

昭和53年度

京都市埋蔵文化財調査概要

昭和53年度

京都市埋蔵文化財調査概要

財団法人

京都市埋蔵文化財研究所

2011年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

昭和53年度

京都市埋蔵文化財調査概要

2011年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市は平安京の建都に始まり千二百年余の永い歴史を有する古都であり、市域内には平安京跡とその周辺部には数多くの遺跡が点在している。都市機能の整備と近代化のための再開発などに伴い、文化景観や遺跡が壊される機会が多くなった。その対策として遺跡保護の法的措置が講じられるようになった。

京都市では、昭和47年に京都市遺跡地図・台帳が作成され、周知されている埋蔵文化財包蔵地内で工事などをするときには、事前の届出の義務が法令で定められている。この頃から遺跡保護のための行政指導や発掘調査を市が直接担当するようになったが、それまでは京都府や大学他の任意の調査団体などが遺跡の発掘調査に関わり大きな成果を挙げてきた。

その後、遺跡発掘の事例が増加し、遺跡の保護と調査体制を整備充実するために、関係する調査団体と京都市が協力し、昭和51年11月1日に財団法人京都市埋蔵文化財研究所が設立された。

遺跡の発掘調査事業を中心にして、その成果をまとめた報告書を刊行し、あわせて講演や、京都市考古資料館などで展示の機会を提供して、遺跡への理解と関心を深めるための普及事業も積極的に実施するなど、市民をはじめ大方の埋蔵文化財保護への支援と理解を高めることを目的としている。

本書は、研究所が実施した昭和53年度の発掘調査、試掘・立会調査の各概要について報告するものである。

本来、この「京都市埋蔵文化財調査概要」は、研究所年報として各年度の1年間の発掘調査概要、試掘・立会調査概要その他について紹介し、研究所の諸事業の全貌の概略を周知することを目的とするものである。

年報については、昭和58年3月に昭和56年度の「京都市埋蔵文化財調査概要」が刊行されたのが最初である。昭和51年度から55年度の調査概要については、30年余の時間が経過するなかで、あらためて編集を進めてきたが、今ここに、昭和53年度の調査事業概要報告書として本書を上梓することになった。ご参考になれば幸いである。

平成23年12月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

凡 例

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が昭和53年度に実施した、発掘調査（第1章）、試掘・立会調査（第2章）の年次報告である。
- 2 本書中に示した方位は、大半が磁石によったが、一部天測を行った現場もある。水準高は、一部京都市水準点を使用した。大半は任意である。
- 3 本書中の地図は、京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）を参考にし、作成した。
- 4 長岡京の条坊呼称は、調査時には既往の呼称（旧呼称）を使用していたが、長岡京連絡協議会の取り決めにより、新呼称を用いた。
- 5 遺構表示のうち、表示記号で示したものは、奈良国立文化財研究所の用例に従った。
- 6 調査位置図の方位は、北を上配置し、縮尺は付記した。
- 7 国庫補助事業による調査は、『平安京跡発掘調査概要』京都市埋蔵文化財研究所概要集1978、『六勝寺跡発掘調査概要』1978、『鳥羽離宮跡』国庫補助による発掘調査概要 昭和53年度、『中臣遺跡』文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1978年度、『中臣遺跡』建設省国庫補助事業による発掘調査の概要 1978年度、『中臣遺跡』西野山大宅線建設工事に伴う建設省国庫補助による試掘調査 1978年度、『伏見城跡』文化庁国庫補助による発掘調査報告 1978年度に報告している。区画整理による調査は、『鳥羽離宮跡』区画整理道路予定地内発掘調査概要 昭和53年度に報告している。また、一部の調査は『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』などに報告している。既報告のものは書名を文末に記した。
- 8 各報告は網 伸也が編集・執筆した。また、それ以外に本書作成には調査業務職員および資料業務職員があたった。

目 次

第1章 発掘調査

I 昭和53年度の発掘調査概要 ……	1	28 平安京右京一条三坊四町 ……	68
II 平安宮・京跡		29 平安京右京二条三坊二町 ……	73
1 平安宮朝堂院跡 1 ……	3	30 平安京右京二条三坊七町 ……	74
2 平安宮朝堂院跡 2 ……	5	31 平安京右京三条二坊十二町 ……	79
3 平安宮朝堂院跡 3 ……	7	32 平安京右京四条一坊九町 ……	82
4 平安宮豊楽院跡 ……	9	33 平安京右京四条一坊十二町 ……	84
5 平安宮正親司跡 ……	11	34 平安京右京四条四坊六町 ……	86
6 平安宮主殿寮跡 ……	13	35 平安京右京五条二坊一町 ……	88
7 平安宮造酒司跡 ……	15	36 平安京右京六条一坊三・四町 ……	90
8 平安宮中和院跡 ……	17	37 平安京右京六条二坊七町 ……	95
9 平安宮中務省跡 1 ……	19	38 平安京右京六条二坊八町 ……	100
10 平安宮中務省跡 2 ……	21	39 平安京右京八条二坊一町 ……	101
11 平安宮太政官跡 1 ……	23	40 平安京右京九条一坊十町 ……	104
12 平安宮太政官跡 2 ……	25	41 平安京右京九条一坊・西寺跡 1 ……	107
13 平安京左京北辺二坊六町 ……	27	42 平安京右京九条一坊・西寺跡 2 ……	109
14 平安京左京一条四坊隣接地 ……	30	43 平安京右京九条二坊四町 ……	113
15 平安京左京二条三坊十二町 ……	32	III 白河街区跡	
16 平安京左京四条三坊十五町 1 ……	35	44 尊勝寺跡 1 ……	117
17 平安京左京四条三坊十五町 2 ……	37	45 尊勝寺跡 2 ……	120
18 平安京左京四条四坊一町 ……	40	IV 鳥羽離宮跡	
19 平安京左京五条一坊十二町 ……	42	46 鳥羽離宮跡37次調査 ……	122
20 平安京左京六条一坊二町 ……	44	47 鳥羽離宮跡38次調査 ……	124
21 平安京左京六条一坊三町 ……	46	48 鳥羽離宮跡39次調査 ……	125
22 平安京左京六条一坊三・六町 ……	48	49 鳥羽離宮跡40次調査 ……	128
23 平安京左京八条三坊二町 1 ……	52	50 鳥羽離宮跡41次調査 ……	130
24 平安京左京八条三坊二町 2 ……	54	51 鳥羽離宮跡42次調査 ……	132
25 平安京左京八条三坊七町 ……	58	52 鳥羽離宮跡43次調査 ……	133
26 平安京左京八条三坊十・ 十一・十四町 ……	61	53 鳥羽離宮跡44次調査 ……	135
27 平安京左京九条四坊三町 ……	65	54 鳥羽離宮跡45次調査 ……	137

55	鳥羽離宮跡46次調査	140	67	室町殿跡	163
56	鳥羽離宮跡47次調査	142	68	北野廃寺1	165
57	鳥羽離宮跡48次調査	144	69	北野廃寺2	171
V 中臣遺跡			70	法性寺跡	173
58	中臣遺跡12次調査	145	71	旭山古墳群	176
59	中臣遺跡13次調査	146	72	山科本願寺跡	178
60	中臣遺跡14次調査	148	73	醍醐古墳群	179
61	中臣遺跡15次調査	150	74	醍醐寺旧境内	182
62	中臣遺跡16次調査	152	75	板橋廃寺	183
63	中臣遺跡17次調査	157	76	伏見城跡1	186
64	中臣遺跡18次調査	158	77	伏見城跡2	187
VI 長岡京跡			78	伏見城跡3	189
65	長岡京左京四条四坊	159	第2章 試掘・立会調査		
VII その他の遺跡			I	昭和53年度の試掘・立会調査概要	191
66	松ヶ崎廃寺	160	II	平安京跡	
			1	平安京右京広域・西京極遺跡	193

図 版 目 次

図版1	平安京左京北辺二坊六町	1	調査区全景（北西から）
		2	瓦溜1（北西から）
		3	埋甕土壙（北から）
図版2	平安京左京一条四坊隣接地	1	調査区東半全景（北西から）
		2	調査区全景（西から）
		3	SK32（南西から）
図版3	平安京左京二条三坊十二町	1	調査区全景（西から）
		2	調査区西半柱穴群（西から）
図版4	平安京左京四条四坊一町	1	調査区全景（西から）
		2	SE5（北から）
		3	SE6（北から）

図版5	平安京左京五条一坊十二町	1 調査区全景（南から） 2 SE 1（西から） 3 SE 3（北から）
図版6	平安京左京六条一坊三・六町	1 1区全景（西から） 2 2区全景（東から） 3 3区全景（西から）
図版7	平安京左京八条三坊二町 1	1 調査区全景（北から） 2 SE10（南から） 3 SE26（北から）
図版8	平安京左京八条三坊二町 2	1 調査区全景（北から） 2 SE 2（東から）
図版9	平安京左京八条三坊十・十一・十四町	1 1次調査区全景（西から） 2 2次調査区全景（東から）
図版10	平安京左京八条三坊十・十一・十四町	1 3次調査区全景（北東から） 2 4次調査区全景（北東から）
図版11	平安京右京一条三坊四町	1 調査区西半全景（西から） 2 SD 7（東から） 3 SE 3（北から）
図版12	平安京右京二条三坊七町	1 第1調査区 春日小路路面・南側溝（北から） 2 第2調査区全景（北から）
図版13	平安京右京二条三坊七町	1 第2調査区 大炊御門大路北側溝（北西から） 2 第3調査区全景（北から）
図版14	平安京右京四条一坊十二町	1 近世から中世遺構面全景（南から） 2 下層池跡全景（南から）
図版15	平安京右京五条二坊一町	1 調査区全景（南東から） 2 SB 1（東から）
図版16	平安京右京六条一坊三・四町	1 1区東部 朱雀大路西側溝（南西から） 2 SE 2（西から） 3 柱穴B（南から）
図版17	平安京右京六条一坊三・四町	1 2区全景（南西から） 2 2区全景（北から） 3 SE 3（南から）
図版18	平安京右京六条二坊七町	1 1・2区全景（西から） 2 調査区全景（西から） 3 SD22遺物出土状況（西から）

- | | | |
|------|-----------------|---|
| 図版19 | 平安京右京八条二坊一町 | 1 調査区全景（北から）
2 SE 3（西から） |
| 図版20 | 平安京右京九条一坊十町 | 1 調査区全景（北西から）
2 SB 4（西から）
3 弥生時代大溝（東から） |
| 図版21 | 平安京右京九条一坊・西寺跡 2 | 1 調査区全景（北から）
2 東回廊（南から） |
| 図版22 | 平安京右京九条一坊・西寺跡 2 | 1 東回廊基壇外装（北東から）
2 門跡および築地西側溝（北西から） |
| 図版23 | 平安京右京九条二坊四町 | 1 平安時代遺構面全景（南西から）
2 古墳時代遺構面全景（南西から） |
| 図版24 | 室町殿跡 | 1 調査区全景（南から）
2 SE 5（西から）
3 SK13（北から） |
| 図版25 | 北野麩寺 1 | 1 調査区中央西半全景（北から）
2 建物 9（北から）
3 建物 6（東から） |
| 図版26 | 北野麩寺 1 | 1 住居 3 全景（南東から）
2 住居 4 竈（東から） |
| 図版27 | 北野麩寺 2 | 1 D区全景（北から）
2 E区全景（北から） |
| 図版28 | 法性寺跡 | 1 調査区全景（北西から）
2 建物 1・2（西から）
3 石敷雨落溝（南から） |
| 図版29 | 醍醐古墳群 | 1 2号地点全景（西から）
2 3号地点全景（西から） |
| 図版30 | 醍醐寺旧境内 | 1 調査区全景（北から）
2 建物 1 礎石（北から）
3 建物 2 およびSX 1（西から） |
| 図版31 | 板橋麩寺 | 1 上層建物群全景（北から）
2 下層建物 3・4（北東から）
3 建物内竈（北から） |
| 図版32 | 伏見城跡 3 | 1 調査区全景（東から）
2 土壇 2（北から）
3 下層古墳墳丘（北西から） |

図版33	平安京右京広域・西京極遺跡	弥生土器・子持勾玉
図版34	平安京右京広域・西京極遺跡	古墳時代前期の土器（1）
図版35	平安京右京広域・西京極遺跡	古墳時代前期の土器（2）

挿 図 目 次

図 1	平安宮朝堂院跡 1	調査位置図	3
図 2	〃	調査区配置図	3
図 3	〃	南北中央セクション東壁断面図	3
図 4	〃	遺構平面図	4
図 5	平安宮朝堂院跡 2	調査位置図	5
図 6	〃	調査区配置図	5
図 7	〃	セクション北壁断面図	5
図 8	〃	北調査区遺構平面図	6
図 9	平安宮朝堂院跡 3	調査位置図	7
図10	〃	調査区配置図	7
図11	〃	西壁断面図	8
図12	〃	遺構平面図	8
図13	平安宮豊楽院跡	調査位置図	9
図14	〃	調査区配置図	9
図15	〃	南壁断面図	9
図16	〃	遺構平面図	10
図17	平安宮正親司跡	調査位置図	11
図18	〃	調査区配置図	11
図19	〃	出土遺物実測図	11
図20	〃	西区西端部北壁断面図	12
図21	〃	遺構平面図	12
図22	平安宮主殿寮跡	調査位置図	13
図23	〃	西壁中央断面図	13
図24	〃	遺構平面図	13
図25	〃	調査区全景	14
図26	平安宮造酒司跡	調査位置図	15
図27	〃	調査区配置図	15

図28	平安宮造酒司跡	北壁断面図	16
図29	〃	遺構平面図	16
図30	平安宮中和院跡	調査位置図	17
図31	〃	調査区配置図	17
図32	〃	北壁断面図	18
図33	〃	遺構平面図	18
図34	平安宮中務省跡 1	調査位置図	19
図35	〃	調査区配置図	19
図36	〃	東壁断面図	19
図37	〃	遺構平面図	20
図38	平安宮中務省跡 2	調査位置図	21
図39	〃	調査区配置図	21
図40	〃	西壁断面図	22
図41	〃	第2・3面遺構平面図	22
図42	平安宮太政官跡 1	調査位置図	23
図43	〃	調査区配置図	23
図44	〃	南壁断面図	23
図45	〃	遺構平面図	24
図46	平安宮太政官跡 2	調査位置図	25
図47	〃	調査区配置図	25
図48	〃	西区北壁断面図	26
図49	〃	遺構平面図	26
図50	平安京左京北辺二坊六町	調査位置図	27
図51	〃	調査区配置図	27
図52	〃	遺構実測図	28
図53	〃	瓦溜 1 出土金箔瓦および土壙 5 出土土師器皿	29
図54	平安京左京一条四坊隣接地	調査位置図	30
図55	〃	調査区配置図	30
図56	〃	遺構実測図	31
図57	平安京左京二条三坊十二町	調査位置図	32
図58	〃	調査区配置図	32
図59	〃	遺構実測図	33
図60	平安京左京四条三坊十五町 1	調査位置図	35
図61	〃	調査区配置図	35
図62	〃	調査区全景	35

図63	平安京左京四条三坊十五町 1	遺構実測図	36
図64	平安京左京四条三坊十五町 2	調査位置図	37
図65	〃	調査区配置図	37
図66	〃	遺構実測図	38
図67	〃	SE 4・5 出土遺物拓影・実測図	38
図68	〃	調査区全景	39
図69	平安京左京四条四坊一町	調査位置図	40
図70	〃	調査区配置図	40
図71	〃	遺構実測図	41
図72	平安京左京五条一坊十二町	調査位置図	42
図73	〃	調査区配置図	42
図74	〃	遺構実測図	43
図75	平安京左京六条一坊二町	調査位置図	44
図76	〃	調査区配置図	44
図77	〃	遺構実測図	45
図78	〃	調査区全景	45
図79	平安京左京六条一坊三町	調査位置図	46
図80	〃	調査区配置図	46
図81	〃	遺構実測図	47
図82	〃	東調査区全景	47
図83	平安京左京六条一坊三・六町	調査位置図	48
図84	〃	調査区配置図	48
図85	〃	遺構実測図	49
図86	〃	1区SK 2 出土土器実測図	50
図87	平安京左京八条三坊二町 1	調査位置図	52
図88	〃	調査区配置図	52
図89	〃	東壁断面図	52
図90	〃	遺構平面図	53
図91	平安京左京八条三坊二町 2	調査位置図	54
図92	〃	調査区配置図	54
図93	〃	遺構実測図	55
図94	〃	遺物実測図	56
図95	平安京左京八条三坊七町	調査位置図	58
図96	〃	調査区配置図	58
図97	〃	南北中央セクション北壁断面図	58

図98	平安京左京八条三坊七町	第1・2面遺構平面図	59
図99	〃	第3・4面遺構平面図	60
図100	平安京左京八条三坊十・	調査位置図	61
図101	十一・十四町	調査区配置図	61
図102	〃	2次調査区西壁断面図	62
図103	〃	1次調査区第2面遺構平面図	62
図104	〃	2・3次調査区第2面遺構平面図	63
図105	〃	4次調査区第2面遺構平面図	64
図106	平安京左京九条四坊三町	調査位置図	65
図107	〃	調査区配置図	65
図108	〃	北トレンチ北壁断面図	65
図109	〃	遺構平面図	66
図110	〃	SD1出土遺物実測図	67
図111	平安京右京一条三坊四町	調査位置図	68
図112	〃	調査区および遺構配置図	69
図113	〃	調査区西半遺構実測図	70
図114	〃	SD7・SK2出土土器実測図	71
図115	平安京右京二条三坊二町	調査位置図	73
図116	〃	調査区配置図	73
図117	〃	調査区全景	73
図118	平安京右京二条三坊七町	調査位置図	74
図119	〃	調査区および遺構配置図	74
図120	〃	第1・2調査区西壁断面図	75
図121	〃	遺構平面図	76
図122	〃	SK1出土遺物実測図	77
図123	平安京右京三条二坊十二町	調査位置図	79
図124	〃	北壁断面図	79
図125	〃	遺構平面図	79
図126	〃	SE7出土遺物実測図	80
図127	平安京右京四条一坊九町	調査位置図	82
図128	〃	調査区配置図	82
図129	〃	遺構実測図	83
図130	〃	調査区全景	83
図131	平安京右京四条一坊十二町	調査位置図	84
図132	〃	中央セクション北壁断面図	84

図133	平安京右京四条一坊十二町	池出土墨書土器	84
図134	〃	遺構実測図	85
図135	平安京右京四条四坊六町	調査位置図	86
図136	〃	調査区配置図	86
図137	〃	遺構実測図	87
図138	〃	調査区全景	87
図139	平安京右京五条二坊一町	調査位置図	88
図140	〃	調査区配置図	88
図141	〃	遺構実測図	89
図142	〃	有舌尖頭器	89
図143	平安京右京六条一坊三・四町	調査位置図	90
図144	〃	1区SD1・2断面図	90
図145	〃	調査区配置図	91
図146	〃	遺構平面図	92
図147	〃	SD2出土遺物実測図	93
図148	平安京右京六条二坊七町	調査位置図	95
図149	〃	調査区配置図	95
図150	〃	3区東壁断面図	95
図151	〃	遺構実測図	96
図152	〃	SD22出土土器実測図1	98
図153	〃	SD22出土土器実測図2	99
図154	平安京右京六条二坊八町	調査位置図	100
図155	〃	調査区配置図	100
図156	〃	調査区全景	100
図157	〃	遺構実測図	100
図158	平安京右京八条二坊一町	調査位置図	101
図159	〃	調査区配置図	101
図160	〃	遺構実測図	102
図161	〃	SE3出土遺物実測図	103
図162	平安京右京九条一坊十町	調査位置図	104
図163	〃	調査区および遺構配置図	104
図164	〃	南壁西半部断面図	104
図165	〃	調査区東半部遺構平面図	105
図166	〃	瓦屋銘軒平瓦	105
図167	平安京右京九条一坊・西寺跡1	調査位置図	107

図168	平安京右京九条一坊・西寺跡 1	調査区配置図	107
図169	〃	C区西端断面図	108
図170	〃	遺構平面図	108
図171	平安京右京九条一坊・西寺跡 2	調査位置図	109
図172	〃	調査区配置図および西寺復元図	109
図173	〃	回廊基壇断面図	110
図174	〃	遺構平面図	111
図175	〃	SX 6・SD 4 出土土器	112
図176	平安京右京九条二坊四町	調査位置図	113
図177	〃	調査区配置図	113
図178	〃	遺構実測図	114
図179	〃	土壌 1 出土黒色土器風字硯	116
図180	尊勝寺跡 1	調査位置図	117
図181	〃	調査区配置図	117
図182	〃	東西セクション北壁断面図	118
図183	〃	遺構平面図	118
図184	〃	調査区全景	119
図185	尊勝寺跡 2	調査位置図	120
図186	〃	調査区配置図	120
図187	〃	北壁断面図	121
図188	〃	遺構平面図	121
図189	鳥羽離宮跡37次調査	調査位置図	122
図190	〃	調査区配置図	122
図191	〃	南壁断面図	123
図192	〃	遺構平面図	123
図193	鳥羽離宮跡38次調査	調査位置図	124
図194	〃	調査区配置図	124
図195	〃	遺構平面図	124
図196	鳥羽離宮跡39次調査	調査位置図	125
図197	〃	調査区配置図	125
図198	〃	北壁断面図	125
図199	〃	平安時代遺構平面図	126
図200	〃	古墳時代遺構平面図	127
図201	鳥羽離宮跡40次調査	調査位置図	128
図202	〃	調査区配置図	128

図203	鳥羽離宮跡40次調査	東壁断面図	128
図204	〃	遺構平面図	129
図205	鳥羽離宮跡41次調査	調査位置図	130
図206	〃	調査区配置図	130
図207	〃	西壁断面図	130
図208	〃	遺構平面図	131
図209	鳥羽離宮跡42次調査	調査位置図	132
図210	〃	調査区および遺構配置図	132
図211	〃	東壁断面図	132
図212	鳥羽離宮跡43次調査	調査位置図	133
図213	〃	調査区配置図	133
図214	〃	西壁断面図	134
図215	〃	南トレンチ遺構平面図	134
図216	鳥羽離宮跡44次調査	調査位置図	135
図217	〃	調査区配置図	135
図218	〃	西壁断面図	136
図219	〃	遺構平面図	136
図220	鳥羽離宮跡45次調査	調査位置図	137
図221	〃	調査区配置図	137
図222	〃	西区北壁断面図	137
図223	〃	西区下層遺構平面図	138
図224	〃	西区上層遺構平面図	138
図225	〃	東区南壁断面図	138
図226	〃	東区遺構平面図	139
図227	鳥羽離宮跡46次調査	調査位置図	140
図228	〃	西壁断面図	140
図229	〃	井戸SE4601断割り	141
図230	〃	遺構平面図	141
図231	鳥羽離宮跡47次調査	調査位置図	142
図232	〃	西区東壁断面図	142
図233	〃	J期遺構平面図	143
図234	鳥羽離宮跡48次調査	調査位置図	144
図235	〃	調査付近航空写真	144
図236	中臣遺跡12次調査	調査位置図	145
図237	〃	調査区配置図	145

図238	中臣遺跡12次調査	北壁断面図	145
図239	中臣遺跡13次調査	調査位置図	146
図240	〃	調査区配置図	146
図241	〃	東壁断面図	146
図242	〃	遺構平面図	147
図243	中臣遺跡14次調査	調査位置図	148
図244	〃	調査区配置図	148
図245	〃	南壁断面図	149
図246	〃	遺構平面図	149
図247	中臣遺跡15次調査	調査位置図	150
図248	〃	北壁断面図	150
図249	〃	遺構平面図	151
図250	中臣遺跡16次調査	調査位置図	152
図251	〃	調査区配置図	152
図252	〃	25号道路4区拡張区東壁断面図	153
図253	〃	25号道路第1面遺構平面図	153
図254	〃	25号道路第2-1面遺構平面図	153
図255	〃	2～4号住居平面図	154
図256	〃	5・6号住居実測図	154
図257	〃	7号住居平面図	155
図258	〃	8号住居平面図	155
図259	〃	9号住居平面図	156
図260	中臣遺跡17次調査	調査位置図	157
図261	〃	調査区配置図	157
図262	〃	2区西壁断面図	157
図263	中臣遺跡18次調査	調査位置図	158
図264	〃	調査区配置図	158
図265	〃	2区南壁断面図	158
図266	長岡京左京四条四坊	調査位置図	159
図267	〃	東壁断面図	159
図268	〃	調査区および遺構配置図	159
図269	松ヶ崎廃寺	調査位置図	160
図270	〃	調査区配置図	160
図271	〃	西壁断面図	161
図272	〃	遺構平面図	161

図273 松ヶ崎廃寺	第3面全景	162
図274 室町殿跡	調査位置図	163
図275 〃	遺構実測図	163
図276 北野廃寺1	調査位置図	165
図277 〃	調査区配置図	165
図278 〃	遺構実測図	166
図279 〃	竪穴住居実測図	167
図280 〃	溝26出土土器実測図	169
図281 北野廃寺2	調査位置図	171
図282 〃	溝2出土尖頭器	171
図283 〃	A区・D区西壁断面図	171
図284 〃	調査区配置図および遺構平面図	172
図285 法性寺跡	調査位置図	173
図286 〃	調査区配置図	173
図287 〃	西壁断面図	174
図288 〃	遺構平面図	175
図289 旭山古墳群	調査位置図	176
図290 〃	調査区配置図	176
図291 〃	D-4号墳石室実測図	177
図292 山科本願寺跡	調査位置図	178
図293 〃	調査区配置図	178
図294 醍醐古墳群	調査位置図	179
図295 〃	2～4号地点断面図	179
図296 〃	調査区配置図および墳丘測量実測図	180
図297 醍醐寺旧境内	調査位置図	182
図298 〃	調査区配置図	182
図299 〃	遺構実測図	182
図300 板橋廃寺	調査位置図	183
図301 〃	調査区配置図	183
図302 〃	遺構実測図	184
図303 伏見城跡1	調査位置図	186
図304 〃	調査区全景	186
図305 〃	暗渠施設検出状況	186
図306 伏見城跡2	調査位置図	187
図307 〃	調査区配置図	187

図308	伏見城跡 2	南壁断面図	187
図309	伏見城跡 3	調査位置図	189
図310	〃	調査区配置図	189
図311	〃	東壁断面図	189
図312	〃	遺構平面図	190
図313	平安京右京広域・西京極遺跡	A 地点位置図	193
図314	〃	A 地点出土土器実測図	194
図315	〃	B 地点位置図	195
図316	〃	B 地点出土土器実測図 1	196
図317	〃	B 地点出土土器実測図 2	197
図318	〃	C 地点位置図	198
図319	〃	C 地点出土土器実測図	198
図320	〃	D 地点位置図	198
図321	〃	D 地点出土土器実測図	199
図322	〃	E 地点位置図	199
図323	〃	E 地点出土子持勾玉実測図	199
図324	昭和53年度試掘・立会調査位置図		200

表 目 次

表 1	昭和53年度発掘調査一覧表	201
表 2	昭和53年度試掘・立会調査一覧表	206

第1章 発掘調査

I 昭和53年度の発掘調査概要

昭和53年度に実施した発掘調査件数は、78件であった。その内訳は、平安宮・京跡43件、白河街区跡2件、鳥羽離宮跡12件、中臣遺跡7件、長岡京跡1件、その他の遺跡13件であった。以下におもだった遺跡の概要を報告する。

平安宮・京跡 平安宮の中心部は遺構の遺存状況が悪く、宮に関係する遺構の検出は少ないが、太政官跡（11）では西限の南北築地を検出し、造酒司跡（7）では西限築地の内溝と、曹司内西端部の掘立柱建物群も確認した。また、正親司跡（5）では宮城外溝と考えられる幅広い南北溝と西大宮大路を検出しており、宮城構造の一端を明らかにすることができた。

平安京域では条坊関係遺構の検出事例が増えている。左京六条一坊三町（21）と右京六条一坊三・四町（36）で朱雀大路の東西側溝を確認した。左京では、二条三坊十二町（15）で烏丸小路の西側溝、八条三坊七町（25）で八条坊門小路と南北両側溝、そして室町小路路面と東側溝を検出した。右京では、一条三坊四町（28）で中御門大路の北側溝、二条三坊七町（30）で春日小路路面と南側溝、大炊御門大路路面と北側溝、六条二坊七町（37）で樋口小路と西鞆負小路の交差点部分を明らかにしている。これらの条坊関係遺構は、平安京条坊の復元作業を進めるうえでの重要な遺構となる。また、左京一条四坊隣接地（14）では、東京極を南流していたと想定される中川に関連する流路遺構を確認している。さらに、左京八条三坊二町（23）では、時期は下るが西洞院川を検出しており、平安京内を流れる幹線流路の実態が明らかになりつつある。

平安京内の宅地に関しては、右京五条二坊一町（35）で東庇をもつ大型の南北棟建物を検出している。また、右京八条二坊一町（39）では、西市外町に関係する方形井戸を確認し、井戸内から曲物を含む多くの平安時代前期の土器群が出土した。同時期のまとまった土器群は、左京六条一坊三町（21）や右京二条三坊七町（30）、右京六条二坊七町（37）などで土壌などから出土しており、平安時代の土器編年の好資料となっている。西寺では、金堂院の東回廊を良好な状態で検出するとともに、伽藍地南東に造営された院地の西築地を発見した。築地側溝からは白磁椀や三彩陶器皿などが出土している。また、右京九条一坊十町（40）では、西寺諸院に付属すると想定できる、大型の東西棟建物を検出した。

白河街区跡 前年度の1次調査で発見した礎石建物の北延長部分を検出し、尊勝寺阿弥陀堂と推定した（44）。また、この礎石建物の南東でも礎石建物の一部を発見している（45）。

鳥羽離宮跡 鳥羽離宮跡では、馬場殿周辺（46・47）や東殿（49～51・53・55・56）において洲浜や景石などの園池遺構を検出し、金剛心院推定地周辺で雨落溝を伴う建物跡の地業を発見している。

中臣遺跡 中臣遺跡では古墳時代の竪穴住居を多数検出するとともに、16次調査で飛鳥時代か

ら奈良時代の大型掘立柱建物を新たに発見した。

その他の遺跡 北野廃寺（68）では寺院地南西部において、飛鳥時代の竪穴住居と重複する平安時代の掘立柱建物群を検出し、後者は寺内諸院に関連する遺構と想定できた。法性寺跡・正覚寺跡（70）では新たに礎石建物を良好な状態で発見しており、法性寺との関連も含めて遺跡の性格が問題となった。旭山古墳群（71）では、横穴式石室を伴う古墳・小石室・土壙などを検出し、群集墳を構成する支群の状況が明らかとなった。伏見城関連の遺跡（76～78）では、築城時の整地層を確認し、城下町の建物遺構も発見することができた。また、伏見城の周辺に古墳群の存在したことが、墳丘遺構や埴輪の出土から想定できるようになった。

II 平安宮・京跡

1 平安宮朝堂院跡1

経過 今回の発掘調査は、店舗付住宅の新築工事に伴うもので、当地は平安宮朝堂院会昌門推定地にあたるため、試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、地表下0.2mで石列を検出したため発掘調査を実施した。調査区中央に南北3.4m、東西10mの長方形の調査区を設定した。手掘りで現代層・攪乱を掘削し、その後遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層（0.2m）、第2層淡茶灰色泥砂層（約0.05m）、第3層暗黄灰色泥砂層（0.35m）、第4層暗黄色微砂層（0.25m）、第5層淡黄灰色粘土層（地山）である。第2層上面で石組み溝を検出した。

石組み溝は調査区の南部で検出し、東西方向である。溝掘形は幅1.4m、深さ1.1mで、兩岸の最下層に丸太を据え、その上に自然石を内側に面を合わせ積み上げる。埋土は暗灰色泥土で、土器類が出土した。時期はすべて江戸時代に属する。

遺物 遺物は、整理箱で1箱出土した。遺物には、土師器、須恵器、陶器、磁器、棧瓦などがある。いずれも攪乱・溝から出土し、大半が江戸時代である。

小結 今回の調査では、平安時代の遺構は検出できなかった。江戸時代の東西溝は所司代屋敷に関係すると考えられる。

今回の調査地の千本通を挟んだ東側の調査では、地山面が今回調査とほぼ同一レベルで、その

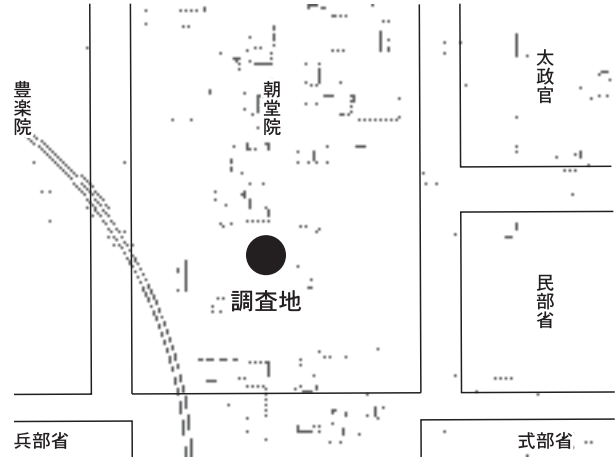


図1 調査位置図（1：5,000）

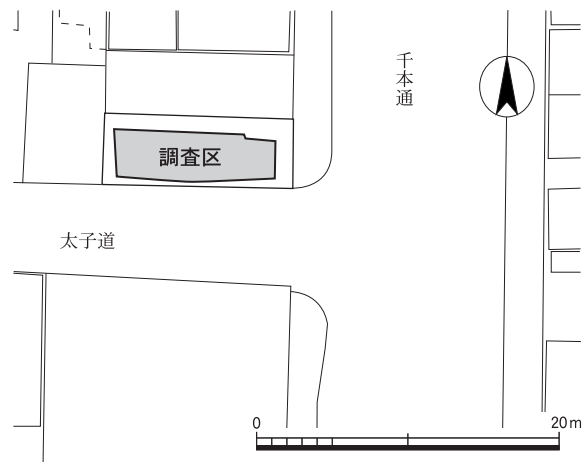


図2 調査区配置図（1：500）

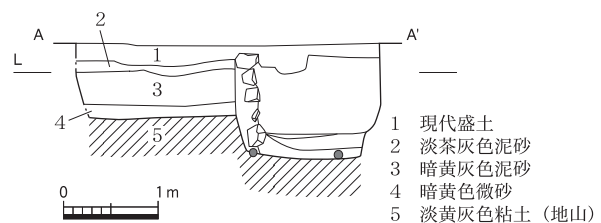


図3 南北中央セクション東壁断面図（1：80）

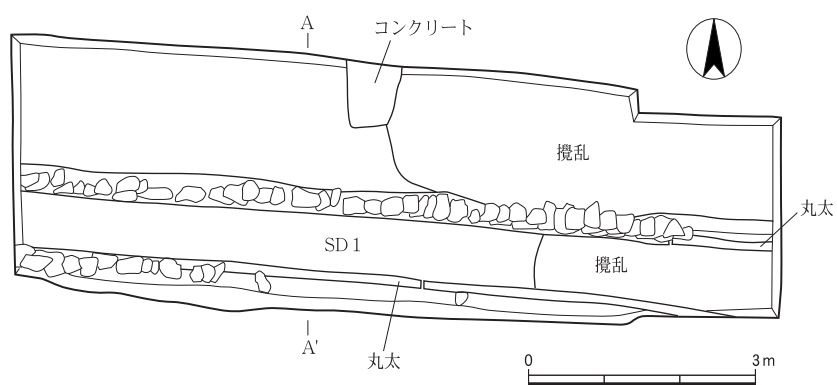


図4 遺構平面図（1：100）

上面で遺構が検出されている。当調査地では現代層の下は無遺物層で、地山面でも遺構や土取穴も検出できなかった。第2～4層が整地層かどうか不明である。

『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』 1979年報告

2 平安宮朝堂院跡 2

経過 今回の発掘調査は、住宅の新築工事に伴うもので、当地は平安宮朝堂院暉章堂推定地にあたるため、調査を実施した。

調査地の南北2箇所、東西4.5m×南北5.1m、東西2m×南北2.5mの調査区を設定した。この内、南調査区は約3m掘り下げたが現代層が続き遺構が遺存しないと考えられたので、埋め戻した。北調査区は重機で現代層・攪乱を掘削し、その後遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 北調査区の基本層序は、第1層現代盛土層(0.7m)、第2層茶褐色砂層(近世包含層:約0.15m)、第3層黒褐色砂泥層(0.15m)、第4層淡茶褐色砂礫層(0.3m)、第5層黄褐色粘質土(地山)である。調査区西辺では攪乱されていない堆積層を検出したが、遺構は確認できなかった。調査区東部は大規模な土取りなどにより遺構面の削平を受けている。この状況は、南調査区や前年度に調査区東側で行われた調査と同様で、連続するものと考えられる。

遺物 遺物は、整理箱で2箱出土した。遺物には、土師器、陶器、磁器などがある。土師器は細片が第3・4層から出土している。時期は不明である。第2層からは陶磁器が出土し、時期は近世以降である。

小結 今回の調査では、平安時代の遺構は検出できなかった。周辺には近世以降の大規模な土取穴が多く存在するが、平安時代の遺構は部分的に残存している可能性がある。

『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』 1979年報告

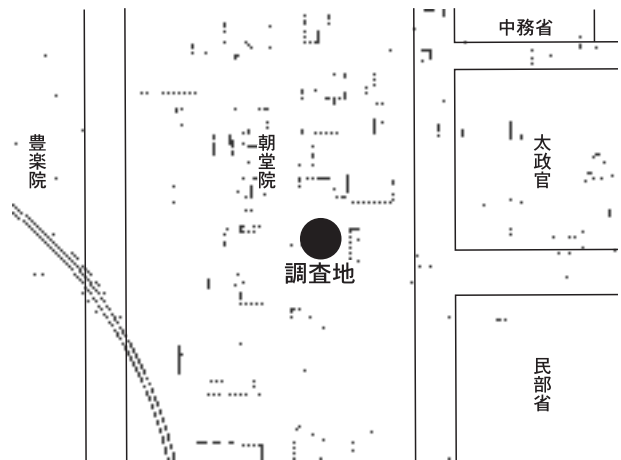


図5 調査位置図(1:5,000)

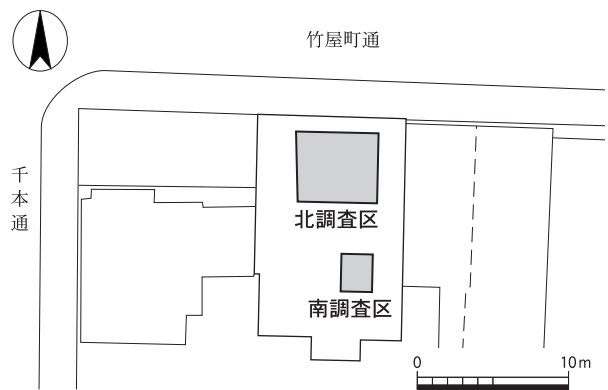


図6 調査区配置図(1:500)

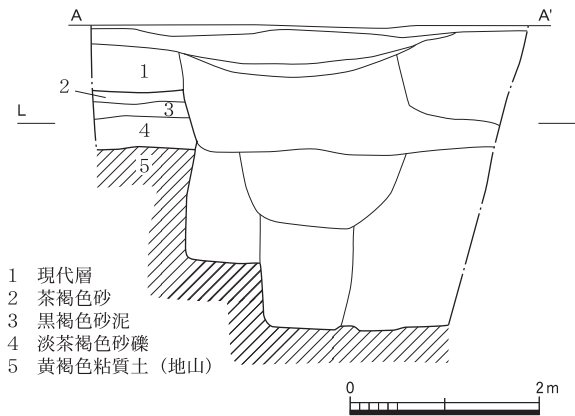


図7 セクション北壁断面図(1:80)

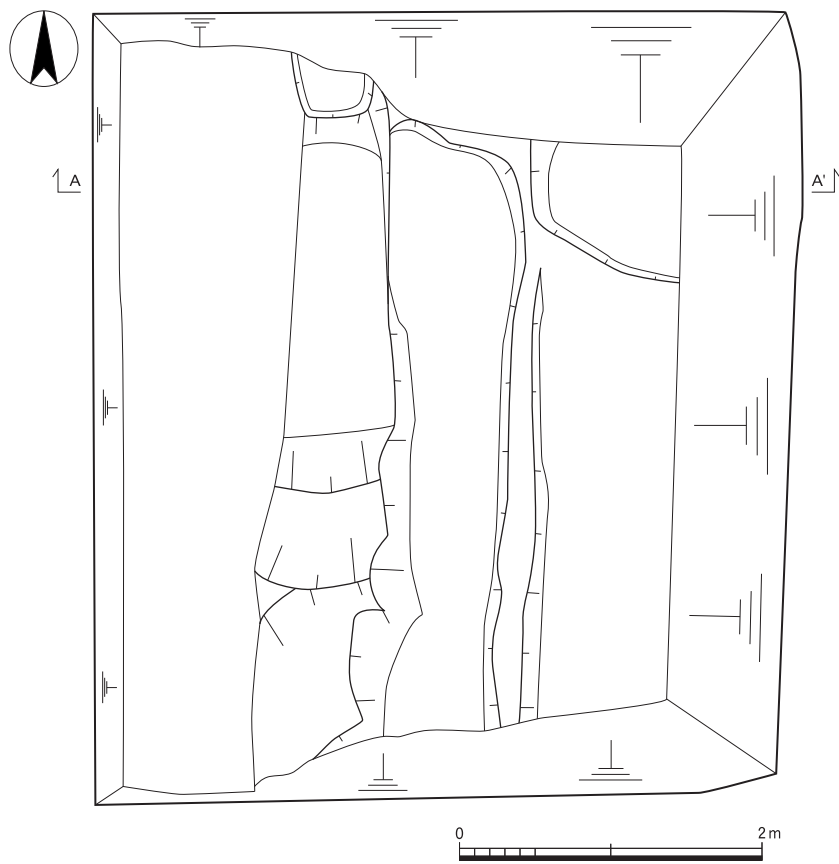


图8 北調査区遺構平面図（1：50）

3 平安宮朝堂院跡 3

経過 今回の発掘調査は、ビル新築工事に伴うもので、当地は推定平安宮朝堂院小安殿にあたるため、調査を実施した。

調査地内に南北8m、東西15.5mの調査区を設定した。重機で現代層（約0.8m）を掘削し、その後調査を実施したが、遺構は検出できなかった。平面実測と写真撮影を実施し、部分的に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 基本層序は、第1層近代現代盛土層（約1m）、第2層茶褐色砂泥層（耕土：約0.8m）、第3層黄褐色砂礫層（包含層：2m以上）である。第1層は東壁の観察によれば、東側現千本通から数回盛り土されていたことがわかる。第3層は単一の層ではなく東西方向から複雑に流れ込んだ状況を示し、遺物を含む。地山は検出できなかった。

遺物 遺物は整理箱で40箱出土した。種類は土師器、陶器、磁器、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などである。いずれも第3層から出土した。瓦は平安時代前期から中期に属するもので緑釉軒丸瓦もある。土器は少量で、平安時代から近世までにわたる。

小結 今回の調査では、遺構は全く検出できなかった。周辺の調査結果から黄灰色砂礫層を掘り下げて得た深さよりさらに下部に遺構の検出される可能性は少ない。黄灰色砂礫層の堆積は大規模な掘状の遺構の存在を示すものかもしれない。

『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』 1979年報告

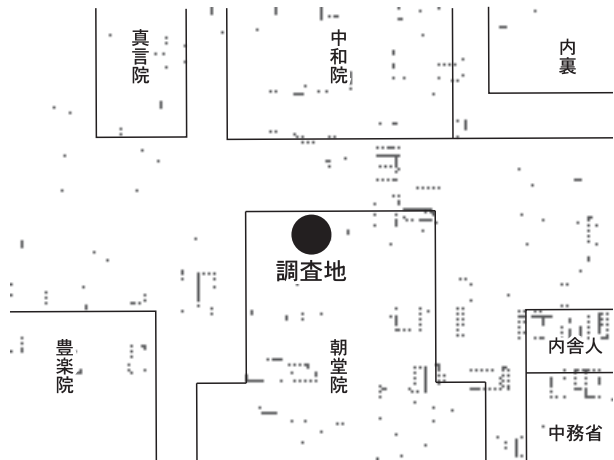


図9 調査位置図 (1 : 5,000)

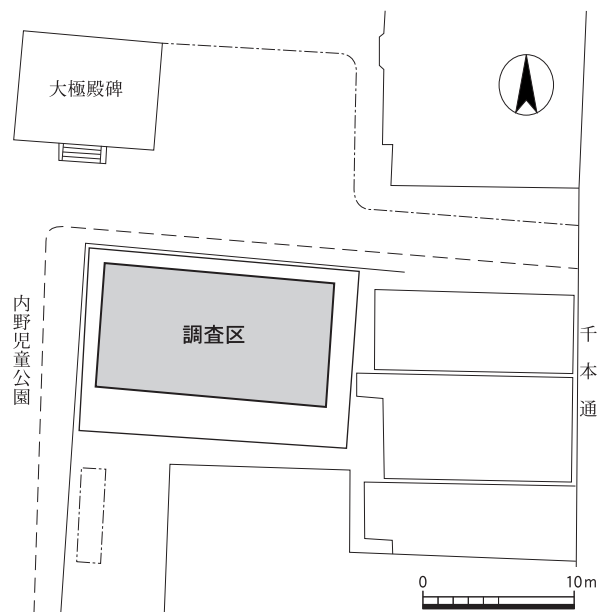


図10 調査区配置図 (1 : 500)

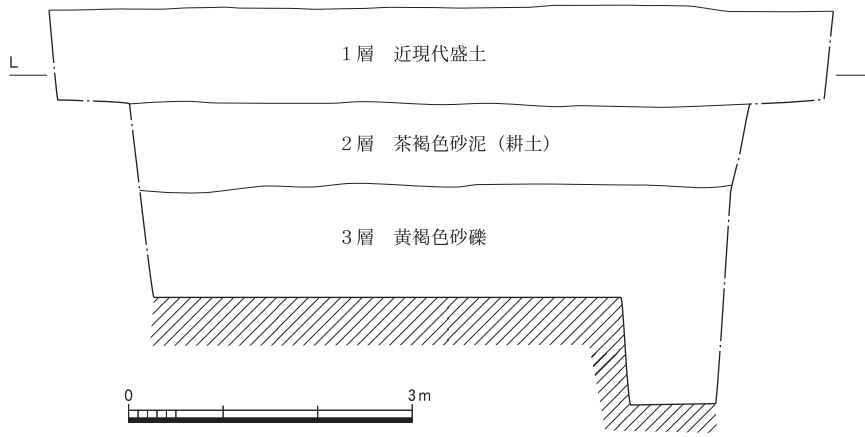


图11 西壁断面图 (1 : 80)

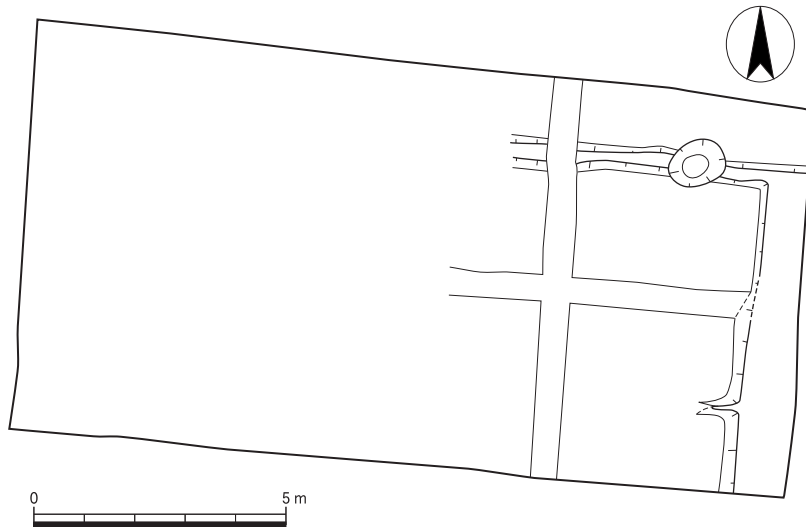


图12 遺構平面图 (1 : 150)

4 平安宮豊楽院跡

経過 今回の発掘調査は、住宅の新築工事に伴うもので、当地は平安宮豊楽院不老門推定地にあたるため、調査を実施した。

調査地内に南北8.2m、東西2.5mの調査区を設定した。重機で現代層（約0.2m）を掘削し、その後手掘りで攪乱を掘り下げ、遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 基本層序は、第1層近現代盛土層（約0.15m）、第2層淡茶灰色砂泥層（約0.15m）、第3層黄褐色砂泥層（地山）である。調査区西辺は道路旧側溝のため攪乱を受ける。遺構は第2層上面と、第3層上面で検出した。

第2層上面では、調査区東側で落込み（SX1）を検出した。深さは1m以上で、調査区東側に続く。埋土は4層以上に分けられるが、基本的には茶灰色系の砂泥層である。中央部では柱穴を4基検出した。いずれも円形で、径0.4m、深さ0.2mである。各遺構は近世以降に属する。

第3層上面では、調査区中央で土壌を2基検出した。いずれも攪乱・SX1に削平を受け、本来の形状や規模は不明である。深さはSK1が0.3m、SK2が0.5mである。埋土は黄灰色の泥砂で、瓦・土器の小片を含む。遺物の時期は平安時代中期に属する。

遺物 遺物は、整理箱で4箱出土した。遺物には土師器、施釉陶器、陶器、磁器、丸瓦・平瓦などがある。平安時代の土師器は土壌から、平安時代の土師器、施釉陶器、他の土器類は包含層・攪乱・落込みなどから出土

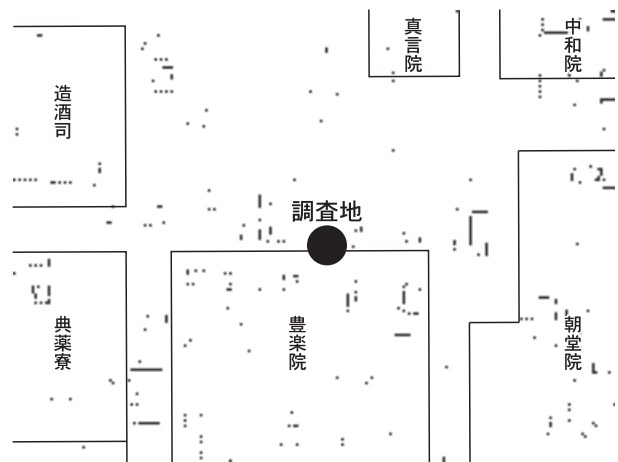
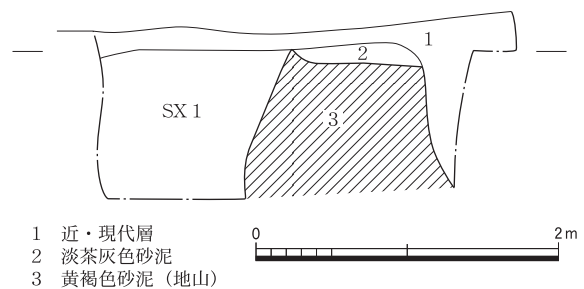


図13 調査位置図（1：5,000）



図14 調査区配置図（1：200）



- 1 近・現代層
- 2 淡茶灰色砂泥
- 3 黄褐色砂泥（地山）

図15 南壁断面図（1：50）

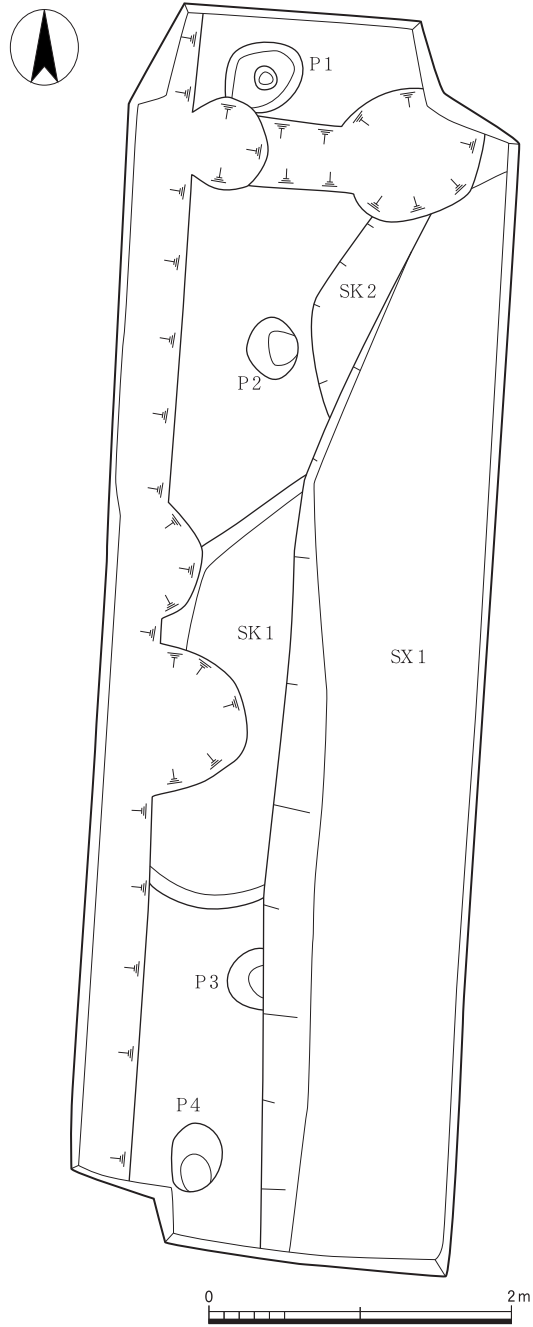


図16 遺構平面図（1：50）

した。

小結 今回の調査では、豊楽院に係する遺構は検出できなかったが、比較的浅い所で平安時代の遺構が確認でき、周辺に当該期の遺構が存在する可能性を示している。

落込みSX1は土取穴、または所司代屋敷の壕であると推定できる。

『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』 1979年報告

5 平安宮正親司跡

経過 今回の発掘調査は、本門仏立宗宗務本庁会館新築工事に伴うもので、当地は平安宮正親司跡西辺・平安宮西面築地推定地にあたるため、調査を実施した。

調査地内に西区・中央区・南区の3箇所の調査区を設定した。重機で現代層(0.3~0.6m)を掘削し、その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。

遺構 基本層序は、中央区・南区では第1層近現代盛土層(約0.4m)、第2層茶灰色泥砂層(近世包含層:約0.3m)、第3層黒褐色泥砂層(約0.2m)、第4層淡黒褐色泥砂層(約0.15m)、第5層黄褐色砂泥層(地山)である。西区では第1層近現代盛土層(約0.4m)、第2層茶灰色泥砂層(近世包含層:約0.3m)、第3層黒褐色泥土層(約0.6m)、第4層黄褐色砂泥層(地山)である。遺構は中央区・南区では第5層上面で、西区では第3層上面と、第4層上面で検出した。検出した遺構には、溝、柱列、土壇、墓壇などがある。

南区では、東西溝SD1(幅約2m、深さ約1m)を検出した。平安時代前期に属する。

中央区では、南北溝SD2(幅約1m、深さ0.2m)を検出した。東西両肩口で柱列を検出した。柱穴は径0.4~0.5mの円形である。平安時代前期に属する。

西区では、第4層上面で南北溝SD4(幅約1.5m、深さ0.6m)および西側で路面を検出した。平安時代前期に属する。第3層上面では南北溝SD3(幅約2.3m、深さ0.5m)をSD4の西側で検出した。平安時代後期に属する。

遺物 遺物は、整理箱で20箱出土した。遺物には、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、陶器、磁器などがある。平安時代前期の遺物は、主としてSD1・2・4から出土し、9世紀後半から10世紀前半である。平安時代後期の遺物は、SD3から出土し、12世紀後半に属する。江戸時代の遺物は、土壇などから出土した。

小結 検出した遺構では、SD4が平安宮西面築地(西大宮大路東築地)外溝、その西側が西大宮大路路面にあたる。SD3はそれらが埋ま

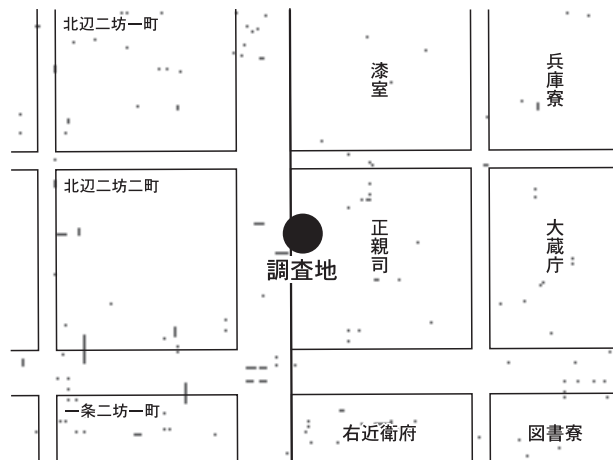


図17 調査位置図(1:5,000)

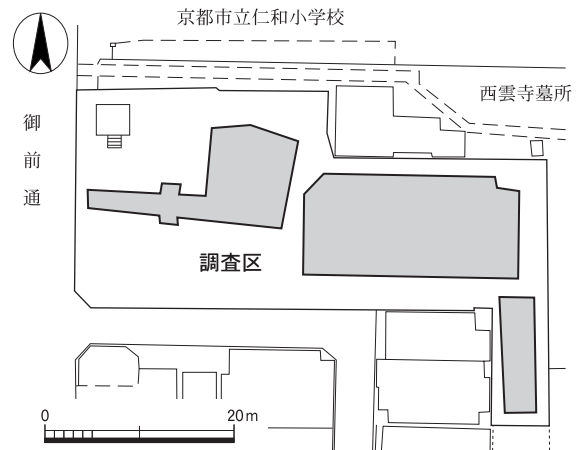


図18 調査区配置図(1:800)



図19 出土遺物実測図(1:4)

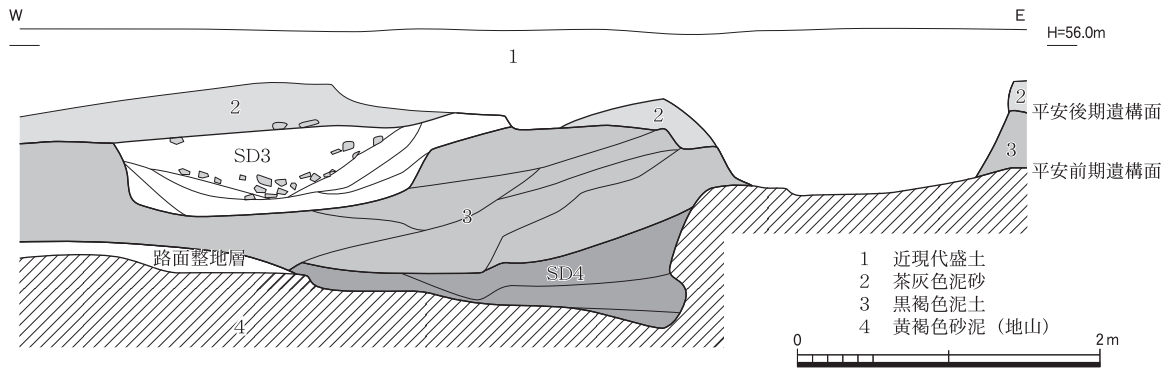


図20 西区西端部北壁断面図（1：50）

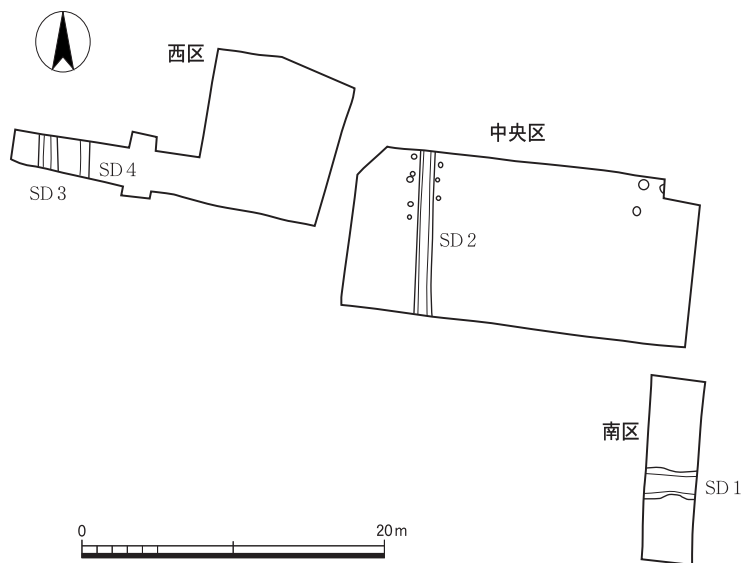


図21 遺構平面図（1：500）

った後に平安時代後期に改掘された同築地外溝である。SD 1は正親司を南北に区画する溝と考えられ、SD 2は官衙内の建物に伴う施設の可能性がある。溝両側の柱穴は橋などと考えられる。今回の調査では、官衙内区画溝や平安宮西限施設を検出し、重要な成果となった。

『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 1995年報告

6 平安宮主殿寮跡

経過 今回の発掘調査は、社屋新築工事に伴うもので、当地は平安宮主殿寮南東部および聚楽第推定地にあたるため、調査を実施した。

調査地内に南北9.5m、東西15.5mの長方形の調査区を設定した。重機で現代層（地表下約1m）を掘削し、その後手掘りで攪乱などを掘り下げた後、遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層（約1m）、第2層灰茶褐色粘土層（0.4m）、第3層淡褐色砂礫層（約0.25m）、第4層黄褐色粘土層（地山）である。第4層上面で遺構を検出した。遺構は、井戸、柱穴、土取穴などである。

調査区の西端部に第4層が部分的に残り、上面で柱穴数基を検出した。大半は大規模な土取穴によって遺構面は削平を受け、検出面からの深さが2mに達する場所もある。調査区南西部では土取穴底部で井戸1基を検出した。時期はすべて江戸時代に属する。

遺物 遺物は、整理箱で20箱出土した。遺物には、土師器、陶器、磁器などがある。平安時代の土師器皿が少量出土したほかは、大半が江戸時代の陶磁器類である。

小結 今回の調査では、調査区の大半が江戸時代の土取穴で掘削され、遺構面はほとんど残存していなかった。しかし一部では地山が良好に残存し、平安時代の遺物も出土したことから、近接地には当該期の遺構の存在を窺わせる。

『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 1995年報告

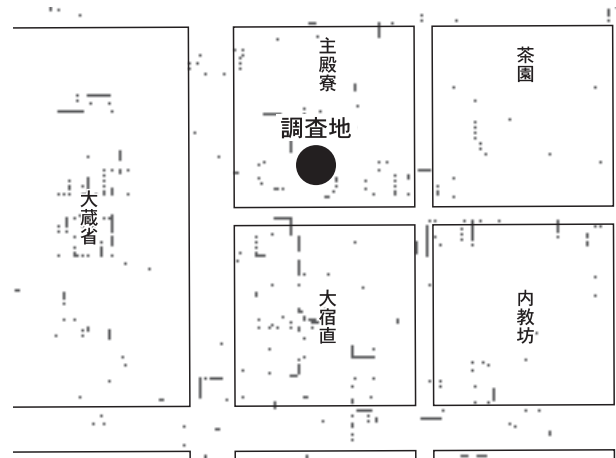


図22 調査位置図（1：5,000）

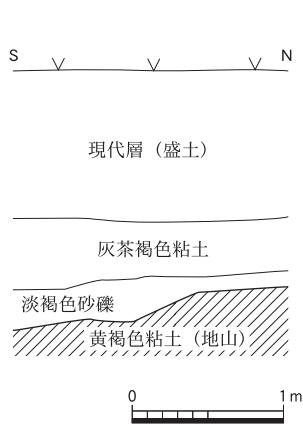


図23 西壁中央断面図（1：50）

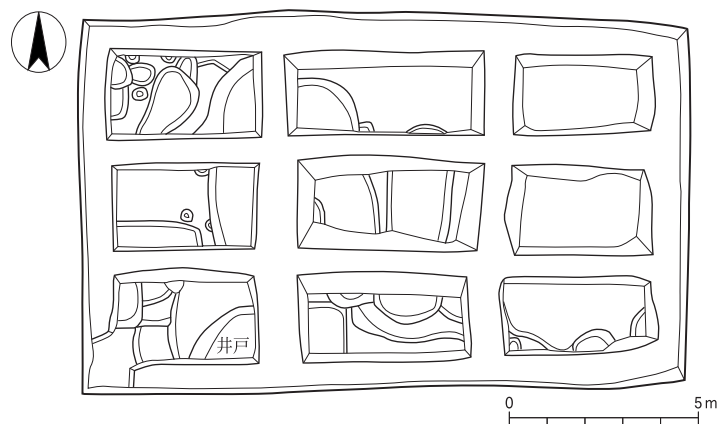


図24 遺構平面図（1：200）

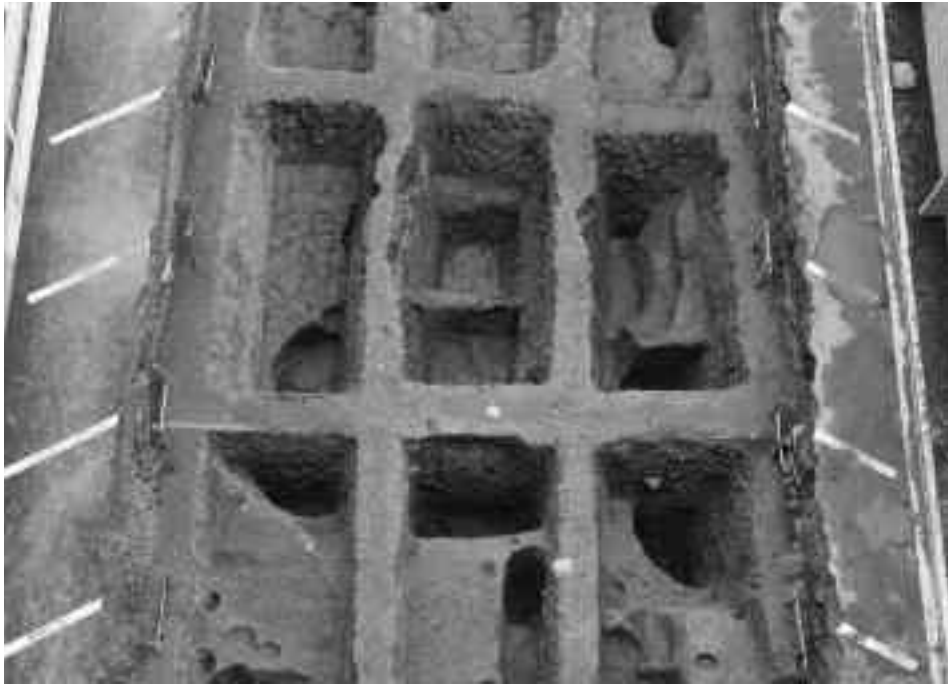


図25 調査区全景（西から）

7 平安宮造酒司跡

経過 調査は聚楽幼稚園新築工事に伴うもので、当地域は平安宮造酒司西部推定地にあたるため、調査を実施した。

調査地内北西部にエ字形の調査区、および西側・北側に長方形の調査区を設定し、随時拡張した。重機で現代層・耕土（地表下約0.6m）まで掘削し、その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

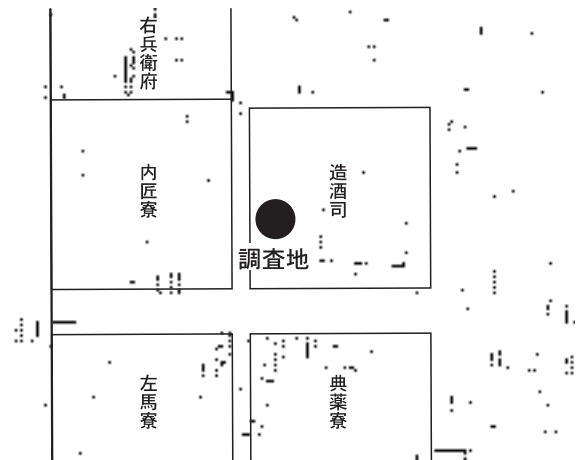


図26 調査位置図（1：5,000）

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層（0.9m）、第2層茶灰色砂泥層（近世耕作土：0.2m）、第3層黒褐色粘土・淡黄褐色砂泥層（地山）である。黒褐色粘土層は5次調査区のみ堆積し、当初から窪地であったと考えられる。遺構は第3層上面で検出し、この面は北から南に約0.6m傾斜する。

平安時代の遺構は全域で検出し、南北溝SD4、東西溝SD5～9、掘立柱建物SB3～5、土壇SK18～24がある。SD4は調査地西部に位置し、幅2.4～3m、深さ0.5mで、23m検出した。埋土は暗茶褐色砂泥である。SB3は北西部で検出し、2間×5間の東西棟で、桁行・梁間共に3mである。柱穴掘形は円形または方形で、径約0.8m、深さ0.2～0.9mである。柱穴内に根固め石を据えた例もある。SB4は南東部で検出し、東西2間×南北1間以上の南北棟で、桁行・梁間共に3m

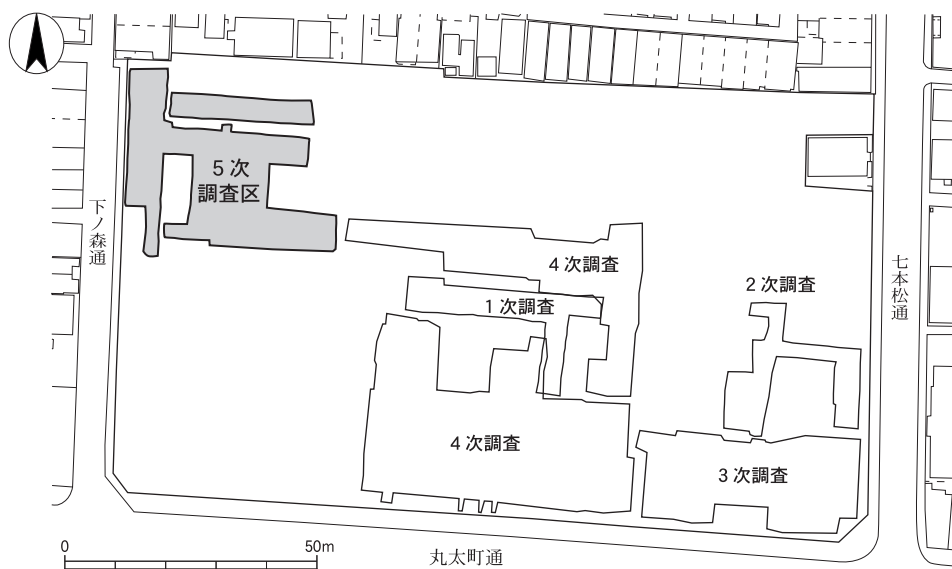


図27 調査区配置図（1：1,500）

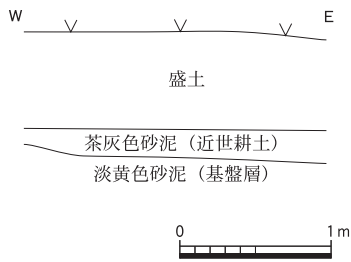


図28 北壁断面図 (1:50)

である。掘形は方形で、一辺約0.9m、深さ約0.5mである。SB5は東西2間×南北2間以上の南北棟で、桁行1.8m、梁間2mである。掘形は楕円形で、長径約0.7m、深さ約0.3mである。切り合いからSB4に先行する。土壙SK18~24は南半で検出し、小規模な東西溝を伴い、土器と炭を多量に包含する。SK21~23はやや規模が大きく、土器類が多数出土した。平安時代以前の遺構には北東から南西方向に向かう溝がある。

ある。

室町・江戸時代の遺構は、全域で検出し、全面で掘立柱建物、土壙、溝、井戸を検出した。

遺物 遺物は、整理箱で100箱出土した。遺物には、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、瓦類などがある。時期は、平安時代の土器類が大半を占め、瓦類も出土した。中近世の遺物は少ない。特にSD4、SK21~23からは平安時代前期のまとまった土器類が出土した。

小結 遺構は、平安宮の復元図によれば、SD4が西面築地内溝に比定できる。また、SB3は南柱筋が造酒司域の南北中心線上に位置し、東妻柱筋は東西中心線より西38mに位置する。このことにより、前期の段階で計画的な建物配置がなされていたことが窺える。SK21~23は東西小溝から取水していたと考えられ、厨房あるいは醸造に関連した施設の可能性がある。

『平安宮 I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 1995年報告



図29 遺構平面図 (1:400)

8 平安宮中和院跡

経過 今回の発掘調査は、住宅の新築工事に伴うもので、当地は平安宮中和院南部推定地にあたるため、調査を実施した。

調査地内に南北17m、東西5.5mの長方形の調査区を設定した。重機で現代層（0.5～1.8m）を掘削し、その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 基本層序は、第1層近現代盛土層（約0.5～1.8m）、第2層茶灰褐色泥砂層（近世包含層：約0.3m）、第3層黄茶色泥砂層（約0.2m）、第4層褐色砂泥層（平安時代中期包含層：約0.25m）、第5層黄色細砂と粗砂の互層（地山）である。第4層は上下2層に分かれ、上層がやや暗い色調である。調査区北部では厚さ0.4mほどあるが、南部では0.02mとなる。平安時代中期を下限とする遺物小片を多量に包含する。

第3層上面で第1面、第4層上面で第2面、第5層上面で第3面を検出した。検出した遺構には、土壇、柱穴、瓦溜、落込みなどがある。

第1面では、全域で土壇、柱穴を検出した。柱穴は建物としてまとまらなかった。土壇は形状・規模で多様なものがある。時期は近世に属する。

第2面では、調査区中央で南北方向の落込みSX 1を検出した。南北約9m、東西は調査区外に続き、深さは約1mで底部は北西から南東に深くなる。埋土は上層褐色灰砂礫層、下層灰色砂泥層で、下層に遺物が集中する。南部で瓦溜SK 1を検出した。北側はSX 1に削平されるが、東西1m、南北1.5m以上で丸瓦・平瓦を包含する。時期は平安時代中期に属する。

第3面では、調査区北半で東西方向の落込みSX 2を検出した。南北約4mで西は調査区外に続き、深さは約0.2～0.4mである。埋土は黄灰色砂泥を中心とし、遺物を若干含む。時期は平安時代

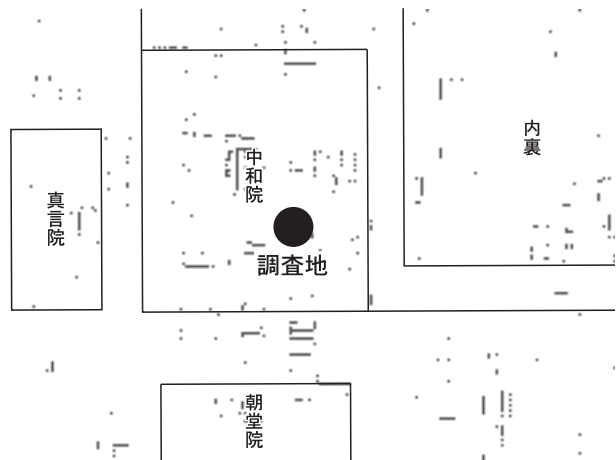


図30 調査位置図（1：5,000）



図31 調査区配置図（1：500）

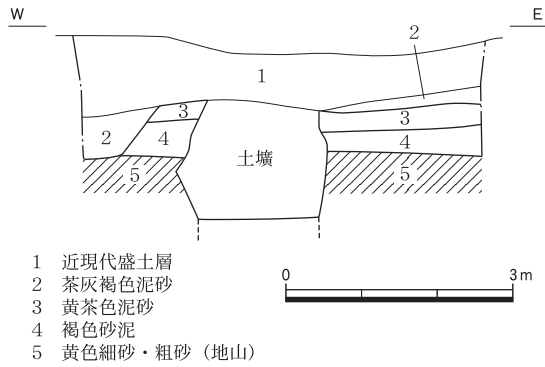


図32 北壁断面図 (1 : 100)

前期に属する。

遺物 遺物は、整理箱で140箱出土した。遺物には、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、陶器、磁器などがある。時期は平安時代前期から近世にわたり、近世の遺物が多い。平安時代中期の遺物は第4層から集中して出土し、土師器には皿・杯・高杯・鉢・甕、須恵器には杯・壺・鉢・甕、黒色土器杯・甕・硯、青磁椀、緑釉陶器

杯・椀・皿・香炉、灰釉陶器椀・皿・浄瓶などがある。

小結 検出遺構では、SX1・2が平安時代の遺構であるが、性格は不明である。また、それらの中には平安時代中期の包含層が堆積し注目される。

『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』 1979年報告

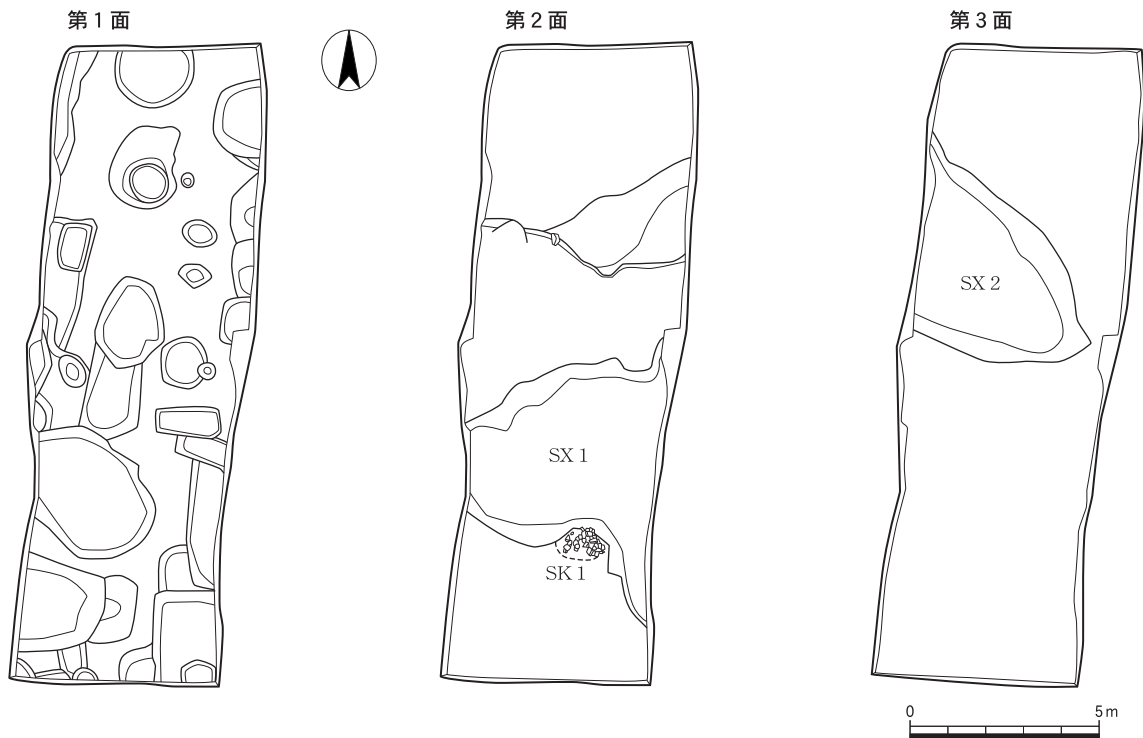


図33 遺構平面図 (1 : 200)

9 平安宮中務省跡 1

経過 今回の発掘調査は、ビル新築工事に伴うもので、当地は平安宮中務省中央西部推定地にあたるため、調査を実施した。中務省1回目の調査である。

調査地内に南北8.4m、東西7.4mの長方形の調査区を設定し、南辺を幅2mで東へ拡張した。重機で現代層・攪乱(約0.5m)を掘削し、その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 基本層序は、第1層近現代盛土層(約0.5m)、第2層茶褐色砂泥層(約0.4m)、第3層暗褐色砂泥層(包含層:約0.2m)、第4層黄褐色粘質土層(地山)である。第3層内には瓦片を多量に包含する。第4層上面で平安時代の遺構面を検出した。検出した遺構には、土壇2基がある。

調査区北東部で土壇SK1を検出した。南北5.2mで東は調査区外に続く。深さは約0.5mである。埋土は暗灰色砂泥で、多量の土器が炭と共に出土した。土器は比較的短期間に投棄され、型的にまとまりがある。南東部ではSK2を検出した。不定形の凹み状の土壇である。SK1と同時期と考えられる土器が若干出土した。いずれも平安時代前期に属する。

遺物 遺物は、整理箱で40箱出土した。遺物には、土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器などがある。平安時代の土器はSK1からまとまって出土し、土師器には椀・杯・皿・蓋・高杯、須恵器には杯・蓋・壺・鉢・甕・硯などがある。

小結 今回の調査では中務省に関係した建物などは検出できなかったが、土壇(SK1・2)か

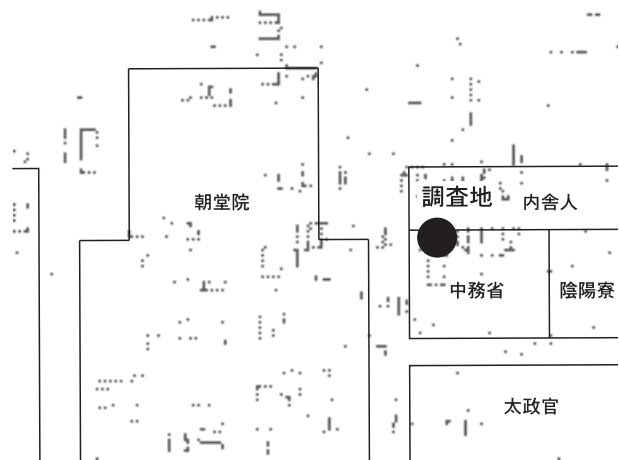


図34 調査位置図 (1 : 5,000)



図35 調査区配置図 (1 : 500)

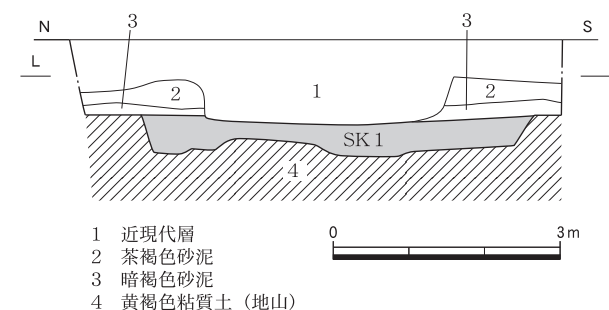


図36 東壁断面図 (1 : 100)

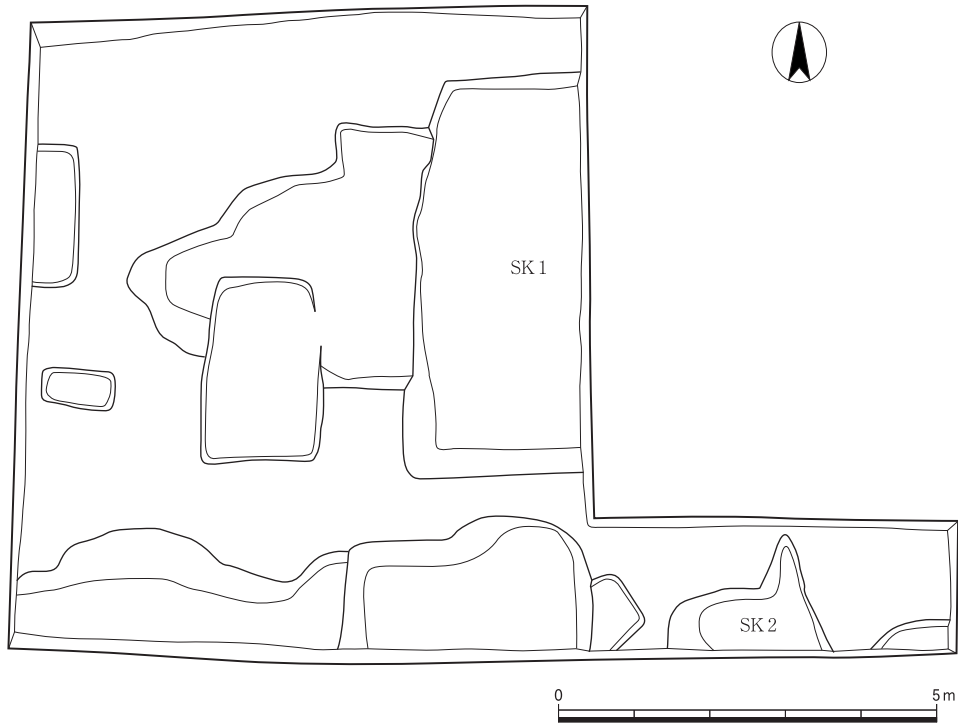


図37 遺構平面図（1：100）

ら出土した多量の土器は、付近に遺構の存在を窺わせる。これらの土壌は、使用済の土器を一括
投棄するために掘られたものと推定できる。

『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』 1979年報告

10 平安宮中務省跡 2

経過 今回の発掘調査は、住宅の新築工事に伴うもので、当地は平安宮中務省中央北側推定地にあたるため、調査を実施した。

調査地内に南北12m、東西6mの調査区を設定し、随時拡張した。重機で現代層を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 北調査区の基本層序は、第1層現代盛土層(0.1~0.3m)、第2層淡黄灰色泥砂層(近世包含層:約0.1m)、第3層淡褐色泥砂層(0.1~0.15m)、第4層暗褐色泥砂層(0.1~0.4m)、第5層茶灰色粘質土層(地山)である。調査区東部では第2層は見られない。第3層上面は堅く整地する。第4層は整地層で、土師器細片を多量に含み堅く叩きしめた厚さ0.03~0.05mの層と瓦を敷き詰めたような厚さ0.05mの層が互層に堆積する。

第3層上面で第1面、第4層上面で第2面、第5層上面で第3面の遺構を検出した。検出した遺構は、掘立柱建物、柵、溝、落込みである。

第1面の遺構は、調査区中央で掘立柱建物1棟とその東側に南北柵がある。建物SB1は梁間1間×桁行2間の南北棟で、梁間2.8m、桁行1.5mである。柵はSB1の東1.6mに位置し、柱穴の規模や間隔は不揃いである。

第2面の遺構は、調査区北端で東西溝、中央で掘立柱建物1棟、南東部で溝2条、土壇である。溝SD1は幅3.7m以上、深さ0.1~0.15mで、調査区外へ続く。建物SB2は東西1間(5.0m)、南北1間(6.8m)を検出した。柱穴4基に根固め石や凝灰岩を伴っている。溝SD2・3は幅約2m、深さ0.2~0.3mで東西に続く。埋土中には、多量の瓦が含まれる。

第3面の遺構は、調査区北端で落込みSX1がある。SX1は北側に落ち込み、最深部で0.4mある。埋土全体に瓦を多く含む。

遺物 遺物は、整理箱に200箱出土した。遺物には、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、軒

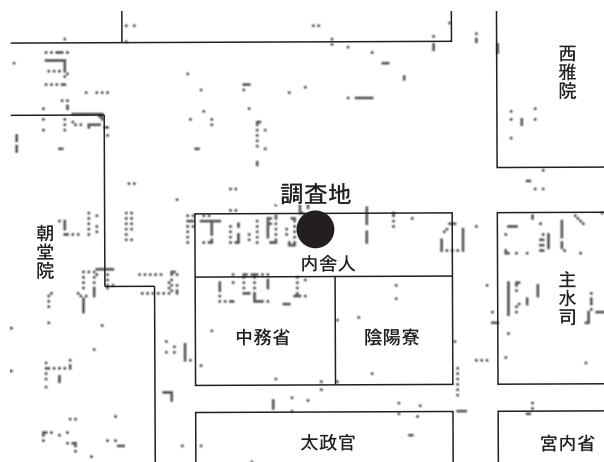


図38 調査位置図 (1:5,000)

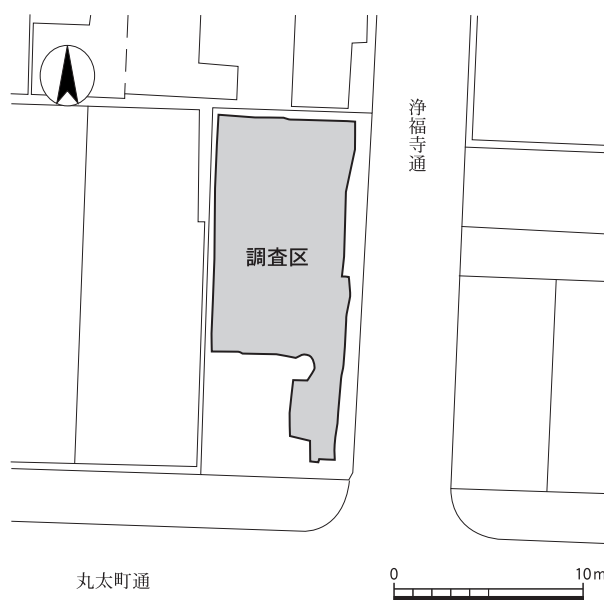


図39 調査区配置図 (1:400)

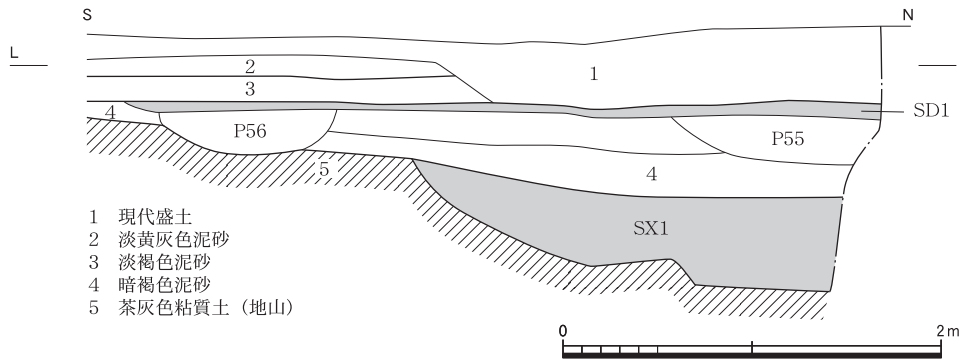


図40 西壁断面図 (1 : 40)

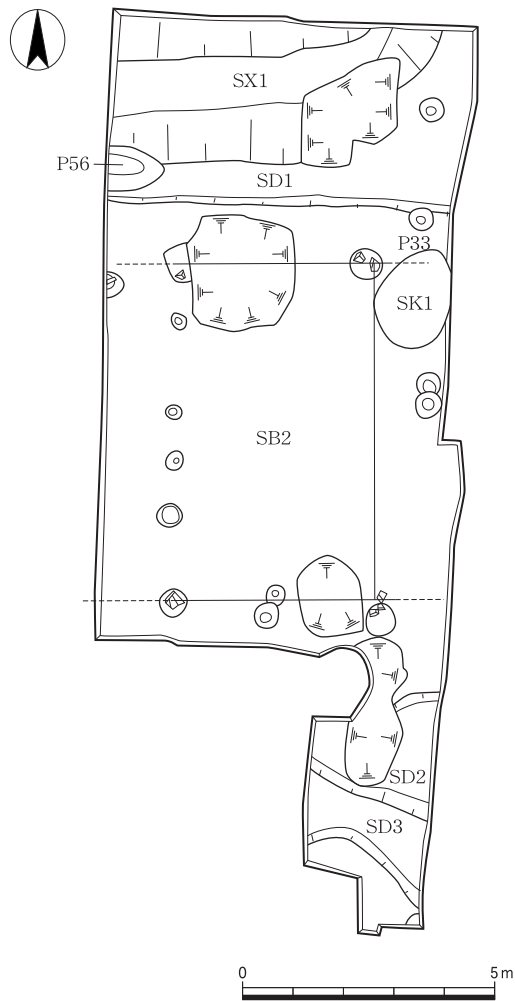


図41 第2・3面遺構平面図 (1 : 150)

丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などがある。時期は平安時代から近世である。平安時代の土器類は第3層およびSD1から集中して出土した。平安時代の瓦類はSD2・3から集中して出土した。

小結 今回の調査では、調査範囲が狭いため平安時代の明確な遺構は検出できなかった。しかし、近世層下に2面の整地層を確認できたことは、同地周辺の消長を考える上で、大きな意味がある。

『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所 概要集1978』 1979年報告

11 平安宮太政官跡 1

経過 今回の発掘調査は、住宅の新築工事に伴うもので、当地は平安宮太政官東側中央推定地にあたるため、調査を実施した。

調査地内に南北6m、東西12mの調査区を設定し、随時拡張した。重機で近現代層を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に部分的に断割り、下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層(0.4m)、第2層茶褐色砂泥層(約0.15m)、第3層暗灰褐色粘質土層(0.3m)、第4層灰褐色砂礫層(地山)である。第4層上面で遺構を検出した。検出した遺構には、溝、整地層、土壇がある。

調査区東部で南北溝SX5を検出した。東西幅5m以上、深さは最深部で0.8mである。埋土は暗茶褐色粘質土で、近世の遺物を含む。この溝は1977年調査の東端で検出した落込みの続きである。SX5の東側では、第4層上面が平坦で強く締まり、土器細片を含み整地層SX6とした。この整地層も1977年調査のSX1の続きである。時期は不明である。土

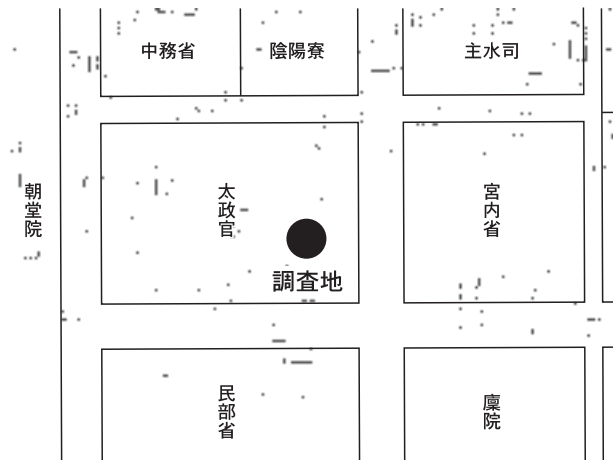


図42 調査位置図 (1 : 5,000)

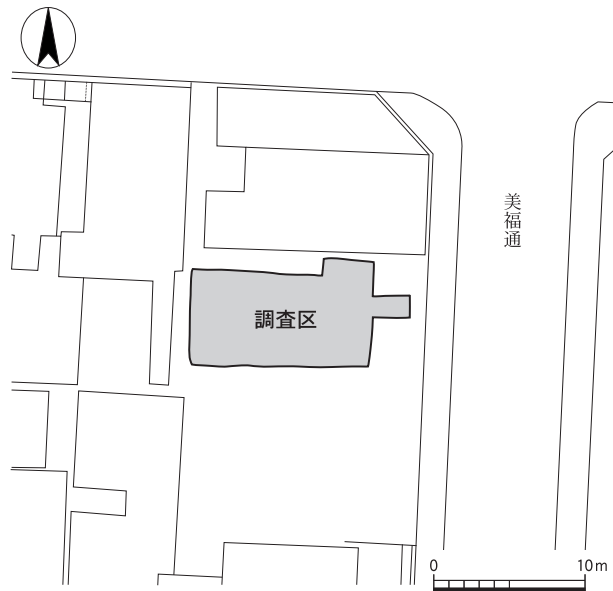


図43 調査区配置図 (1 : 500)

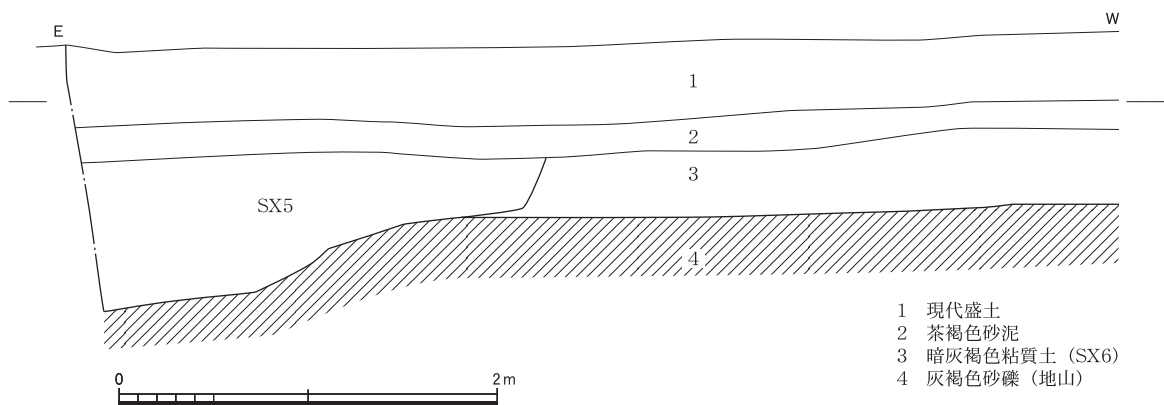


図44 南壁断面図 (1 : 40)

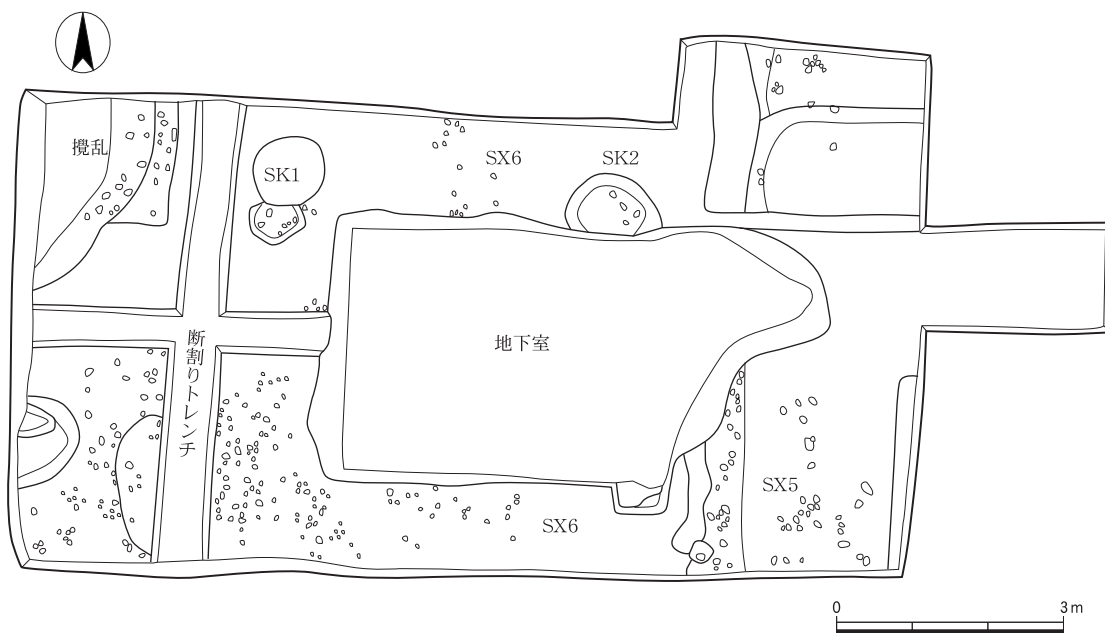


図45 遺構平面図（1：100）

壙は全域で検出した。円形や不定形の多様なものがあり、規模もさまざまである。時期は近世で、平安時代の遺物も含む。

遺物 遺物は、整理箱で4箱出土した。遺物には、軒平瓦、土師器、陶磁器などがある。時期は軒平瓦が平安時代前期である他は、すべて近現代である。

小結 今回の調査では、南隣の1977年度調査地から続く南北溝・整地層を検出した。整地層は明確な遺物は確認していないが、平安時代の可能性がある。調査地は太政官東限近くであり、周辺の調査によってこの遺構の意味も明らかになるであろう。

『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』 1979年報告

12 平安宮太政官跡 2

経過 今回の発掘調査は、住宅の新築工事に伴うもので、平安宮太政官西北部推定地にあたるため、調査を実施した。

調査は2回に分けて実施し、東側に南北16m、東西6mの調査区（東区）、西側に南北7m、東西7mの調査区（西区）を設定した。

遺構 西調査区の基本層序は、第1層現代盛土層（0.4～0.6m）、第2層淡褐灰色泥砂層（約0.1m）、第3層灰色砂礫層（0.15m）、第4層茶褐色粘土層（地山）である。第4層上面で各時期の遺構を検出した。検出した遺構は、溝、築地、土壇、凝灰岩列、柱穴などである。

古墳時代の遺構は、東区中央で北東から南西方向の溝を検出した。幅3m、深さ1mで断面V字形である。埋土は砂礫層が主体で、上層に淡灰色粘土が堆積する。

平安時代の遺構は、全域で検出した。東区で南北築地SA1を検出した。幅4.5mで15m分検出した。第4層上面に明茶褐色粘土・淡黄褐色粘土を盛り土して構築する。SA1の

東側では築地内溝SD10・11、西側では宮内道路側溝SD30を検出した。SD10は幅0.4m、深さ0.3mで、南側では護岸凝灰岩列が残存した。SD11は数時期にわたる掘り替えがあり、最大幅2.4m、最深0.6mである。SD30は幅1.6m、深さ1.1mで、北側がやや細くなる。東区では、土壇SK7～9を検出した。規模・形状は様々であるが、いずれも瓦を多量に含むことから、瓦溜である。土壇SK10は築地・側溝の下層で検出し、これらに先行する土壇である。西区でも土壇を多数検出したが、大半が瓦溜である。

遺物 遺物は、整理箱で約240箱出土した。土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、軒瓦・丸瓦・平瓦、凝灰岩などが出土した。大半は瓦が占め、土器類は少ない。時期は、古墳時代、平安時代、近世、近代である。古墳時代の土器は溝から出土し、時期は6世紀初めから7世紀である。平安時代の遺物は溝・土壇などから出土し、時期は平安時代前期から中期である。瓦は、東区では平安時代前期の他、奈良時代・長岡京期のものも含まれる。西区土壇では平安時代後期のものが主体を占める。

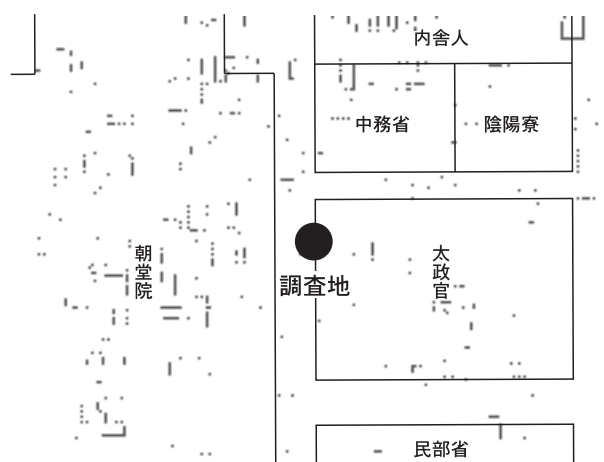


図46 調査位置図（1：5,000）

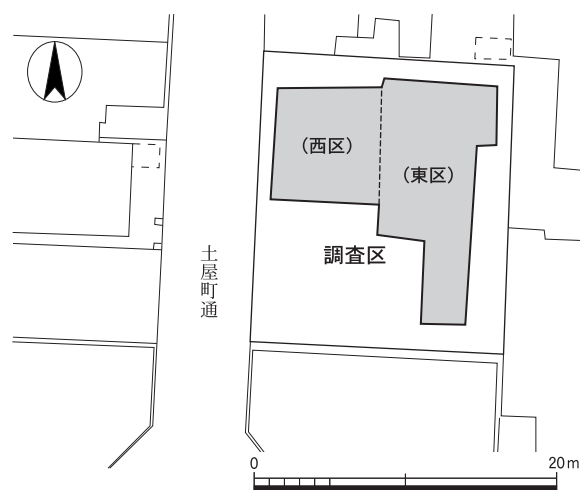


図47 調査区配置図（1：500）

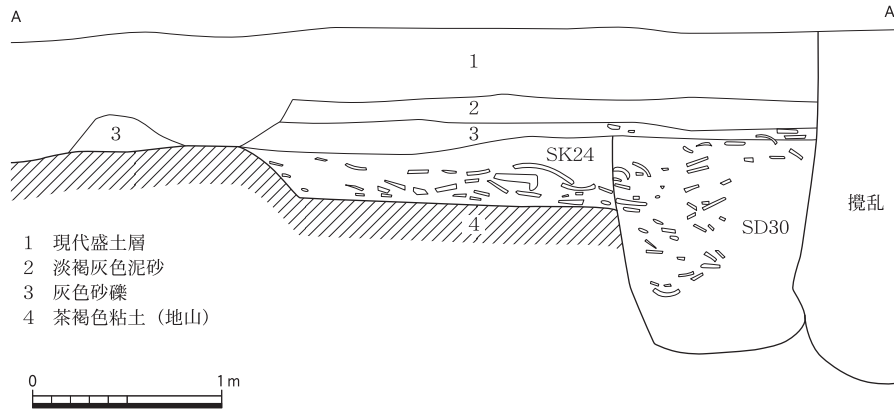


図48 西区北壁断面図（1：40）

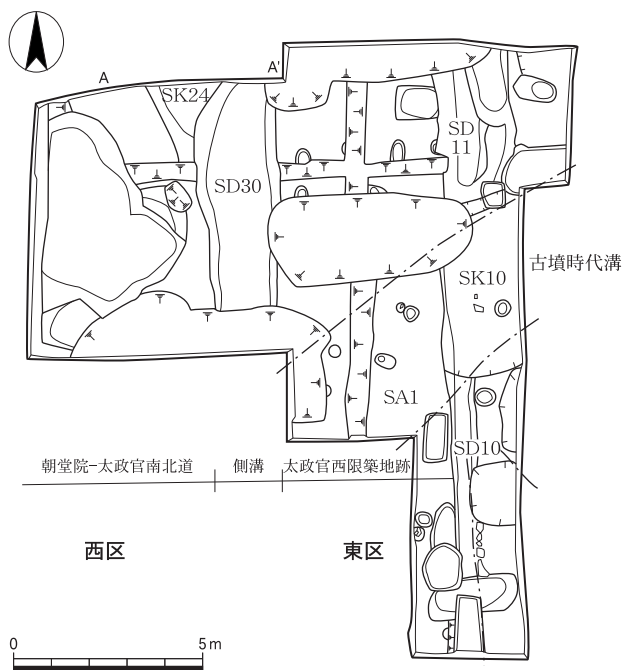


図49 遺構平面図（1：200）

小結 今回の調査では、太政官西限築地を検出した。ただ、築地の西側は朝堂院との間の南北道路であるが、瓦溜群があり道路面は検出できなかった。一方、太政官内は時期的に変遷し、内溝は10世紀には消滅することが明らかとなった。また、下層から古墳時代の溝を検出し、近辺に当該期の遺構が存在することが想定できる。

『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』 1979年報告

13 平安京左京北辺二坊六町（図版1）

経過 日本電信電話公社は敷地内に西陣電話局の増設工事を行うことになった。当地は平安京北辺二坊六町に相当し、女官町の存在が推定されている。京都市文化観光局文化財保護課の指導により、建築工事に先がけて発掘調査を実施することとなった。

遺構 調査地全体の基本層序を西壁断面で観察すると、現代の盛土が約1.9mとなっており、その下層に茶褐色砂礫や暗茶褐色砂泥などが0.5～0.6mの厚さで堆積している。基本的に上層の堆積層は江戸時代に対応し、下層の暗茶褐色砂泥層は室町時代である。最終遺構面の標高は48m前後である。

検出した遺構は、調査区全体で井戸が10基、土壙59基、柱穴76基、瓦溜1基、石室1基、溝5条である。近代以降の井戸や攪乱によって壊されていることが多く、ここでは特徴的な主要遺構に限って取り上げる。

瓦溜1は調査区東側拡張区で検出した遺構である。南北の長さは確認できなかったが、東西の長さは3.5mであった。出土遺物は土師器や常滑焼の甕の破片を数点含むが、ほとんどが瓦で金箔瓦も出土した。土壙2は、長径約2.4m、短径約1mの楕円形を呈する土壙である。後述する溝3を切っており、江戸時代の土師器や陶磁器が多く出土した。溝3は調査区南端で検出した、幅約1.4m、深さ約1mの東西溝である。下層に礫を多く含む暗茶灰色砂泥が厚く堆積しており、一時に埋められた様相を呈している。出土遺物は、室町時代の土師器や常滑焼の甕の破片が多量に出土した。溝4は調査区北西で検出した、幅約1.2m、深さ約0.7mの東西溝である。溝3と比較すると、礫は少なく暗黄灰色粘土が堆積している。遺物は鎌倉時代から室町時代の土師器が出土した。

土壙5は調査区の北東隅で検出した。規模は径2.4m以上、深さは0.2mで、鎌倉時代の土師器が多量に出土した。石室は河原石を長方形に積んだ施設で、東西約0.8m、南北約1m、深さ約0.9m

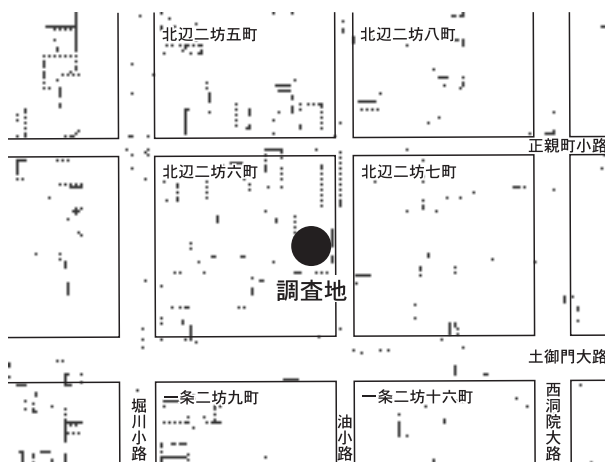


図50 調査位置図（1：5,000）

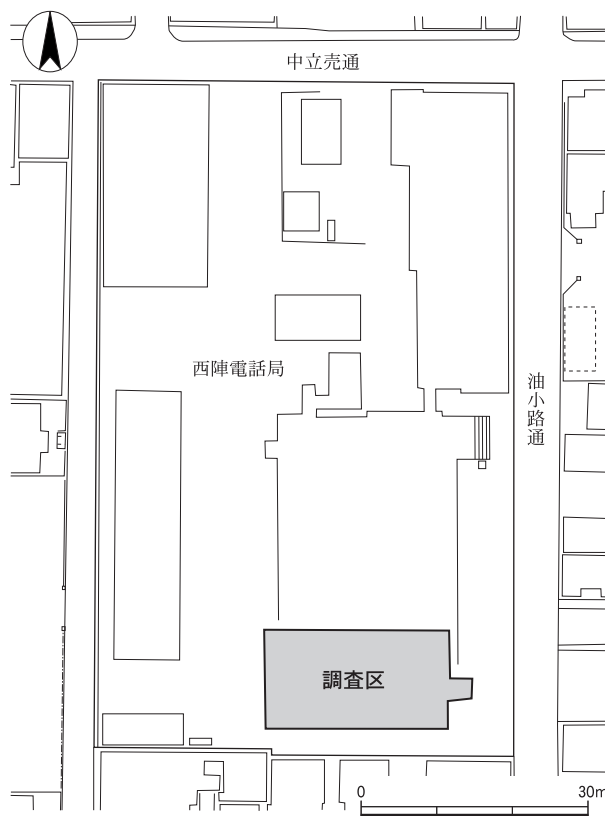


図51 調査区配置図（1：1,000）

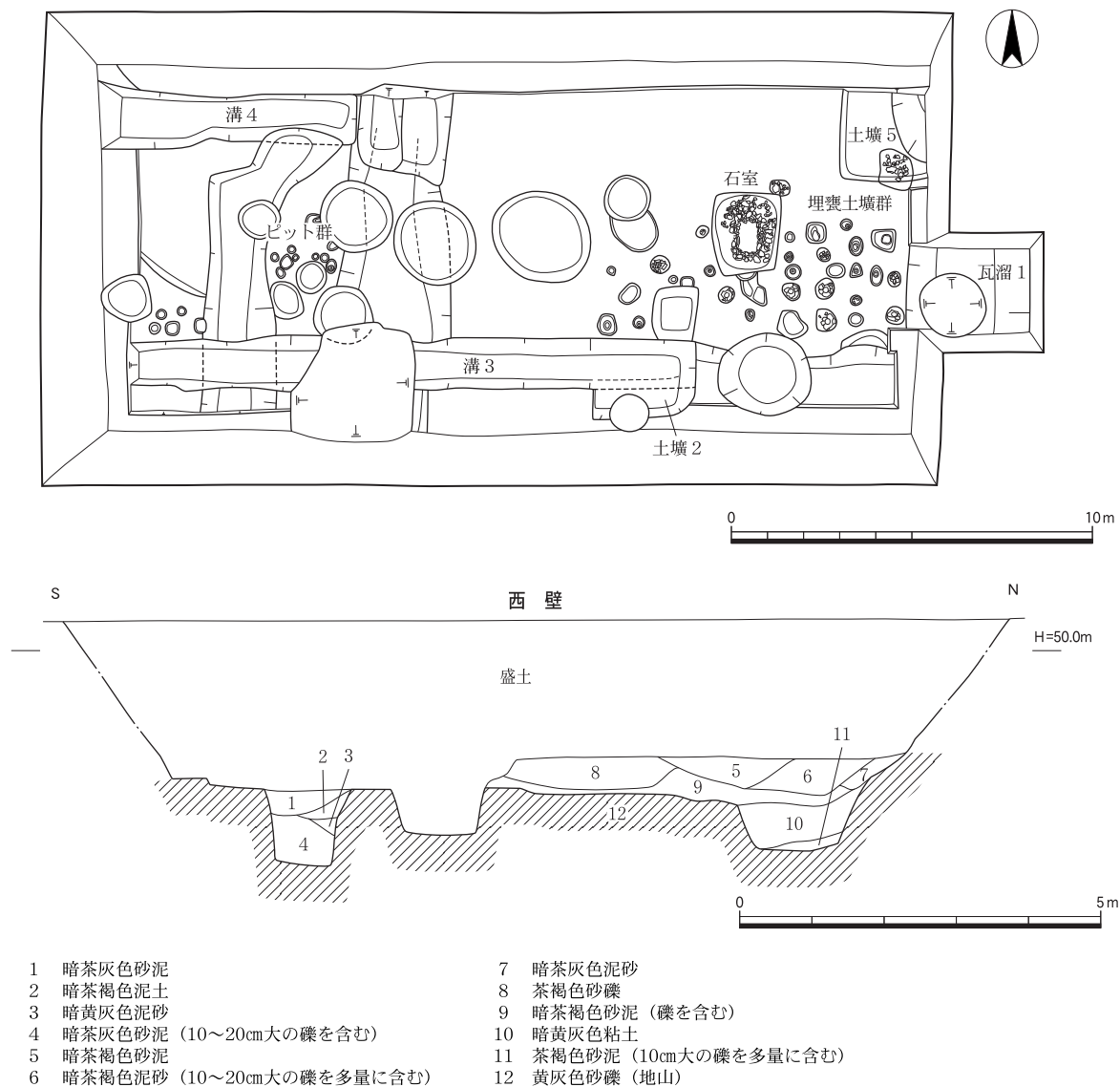


図52 遺構実測図 (1 : 200、1 : 100)

である。掘形はやや大きく東西約1.9m、南北約2.2mであった。埋葬土壌群は石室の東を中心に8基検出しており、常滑焼の甕が据えられていた。これらの小土壌はほぼ等間隔に並んでおり、油甕もしくは酒造に関する甕として利用された可能性がある。

この他、建物の柱穴と考えられるピット群を多数検出しているが、大半が別の遺構に壊されており柱筋を確認することができない。径約0.2~0.3m前後のものが多く、層位の関係や出土遺物から鎌倉時代の柱跡と考えられる。

遺物 遺物は、整理箱で104箱出土した。出土遺物については、多量に出土した瓦溜1と土壌5の資料に絞って述べることにする。

瓦溜1から出土した遺物は、大半が平瓦と丸瓦であるが、瓦当をもつものがあり桃山時代の金箔瓦が含まれている。軒丸瓦は7点あり、いずれも右方向に巻き込む三巴文軒丸瓦である。瓦当部には金箔を施している。また、道具瓦には鬘斗瓦と飾瓦とがあり、鬘斗瓦の側面および飾瓦の



図53 瓦溜1出土金箔瓦（左）および土壙5出土土師器皿（右）

表面にも金箔が施されていた。

土壙5から出土した遺物は、大半が鎌倉時代の土師器皿である。また瓦器碗が出土しているが、他の遺物は認められない。土師器の皿は、口径や形態により大皿1種、小皿2種に大別される。まず、大皿としては口径13cm、器高2.5cm前後のものがある。口縁部はやや内弯ぎみに立ち上がり、端部はさらに内向する。内面から口縁部外面にかけて丁寧にナデ調整する。小皿は口径8.5cm、器高0.9～1cm前後で、口縁部が外側へ短く立ち上がるタイプと、口縁部が内側へ強く屈曲するタイプに分かれる。口縁部内外面は横方向のナデ、底部内面は一定方向のナデで仕上げるが、前者は全体的に調整が丁寧である。瓦器はすべて碗で、低い貼付け高台をもつものと、平底で高台がつかないものがある。

小結 今回の調査で検出した主な遺構を時代順にあげると、最も古い遺構は土壙5と柱穴群で鎌倉時代に遡る。室町時代の遺構は溝2・3、石室、埋甕土壙群である。瓦溜1は桃山時代の遺構であり、江戸時代以降の遺構は井戸および他の土壙となる。平安時代については、中世以降の遺構内に平安時代の遺物が混入して少量出土するだけで、平安時代の明確な遺構および遺物包含層は確認できなかった。

14 平安京左京一条四坊隣接地（図版2）

経過 京都御苑の寺町御門の南東部、寺町通の間において公共防火水槽の設置が計画されたため、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。調査地は平安京では勘解由小路と東京極大路の交差点南東部、平安京左京一条四坊十三町の東京極を挟んだ京外隣接地にあたる。調査地北側には藤原道長が建立した法成寺が所在したとされ、東京極における土地利用の実態を明らかにするため調査を行った。

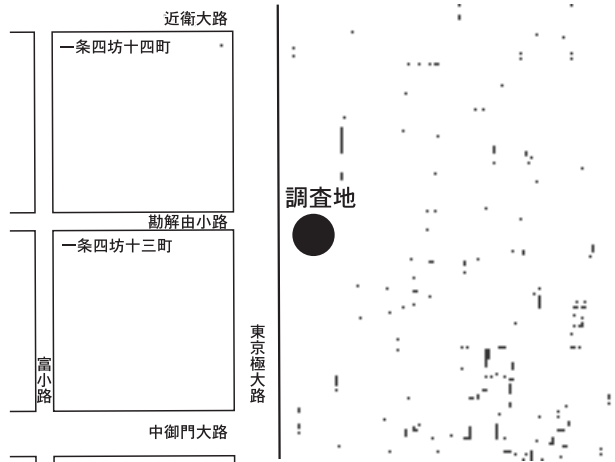


図54 調査位置図（1：5,000）

遺構・遺物 調査区全体の基本層序は、現代の路面整地層の除去後に、北西から南東に導排水する石組溝（御所水道）を検出した。近世から近代の包含層は0.7～0.9m堆積しており、この下層で中世遺構面を形成する茶褐色砂泥層および灰黒色泥砂層となる。また、これら中世包含層の下層、地表下1.3～1.4mで、平安時代後期の遺構検出面である黒灰色砂泥層を確認している。なお、この黒灰色砂泥層からも遺物が少量出土しており、平安時代の遺物包含層と考えられる。これより下層は褐色砂礫の地山となり、遺構は検出できなかった。

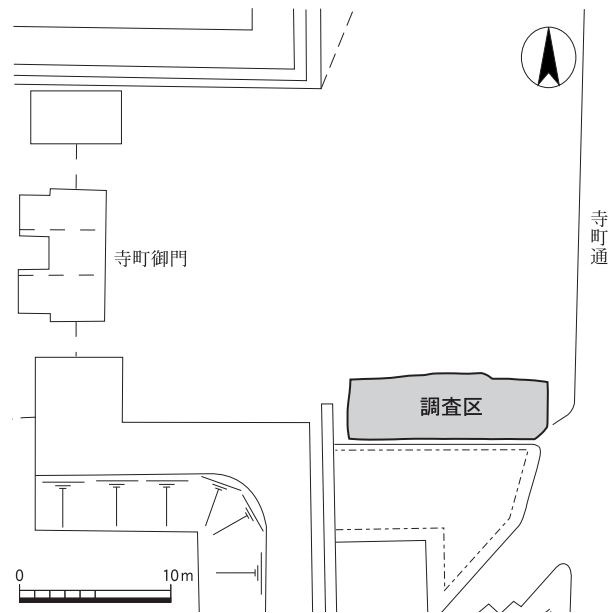
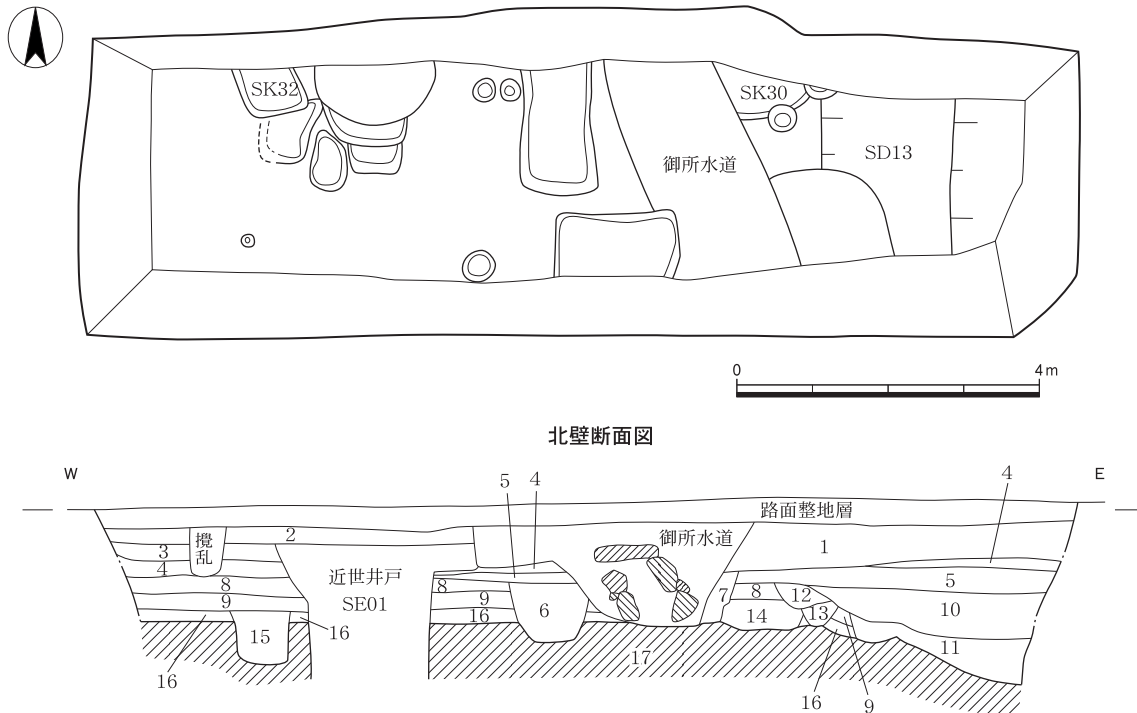


図55 調査区配置図（1：500）

検出した遺構は近世以降の土壌や井戸がほとんどであるが、平安時代後期と中世の土壌を1基ずつ確認し、調査区東端では南北流路の西肩部を検出している。これらの遺構について出土遺物とともに概観する。

SK32は調査区西で検出した土壌である。幅約0.8m、深さ約0.7mで、北側は調査区外に展開する。玉縁口縁の白磁椀とともに二段ナデを施す土師器皿が多量に出土しており、11世紀末から12世紀初頭の年代が与えられる。SK30は西側を御所水道で壊されており、大半が北側調査区に展開するため規模は明らかでないが、幅1.2m以上、深さ約0.4mの土壌である。土師器、瓦器、陶器など、鎌倉時代から室町時代の土器片を包含する。SD13は調査区東端で検出した東西幅2.5m以上の流路の西肩部である。上層と下層の大きく2時期に分かれ、上層の灰褐色～淡灰色シルト層は中世遺構面である茶灰色砂泥層から成立している。下層の褐色砂礫層も中世包含層下層である灰黒色泥



- | | | |
|-----------------|------------------------|--------------------|
| 1 暗茶褐色土 (近代棧瓦溜) | 7 茶褐色砂泥 | 13 暗灰色砂泥 |
| 2 茶褐色土 | 8 茶灰色砂泥 (中世包含層) | 14 黒褐色砂泥 (SK30) |
| 3 淡灰色泥砂 | 9 灰黒色泥砂 (中世包含層) | 15 暗茶灰色礫混泥砂 (SK32) |
| 4 褐色砂礫 | 10 灰褐色～淡灰色シルト (SD13上層) | 16 黒灰色砂泥 (平安時代包含層) |
| 5 黒灰色泥砂 | 11 褐色砂礫 (SD13下層) | 17 茶褐色砂礫 (地山) |
| 6 暗褐色砂泥 | 12 茶褐色砂泥 | |

図56 遺構実測図 (1:100)

砂層から成立しており、遺構としては鎌倉時代以降のものとなる。ただ、流路埋土内からは平安時代の遺物も出土しており、平安時代遺構面を形成する黒灰色砂泥層が流路に向かって下っていることから、流路の成立は平安時代に遡ると考えられる。

小結 今回の調査で検出した南北方向の流路SD13は、東京極大路を南流する中川と考えられる。中川の初見は寛平8年(896)の太政官符に見られ、平安時代後期に造営された法成寺は、中川に面していたことから中川御堂と称されていたという。また、長元元年(1028)9月の鴨川・中川の洪水においては、法成寺伽藍が水浸しになり塔が傾いたと記録されている。当調査地は法成寺のすぐ南に位置しており、平安時代後期の土壌も少ないながら確認している。従来不明な点が多かった中川について、今回具体的な遺構として検出できた成果は大きいといえる。今後、周辺の調査を継続して行うことによって、中川の変遷を検討していく必要がある。

15 平安京左京二条三坊十二町（図版3）

経過 烏丸通二条のやや北、烏丸通に面した西側においてビル建設が計画された。工事に先立ち京都市文化観光局文化財保護課（以下、文化財保護課と表記する）が試掘調査を行ったところ、遺構の存在が明らかとなったため、発掘調査を実施することとなった。

当地は平安京では左京二条三坊十二町にあたり、敷地東端部では烏丸小路に関連する遺構の存在も推定される。調査区は文化財保護課の指導のもと、東西約15mのL字形に設定して調査を開始した。調査を進めたところ調査区東端で烏丸小路西側溝と考えられる南北溝の一部を検出したため、3.5m幅で東へ約4m拡張を行い溝の全容を明らかにした。なお、南北溝の南側で確認調査を補足的に行い、南北溝が南へさらに続いていることを、最終的に確認した。

遺構・遺物 調査地の基本的層序を北壁東半部で見ると、近・現代の盛土および整地層が約1.3m堆積しており、この下層で江戸時代の遺構面を確認した。さらに、約0.4m下層で古代末から中世遺構面となり、基盤層はさらに約0.3m下層で、地表下約2mであった。

検出した遺構は江戸時代以降の土壙や井戸、古代末から中世では烏丸小路西側溝や多くの柱穴群・土壙などを検出した。また、最終遺構面では平安時代の井戸を確認している。ここでは古代末から中世の主要な遺構について概要を述べる。

SD4は調査区東端で検出した南北溝で、少なくとも2時期の変遷が認められる。新段階の溝SD4Bは幅約2.2m、深さ約0.5mである。平安時代後期の遺物が多く出土するが、最下層から室町時代の遺物が出土し、新しくなることが判明した。南半部は後述する土壙SK17に壊されている。旧段階の溝SD4AはSD4Bの東に接して検出した下層の南北溝である。幅約1.6m、深さ約0.3mで、遺物はほとんど出土しなかったが、層的に下層となることやSD4Aから11世紀の土器が多く出土していることから、11世紀以前に遡る可能性がある。なお、これらの溝は実質的に長さ2mほ

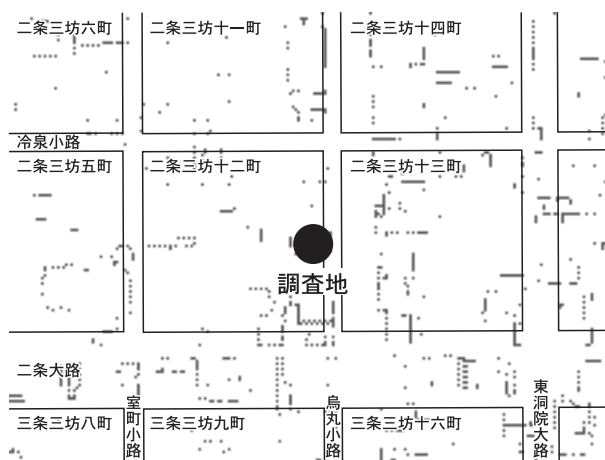


図57 調査位置図（1：5,000）

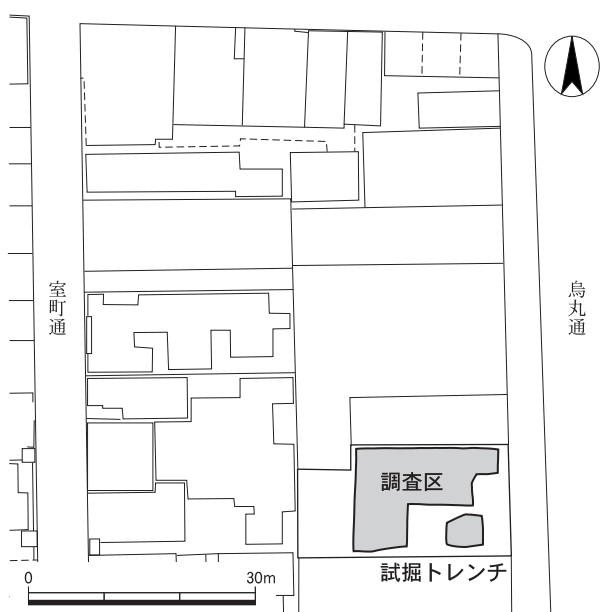


図58 調査区配置図（1：1,000）

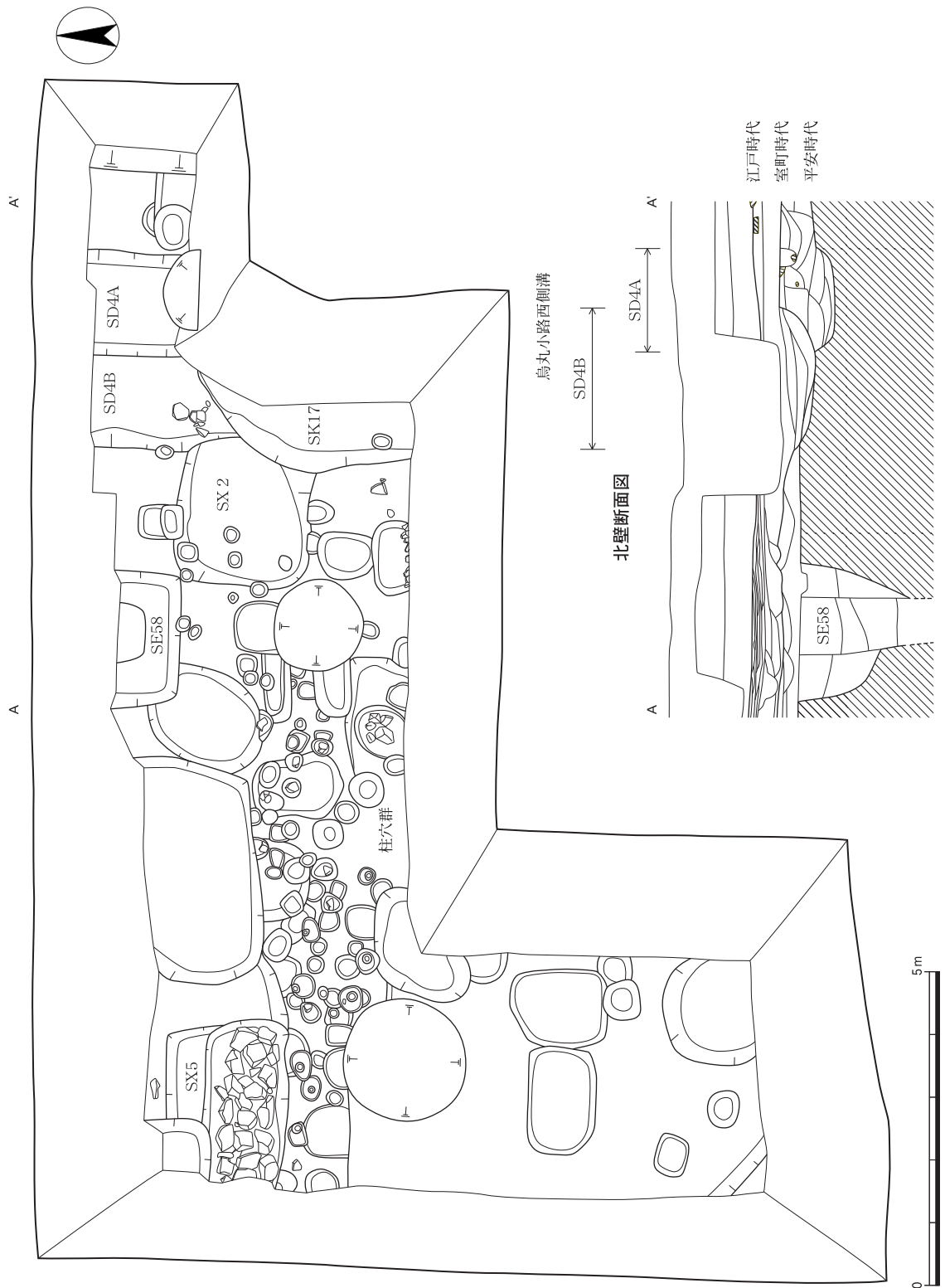


図59 遺構実測図 (1 : 100)

どしか検出できていないが、調査区南東部で実施した確認調査で南へ延長することが判明しており、烏丸小路の西側溝であることは間違いないであろう。

土壙は平安時代後期に遡る土壙SX2と室町時代の土壙SK17および中世以降のSX5がある。SX2は平面規模2m余り、深さ0.25mほどの凹み状の土壙である。東端はSD4Bに切られている。11世紀の土器類が多く出土している。SK17はSD4Bの南半を壊して穿たれた不整形土壙である。南と東は調査区外に展開するため、規模は明らかでない。室町時代後期の土器類が多く出土した。SX5は調査区北西隅で検出した、南北2m、東西2.5m以上の東西に長い方形土壙である。底部南端には1.3m幅で石が敷かれており、西は調査区外に展開する。出土遺物が少なく時期が明確に確定できないが、中世のピット群を切っていることから、あるいは江戸時代に下る遺構かもしれない。

井戸は調査区中央北端で、平安時代に遡る井戸SE58を検出している。北半が調査区外に展開しており、安全を考慮して完掘はできなかった。そのため構造は不明であるが、9世紀に遡る遺物が出土した。

この他、近世以降の攪乱で壊されなかった遺構面上には、柱穴と考えられるピット群を多数検出しており、烏丸小路に面して中世建物が頻繁に建てられていた様子を窺うことができる。

小結 今回の調査では、平安時代後期から室町時代前期にかけて機能していた烏丸小路西側溝を検出した。とくに、新段階の烏丸小路西側溝は室町時代後期には埋没しており、土壙SK17が穿たれている事実は重要である。応仁の乱後、上京と下京を中核とする中世京都の再編が行われるが、上京と下京を繋ぐ室町小路から東へ外れる烏丸小路辺は衰退したと考えられている。当調査で検出した建物は、おそらく烏丸小路に面して建てられた建物であり、室町時代後期には廃絶していた可能性が高い。烏丸小路の新たな条坊データを得るとともに、中世京都の実態を考えるうえでも大きな成果だったといえよう。

16 平安京左京四条三坊十五町 1

経過 頂法寺（六角堂）の六角通を挟んだ南東において、2箇所を発掘調査を行った。東側の調査区はA区、西側の調査区はB区として調査している。ここで概要報告するA区の調査は、ビル建設に伴う発掘調査である。B区の調査成果については、項を改めて後述する。なお、当地は平安京左京四条三坊十五町に相当する。

遺構・遺物 調査地の基本層序を北壁で見ると、近世以降の盛土および整地層が約1.5m堆積しており、この下層で江戸時代の遺構面を確認した。さらに、約0.6~0.7m下層で中世遺構面となる。中世遺構面は、地表下約2.2mであった。

検出した中世の遺構は、不整形な土壇5基と柱穴2基のみである。調査区北西で検出した2基の土壇SK21・22は深さ0.8mを超える土壇で、調査区中央部にも深さ0.2~0.6mの土壇が数基切りあっている。近世の遺構は調査区北東部で底部に曲物を据えた石組み井戸SE3がある。石組みは最下段しか残っておらず、下層には大礫が多量に廃棄されていた。曲物内から寛永通寶が出土している。また、調査区中央にも素掘り井戸SE4が検出できた。さらに調査区南端では、幅約1.3m、深さ0.5~0.6mの東西溝SD3を検出しており、町屋の裏の区画溝である可能性が高い。

小結 今回の調査では、平安時代の遺構はほとんど検出できず、中世の遺構も不整形土壇が数基確認できるだけであった。ただ、近世の遺構として六角通に面する町屋に関わる井戸を検出し、南では区画溝も確認している。この区画溝は六角通

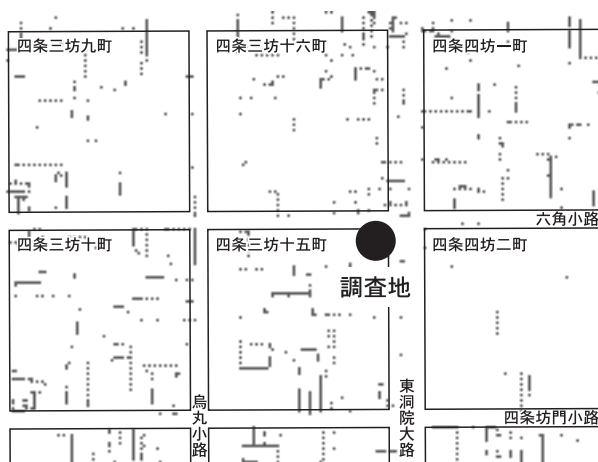


図60 調査位置図 (1 : 5,000)

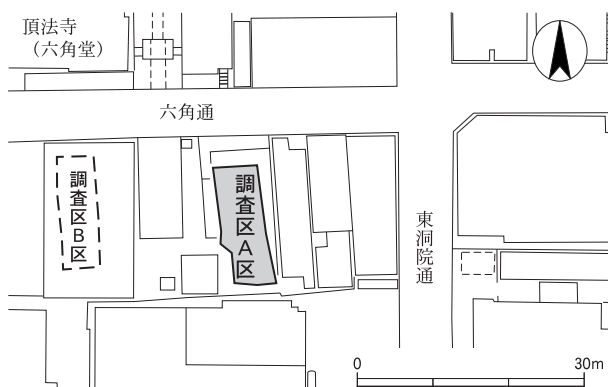


図61 調査区配置図 (1 : 1,000)



図62 調査区全景 (北から)

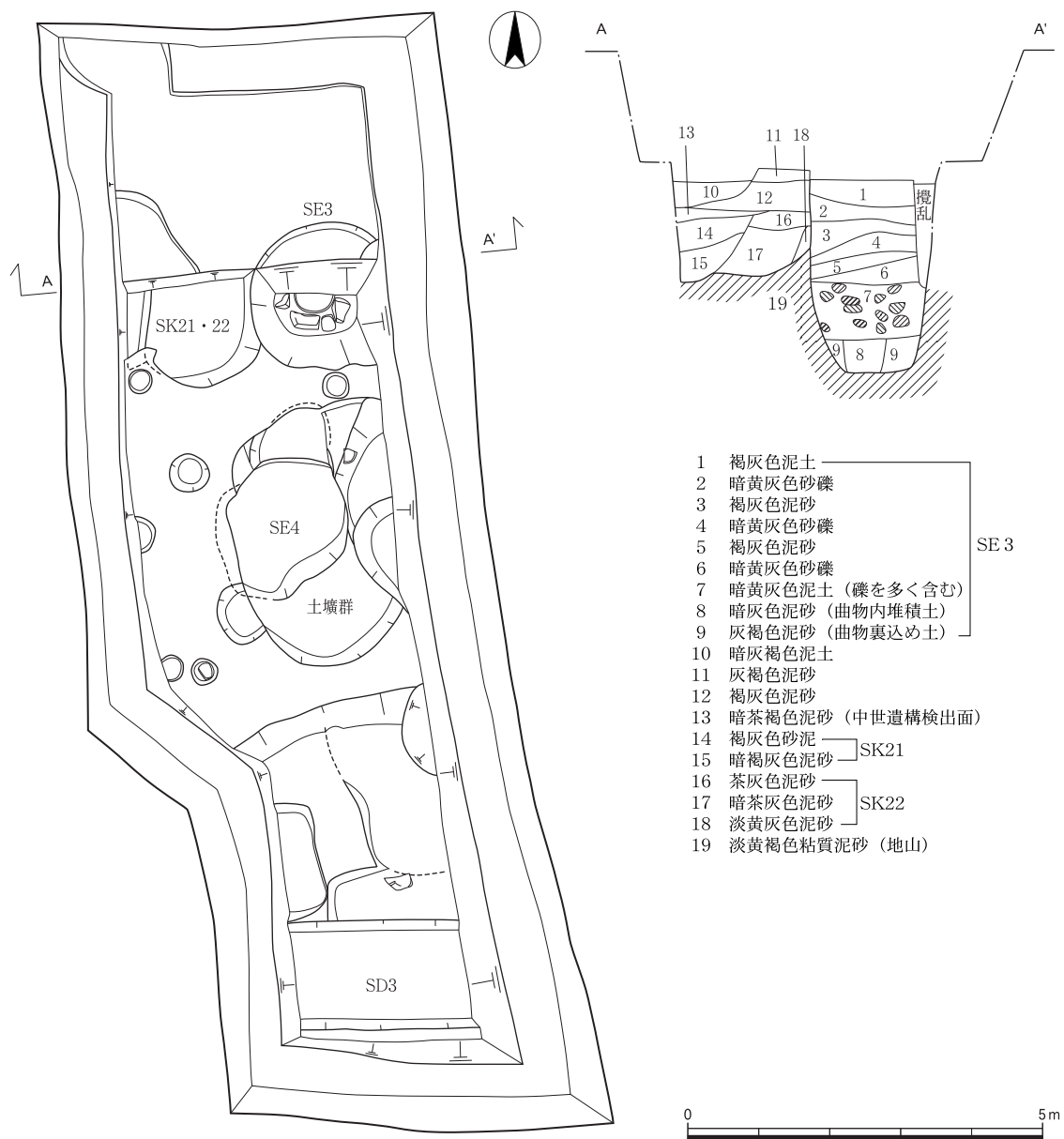


図63 遺構実測図 (1 : 100)

から18mほどしか離れておらず、六角通に面する町屋の奥行きが狭い状況を明らかにすることができたといえる。

17 平安京左京四条三坊十五町 2

経過 六角堂南東で行った発掘調査B区の調査概要を報告する。当遺跡は平安京左京四条三坊十五町に相当し、敷地北側が現在の六角通である。当地において旅館新築工事が計画されたため、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。

六角通を隔てた六角堂は聖徳太子ゆかりの地として信仰をあつめ、西国三十三箇所霊場の第十八番札所となって現在に至っている。調査区では六角堂および平安京の六角小路に関連する遺構の存在が推定された。これらの遺構の解明を目的として発掘調査を行った。

遺構・遺物 調査地の基本層序は、地表から基盤層上面まで各時期の遺構が錯綜しており、明確な層序を把握するのは困難であった。とくに、地表下1.1mまでは3時期の焼土層と十数層の整地層が認められたが、それ以下については調査区中央部に地表下1.8mまで江戸時代の石室が構築されており、包含層は

ごく一部しか遺存していなかった。しかし、石室の床面下約0.7mで中世および平安時代の遺構面を確認し、少ないながら土壙や井戸などの遺構を検出することができた。基盤層は灰色砂層あるいは黄灰色細砂層である。以下に中世および平安時代の遺構を概説する。

中世の遺構は非常に少なく、径1.2~1.5mの浅い土壙であるSK22で、わずかにへそ皿や中世瓦が出土したほかは、中世と断定できる遺構はない。A区も含めて中世の遺構が少ないのは、江戸時代の大規模な削平を受けているだけでなく、当地が中世段階において遺構密度の低い場所であったことを示唆している。

平安時代の遺構は、横棧縦板組みの方形井戸を2基検出した。SE4は調査区南端で検出しており、西半は調査区外となる。掘形が一辺3m以上あり、一辺約1mの井戸枠が設置される。掘形の埋土には土師器、緑釉陶器の破片が多数含まれ、井戸枠内からは大小の土師器皿(1~7)と中国製白磁が出土した。

SE5は調査区中央東壁際で検出した。井戸枠の大半は東調査区外となるが、一辺約0.8mの井戸枠が組まれていた。また、井戸枠内を部分的に拡張して調査を行ったところ、井戸内底部には上下二段の曲物が据えられていたことが判明した。上段曲物は直径0.6m、高さ0.3m、下段曲物は直



図64 調査位置図 (1 : 5,000)

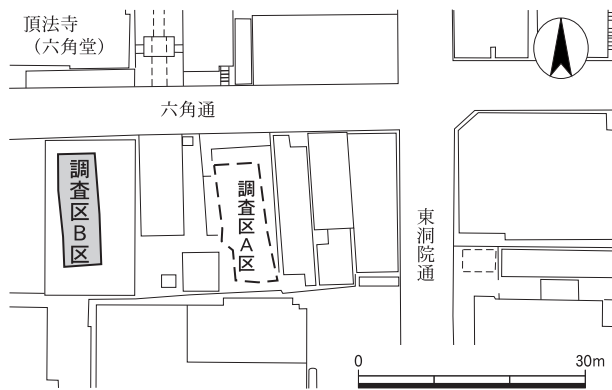


図65 調査区配置図 (1 : 500)

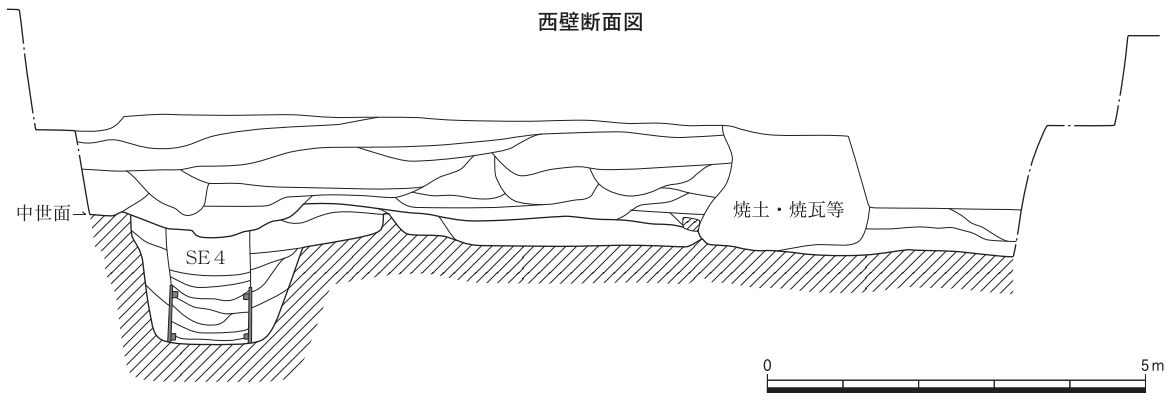
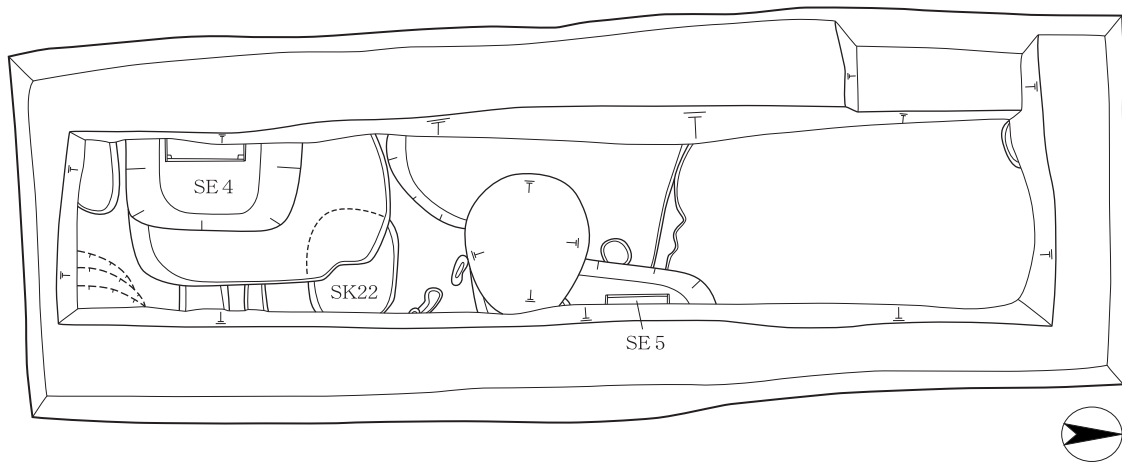


図66 遺構実測図 (1 : 100)

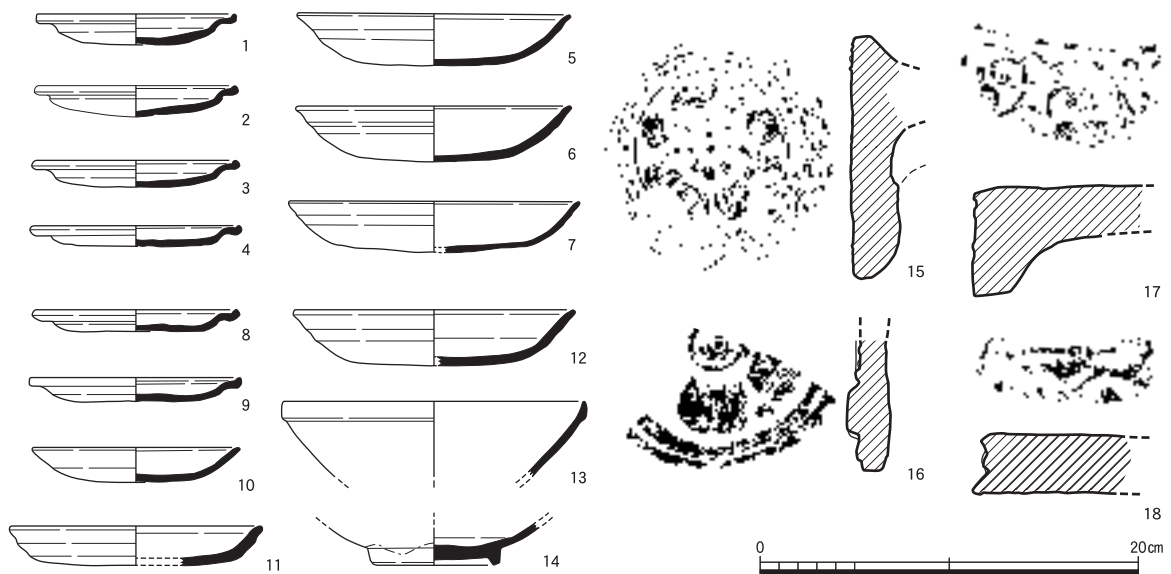


図67 SE 4・5 出土遺物拓影・実測図 (1 : 4)
 (1~7) SE 4 出土 (8~18) SE 5 出土

径0.42m、高さ2.7mであった。遺物はSE4と同様に土師器皿（8～12）と中国製白磁（13・14）が枡板内から出土し、平安時代後期の軒瓦（15～18）や完形に近い平瓦も出土している。これらSE4・5の時期は、土器や軒瓦の年代観から11世紀と考えられる。

小結 今回のB区の調査では平安時代後期の井戸を検出し、六角小路に面した当地における人々の生活痕跡を明らかにすることができたが、六角堂に関連する遺構は確認できなかった。六角堂は南は六角小路に面しており、南接する当町には平安時代後期には白河法皇近臣の藤原国明の六角東洞院第があったと伝えられている。時期的にやや遡るが、井戸から出土した白磁椀や軒瓦が邸第の存在を示す遺物である可能性もある。今後の周辺域の調査によって、六角堂を取り巻く邸第や施設の様相が明らかにされることを期待したい。



図68 調査区全景（北東から）

18 平安京左京四條四坊一町（図版4）

経過 旅館建物の新築工事に伴う発掘調査である。当地は平安京左京四條四坊一町にあたり、西は東洞院大路に面し、南の六角小路にも近接した場所である。西隣には東洞院大路を挟んで六角堂が所在する。発掘調査は、当初東西約23mの調査区を設定していたが、西半約9m分が攪乱で壊されていることが判明したため、東半部のみ調査となった。

遺構・遺物 調査区の基本層序は、地表下約0.7mまでは現代の盛土で、その下層は非常に複雑な堆積状況を示している。ただ、地表下約1.5mの深さで比較的安定した生活面を確認したため、この面を近世遺構面として調査を行った。この遺構面では江戸時代の石組み井戸（SE3・7）とともに多数の不整形土壌を確認した。これらの遺構群を処理した後に近世包含層を掘り下げ、地表下約1.9mで基盤層である暗黄灰色粗砂層となった。中世以前の遺物包含層は近世の攪乱によって確認できず、中世の遺構も室町時代の井戸SE5を1基検出しただけであった。同遺構面で確認した石組み井戸SE6は染付磁器を包含することから、やはり近世の井戸である。ここでは唯一確認できた室町時代の井戸SE5について概略を述べておく。

SE5は調査区中央で検出した、直径約0.9m、深さ約2mの円形石組み井戸である。底部に一辺約0.75m、高さ約0.35mの方形木枠を組み、その上に長径0.2~0.3mほどの河原石を円形に組み上げている。井戸底部の木枠内には炭と焼けただれた礫が多量に堆積しており、火事を受けた後に廃棄され直ちに埋められたものと想定できる。埋土内から土師器、瓦器、陶器、磁器などが出土している。中世以前の明確な遺構はこの井戸だけであり、平安時代の遺構は全く検出できなかった。

小結 今回の調査で検出した近世井戸群は、東洞院通に面した町家の裏手に穿たれたものと考えられ、同位置に室町時代の井戸が存在することから、これら町屋の成立は室町時代まで遡ることが想定できる。ただ、近世以降の

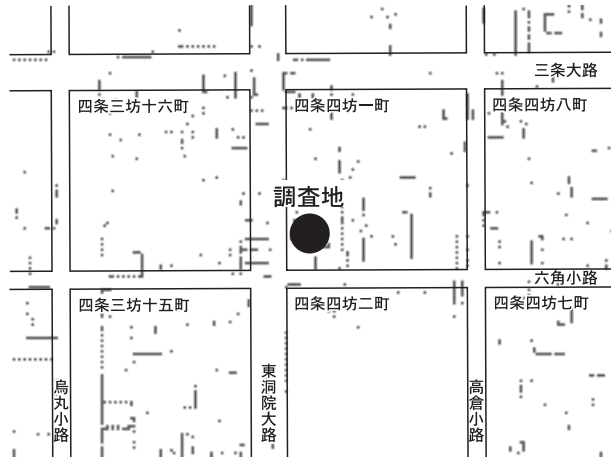


図69 調査位置図（1：5,000）



図70 調査区配置図（1：500）

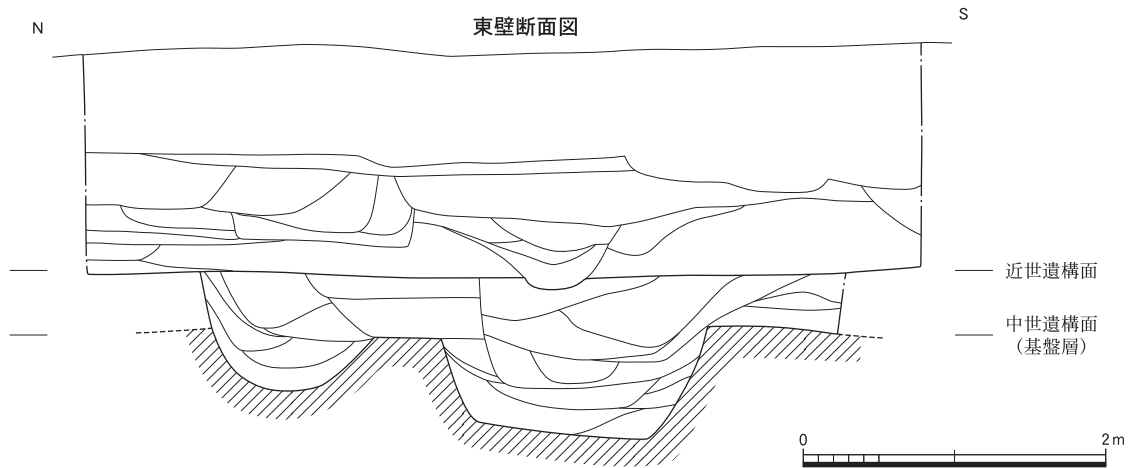
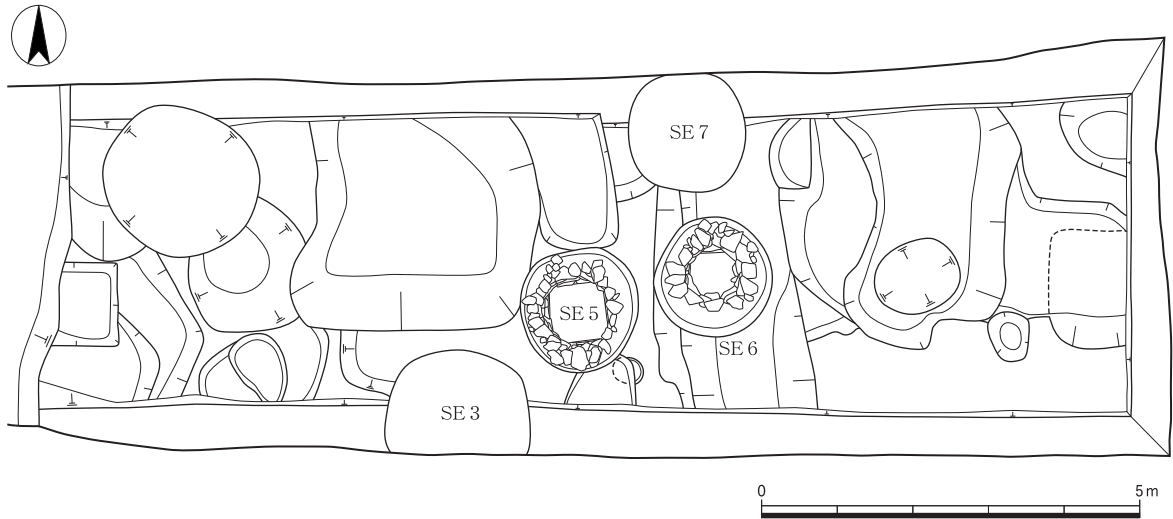


図71 遺構実測図 (1 : 100、1 : 50)

攪乱によって多くの遺跡が失われたことを考慮しても、実態として中世の遺構・遺物が非常に少ないといえる。応仁乱以降に下京の町が形成されていく中で、当地域の町屋がどのような変遷を辿っていくのか、周辺地域での調査成果を集積していくことによって明らかにする必要がある。

19 平安京左京五条一坊十二町（図版5）

経過 松原中学校の敷地西側に屋内運動場が建設されることになり、工事に先立って発掘調査を実施することとなった。当地は平安京左京五条一坊十二町に相当し、壬生大路と五条大路の交差点の北東に位置することから、平安時代の何らかの遺構の存在が推定された。発掘調査を進めたところ、遺構面全体が後世の削平を受けており、近世以降の攪乱も多く、平安時代の遺構は遺存していなかった。また、中世の遺構も少なく、井戸を2基検出するにとどまった。

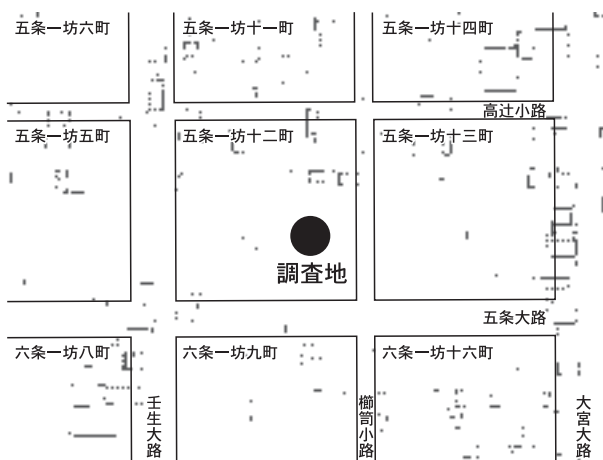


図72 調査位置図（1：5,000）

遺構・遺物 調査区の基本層序は、地表下0.8mまでがグラウンド整地層と盛土であり、その下層に近世以降の耕作土層が約0.4m堆積する。この近世耕作土層を除去した段階で基盤層である黄褐色砂礫層となり、遺構はこの基盤層上で検出した。

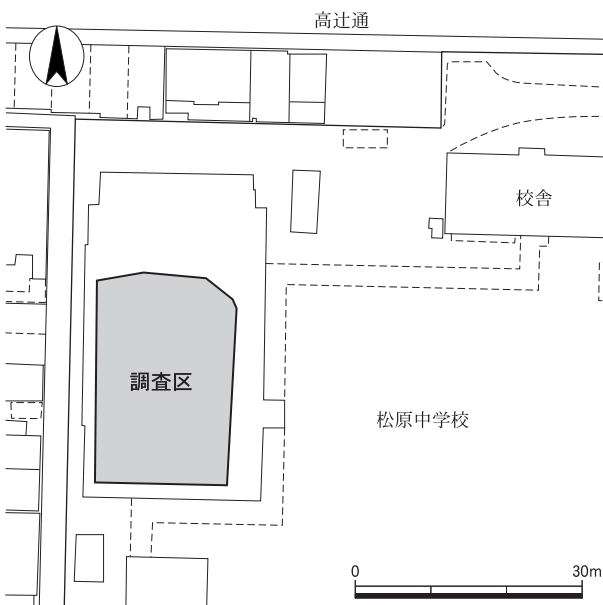


図73 調査区配置図（1：1,000）

遺構面は前述したように近世以降の削平および攪乱を多く受けており、中世以前の遺構は調査区北半部で方形横棧縦板組みの井戸を2基検出しただけである。南西に位置する井戸SE1は、一辺1m前後、深さ2mで、横棧が4段残存していた。木枠内からは土師器、

須恵器、天目茶碗などが出土した。掘形は南北約2.1m、東西約2.6mで、掘形内からも瓦器碗が出土している。

調査区北端で検出した井戸SE3は、一辺約1.4m、深さ約1.6mの大型井戸で、四隅柱と縦板の一部は遺存するが、横棧は最下段に痕跡が残るだけであった。井戸底部には直径約0.5mの曲物を据えた痕跡が認められる。枠内から中世陶器とともに須恵器瓶子が3個完形で出土した。掘形は南北約2.8m、東西約2.2mと長方形を呈し、掘形内から瓦器の火舎が出土している。井戸SE1とともに中世末の井戸である可能性が高い。

小結 今回の調査で検出したのは中世末に構築されたと考えられる井戸2基だけであり、平安時代の遺構はもとより中世における土地利用の実態も明確にできなかった。井戸が存在することから、中世末には一時宅地利用されていたと考えられるが、その後は近代まで耕作地として利用

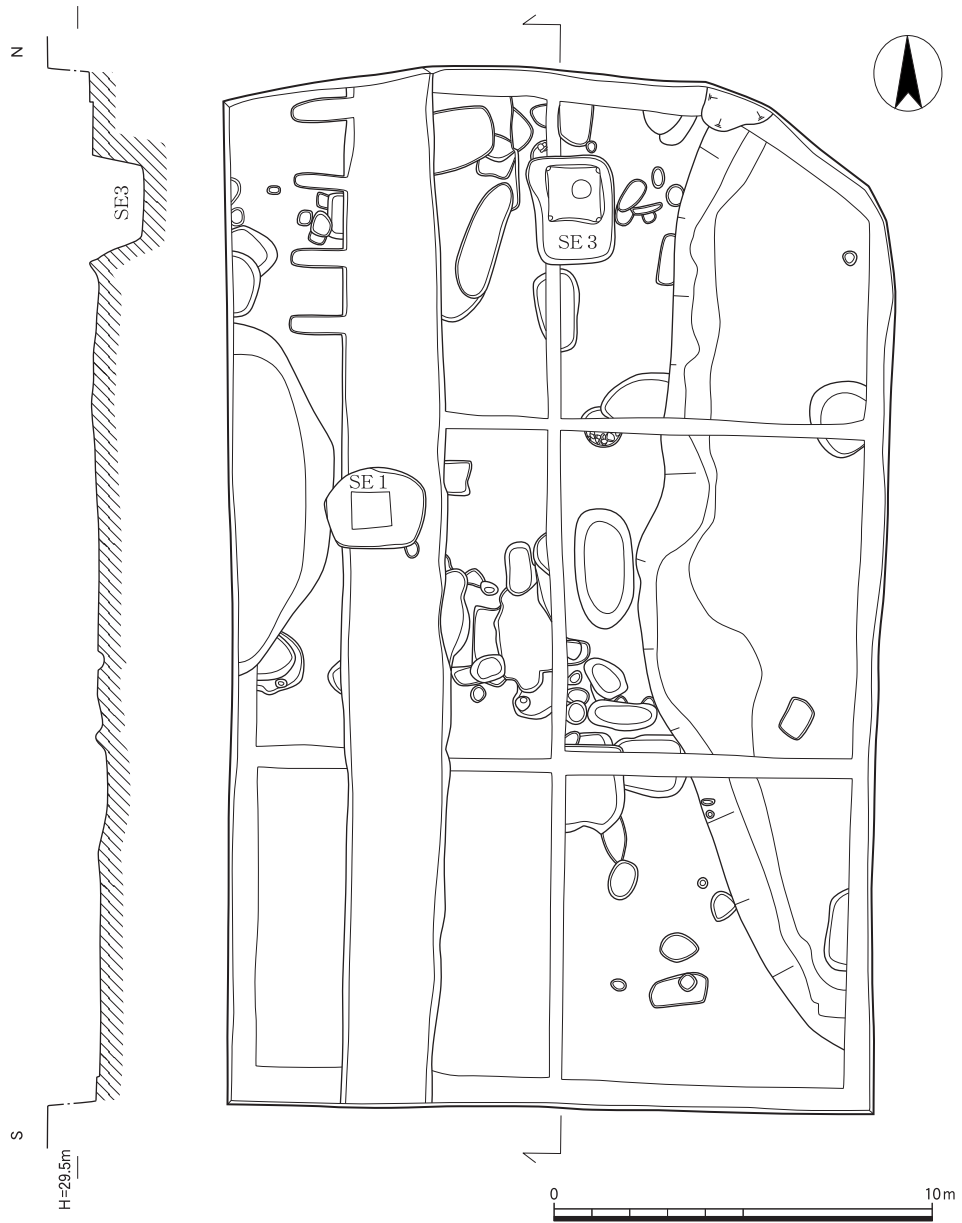


図74 遺構実測図（1：200）

されたことが窺えるのみであった。

20 平安京左京六条一坊二町

経過 京都市下京区中堂寺坊城町に所在する京都市立光徳小学校旧校舎跡地に新校舎の建築が行われることになったため、京都市教育委員会より委託を受け、発掘調査を行うことになった。当地は平安京左京六条一坊二町に相当し、朱雀大路に面する坊城地であることから、平安時代の重要な遺構が存在することが推定できた。今回の調査は、平安時代の遺構の有無や土層堆積状況を確認することを目的として発掘調査を行った。

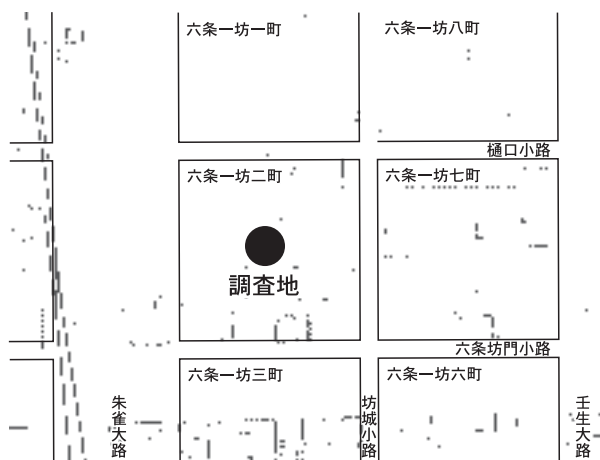


図75 調査位置図 (1 : 5,000)

遺構・遺物 発掘調査前の地表は旧校舎が建ち並び、平坦になっていた。基本層序は第1層現代盛土層、第2層灰色粘土層、第3層灰色粘土層、第4層茶褐色砂礫層、地山面は黄褐色砂泥層であった。第2・3層は近世から中世にかけての遺物を包含する土層である。第4層も近世から中世にかけての遺物を包含する。第2層から第4層は包含する遺物の関係から、中世から近世に至るまで幾度となく削平あるいは整地がなされたことを示すものと考えられる。

検出した遺構としては、近世の土取土壌の他には溝3条、柱穴群、井戸1基で、いずれも近世のものであった。

土取土壌は中央をはさんで南北に細長く延びており、土壌内からは近世から平安時代にかけての遺物が整理箱にして10箱出土している。とりわけ緑釉陶器、土師器皿、軒丸瓦などは平安時代中期の特徴を示すものであった。

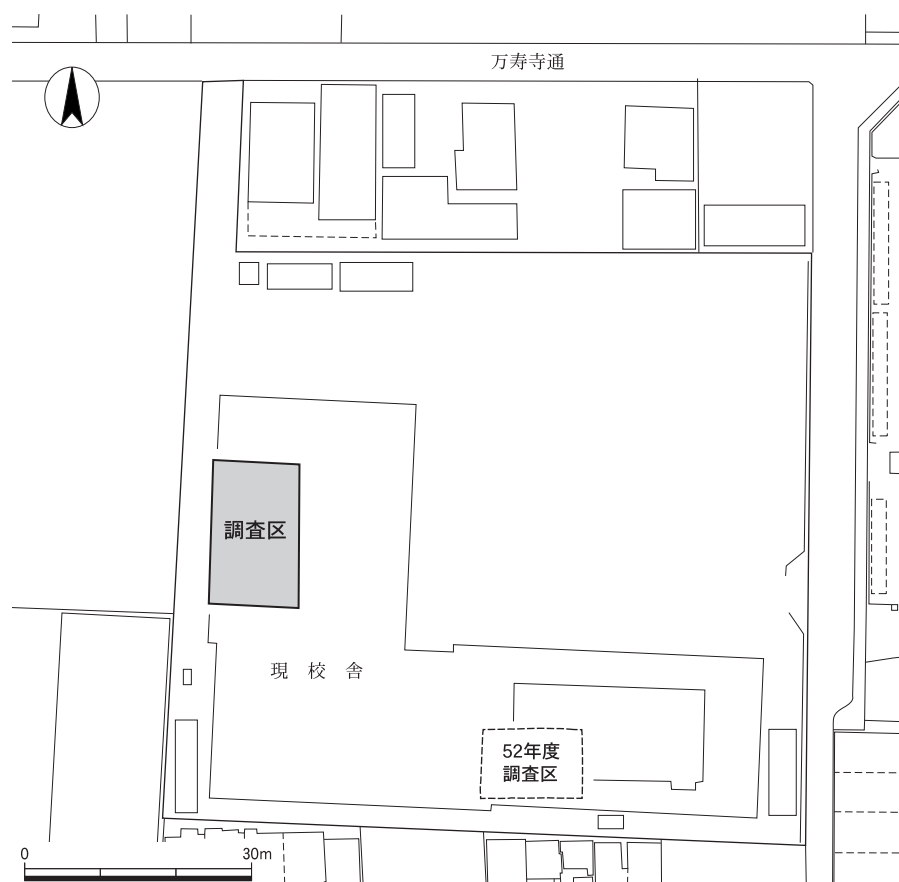


図76 調査区配置図 (1 : 1,000)

小結 当地は平安京左京六条一坊二町の中央部に位置し、近年では付近の調査などにより平安時代から中世にかけての遺構および遺物包含層の確認といった成果があがっている。今回の発掘調査はそれらの成果を踏まえて行ったが、近世の遺構の検出にとどまった。ただ、近世層内に中世や平安時代の遺物を検出できたことは付近に遺構残存の可能性が大きく、今後とも調査の継続が必要な地区である。

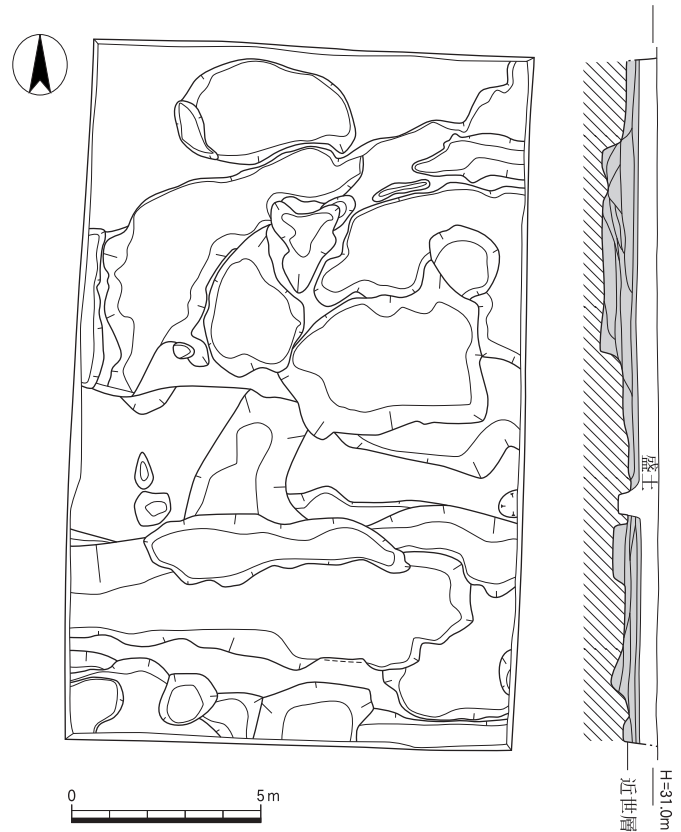


図77 遺構実測図（1：200）



図78 調査区全景（南から）

21 平安京左京六条一坊三町

経過 本調査地点は京都市下京区中堂寺坊城町にあり、五条通と国鉄山陰線高架の交差するところの南東、左折分離帯上に位置する。平安京条坊復元では、朱雀大路と左京六条一坊三町の接する部分にあたり、朱雀大路東側溝が検出されると予想された。そこで、公共下水道工事に先立ち発掘調査を実施し、その有無を確認することとなった。なお、調査区は埋設物の制約によって東調査区と西調査区に分けて調査を行った。

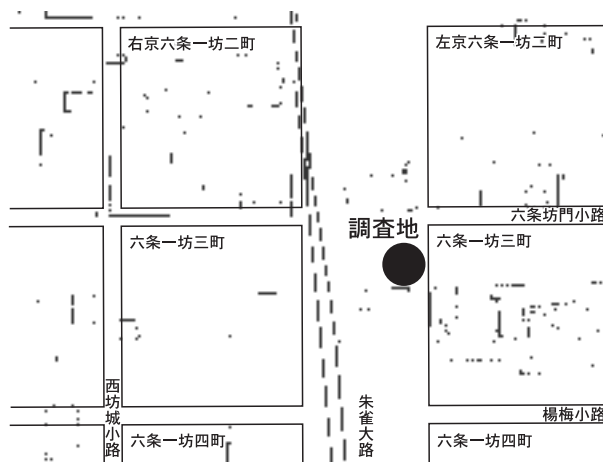


図79 調査位置図 (1 : 5,000)

遺構・遺物 調査地の基本層序は、約0.7mの盛土の下に厚さ約0.3mの旧耕作土がある。西調査区ではこの耕作土の直下に地山土が広がっている。西調査区では地山土上で若干の攪乱土壌を検出したのみで、遺構は全く存在しなかった。東調査区も攪乱土壌が多く認められたが、旧耕作土の下に厚さ約0.35mで暗黄茶色砂層が堆積しており、その堆積土を除去すると遺構面となる。以下では南北流路などを検出した東調査区の概要を報告する。

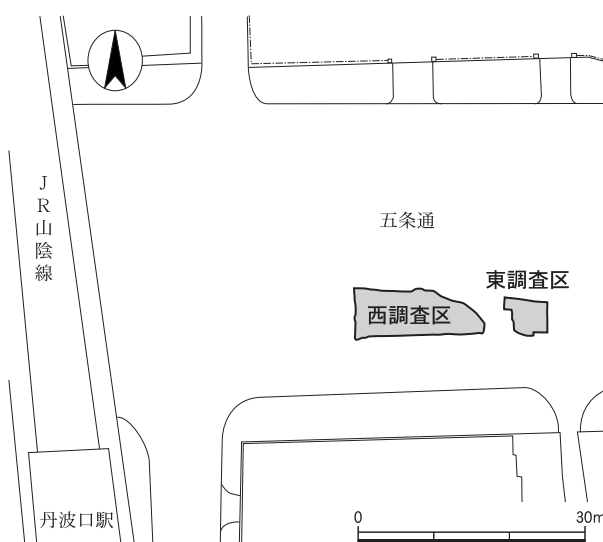


図80 調査区配置図 (1 : 1,000)

東調査区では東半部において、数次にわたる南北方向の流れを確認した。遺存状況は極めて悪いが、1回の堆積が0.1mほどである。遺物はごく少量で、平安時代のものであった。これらの流れは、検出位置と出土遺物の年代から、朱雀大路東側溝と推定できるが、当初の東側溝を確定することはできなかった。調査区の東端付近で確認した暗茶灰色泥土層と淡青灰色砂層は、比較的安定しながら南北方向に走っており、この付近に東側溝を想定するのが妥当であろう。ちなみに、西調査区で遺構が全く検出できなかったのは、朱雀大路の路面部に相当するためと考えられる。

なお、地山土とみなした土層のうち、全調査区にわたり南北方向の川状の堆積がある。縄文時代から古墳時代と思われるが、遺物は出土していない。

小結 朱雀大路東側溝の調査は、1975年に当調査区の南約70mの現中央市場駐車場で発掘調査を行い、南北溝を検出している。今回の調査で北に延長する地点で東側溝を確認したことから、平安京条坊の復元のための重要なデータを得ることができたといえる。

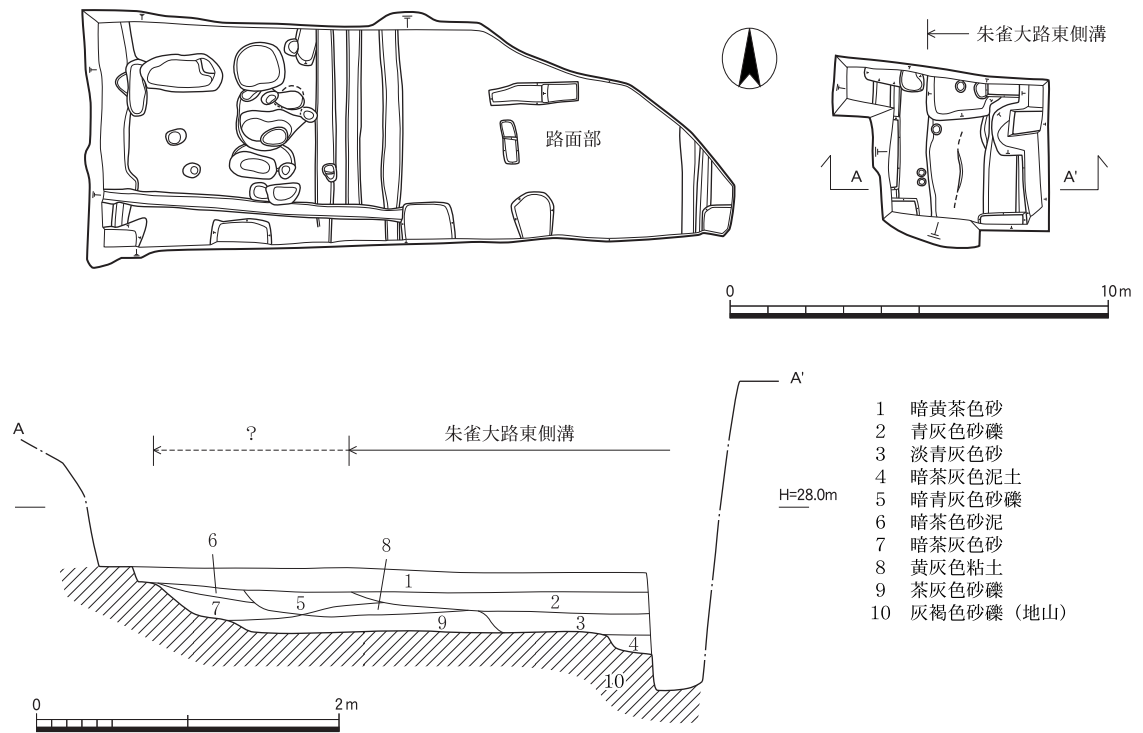


図81 遺構実測図 (1 : 200、1 : 50)



図82 東調査区全景 (南西から)

22 平安京左京六条一坊三・六町（図版6）

経過 当発掘調査は五条通共同溝工事に伴い、建設省近畿地方建設局より委託を受けて実施したものである。調査地点は京都市下京区中堂寺地先（五条千本～五条壬生川間）、一般国道9号線東行安全地帯寄り一車線で、3箇所の調査区を西から1区・2区・3区と定めて調査を開始した。

当地は平安京左京六条一坊三・六町にあたり、南北方向の坊城小路と壬生大路がほぼ現在の坊城通と壬生川通に、東西方向の六条坊

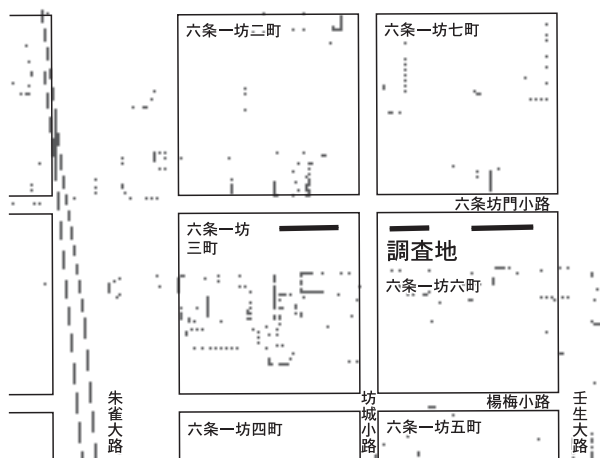


図83 調査位置図（1：5,000）

門小路が9号線北側の歩道付近に推定されている。文献史料ではその土地利用の変遷は不明であるが、付近における数箇所の発掘調査によって、平安時代から室町時代に至る遺構・遺物の発見が期待される場所である。

遺構 各調査区の基本層序はほぼ同じで、厚さ0.8～1mの盛土下に旧耕作土が0.1～0.2m堆積し、それを除去すると遺構面である暗灰黄色砂礫となる。調査により発見した遺構は、弥生時代の川跡2条、古墳時代の川跡1条、鎌倉時代から室町時代の井戸3基、室町時代の墓1基、江戸時代の土取穴5基である。

弥生時代の川（SD4）は、幅約4m、残存の深さ約0.5mで、1区西部を北東から南西へ流れる。同じく弥生時代の川（SD7）は、2区西端でわずかに検出したのみで、川幅・深さともに不明であるが、やはり北東から南西へ流れる。弥生時代中期の土器を若干包含していた。古墳時代の川（SD12）は、3区の中央を北東から南西へ幾分蛇行しながら流れる。幅約4m、深さ約0.6mである。遺物は古墳時代後期の土器がごく少量出土した。

平安時代の遺構は全く検出できなかったが、鎌倉時代から室町時代の遺構は井戸を3基検出した。井戸（SE3）は1区東部の江戸時代土取穴（SK2）の下にあり、一辺約0.7mの井戸枠の最

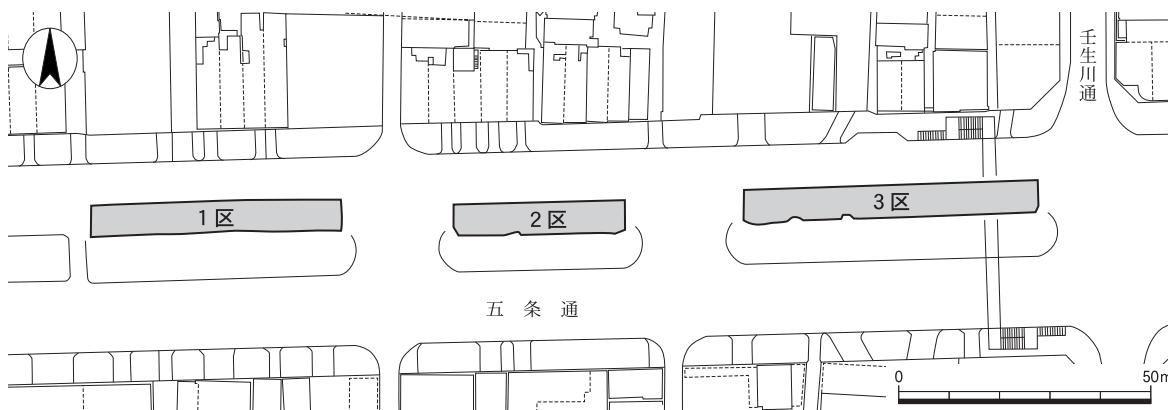


図84 調査区配置図（1：1,500）

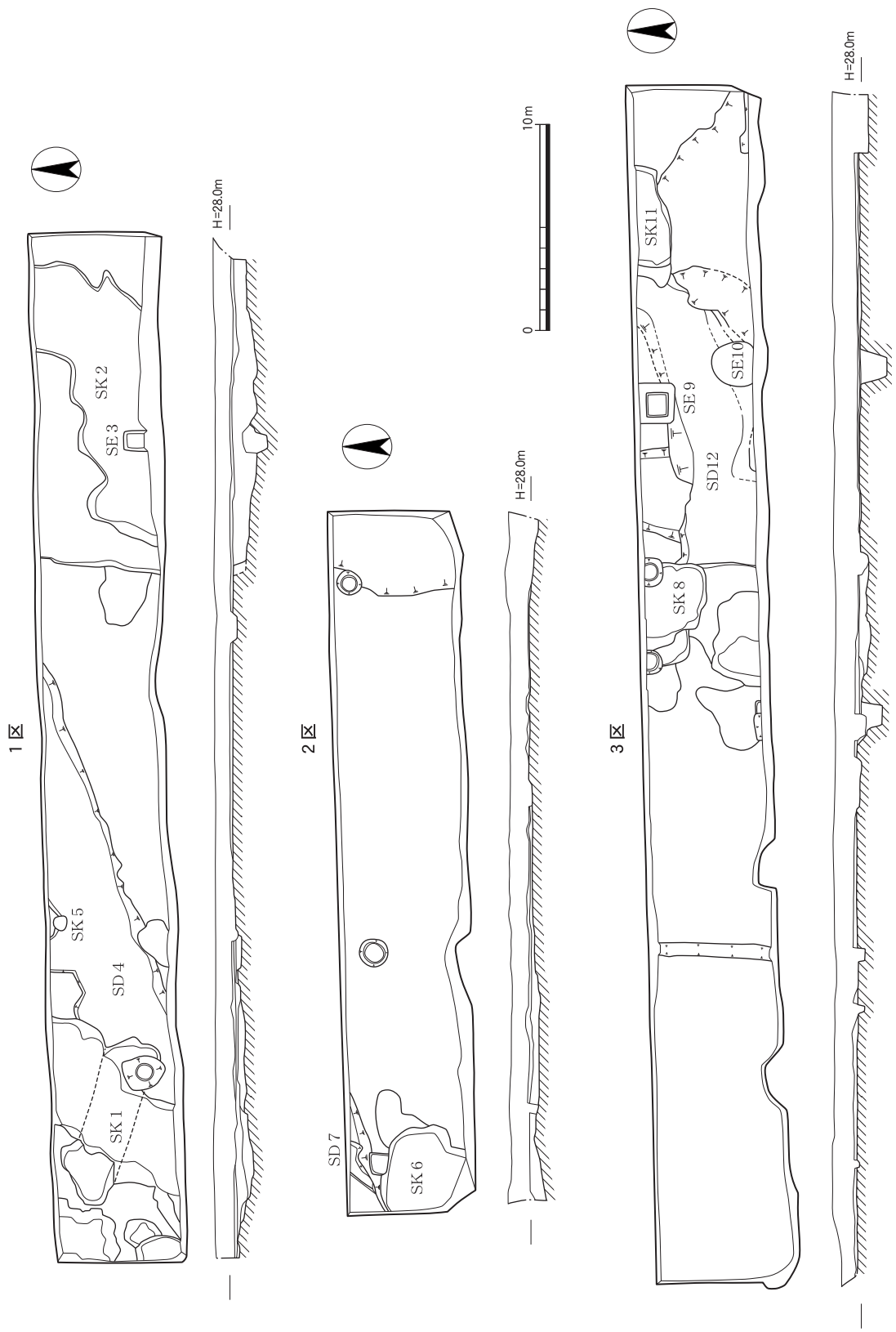


図85 遺構実測図 (1 : 300)

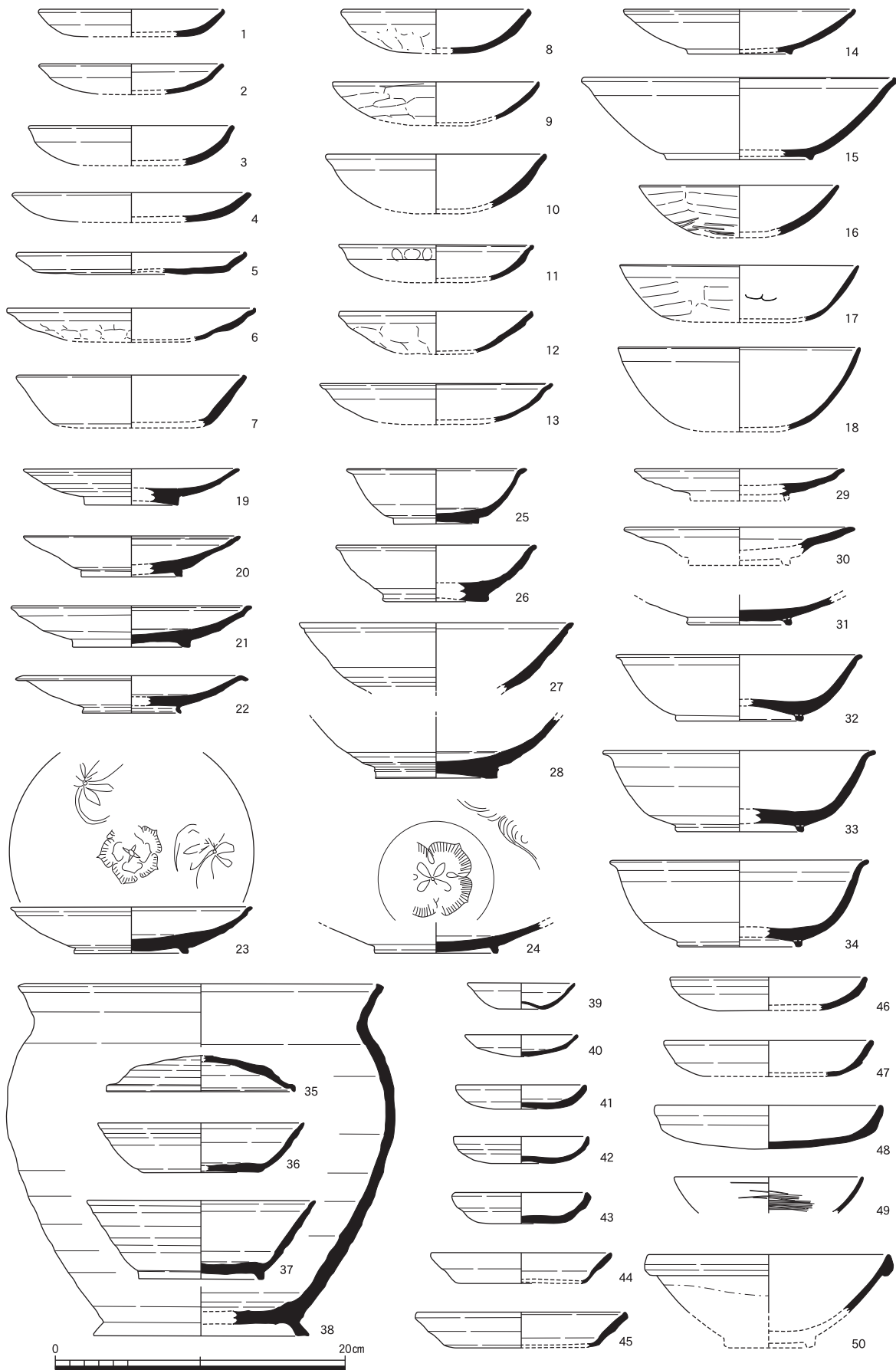


图86 1区SK2出土土器实测图(1:4)

下段が遺存していた。遺物はほとんど出土していない。井戸（SE9）は3区東部にあり、一辺0.9m前後の井戸枠をもつと思われるが、部材はすべて消失していた。遺物は比較的多く出土し、時期は室町時代のものである。同時期の井戸（SE10）は井戸（SE9）の南約4mの地点にあり、直径0.8m前後の円形石組み井戸と思われるが、石組みはすべて破壊され埋められていた。遺物は土器類が比較的多く出土した。このほか、室町時代の墓（SK5）は1区西部で検出した。直径約0.7mの円形掘形で、深さは約0.3mと浅く、この中に土師器の小皿を十数枚埋置していた。

江戸時代の遺構は土取穴（SK1・2・6・8・11）で、各調査区の聚楽土と呼ばれる良質のシルト～粘土がみられる場所に穿たれており、その底はいずれも聚楽土の途切れるところで終わっている。とりわけSK1とSK2は深さ1m前後と大規模で、埋土の中には多量の平安時代から江戸時代の遺物が混在していた。

遺物 今回出土した遺物は整理箱にして約60箱で、平安時代前期から中期の土器類が比較的多く出土したが、大半は江戸時代の土取穴から出土したものである。しかし、これら平安時代の土器群は、当地に何らかの施設が存在したことを示唆するものであり、資料的価値が高い遺物も含まれているため、SK2出土土器群を図示しておく（図86）。

これらの中で、猿投古窯産と考えられる初期灰釉陶器（29～34）は、これまでの平安京内の発掘調査では出土例が少なく、生産地と消費地との関係や生産技術などの研究に寄与できる良好な資料といえる。また、初期灰釉陶器と同時期に製作されたと考えられる東海系緑釉陶器（22～24）も出土しており、優美な陰刻花文を施した緑釉陶器皿も含まれる。平安京近郊窯産の緑釉陶器は削り出し高台をもっており（19～21・25～28）、その製作技術の差異によって明瞭に区別が可能であり、一括資料ではないが貴重な資料群である。

このほか土師器には、外面にケズリ調整や口縁端部を内側に肥厚させる古い型式のもの（1～4・7～10・14・15）と、外面未調整で器壁が薄く口縁端部の屈曲が目立つ新しい型式のもの（5・6・11～13）が混在してみられ、黒色土器（16～18）や須恵器（35～38）も平安時代前期から中期に収まる資料が多く出土している。なお、平安時代後期から中世の遺物については時期を明確に分けることが困難であるが、平安時代後期と考えられる土師器皿（46～48）や輸入白磁碗（50）と、中世と考えられる土師器皿（39～45）や瓦器碗（49）は分類可能であろう。

小結 今回の調査では、平安京の遺構の検出という点では大きな成果を上げることができなかったが、出土遺物のなかに重要な発見があった。

23 平安京左京八条三坊二町1 (図版7)

経過 発掘調査は、病院分院建設に先立って実施したものである。当地域は平安時代後期から中世にかけて栄えた七条町あるいは八条院町に近接しており、当該期の遺構の検出が期待できた。なお、調査地は平安京左京八条三坊二町に相当する。

遺構 調査地の基本層序は地表下約1.8mまでが近現代の盛土で、盛土を除去すると旧耕作土層が0.1~0.2m堆積しており、その下層が中世遺構面であり、基盤層となる灰白色~黄灰色砂礫である。遺構は非常に少なく、中世の方形縦板組み井戸や円形素掘り井戸を7基と、小ピット群を検出したにすぎない。方形縦板組み井戸は一辺0.8m前後、深さ0.8~1mで、遺存状況が悪く最下段の木枠が若干残るだけである。

遺物 出土遺物は整理箱で21箱出土し、土師器、瓦器、陶器、瓦類であった。

小結 今回の調査では、平安時代の遺構はほとんど検出できず、中世の遺構も井戸と建物に関わる小ピットだけであった。ただ、調査区の南に八条坊門小路が復元できることから、これらの遺構は八条坊門小路に面する町家の建物および井戸群と考えられる。



図87 調査位置図 (1 : 5,000)

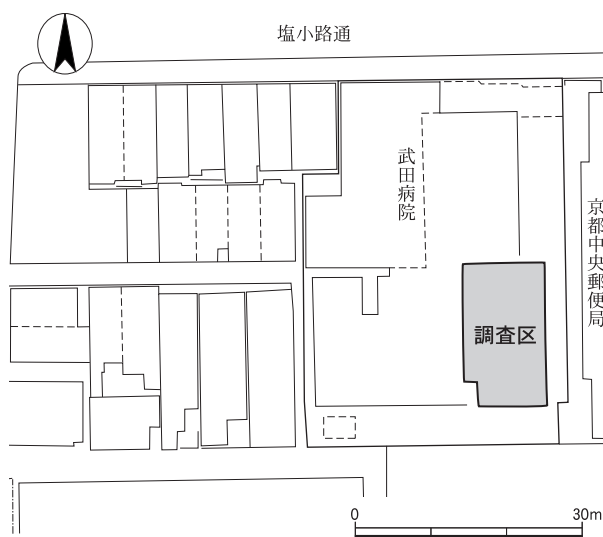


図88 調査区配置図 (1 : 1,000)

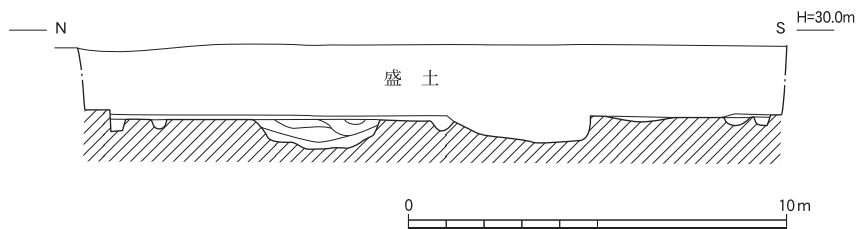
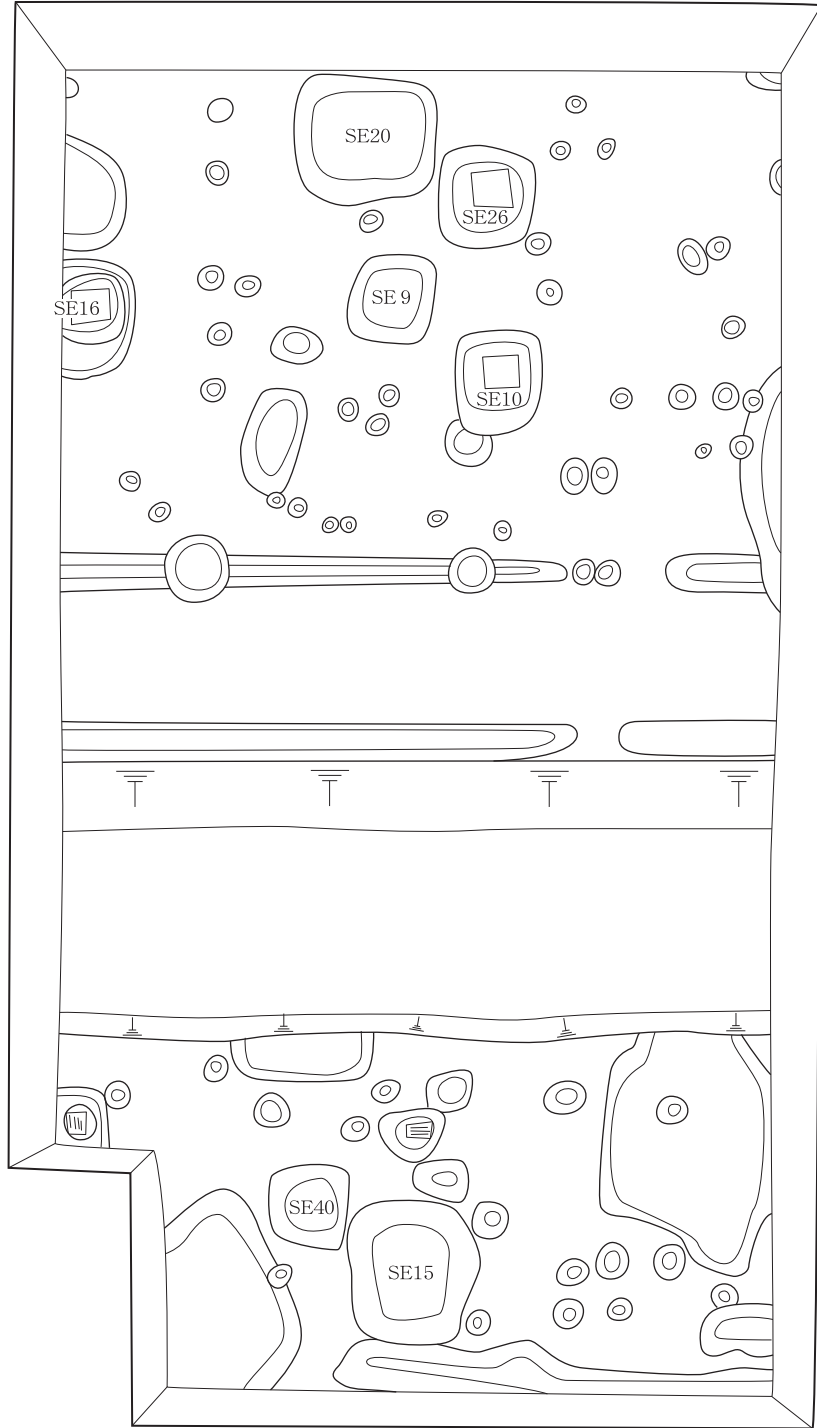


図89 東壁断面図 (1 : 200)



0 3m

图90 遺構平面図 (1 : 100)

24 平安京左京八条三坊二町 2 (図版 8)

経過 本調査は、京都市下京区役所建設に伴う事前調査として実施したものである。調査地は平安京左京八条三坊二町に相当し、調査区西端部では西洞院大路に関連する遺構の存在が予想された。西洞院大路は後代に京を南北に流れる河川となり、近世まで利用されてきた。また、近年の発掘調査によれば、左京七条一带は中世から近世にかけて墓域として利用されていたことが明らかになっており、当調査地においても同時期の遺構が良好に遺存していると想定して調査を開始した

遺構 調査区の基本層序は、地表下1.7～1.8mほどが現代の盛土であり、その下層で近世遺構面である厚さ約0.3mの暗灰色泥土層となる。さらに、下層の灰褐色粘土層は、西洞院川の最終堆積の影響を受けて東から西に向かって厚く堆積しており、最終遺構面は基盤となる黄褐色砂礫層上で西洞院川と中世の井戸5基を検出した。

西洞院川は調査区の西半分にわたって東肩以西を検出しており、川幅は約11m以上、深さは最終遺構面から約1.8m、現地表からは約4.4mの深さとなった。川の堆積土層は基本的に3層に大別できる。下層に黒灰色粘土層が底部にたまっており、中層は流れ堆積を示す灰色粗砂～暗灰色混礫土が堆積し、上層は暗灰色粘土層によって覆われている。川は素掘りで、東肩には護岸施設の痕跡は認められなかった。

調査区南端で検出した井戸 (SE 2) は、二重構造の井戸である。外枠の横棧は東西約3.3m、南北約3.6mの方形で、その外側に横板を添える。この方形区画内に、長さ1.2m、幅約0.12mほどの縦板を径0.85～0.9mの円形に組む。

井戸 (SE 3) は調査区東南部で検出した一辺約0.7mの方形縦板横棧組みの井戸で、最下段の横棧と縦板下端部がかろうじて遺存していた。井戸 (SE 4) は調査区北東で検出した方形井戸で、東西約0.7m、南北約0.6mの最下段の横棧だけが残っていた。井戸 (SE 5) は一辺約0.6mの方形縦板組みの井戸で、底部に直径約0.5mの曲物を据えていた。井戸 (SE 6) は長径約0.65m、短径約0.4mの曲物井戸で、径約1mの掘形を有するが、他に井戸枠痕跡は認められなかった。

遺物 西洞院川の特に中層とした細砂を多く含んだ泥土からは、17世紀前半に属する良好な木

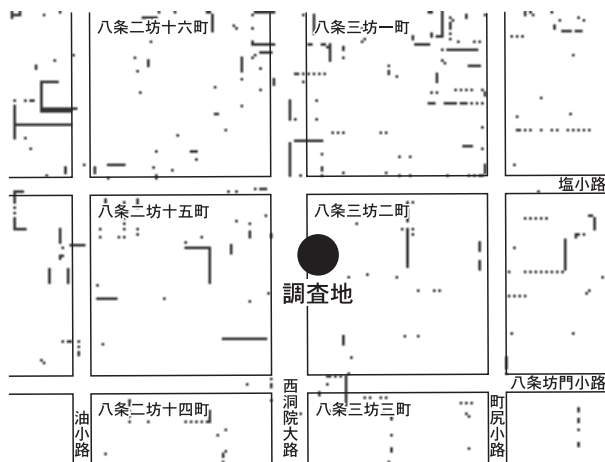


図91 調査位置図 (1 : 5,000)



図92 調査区配置図 (1 : 1,000)

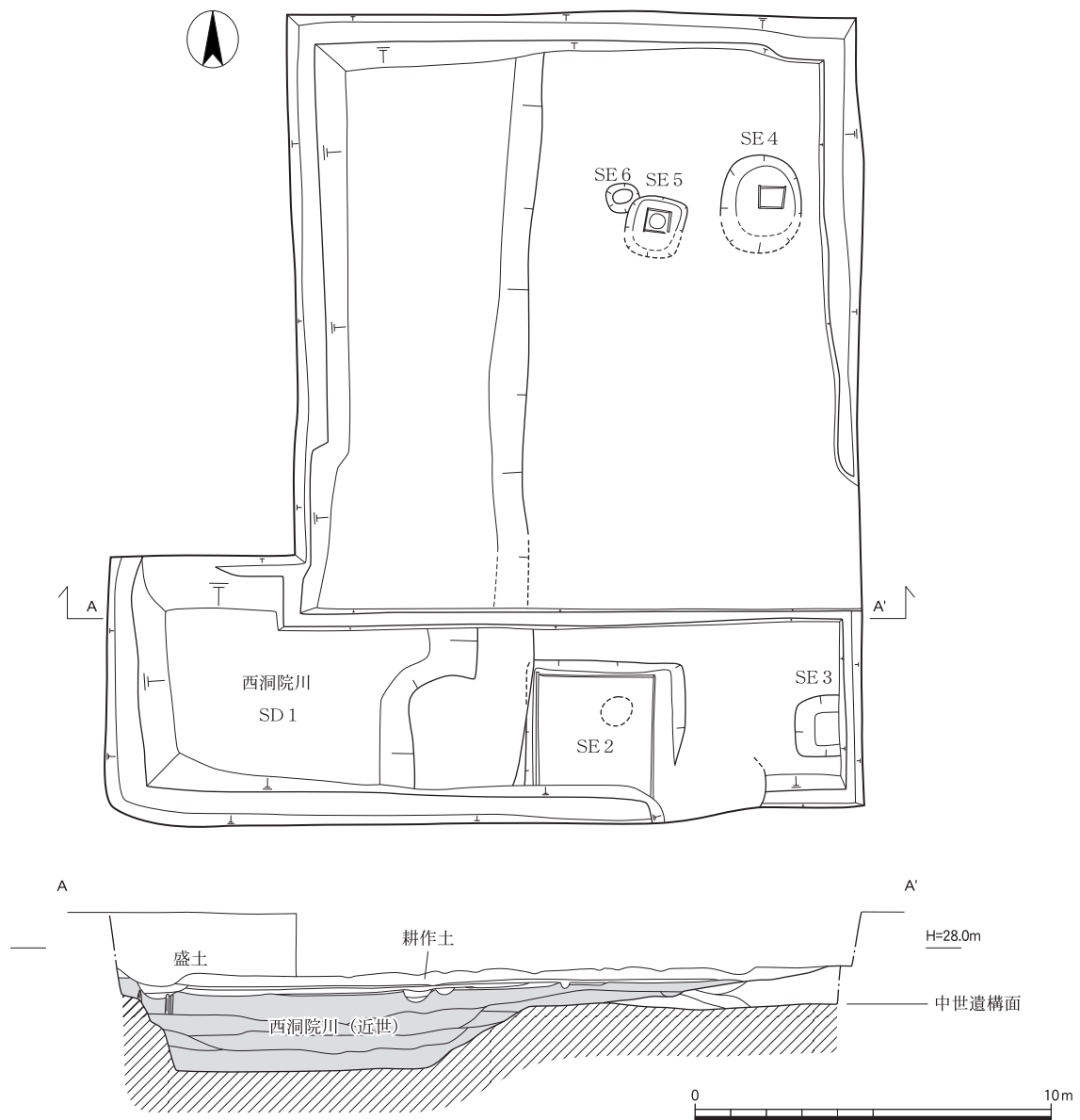


図93 遺構実測図（1：200）

製品、土器類が出土した（図94）。木製品1は折敷き底板で墨書があるが判読できない。2・3は荷札木簡である。2は表「越前北庄少□」、裏「五太刀弁」、3は表「早瀬喜衛門尉」、裏「鯨廿本入」の墨書があり、頭部には記号も描かれる。4は扇の骨、5は串、6は栓、7は漆工用ヘラ、8は将棋駒、9・10は漆器椀である。11・12は横櫛で、11は歯が細かく、12は歯が粗い。13の下駄は歯が磨り減っている。14は物差しで、目盛りは端から3.9cm、3.95cm、3.7cmと不揃いである。15は糸巻横木、16はその軸棒である。17は箱物の部材で目釘が残存する。18は折敷の底板、19は小型の曲物である。20は灯明皿受とみられる。21は目釘が残存する。22～25は箸である。22は両端が尖り、23は片端が尖る。24は尖りがない。25は漆塗り箸である。この他、打毬玉、鉄鎌柄、刷毛柄、釣瓶部品、箱物部品、「南無妙法蓮華經」のお経を記した薄板なども出土している。

土器類26～38は土師器、39～46は陶磁器類である。26～31は土師器皿、32～35は「つぼつぼ」

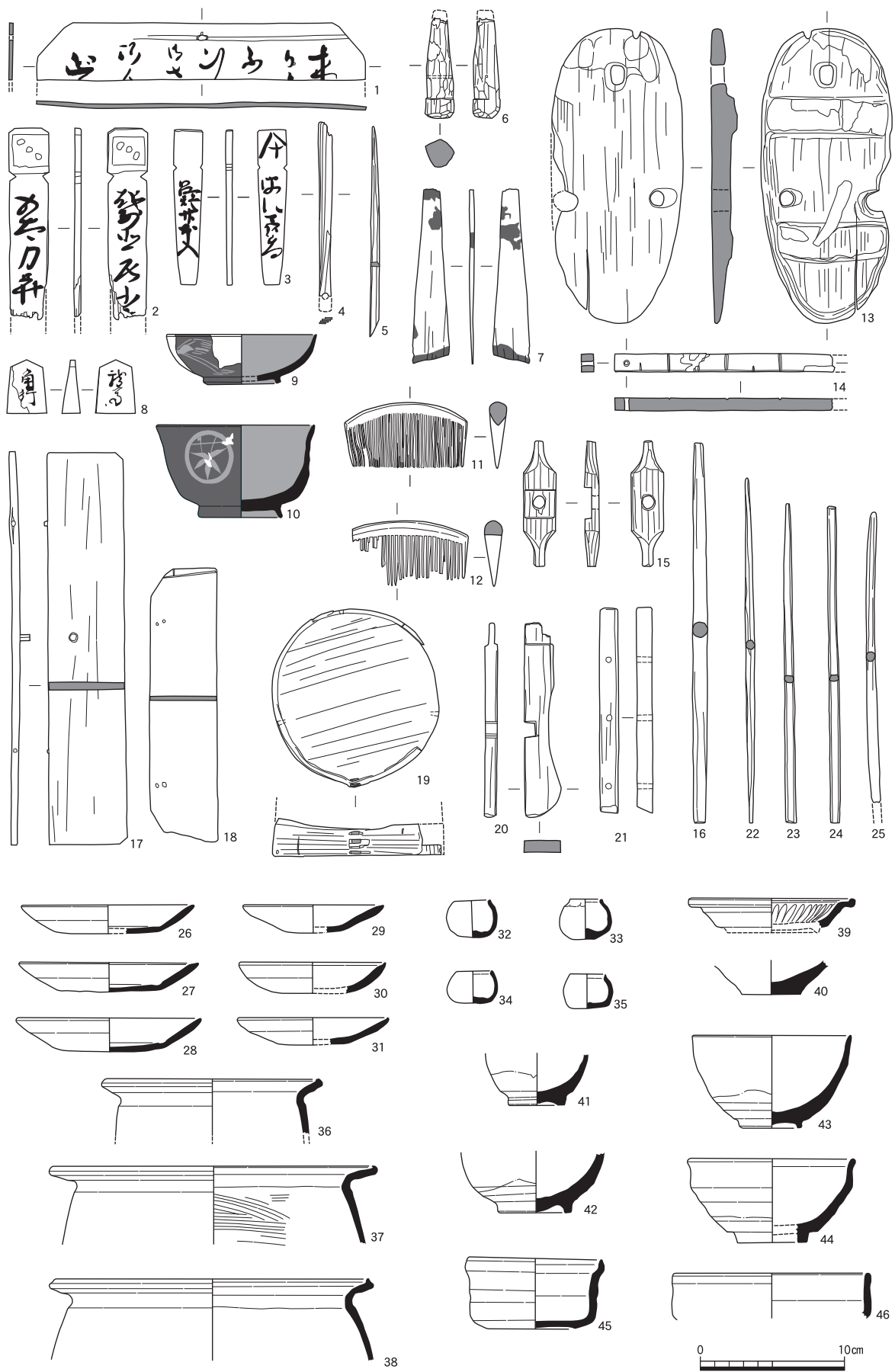


图94 遗物实测图 (1 : 4)

と通称される小壺、36～38は鐙付きの羽釜である。39は美濃の菊花皿、40～43は唐津椀、44は美濃椀、45は美濃鉢、46は唐津鉢である。

井戸SE2の枠内上層からは両孔埴が多量に出土し、下層からは土師器皿とともに至和通寶などが出土した。

小結 西洞院川は平安時代後期には『中右記』などの史料にみられ、以降近世まで堀川とともに京の基幹河川として機能していた。今回検出した西洞院川は幅・深さともに大きな河川で、木製品を含む多彩な遺物を多く包含しており、京の町の中心を流れる水量豊かな川であったことを裏付けている。また、川の東岸で検出した中世の井戸群は、すべて西洞院川上層の暗灰色粘土層に覆われていた。西洞院川では大半の遺物が中世末から近世初頭のものであり、これらの井戸群とは若干の時期差が認められるが、川の成立面が中世遺構面である基盤層であることから、これらの井戸群と川とが共存していた可能性は充分考えられる。ただ、生活の場に伴う建物や溝といった関連遺構は検出していないため、西洞院川東岸での具体的な生活状況は明らかにできなかった。西洞院川の成立時期の解明も含めて、今後の調査に期待したい。

註 丸川義広「平安京左京八条三坊東塩小路町出土の木簡」『木簡研究』創刊号 木簡学会 1979年

25 平安京左京八条三坊七町

経過 本調査は、新阪急ホテル新築工事に伴うもので、当地は推定平安京左京八条三坊七町東側中央にあたるため、調査を実施した。

調査区は南北39m、東西43mのL字形に設定し、随時拡張した。重機で現代・盛土層を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層(0.8m)、第2層耕土層(約0.1m)、第3層暗茶褐色泥砂層(約0.15m)、第4層暗黄褐色泥砂層(0.15m)、第5層褐灰色泥砂混礫層(約0.2m)、第6層灰褐色砂礫層(地山)である。第3層上面で第1面、第4層上面で第2面、第5層上面で第3面、第6層上面で第4面の遺構を検出した。検出した遺構は、溝、井戸、土壇、柱穴、墓壇、建物地業、埋甕、炉跡などがある。

第4面では、調査区中央で南北大溝SD29(幅10.5m、深さ0.8m)を検出し、溝の西側に井戸SE19や土壇が見られる。これらの遺構は第5層によって埋まり、その第3面では調査区全

域で井戸、土壇、東西溝などを検出した。時期は、平安時代中期から鎌倉時代前半に属する。

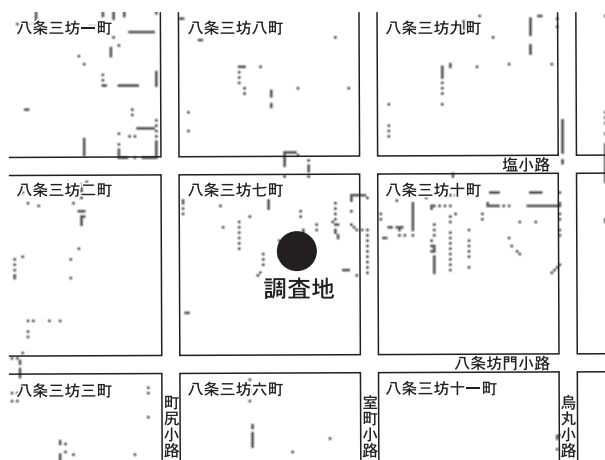


図95 調査位置図 (1:5,000)

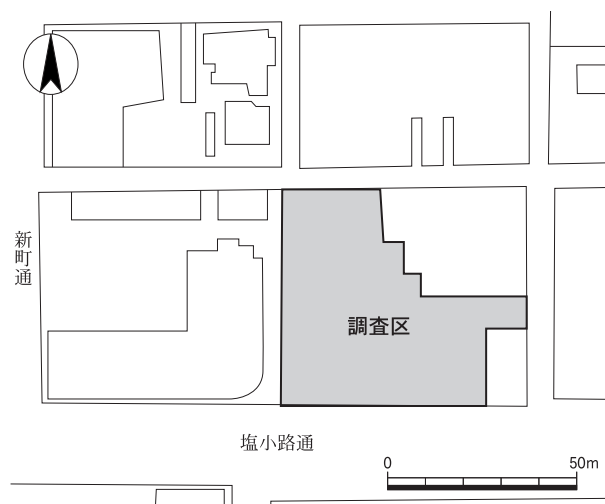


図96 調査区配置図 (1:2,000)

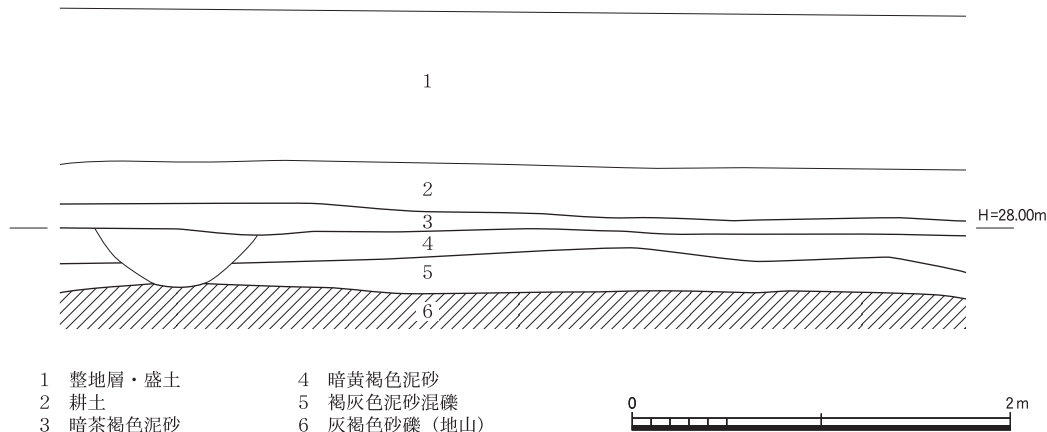
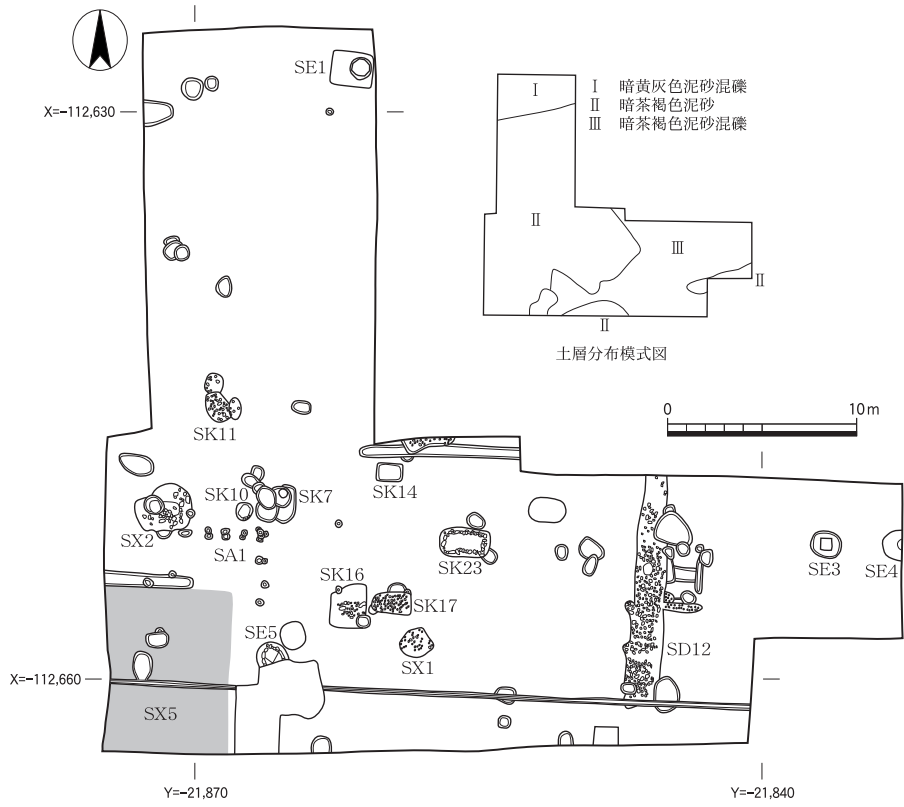


図97 南北中央セクション北壁断面図 (1:40)

第1面



第2面

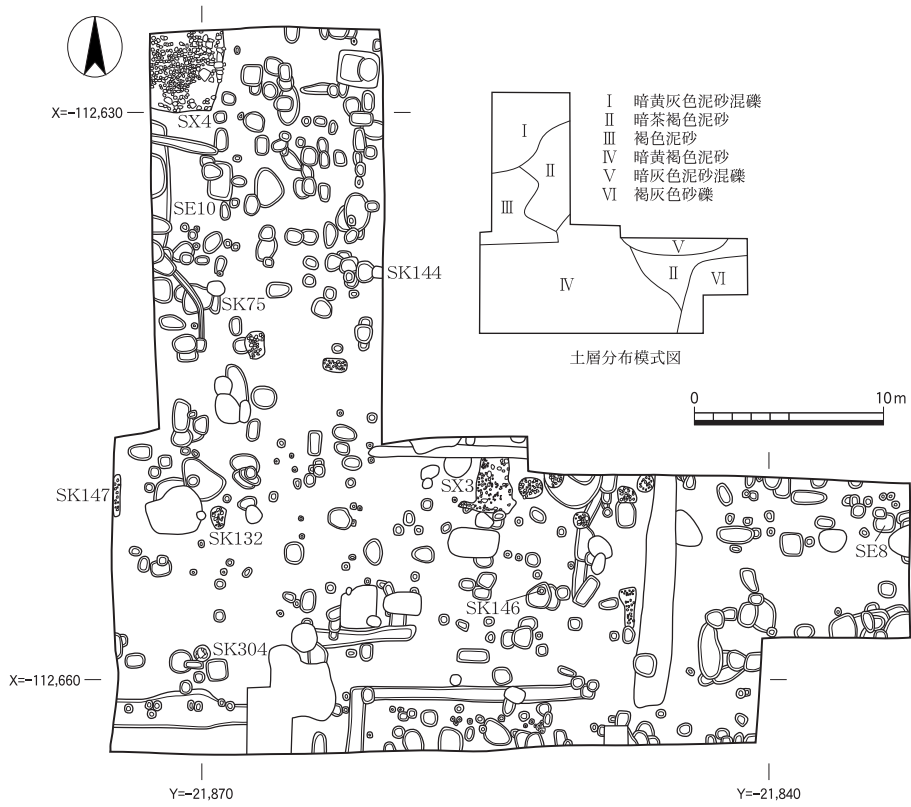


图98 第1·2面遺構平面図 (1:400)

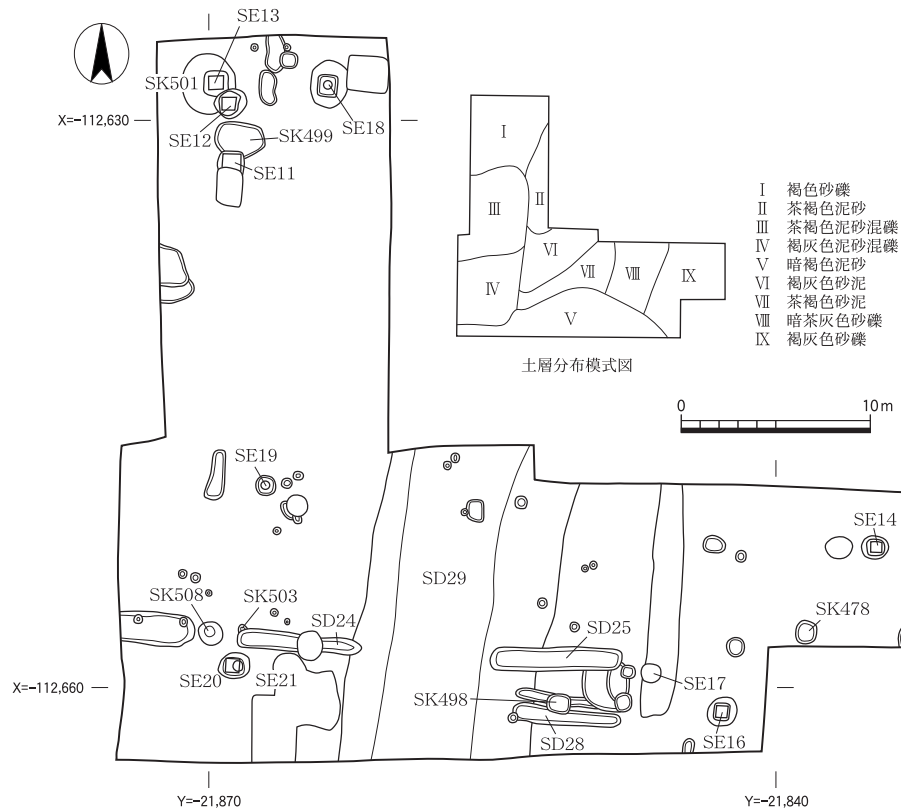


図99 第3・4面遺構平面図（1：400）

第2面では、調査区北端と東端に井戸・柱穴が集中し、第3面と同様の状況である。調査区中央では多数の墓壙を検出した。墓壙は一辺約1m程度の楕円形または不定形の土壇で、鉢・鍋や大甕を蔵骨器として用いるもの、墓壙上面に自然石を集石したものがある。時期は、鎌倉時代後半から室町時代中頃に属する。

第1面では、調査区全域で铸造遺構、土壇、溝、石室、建物跡などを検出した。铸造遺構SX1・2は炉床は削平されたが、周辺から埵塙・铸型・炉壁などが出土した。また、SX5は0.6m掘り窪めた底部に石敷があり、建物地業の可能性が高い。時期は、室町時代中頃から桃山時代に属する。

遺物 遺物は、整理箱で800箱出土した。種類は、弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、陶器、磁器、瓦、土製品、金属製品、石製品、木製品などである。時期は、14世紀～15世紀のものが中心で、他の時期ものは多くない。特に溝（SD24）からは、平安時代後期の輸入陶磁器が多数出土し注目される。また、鎌倉時代の埵塙・铸型・炉壁などは当地域の性格を考える上で重要である。

小結 今回の調査地は、七条町の西南にあたり、平安時代から室町時代に至る大量の土器類が出土した。平安時代の溝からは多量の緑釉陶器や輸入陶磁器が出土し、近辺にこれらを保有し得る階層の邸宅の存在が推定できる。また、出土遺物から考え、鎌倉時代以降当地域が栄えたことを示し、金属製品の生産が行われたことが明らかとなった。

『平安京左京八条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊 1982年報告

26 平安京左京八条三坊十・十一・十四町（図版9・10）

経過 本調査は、京都駅前地下街建設工事に伴うもので、当地は推定平安京左京八条三坊十・十一・十四町にあたるため、調査を実施した。

調査は1～4次の4回に分けて行い、発掘調査の間には立会調査を実施した。各調査区は規模は異なるが、およそ300m程度の長方形に設定した。重機で近現代層を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

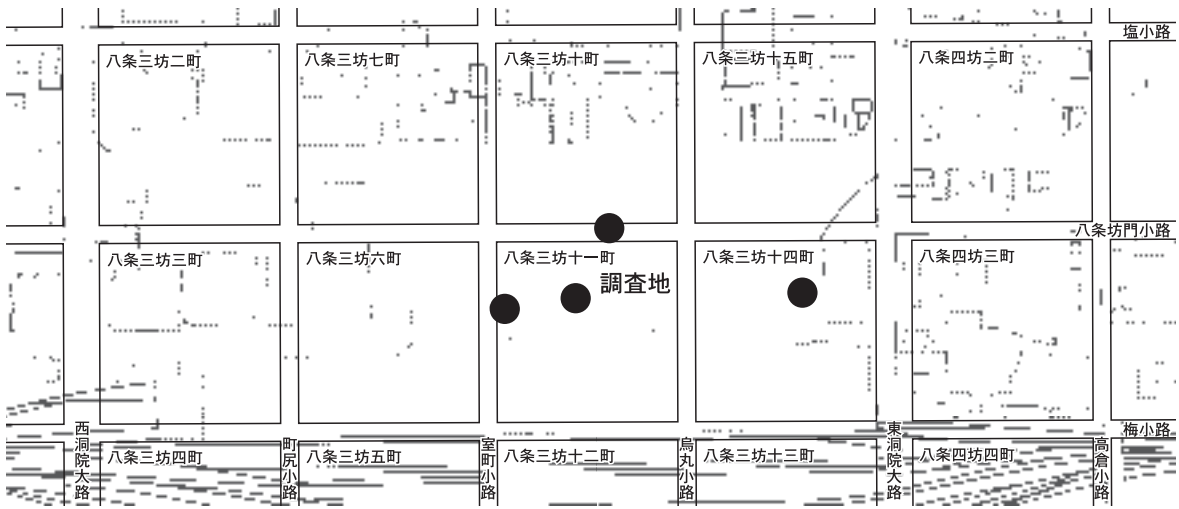


図100 調査位置図（1：5,000）

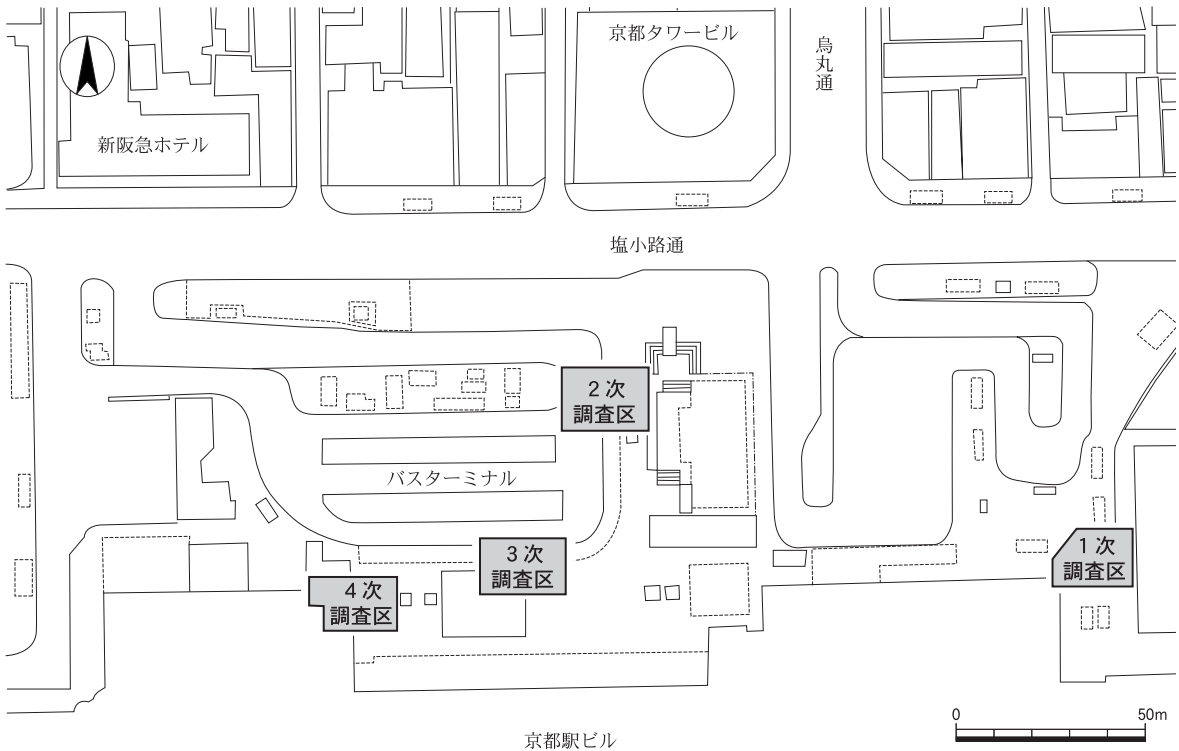


図101 調査区配置図（1：2,000）

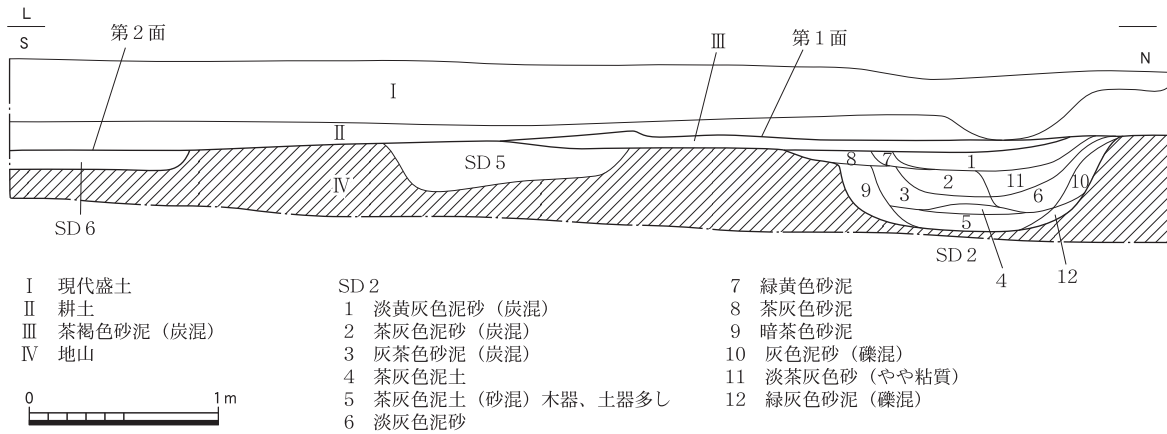


図102 2次調査区西壁断面図 (1 : 40)

遺構 調査区の基本層序は各調査区によって異なるが、2次調査では、第1層現代盛土層 (0.3 m)、第2層耕土層 (約0.1m)、第3層茶褐色砂泥層 (約0.1m)、第4層黄灰色砂礫層 (地山) である。第3層・第4層上面で遺構を検出した。1次調査では第3層上面に暗黄褐色砂泥層などがあり、3・4次調査では第3層上面に茶灰色砂泥層がある。

1次調査は、十四町中央部の調査である。3面に分けて調査を行った。第1面では、調査区全域で東西南北の溝、土壇などを検出した。第2面では、調査区全域で溝、柱穴、井戸、土壇などを検出した。溝は東西・南北の多様なものがあり、調査区西側の溝SD13は直角に曲がる大溝 (幅約2 m、深さ約0.4m) で、埋土は黒褐色粘質土で、土師器、瓦器、磁器、木製箸・椀・曲物・篋などがある。遺構の時期は、鎌倉時代末から室町時代に属する。第3面では平安時代の包含層があり、層中には平安時代後期の瓦が散在する。

2次調査は、十・十一町の調査である。2面に分けて調査を行った。第1面では全域で土壇、

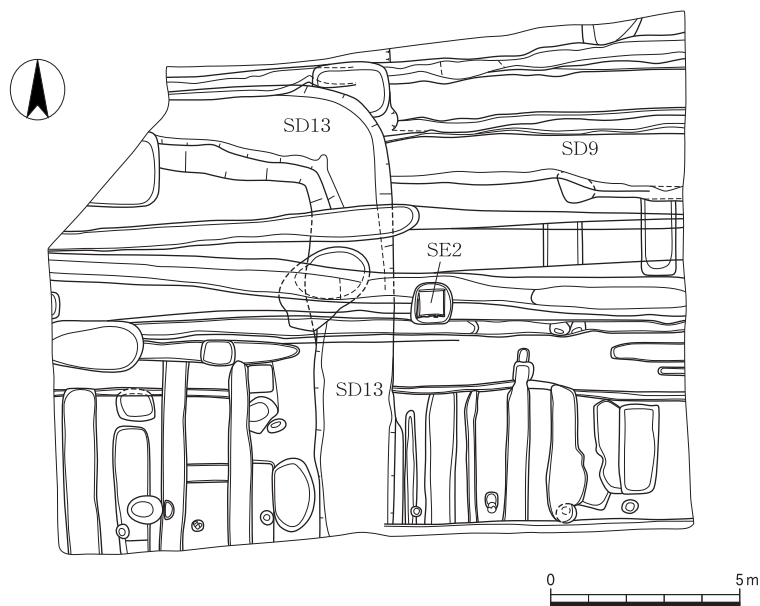


図103 1次調査区第2面遺構平面図 (1 : 200)

溝、井戸、柱穴などを検出した。遺構の時期は不明である。第2面では、平安時代の八条坊門小路路面と南北両側溝（SD3・5）、十町内溝（SD4）を検出した。路面幅は7mで、これに側溝・犬行・築地を想定すると規定（四丈）通りとなるが、築地は後世の削平を受け検出できなかった。南側溝は一度埋没した後に再度平安時代後期から鎌倉時代初頭に掘り直され（SD2）、路面幅は4.2～4.7mと狭くなる。この街路はその後も継続して使用され、江戸時代には両側に肥溜が造られる。

3次調査は、十一町中央部の調査である。2面に分けて調査を行った。第1面では全域で土壇、溝、柱穴などが散在する。時期は室町時代である。第2面では溝、土壇、柱穴、南北溝などを検出した。

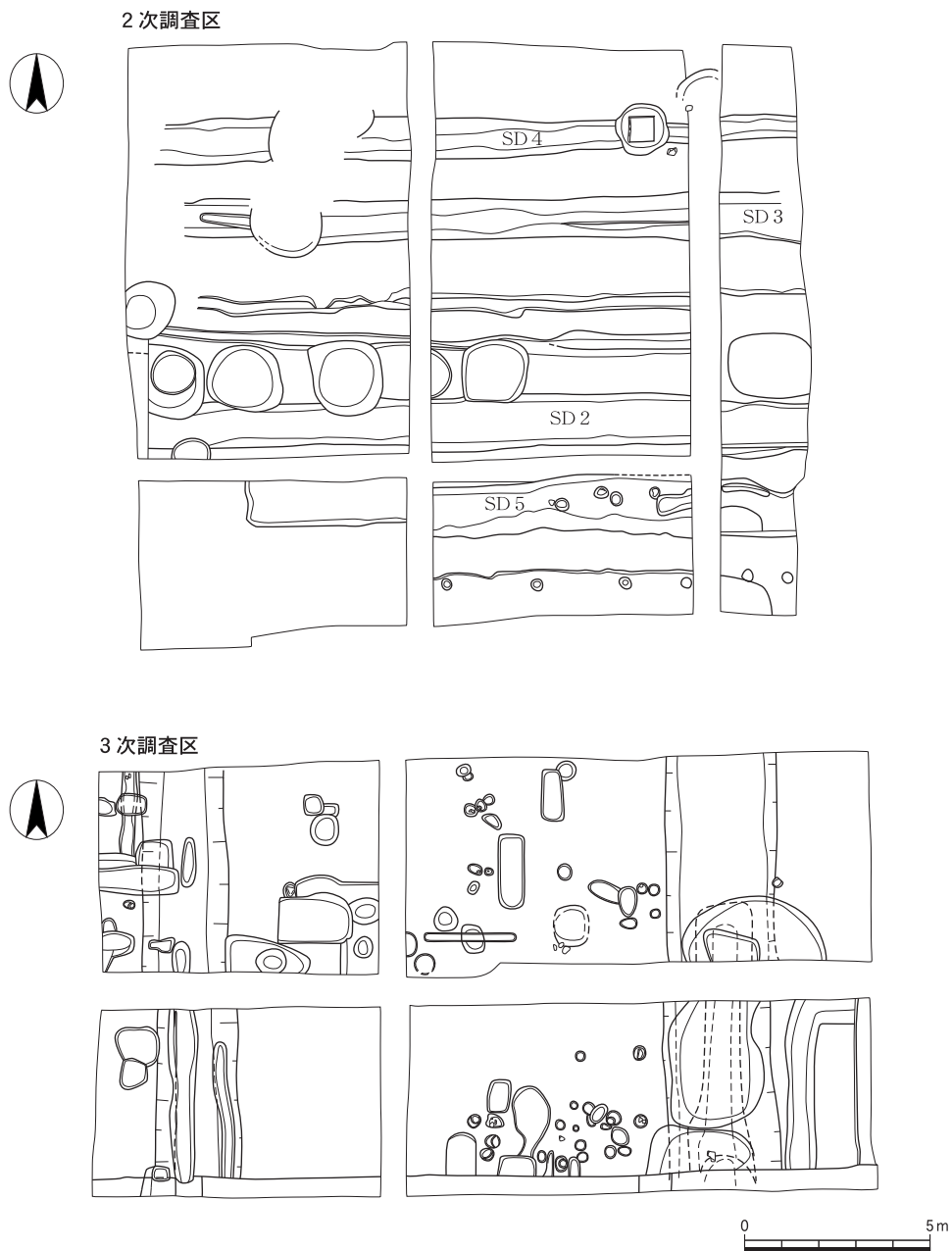


図104 2・3次調査区第2面遺構平面図（1：200）

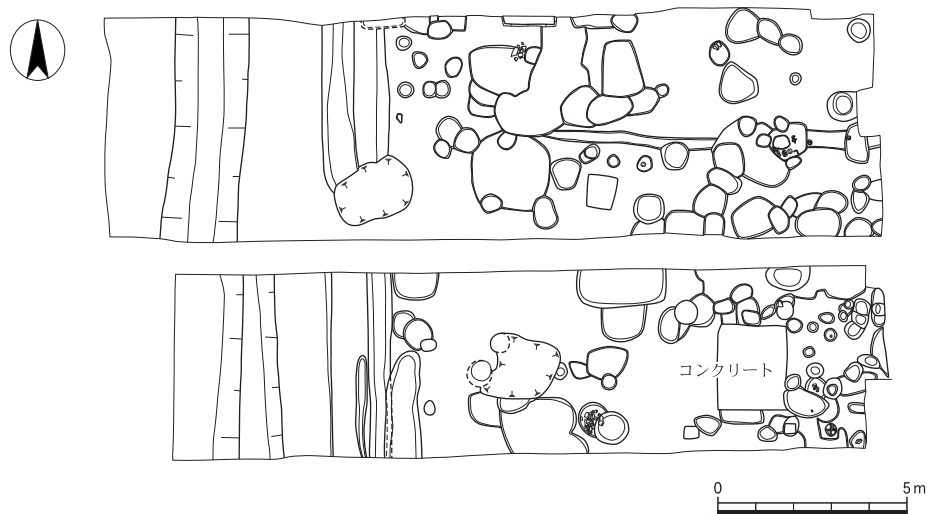


図105 4次調査区第2面遺構平面図（1：200）

4次調査は、室町小路・十一町の調査である。2面に分けて調査を行った。第1面では調査区西端で室町小路路面・東側溝・内溝を検出した。東側では土壌、溝、柱穴、井戸などが散在する。井戸の中には、底部を除いた常滑焼甕を2個重ねて井戸枠としたものもある。時期は中世に属する。第2面では調査区西端で室町小路路面・東側溝・内溝を検出した。東側では土壌、溝、柱穴、井戸などを多数検出した。側溝は洪水跡を示す砂礫層を切って掘られ、室町時代以前に洪水があったことを示す。

遺物 遺物は、整理箱で400箱出土した。出土遺物には、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、陶器、磁器、木製品、石製品などがある。時期は中世のものが大半を占め、他の時期のものはやや少ない。

小結 今回の調査では、平安時代の八条坊門小路・室町小路を検出し、鎌倉時代以降の変遷が明らかとなった。また、平安時代後期以降の遺構～中世の遺構・遺物を大量に検出し、当該期にこの地域が盛行したことが明らかとなった。このことは、文献史料の記述とも合致し、注目できる。

『平安京左京八条三坊 京都駅前地下街建設に伴う発掘調査』 1980年報告

27 平安京左京九条四坊三町

経過 本調査は、社会教育会館新築工事に伴うもので、当地は平安京左京九条四坊三町西部推定地にあたるため、調査を実施した。

調査に先立ち試掘調査を行い、土層を確認した後に発掘調査に取りかかった。調査区は2箇所、北トレンチは南北12m、東西19m、南トレンチは南北9m、東西12mに設定し、一部拡張した。重機で近現代層を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に部分的に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層(0.9m)、第2層褐灰色泥砂層(耕土層:約0.15m)、第3層淡褐色泥砂層(0.05m)、第4層暗茶褐色泥土層(0.15m)、第5層黄褐色粘土層(地山)である。第5層上面で各時期の遺構を検出した。検出した遺構は、溝、築地、井戸、土壇、柱穴などである。

北トレンチ・南トレンチ西側で南北築地(SA1)を検出した。幅1.5mで約20m分検出し、南北に連続する。第5層上面に黄茶褐色粘土を盛土して成形する。北トレンチでは南北柱穴列を検出したが、他の遺構との関係は不明である。間隔は3.5mである。SA1の東側では築地内側溝(SD3)、西側では築地外側溝(SD1)(東洞院大路東側溝)を検出した。SD3は幅0.4m、深さ0.05mの浅い溝で明確に検出できない箇所もある。SD1は幅1.3m、深さ0.6mで、埋土は暗褐色泥砂が主体で、土器類が多数出土した。SD1西側の路面上では舗装は見られない。

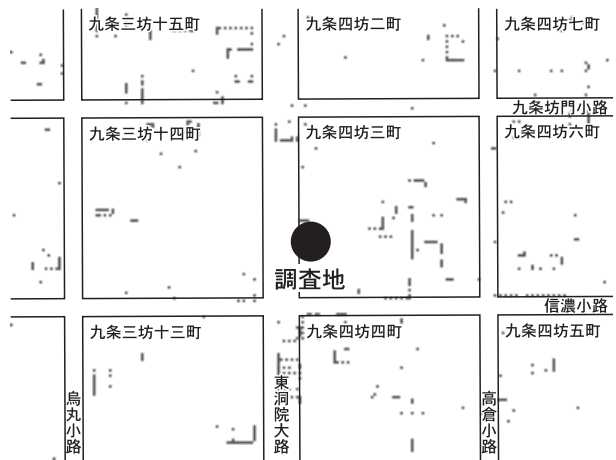


図106 調査位置図 (1:5,000)

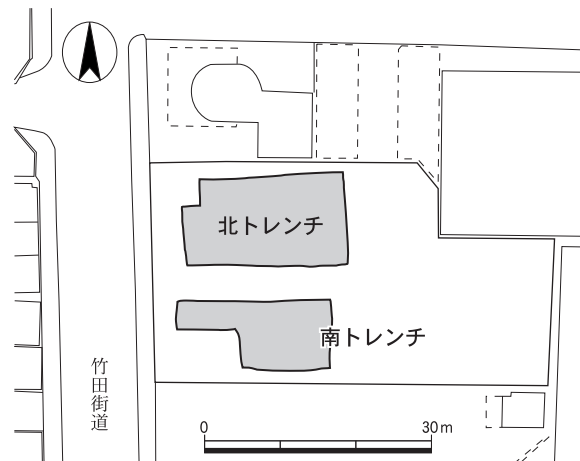


図107 調査区配置図 (1:1,000)

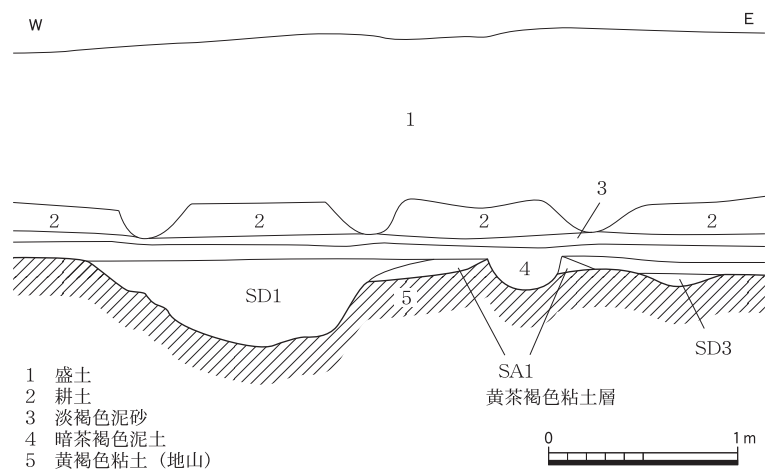


図108 北トレンチ北壁断面図 (1:40)

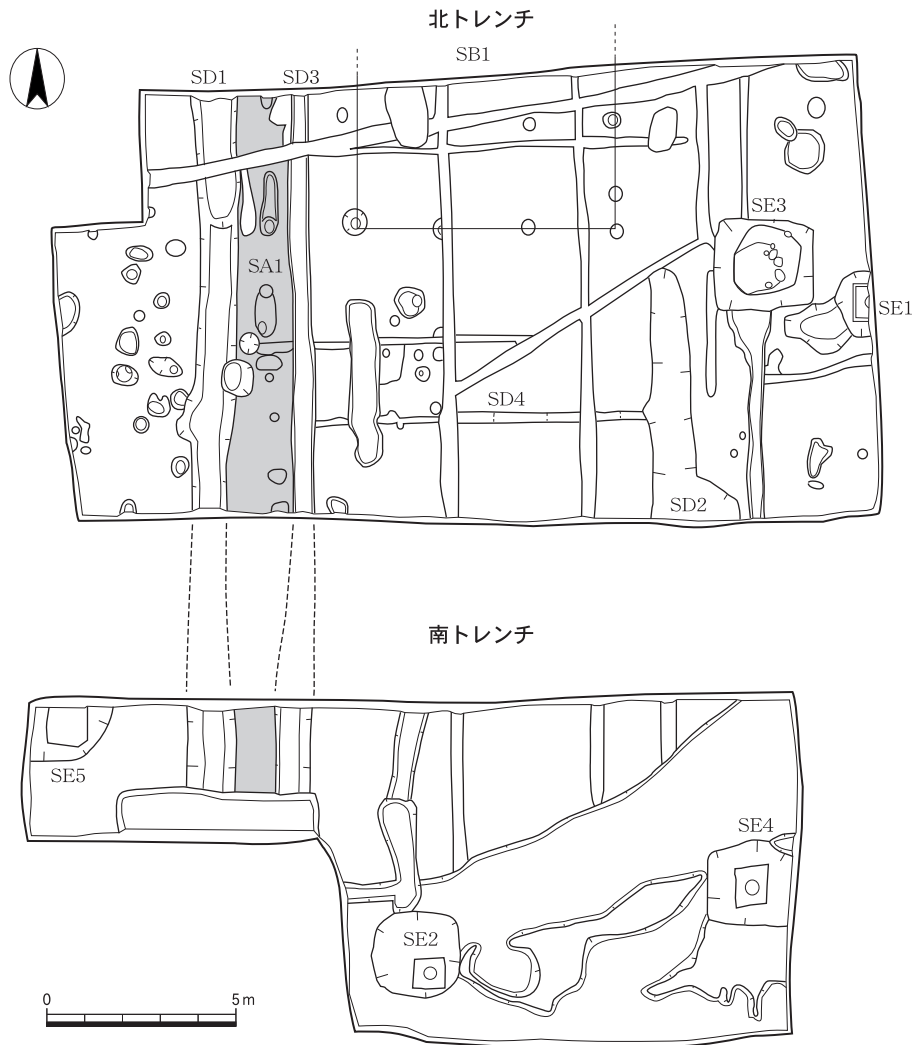


図109 遺構平面図（1：200）

北トレンチ北側で建物（SB1）を検出した。桁行3間×梁間2間の東西棟で、柱間寸法は桁行2.3m、梁間2.7mである。この他にも両トレンチで柱穴を多数検出したが建物としてまとまらなかった。これらの構築物は土層から、側溝埋没後に造られたと判断した。

調査区全域で井戸を検出した。SE1は掘形径1.5mで、井戸枠は方形縦板組みで曲物を据える。SE3は掘形一辺1.7mで、井戸枠は円形石組みである。SE2は掘形径2.3mで、井戸枠は方形縦板組み2段で曲物を据える。SE4は掘形一辺2mで、井戸枠は方形縦板組みで曲物を据える。SE5は掘形径2mで、井戸枠は方形縦板組みである。この井戸は出土遺物からSD1と同時期か若干新しく、東洞院大路路面内に造られたと判断できる。

遺物 遺物は、整理箱で20箱出土した。器種は、土師器、須恵器、瓦器、瓦、陶器、磁器などである。SD1が特に多く、続いて井戸で、他の遺構は少ない。時期は、平安時代中期から桃山時代である。SD1からは、土師器（1～46）、須恵器（47）、瓦器（48～50）、山茶碗（51）、白磁（52～58）が出土し、11世紀中頃である（図110）。SE5が平安時代後期、SE1・2・4が平安時代末から鎌倉時代初め。SE3が室町時代である。

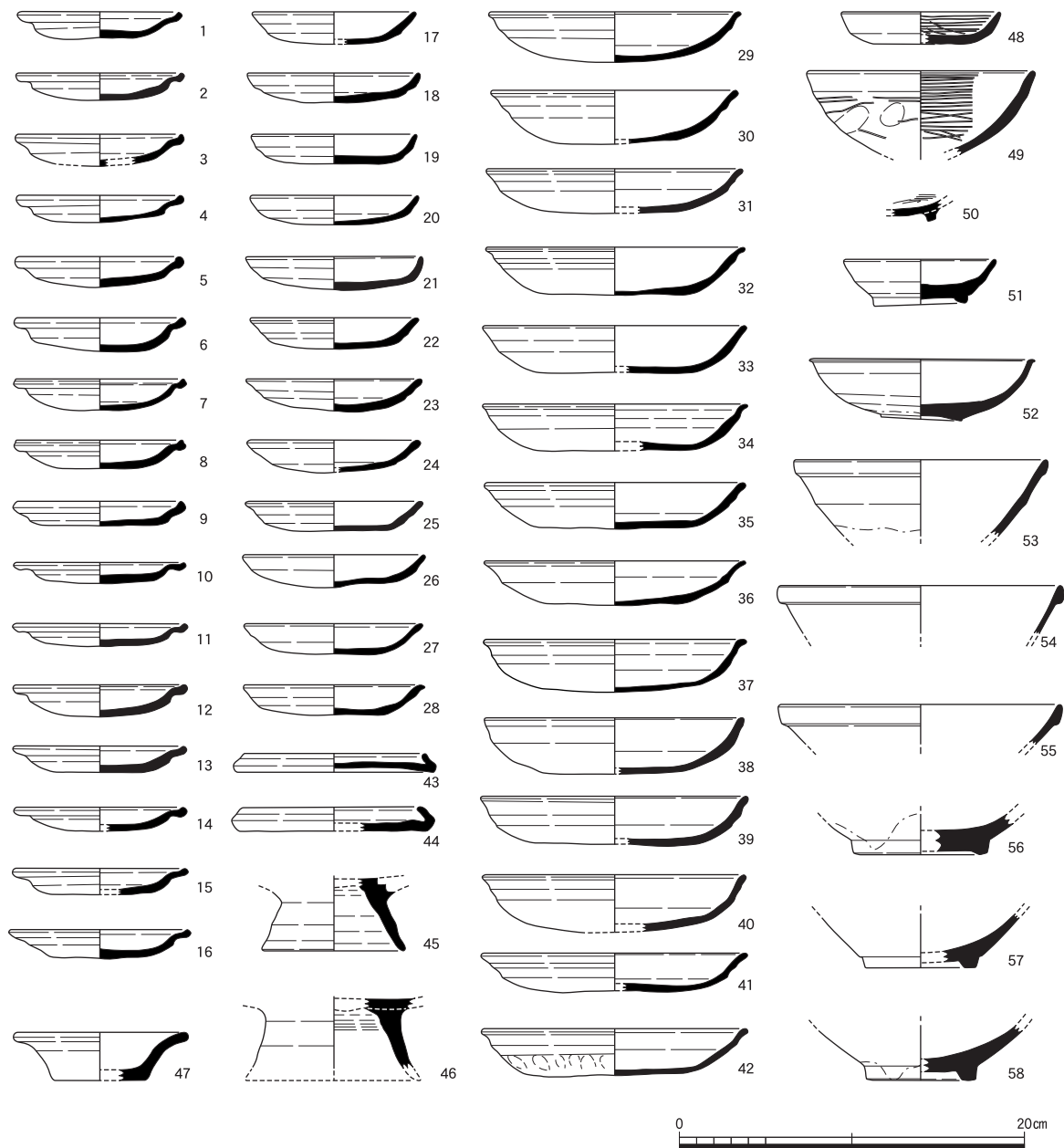


図110 SD1出土遺物実測図（1：4）

小結 今回の調査では、平安時代後期以降の遺構が多く、文献資料からも当該期以降盛行したことが明らかとなった。これに対し、平安時代前中期の遺構は全く見られず、史料を裏付けている。また、SD1から出土した一括遺物は当時期の好資料となる。

『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』 1979年報告

28 平安京右京一条三坊四町（図版11）

経過 発掘調査は、関西電力株式会社円町変電所の新設工事に先立って実施したものである。当調査地は平安京右京一条三坊四町の南端に相当し、中御門大路に関する遺構の検出が期待できた。発掘調査区は、西から1～10調査区まで設定し、遺構の広がりを確認すべき地点では北と南に拡張区を新たに設定して調査を行った。また、調査区西半では中御門大路に関連する遺構が良好に遺存していることが判明したため、北側全体に広く拡張区

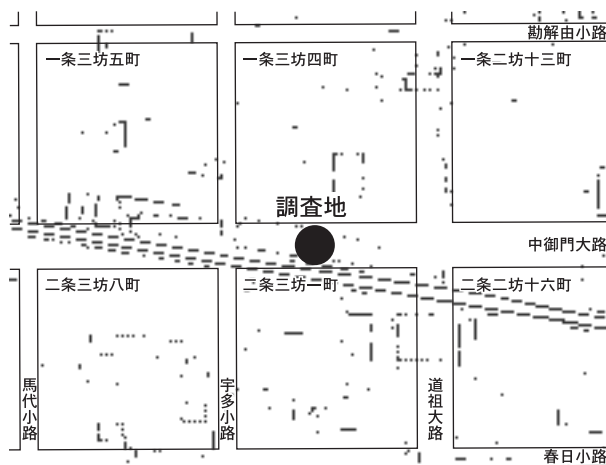


図111 調査位置図（1：5,000）

を設けた。その結果、中御門大路の北側溝を広範囲に渡って検出することができた。

遺構 調査地の現状は平坦であるが、基本層序を4・5調査区の境界に設定した南北セクションで観察すると、基盤層である茶褐色砂礫層は北から南へ緩やかに傾斜する。遺構はこの茶褐色砂礫層上で検出しており、遺構面上では部分的に厚さ約0.2mほどの旧耕作土層（暗褐色泥砂）が堆積するが、調査区北端で約0.35m、南端で約0.65mの盛土を行い、現在の平坦地を形成している。

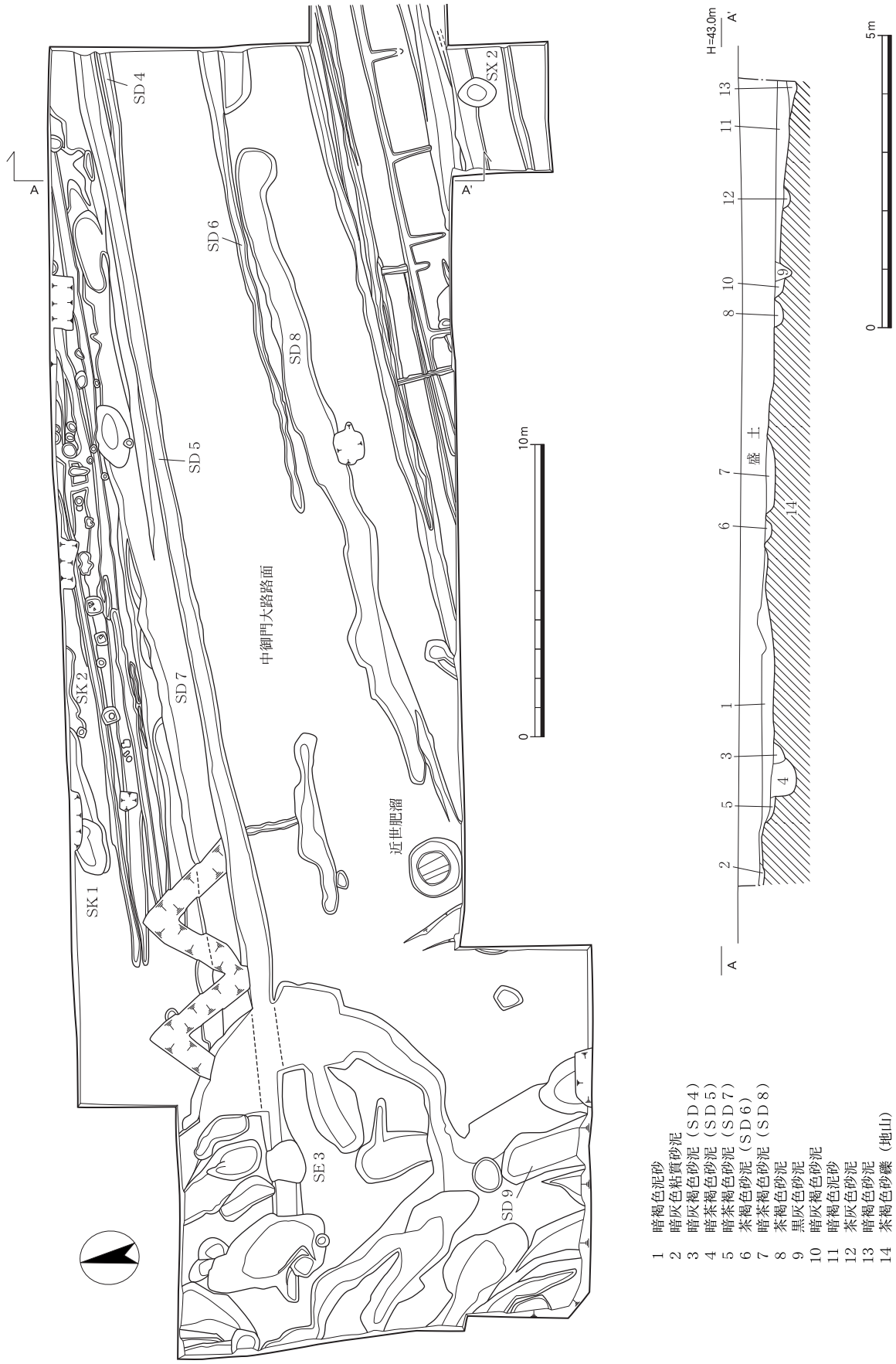
調査区全体で中世以降の東西方向および南北方向の溝群を多数検出しており、これらは耕作に伴う溝群と考えられる。平安時代に遡る遺構は調査地西半で検出した東西溝や流路、井戸などである。

SD7は西半拡張区で検出した中御門大路北側溝と考えられる東西方向の溝である。南肩は後述する中世溝SD4・5に切られており明らかでないが、幅1.5mほどと推測でき、深さは0.2m前後である。西端は大路廃絶後の流路（SD9）に壊されており、東は調査区外に展開するが、現状で33m以上確認できている。溝底部の標高は東端で約41.75m、西端で約41.4mと緩やかに東から西に傾斜する。また、SD7北肩から約3m北側で溝状に繋がる土壇（SK1・2）を検出している。北と東への広がり調査区外となるため確認できないが、深さ0.15～0.2mで、西は削平を受けて途絶えている。このSD7とSK1・2の間では、柱間は揃わないが東西に並ぶ掘立柱穴を検出しており、部分的な検出であるが中御門大路北築垣になる可能性がある。これらの側溝や土壇内からは平安時代前期から中期の遺物が出土した。

中御門大路は平安時代中期には道路としては廃絶したようで、調査区西端部では路面を南北に横切って、やや北西から南東に向かって蛇行する流路（SD9）が流れるようになる。西肩は調査区外となるが幅7m以上、底部は凹凸が激しいが0.6～0.8mほどの深さが想定できる。埋土から平安時代前期から中期の遺物が出土しており、中御門大路北側溝が埋没後まもない時期に形成されたと考えられる。また、流路の北東岸部で井戸（SE3）を1基検出している。直径約1.3m、深さ約1.2mの円形素掘り井戸で、底部に直径約0.55mの曲物を据えていた。中御門大路路面上に位置



図112 調査区および遺構配置図 (1 : 500)



- 1 暗褐色泥砂
- 2 暗灰色粘質砂泥 (SD4)
- 3 暗灰褐色砂泥 (SD5)
- 4 暗茶褐色砂泥 (SD7)
- 5 暗茶褐色砂泥 (SD6)
- 6 茶褐色砂泥 (SD8)
- 7 茶褐色砂泥
- 8 黑灰色砂泥
- 9 暗灰褐色砂泥
- 10 暗褐色泥砂
- 11 茶灰色砂泥
- 12 暗褐色砂泥
- 13 暗褐色砂泥
- 14 茶褐色砂礫 (抛山)

図113 調査区西半遺構実測図 (1 : 200、1 : 100)

するが、埋土内からやはり平安時代の遺物が出土しており、流路とともに中御門大路廃絶に伴って穿たれた井戸であろう。

中世になると流路SD9も再び埋没し、SD7と重複して東西溝SD4・5を検出した。これらの溝は中世の中御門大路北側溝と想定できる。とくに、旧段階のSD5は幅0.6～1m、深さ0.2～0.5mで、長さ40m以上にわたって検出し、西端部では井戸SE3を切っている。ただ、平安時代の中御門大路とは傾斜が逆で、西から東へ緩やかに傾斜する。また、旧路面上では中世の東西溝SD6・8などを検出しており、路面として機能したとしても、路面幅4m程度だったと考えられる。このほか、SD6・8の南では多くの溝群を検出しているが、前述したようにこれらは耕作に伴う溝群であり、当地が以後耕作地として利用されてきたことを示している。

遺物 平安時代の遺物は中御門大路北側溝（SD7）と、北築垣内溝かと考えられるSK2の遺物がまとまっている（図114）。中御門大路北側溝の土器類は、土師器（1～5）、黒色土器（6・7）、須恵器（8・9）、緑釉陶器（10・11）、灰釉陶器（12・13）などである。土師器小皿（1・2）は口径約12cm、大皿と杯は口径16cm前後で形態的差異があまり明確でない資料が多い（3～5）。黒色土器碗にはA類（6）の他、B類（7）も認められる。

SK2の土器類は、土師器（14～22）、緑釉陶器（23）、灰釉陶器（24・25）、須恵器（26）など

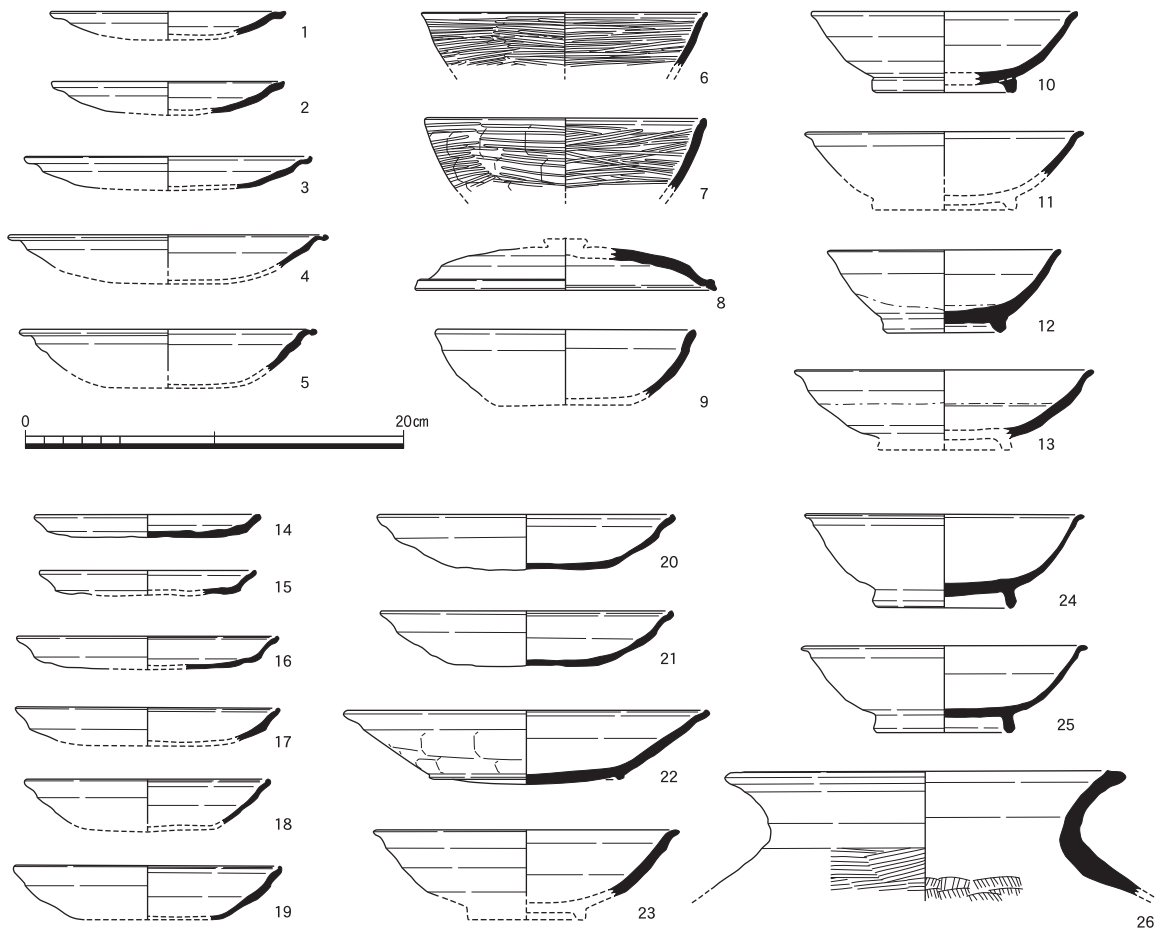


図114 SD7・SK2出土土器実測図（1：4）

である。土師器皿は口径12cm前後のもの（14・15）と口径14cm前後のもの（16・17）に分かれ、cmこれと対応するように土師器杯も口径13～14cmのもの（18・19）と口径約15.5cmのもの（20・21）に分かれる。口径の差による二種は時期差を示すものである可能性が高く、小さいものが新しく、大きいものが古い。また、外面調整にヘラケズリを残す土師器杯B（22）が出土しており、後者の年代に近いものと考えられる。緑釉陶器と灰釉陶器はあまり多くないが、灰釉陶器碗はやや内弯した高い高台を持っており、やや新しい様相を示している。

これら中御門大路北側溝とSK 2出土の土器類は9世紀にまで遡る資料も混在するが、10世紀前半に納まる資料が多いようである。流路SD 9から出土する土器類もこれらの資料と大きな型式差はなく、側溝の機能停止と流路の形成がほぼ同じ時期にあたることを示している。なお、流路SD 9内からは、円面硯や風字硯・土馬など特殊な遺物も出土しており、四町域の宅地の性格を示唆している。

小結 今回の調査で、中御門大路北側溝と北築垣関連遺構を検出するとともに、中御門大路の当地域における変遷が明らかとなった。とくに、中御門大路は平安時代中期には道路としての機能を停止した可能性が高く、路面上に自然流路や井戸などが形成されたことは、右京域の衰退過程を如実に示しているといえる。ただ、中世には条坊地割が再び意識され、平安時代の北側溝と同じ場所に東西溝が穿たれる事実は興味深い。平安京条坊は右京域が耕地化されても、長く土地の区画を規制していたと考えられる。

29 平安京右京二条三坊二町

経過 発掘調査は、朱雀第八小学校の校舎建設に先立って実施したものである。当調査地は平安京右京二条三坊二町に相当する

遺構・遺物 調査地の基本層序は、地表下約0.4mまでが近現代の耕作土と盛土で、その下層が遺構面となる明黄褐色粘質土である。旧校舎の基礎による攪乱が多く、中世以前の遺構は室町時代の溝を検出しただけで、他はほとんど近現代の土取穴であった。遺物も中近世の土師器や陶磁器の破片に混入して、平安時代の緑釉陶器片などが少量出土しただけである。

小結 今回の調査では、平安時代の遺構はまったく検出できず、中世の遺構も室町時代の溝だけであった。ただ、平安時代の遺物も少量出土したことから、周辺に平安期の遺構の存在が想定できる。

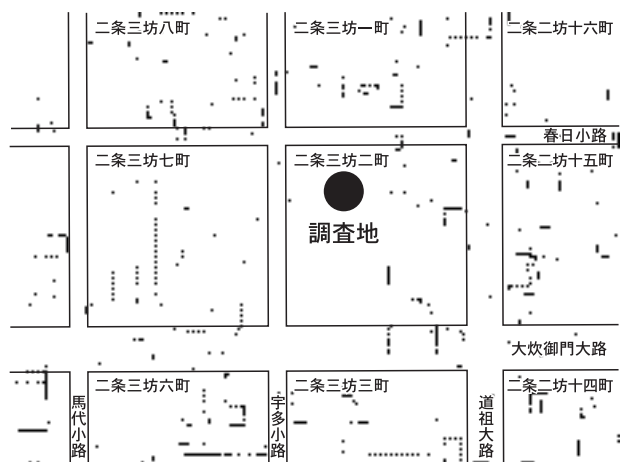


図115 調査位置図 (1 : 5,000)

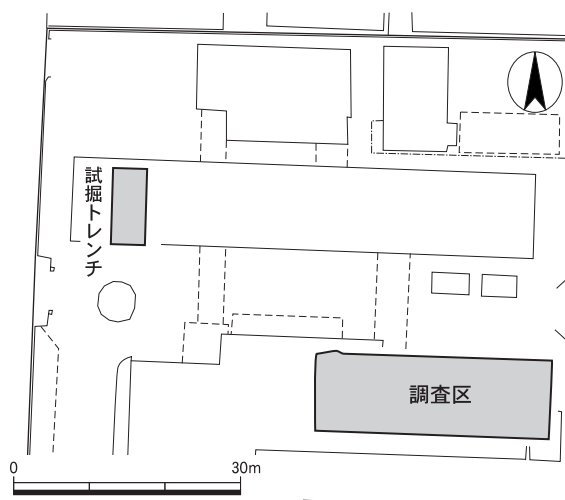


図116 調査区配置図 (1 : 1,000)



図117 調査区全景 (北西から)

30 平安京右京二条三坊七町 (図版12・13)

経過 京都市中京区西ノ京春日町16番地他で実施した、マンション建設に伴う試掘調査および発掘調査で、当調査地は平安京右京二条三坊七町にあたる。

発掘調査に先立ち、既存建物の西辺（第1トレンチ）、南辺（第2トレンチ）および東辺（第3トレンチ）を設定して試掘調査を行った。その結果、第1トレンチの北端部で春日小路南側溝と想定される東西溝を検出し、

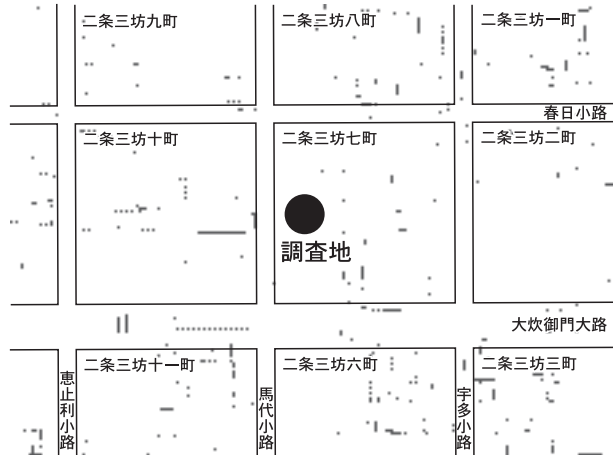


図118 調査位置図 (1 : 5,000)

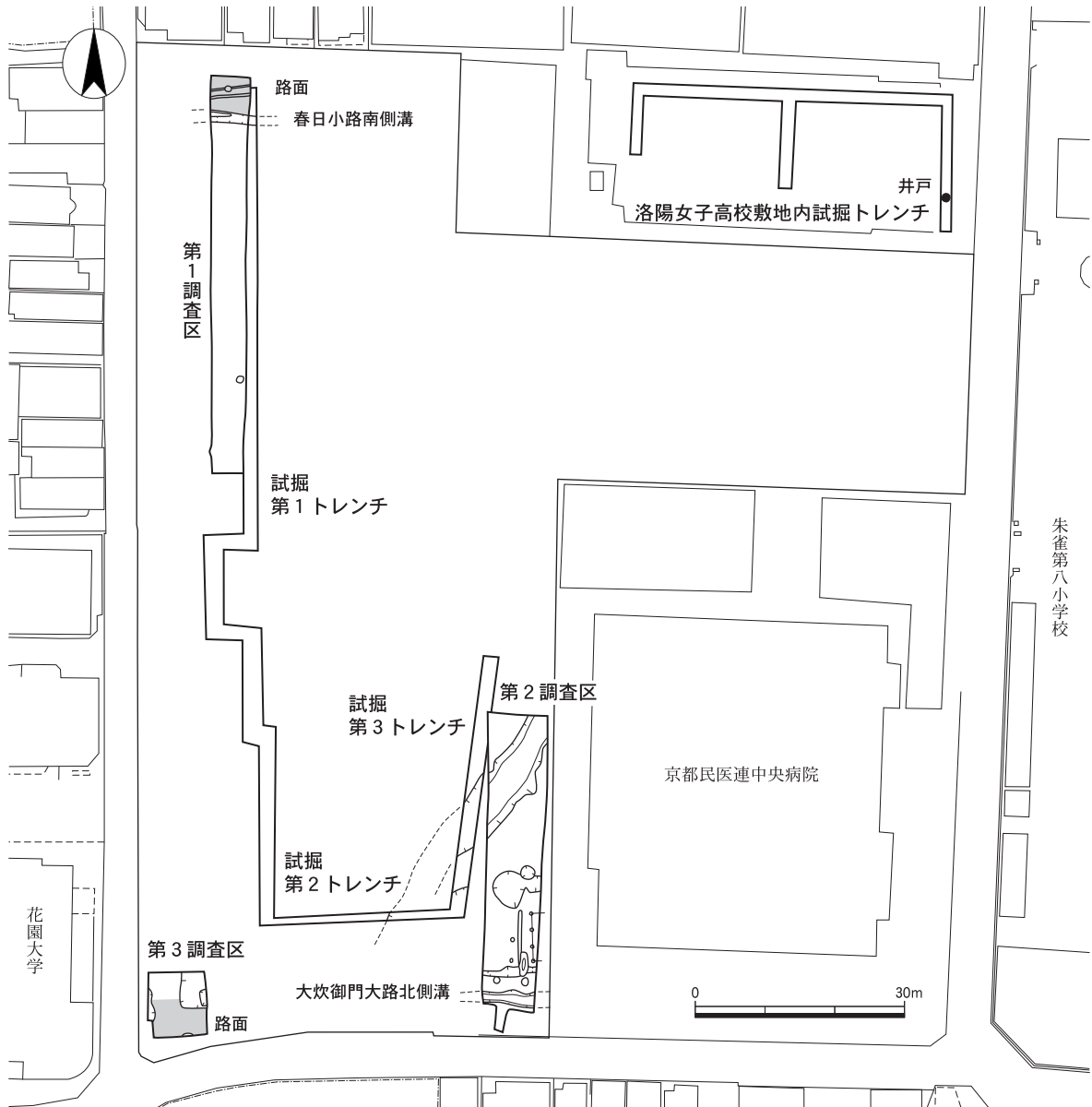


図119 調査区および遺構配置図 (1 : 1,000)

第3トレンチから第2トレンチでは平安時代以前の流路を確認した。この試掘調査成果を受けて、発掘調査を実施することとなった。

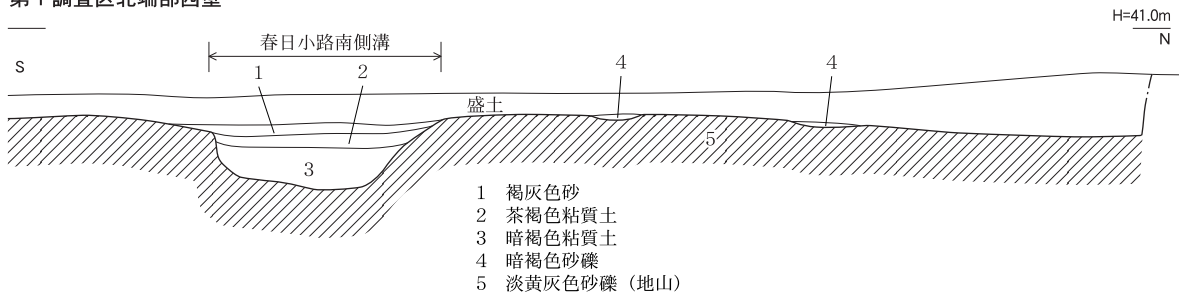
調査区は、敷地北西部に東西幅5m、南北57mの第1調査区、敷地南東部に東西幅8m、南北42mの第2調査区、敷地南西部に東西8m、南北9mの第3調査区を設定した。第1調査区では試掘成果の通り、春日小路南側溝と路面を検出することができ、第2・3調査区では敷地南端に想定された大炊御門大路の遺構を確認し、掘立柱建物の一部や平安時代の土器溜を検出した。また、下層の流路遺構が弥生時代後期のものであることを明らかにし、調査を終了した。

遺構 調査地は北から南へ緩やかに傾斜しており、第1調査区では厚さ0.15~0.4mの盛土直下が平安時代の遺構面である淡黄灰色砂礫（地山）と非常に浅い。第2調査区では第1層盛土（約0.4m）、第2層耕作土（約0.15m）、第3層暗灰褐色粘質土（包含層：0.05m）を除去した段階で遺構面である灰褐色粘質土（地山）を検出した。遺構面の標高は第1調査区北端で40.4m、第2調査区の南端で38.7mである。

検出した平安時代の遺構は、春日小路や大炊御門大路など条坊路に関する遺構と掘立柱建物、土器溜などである。春日小路に関しては、第1調査区北端部で南側溝と考えられる東西溝と礫敷路面を検出している。春日小路南側溝は幅約1.4m、深さ約0.45mで、小片であるが平安時代後期の遺物が出土している。路面は礫敷き舗装されており、路面上では溝間約1.5mの2条の平行して延長する浅い溝を確認している。これらの小溝の性格については明らかでないが、轍の可能性もある。

大炊御門大路の遺構は第2調査区南端部と第3調査区で検出した。大炊御門大路北側溝は第2調査区南端で検出した幅約2.6mの東西溝で、断面観察から少なくとも新旧2時期あることがわか

第1調査区北端部西壁



第2調査区南端部西壁

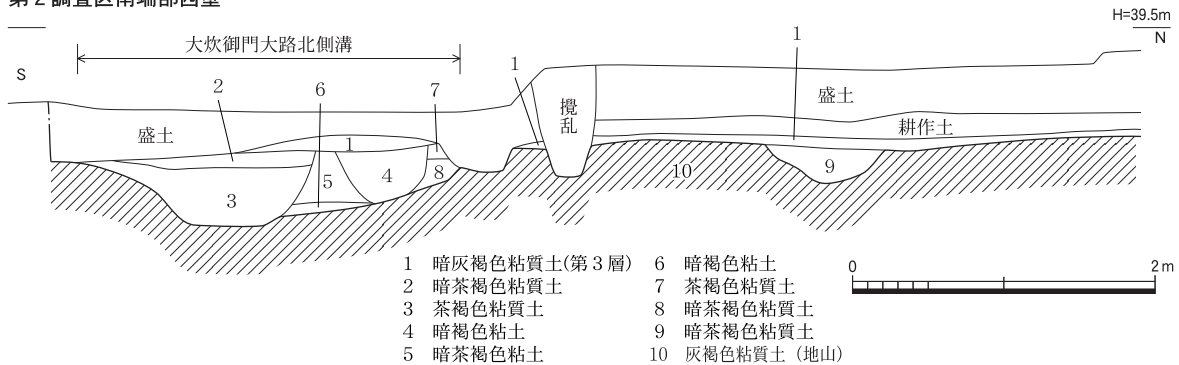


図120 第1・2調査区西壁断面図（1：50）

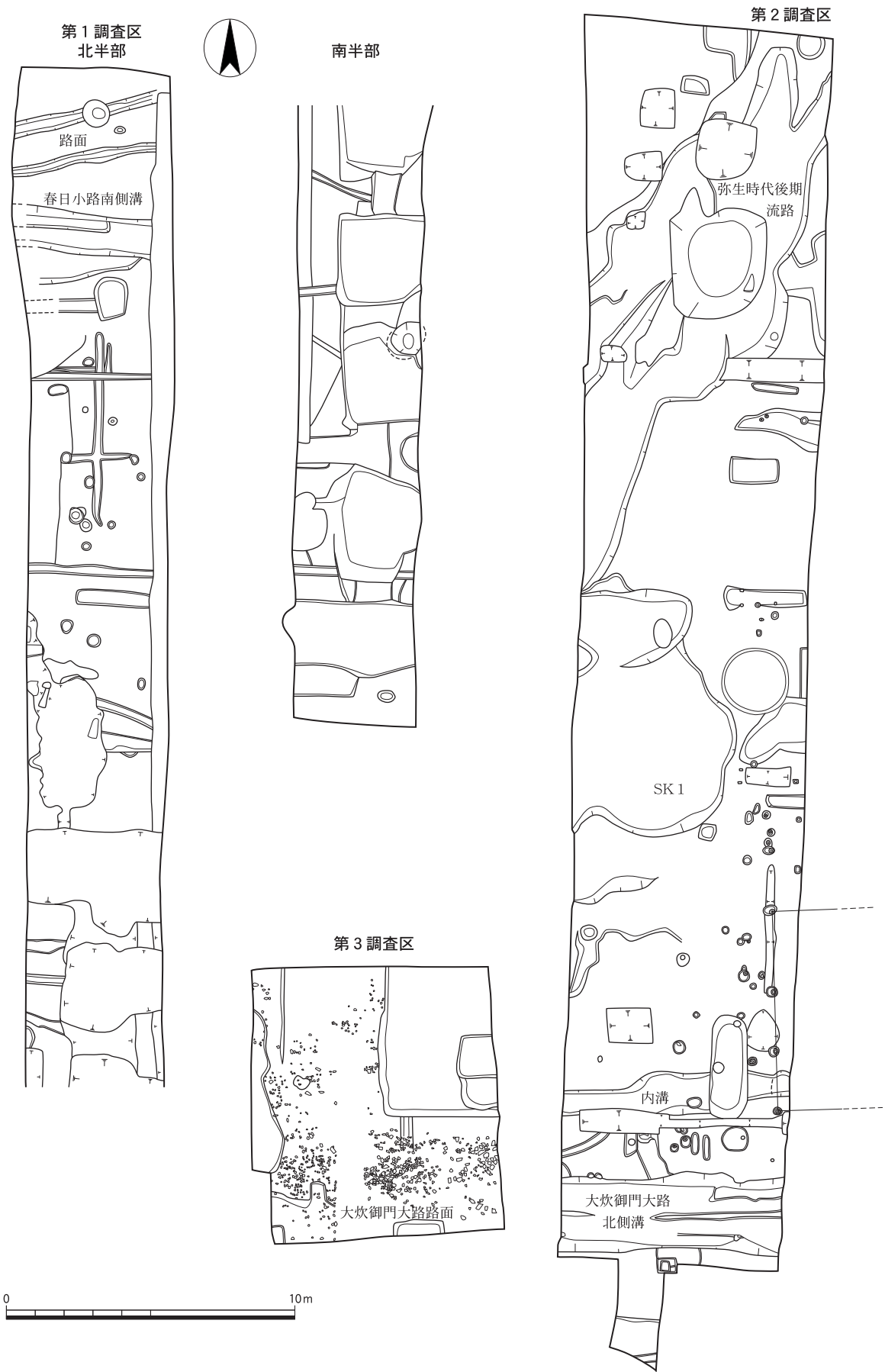


図121 遺構平面図 (1 : 200)

る。北側の旧段階の側溝幅は不明であるが、南側の新段階の側溝は幅約1.6mであった。また、北側溝の北に平行して延長する幅0.8~1.4mの東西溝を検出した。この溝の南肩は、旧段階の大路側溝北肩部から約2m北側に位置しており、築地内溝である可能性が高い。路面の状況については第3調査区で礫敷き面を確認しており、春日小路と同様に礫敷き舗装されていたと考えられる。

七町内の遺構としては第2調査区の南半において、大炊御門大路内溝の北側で南北掘立柱列を3間分確認した。柱間があまり揃っておらず詳細は不明であるが、掘立柱建物の西妻部である可能性が高い。また、建物の北側に接した不整形の土器廃棄土壌であるSK1を検出しており、ここから平安時代前期の土器類が一括して多量に出土した。

なお、第2調査区の下層で北東から南西に流れる流路を検出した。幅4~7mと一定しておらず、流れが頻繁に変わった痕跡が認められることから、自然流路と考えられる。深さは約0.6mで、弥生時代後期の遺物を包含していた。

遺物 平安時代の遺物については、SK1から出土した土器群の概要を報告する（図122）。

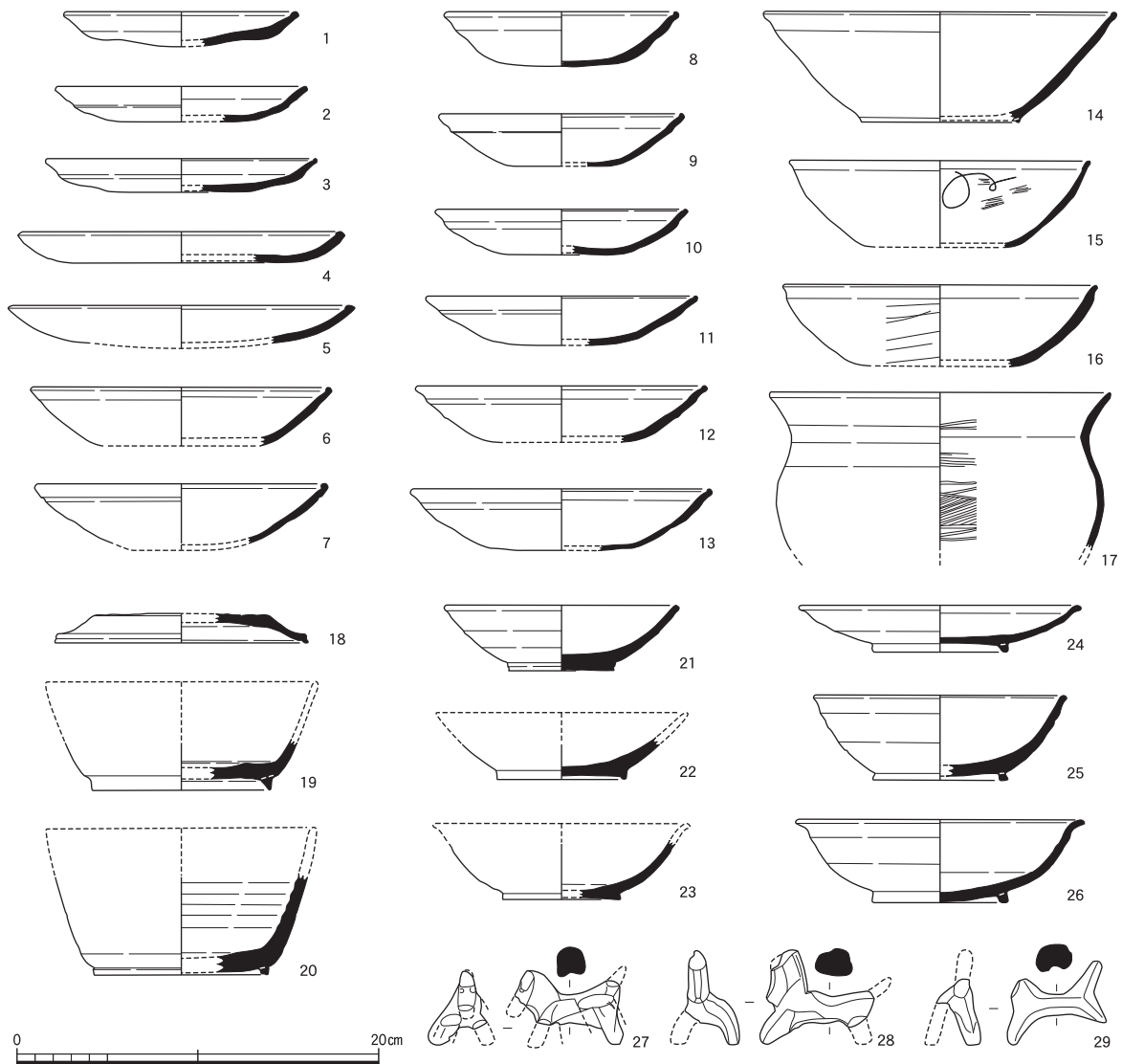


図122 SK1出土遺物実測図（1：4）

土師器は皿（1～5）、杯A（6～13）、杯B（14）がみられる。このうち、体部外面にヘラケズリを施すもの（4～7・14）も若干出土するが、ほとんどは内面から口縁部外面にかけてナデ調整を施すが、体部外面はオサエ・ナデだけで未調整の資料（1～3・8～13）となる。黒色土器はA類の杯（15・16）と小型甕（17）が出土している。須恵器は杯蓋（18）、杯B（19・20）が出土し、鉢や瓶子も認められる。緑釉陶器は椀（21～23）が出土している。緑釉は薄く淡緑色を呈しており、内面には丁寧なヘラミガキが施される。高台はすべて削り出し成形で、平高台や輪高台の他にいわゆる蛇の目高台もある。灰釉陶器は高台断面が逆台形を呈する皿（24）と椀（25・26）が出土している。これらの内面には厚い灰釉が掛かっており、トチンの痕跡も認められる。

これらの土器群は平安時代前期の特徴を備えており、一括遺物として資料的価値が高い。また、これらの土器群と共伴して土馬（27～29）が出土しており、平安京における土馬を伴う祭祀の実態を知るうえで重要な資料となっている。

小結 今回の調査において、大炊御門大路および春日小路の遺構を検出し、平安京条坊復元のデータを新たに得ることができた。また、これらの路面には礫が敷かれていることが判明し、平安京の道路舗装の一端が明らかになったといえる。ただ、七町宅地内の様相については、第2調査区で建物の一部と考えられる掘立柱列と多量の土器類が出土したSK1を検出しただけである。今回の調査と並行して、敷地北東部に隣接する洛陽女子高等学校敷地内においても試掘調査を実施し、平安時代の横棧縦板組み井戸を1基検出しているが、宅地の様相についてはまったく不明である。今後、機会があれば未調査部の調査を継続して行い、七町の宅地利用の実態を明らかにしていく必要がある。

31 平安京右京三条二坊十二町

経過 本調査は、建物新築工事に伴うもので、当地は平安京右京三条二坊十二町南辺中央にあたるため、調査を実施した。

調査に先立ち試掘調査を行い、平安時代の包含層・遺構を確認したため発掘調査となった。調査区は一辺26mの方形の東北部1/4を欠いたL字状に設定した。重機で近現代層を掘削し、その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。その後、部分的に断割りをして、下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層（0.9m）、第2層耕土層（約0.4m）、第3層茶褐色砂泥層（0.05～0.1m）、第4層黄灰色粘質土層（地山）である。調査区全域の層序は均一で、表土が西に比べ東が0.8m高く傾斜する。第4層上面で各時期の遺構を検出した。検出した遺構は、溝、建物、井戸、柱穴などである。

調査区中央で南北溝SD1・2を検出した。SD2は十二町の中心を南北に流れる大溝で、幅約4m、深さ0.1m、両岸は不整形である。埋土は暗灰色砂泥である。SD1はSD2が埋没した後に造られた大溝で、幅2.5m、深さ1.6mで、両岸共にえぐられ速い

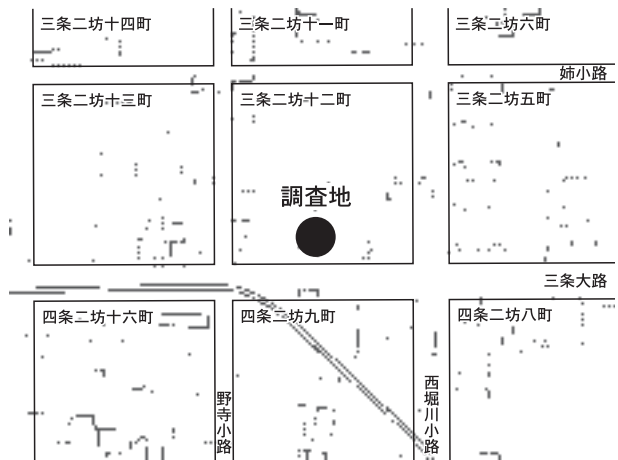


図123 調査位置図（1：5,000）

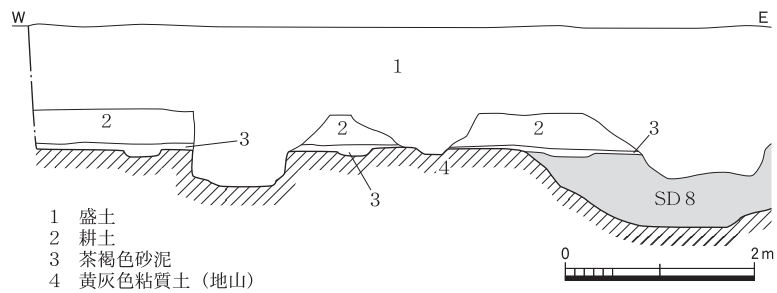


図124 北壁断面図（1：80）

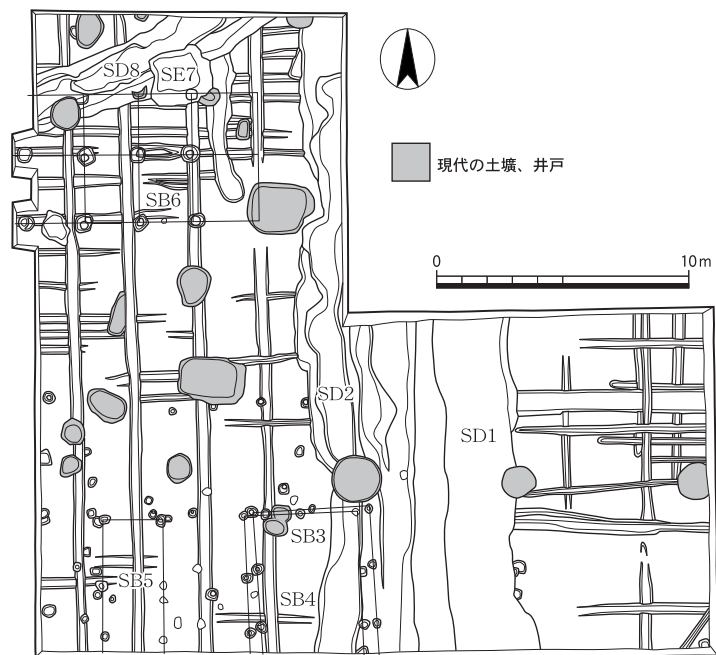


図125 遺構平面図（1：300）

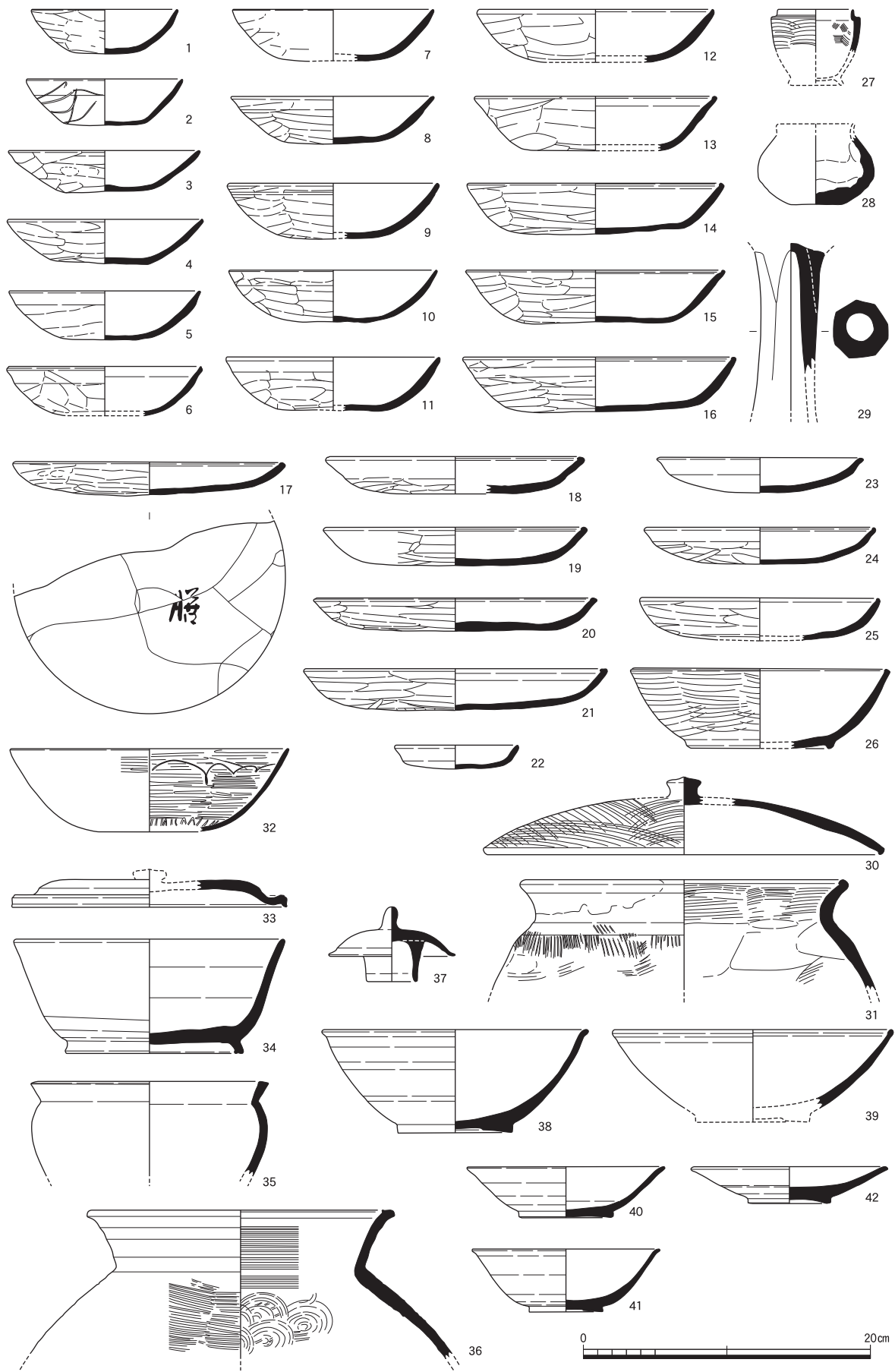


图126 SE7 出土遺物実測図 (1 : 4)

流れのあったことを示す。埋土は砂礫で、東岸にあふれる。SD 8は斜方向の溝で、幅約2.2m、深さ0.8mで、遺物がほとんどないため時期は不明であるが、方向がずれることから、平安時代以前の可能性がある。SD 1は平安時代前期、SD 2は平安時代中期に属する。

調査区北側と南端で掘立柱建物を検出した。SB 6は東西棟で梁間2間×桁行4間以上検出し、西に継続する。梁間約2.5m、桁行2mである。方位はSB 5とほぼ一致する。SB 5は南北棟で梁間1間×桁行2間以上検出し、南に継続する。梁間2.4m、桁行約2.5m・2mである。SB 3・4は南北棟でSB 4の方が新しい。梁間2間×桁行2間以上検出し、南に継続する。梁間約2.2m、桁行約2.2mである。規模もほぼ同じく、建替えの可能性が高い。この他にも柱穴を多数検出したが建物としてまとまらなかった。建物はSB 6が平安時代前期、南側の建物群が中期に属する

調査区北端で井戸SE 7を検出した。掘形一辺約2mで、井戸枠は不明である。埋土から平安時代前期の遺物が多数出土した。埋没した後にSB 6が造られる。

遺物 遺物には、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器などがある。井戸でまとまった遺物が出土したが、他の遺構は少ない。時期は、平安時代中期から中世である。SE 7からは、土師器(1～31)、黒色土器(32)、須恵器(33～36)、灰釉陶器(37)、緑釉陶器(38～42)が出土した。9世紀前半である。

小結 今回の調査では、平安時代前期から中期の遺構を多数検出し、宅地内の変遷が明らかとなった。その後の遺構はほとんどない。南北溝SD 1・2は十二町中央に位置し、町内中央の川と考えられる。SD 8は西ノ京遺跡に関係する可能性がある。また、SE 7から出土した一括遺物は当時代の好資料となる。

『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』 1979年報告

32 平安京右京四条一坊九町

経過 日本電信電話公社社宅の新築工事に先立って発掘調査を行った。調査地は平安京右京四条一坊九町で、東隣りが朱雀院にあたる。嵯峨上皇の離宮として造営された朱雀院は、平安京のメインストリートともいべき朱雀大路の西に面し、北は三条大路、南は四条大路、西は皇嘉門大路に囲まれた広大な敷地をもつ。昭和47年、推定地の南端付近の調査により平安時代の建物跡が発見されており、その遺構の存在が知られている。

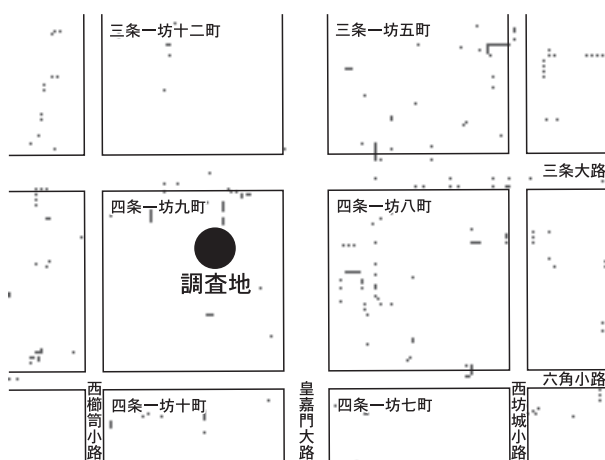


図127 調査位置図 (1 : 5,000)

遺構 調査区の基本層序は、現表土下約1.5m前後まで現代の盛土で、その下層に、暗青灰色砂泥・茶褐色砂泥・暗褐色砂泥・暗灰色粘質土がほぼ水平に堆積している。最下層の暗灰色粘質土は平安時代の遺物を含んでおり、この層の下から柱穴が発見された。基盤層は淡灰色粘質土(地山)である。

平安時代の遺構は、調査区北端部で検出した東西方向の柱穴列だけである。柱穴は3基確認され、そのうち中央のものは、東西0.75m、南北0.55mの長方形である。他の2基は一部を土壌に切られているため全形を知り得ない。心々は2.4mを測り、柵、あるいは北へのびる建物であろう。深さ約0.15m程度しか残っておらず、上部をかなり削平されている。このほか、室町時代の遺物を含む耕作溝を検出している。

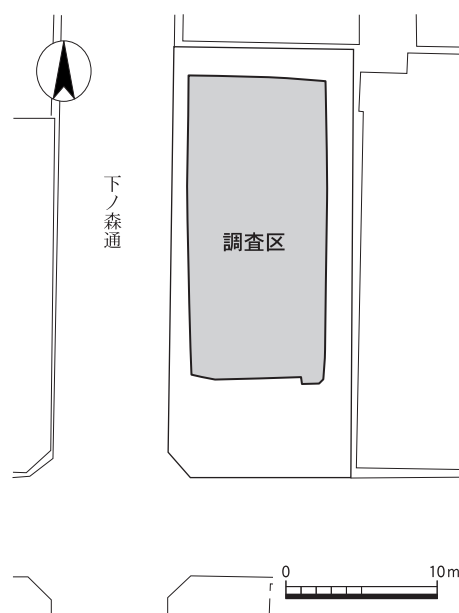


図128 調査区配置図 (1 : 500)

遺物 平安時代の遺物は、ほとんど暗灰色粘質土から出土しており、土器と瓦がある。大部分の遺物が小片で、全形を知りうるものはわずかであるが、すべて平安時代前期に属するものである。土器類には、土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、磁器があり、その大半を土師器が占めている。土師器は椀・皿・杯・高杯・甕があり、椀・皿・杯には外面にヘラケズリが観察できるものもある。須恵器は杯・壺・鉢・甕などで、大半が甕の破片である。黒色土器は椀と甕があるが、いずれも小破片で形態は不明である。緑釉陶器は椀や皿の他に、火舎・鍔釜が出土している。灰釉陶器は椀や壺などがあるが、総量はわずかである。磁器は白磁と青磁の椀がある。青磁は体部の屈曲する、いわゆる稜椀である。この他に弥生時代の石斧が土壌から出土している。上半部は欠失しているが、刃部は丁寧加工されている。

小結 今回の調査によって発見された遺構や遺物包含層は、出土した遺物から見て、朱雀院の存在した年代と同時期のものであることがわかる。院との直接の関連については今後検討を待たなければならないが、先にふれた南側の調査結果とも考え合わせると、周辺に朱雀院の遺構が、比較的良好的な状態で残存している可能性は高く、今後の調査に期待されるところが大きい。

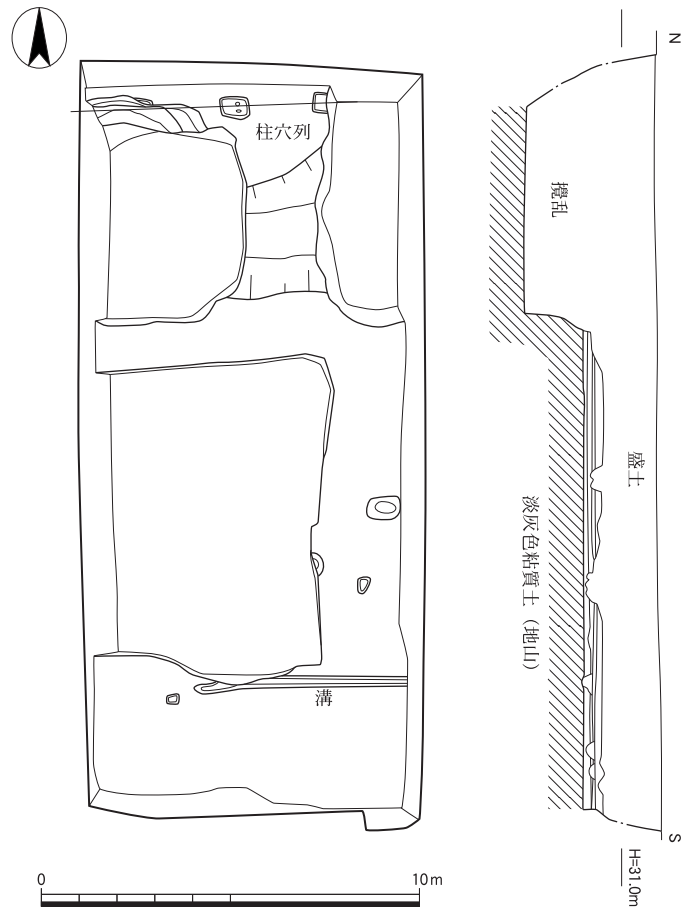


図129 遺構実測図 (1 : 200)



図130 調査区全景 (北から)

33 平安京右京四条一坊十二町（図版14）

経過 京都中央信用金庫が京都市中京区壬生森町に壬生支店を新築する事になった。当地付近は平安京右京四条一坊十二町（西宮領）跡に推定されるため、京都市文化観光局文化財保護課の指導により建築工事に先がけて発掘調査を実施した。

遺構・遺物 調査区の基本層序は、現代盛土層と耕作土層が約0.8mあり、下層に堆積する暗青灰色泥土と黄灰色泥土を除去すると地表下1.1～1.2mで遺構面となる。この遺構面上層では中世から近世の井戸、土壇、耕作溝などを検出した。また、下層で池跡を確認しており、調査区西側で池の汀線が現われ東へなだらかに深くなる。池の堆積土は暗黒灰色泥土と暗茶灰色泥土で、基盤層は黄褐色砂礫である。池から出土した遺物は、土師器・須恵器・緑釉陶器などの土器類や木器類などで、平安時代から中世までの遺物を含む。また、「壹」と墨書した須恵器片や転用硯、土錘なども出土した。

小結 今回の調査で池の西汀を検出した。出土遺物は平安時代から中世にわたっており、遺物の時期差を考えると長期にわたって徐々に埋没したと思われる。近接地である壬生仙念町（京都市リハビリテーションセンター）、壬生花井町（株式会社日本写真印刷）の調査では平安時代の建物跡など数多くの遺構が確認されており、今回発見された池との関連性を追求するには、今後も周辺地における発掘調査の継続が必要である。

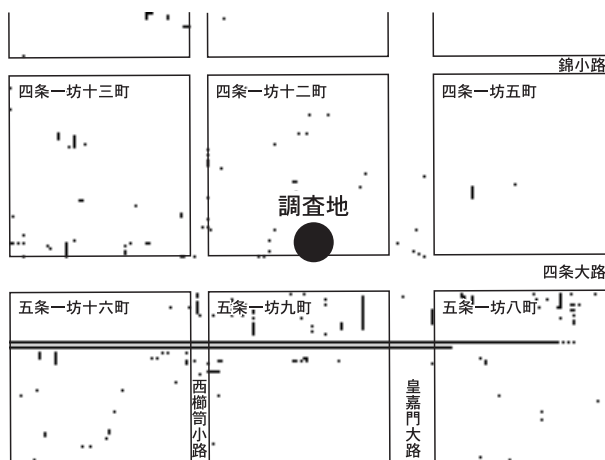


図131 調査位置図（1：5,000）

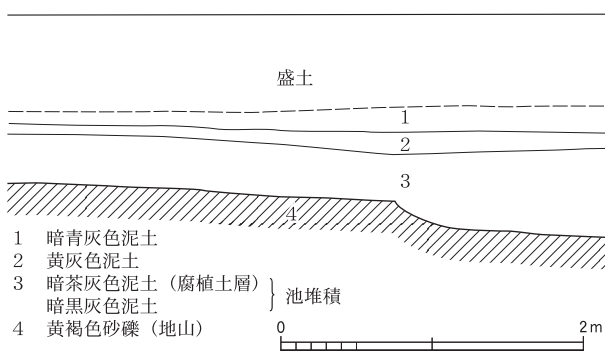


図132 中央セクション北壁断面図（1：50）



図133 池出土墨書土器

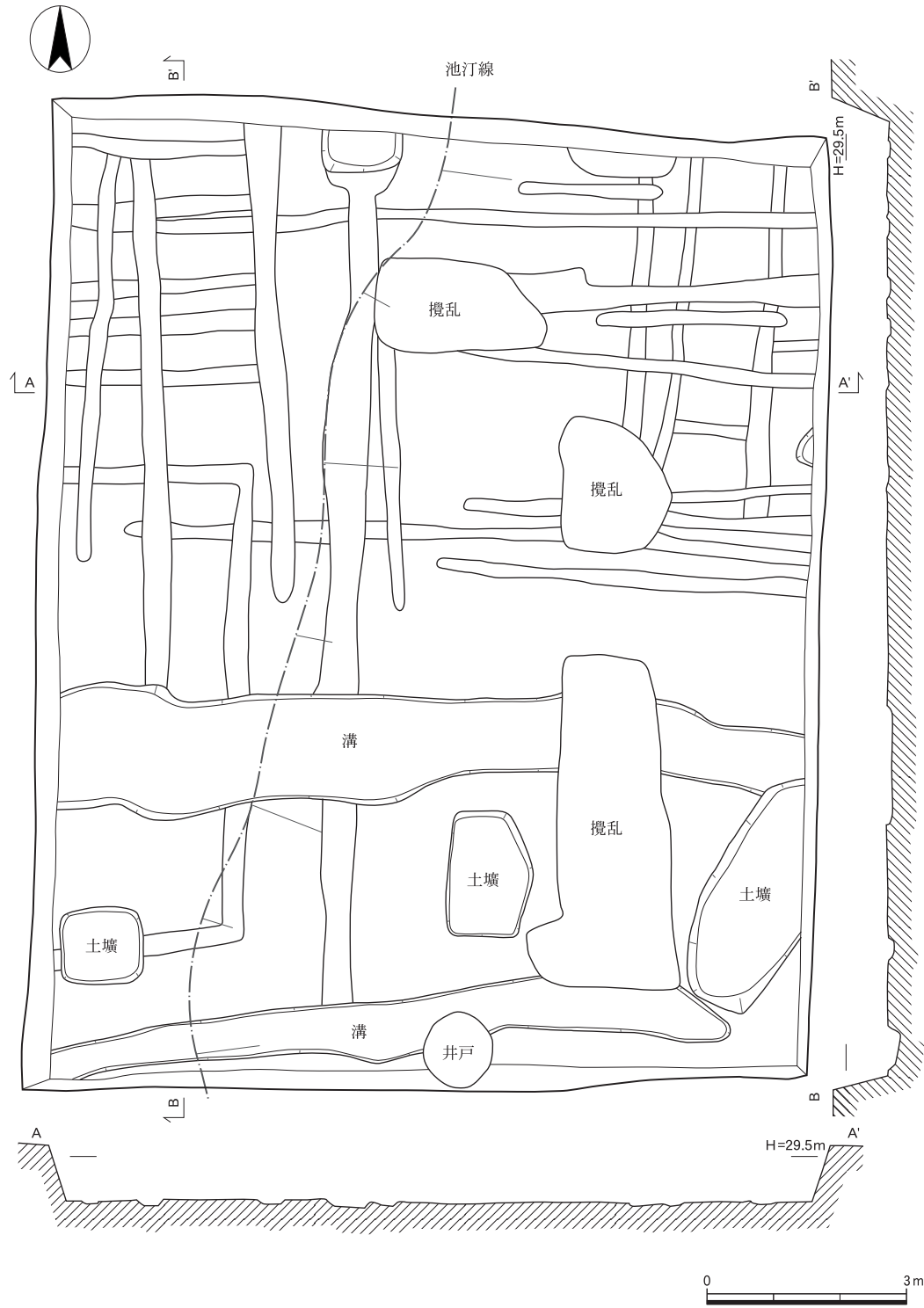


図134 遺構実測図 (1 : 100)

34 平安京右京四条四坊六町

経過 山ノ内小学校の校舎改築に伴う発掘調査で、前年度に引き続き2次調査となる。当地は平安京右京四条四坊六町に相当し、前年度の調査では弥生時代末から古墳時代の溝が検出されている。今年度の調査もそれらに関連する遺構の検出が期待できた。

遺構・遺物 調査区の基本層序は、現代盛土層と耕作土層が0.5～0.6m、近世包含層の褐灰色粘土層が約0.2m堆積しており、その下層が遺構面となる黄灰色粘土である。

遺構密度は非常に低く、近世の耕作溝と弥生時代の溝を検出したのみで、平安時代の遺構は確認できなかった。弥生時代のSD25とSD26の2条を検出している。SD25は調査区北東部で検出した屈曲する溝で、東は調査区外となる。最大幅約2.8mで、北側が深さ0.6～0.7mと深いが、南側は0.2～0.3mと浅くなっている。形状的に自然の溝とは考えられず、方形周溝墓の可能性もある。SD26は調査区南西部で検出した溝で、北西から南東に重複して斜めに延長する。深さは約0.2mと浅く、底部は平坦になっている。これらの溝からは弥生土器片が出土しており、上層からは古墳時代の土師器や須恵器も少量ながら出土した。

小結 今回の調査では前年度と同様に、弥生時代の溝を確認したのみで平安時代の遺構は未検出に終わった。当地は平安京の西端に近く、平安時代においてどのような土地利用がなされていたのか、条坊の有無も含めて検討していく必要がある。また、弥生時代から古墳時代の溝の検出は、当地周辺に集落遺跡が存在することを示唆しており、下層遺構の実態解明も今後の課題である。

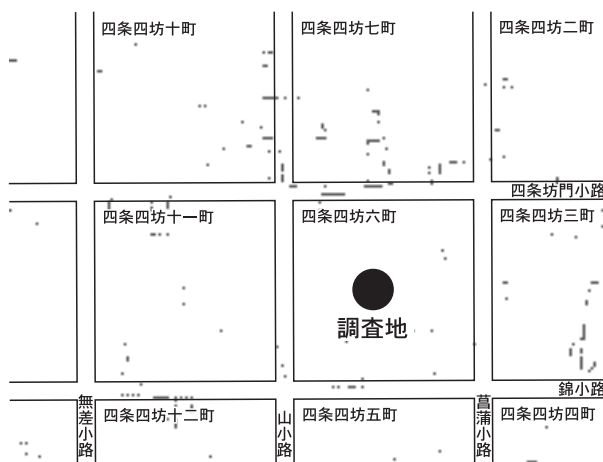


図135 調査位置図 (1 : 5,000)



図136 調査区配置図 (1 : 1,000)

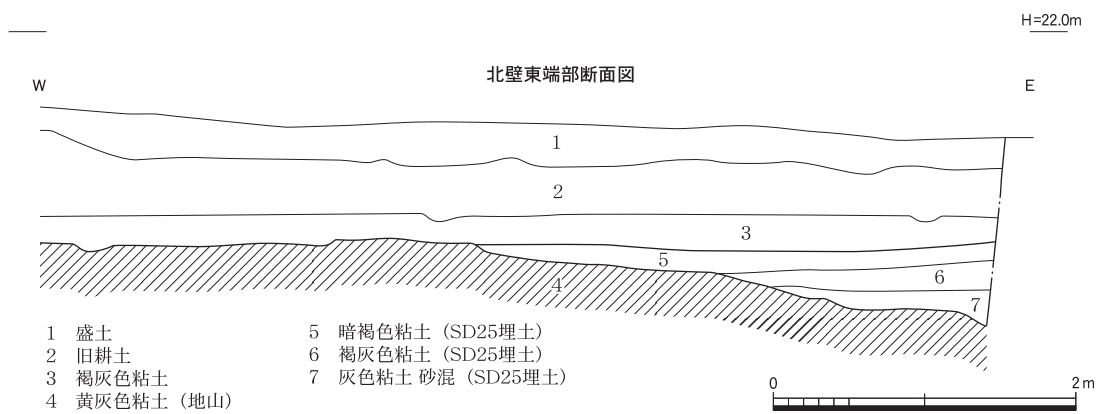
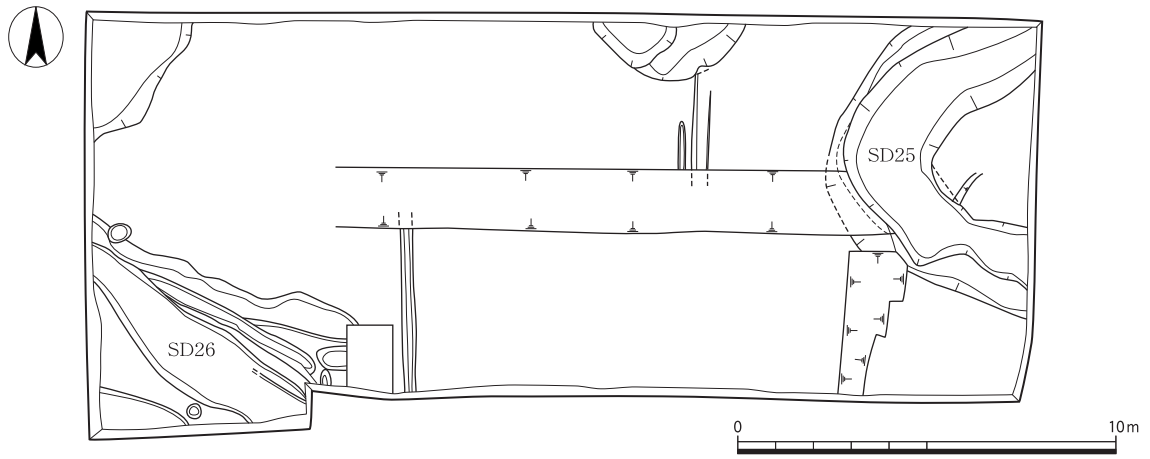


図137 遺構実測図 (1 : 200、1 : 50)



図138 調査区全景 (東から)

35 平安京右京五条二坊一町（図版15）

経過 京都市中京区壬生東土居ノ内町に所在する京都市立朱雀第七小学校の校舎が増築されることとなり、工事に伴い地下遺構が破壊される恐れが生じた。このため京都市文化観光局文化財保護課の指導により、発掘調査を担当することとなった。当該地は右京五条二坊一町にあたり、発掘調査では平安時代の遺構や遺物の発見が期待された。発掘調査に先だって試掘調査を行ったところ、地表下約0.8～0.9mで中世の耕土と思われる層がみられ、遺構の遺存状況が良好であることが想定できた。発掘調査は、まず機械力によって盛土を除去したのち、人力掘削に移り遺構面の検出を行った。

遺構 調査区内の基本層序は、厚さ約0.8～0.9mの盛土がみられ、盛土以下は、茶灰色砂泥層、灰色粘土層、黄灰色粘土層と続く。茶灰色砂泥層と灰色粘土層は中世の耕土と思われる、厚さ0.3～0.4mである。黄灰色粘土層は平安時代の遺構面で、調査区西半で厚さ約0.1mほど堆積し、平安時代前期の遺物を包含する。この黄灰色粘土層の下は、基盤層となる茶褐色砂礫層となる。

検出した主な遺構は、掘立柱建物（SB1）、落込み状遺構（SX2）、溝（SD3）などである。

SB1は調査区西半に位置する南北棟の建物で、東側に庇がつく。黄灰色粘土層上面で検出しているが、北端の柱穴は後述する落込み状遺構（SX2）の下層で検出した。梁間2間×桁行3間分を検出しており、北はさらに調査区外へ続く。柱穴は平面形がほぼ正方形かやや長方形を呈し、一辺約0.6～1.2m、深さ約0.6mを測る。身舎部分の柱穴に比べ、庇部分の柱穴は全体にやや小ぶりである。柱穴埋土は、黄灰色粘土と緑灰色粘土が混然としており、遺物はほとんどみられない。梁間部分の3個の柱穴と、桁行および梁間部分の南から3番目の柱穴にはそれぞれ柱根が残存していた。柱は柱穴の底に直接付くものと、柱穴内に粘土をやや埋め戻したあと柱を据え付けるものがある。各柱間の距離は、梁間が2.52m、桁行が2.45m、庇出柱間が2.75mを測る。

落込み状遺構（SX2）は調査区北西部で検出した遺構である。北と西は調査区外に展開しており規模は不明だが、東西長15.4m以上、南北幅3.8m以上で、緑灰色粘土が堆積し、深さは0.4～0.5

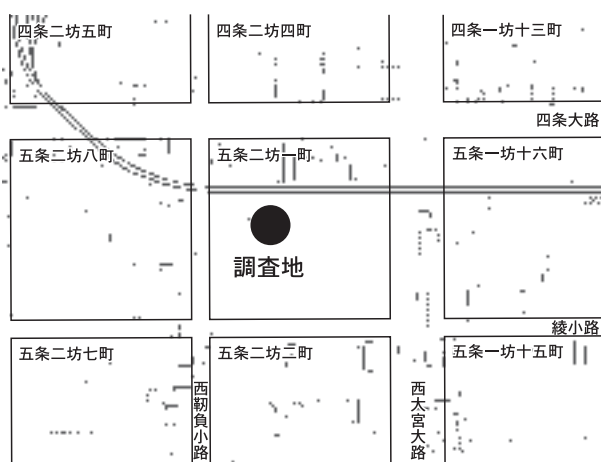


図139 調査位置図（1：5,000）

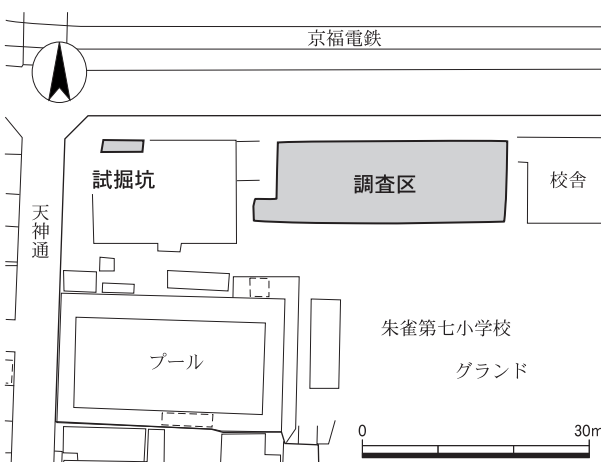


図140 調査区配置図（1：1,000）

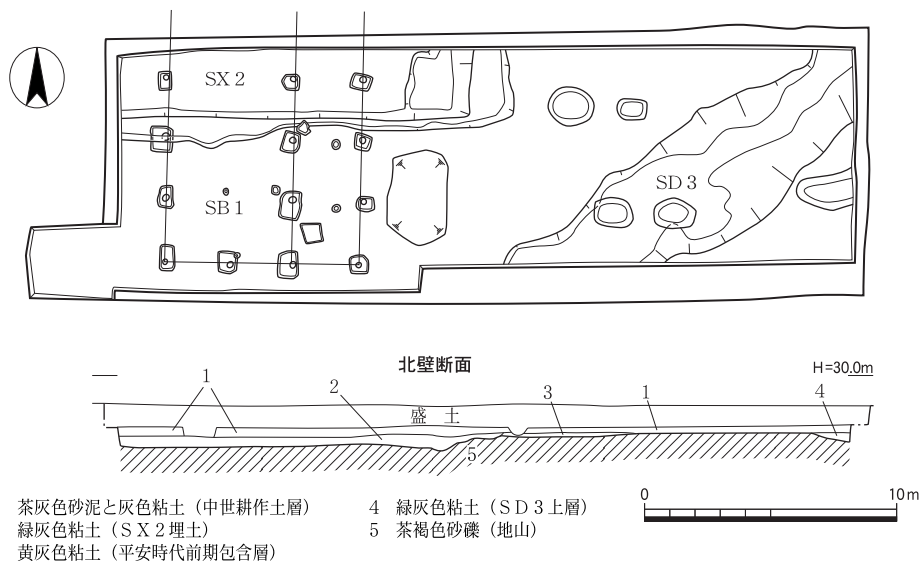


図141 遺構実測図（1：300）

mある。性格は不明だが宅地内を区画する溝状の施設である可能性もある。

SD 3は調査区北東隅より南西に向かって走る溝状の遺構である。溝幅は約3.5～5 m、検出面からの深さ約0.2～0.45mを測る。埋土は3層あり、上層が暗緑灰色粘土層、中層が黄灰色微砂層、下層が黒褐色粘土層である。層位関係から黄灰色粘土層より古い遺構で、古墳時代以前と考えられる。遺物は3層とも包含しない。

遺物 今回の調査で出土した遺物総量は、整理箱で11箱を数える。内容は石器（有舌尖頭器）、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、磁器、瓦などであり、大半が遺物包含層からの出土である。中でも、有舌尖頭器は長さ10cm、幅3.2cmで、調査区北東部で確認した落込みの埋土である緑灰色粘土層から出土している。縄文時代草創期の石器の出土例は、重要な発見といえる。



図142 有舌尖頭器

小結 平安京復元図によれば、今回の調査地である朱雀第七小学校は、北を四条大路、東を西大宮大路、南を綾小路、西を西靱負小路に囲まれた、右京五条二坊一町に該当している。今回の調査区は、この区画内における一部に過ぎないが、発見した掘立柱建物や落込み状遺構は、宅地割り及び建物の配置などを復元するうえで重要な発見と言えよう。なお、建物と落込み状遺構は層位関係および出土遺物より、平安時代前期から中期までの時期と考えられる。

36 平安京右京六条一坊三・四町（図版16・17）

経過 京都中央卸売市場敷地内の旧青果集荷場および五条通に面した駐車場の2箇所で調査を行った。行政区画では京都市中京区中堂寺南町である。今回、青果集荷場の新築が行われることになり、京都市文化観光局文化財保護課の指導のもと発掘調査を実施した。当該地は、平安京右京六条一坊にあたり、朱雀大路の西側溝および楊梅小路の路面、両側溝などが推定できる場所であった。当該地が含まれる六条一坊の三・四町の宅地の状況に

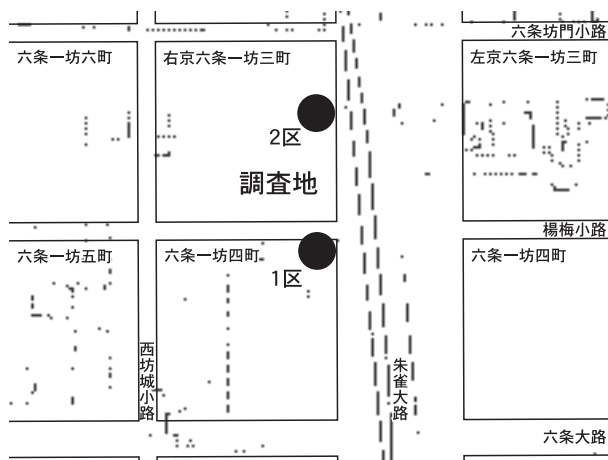


図143 調査位置図（1：5,000）

ついては今のところ不明な点が多いが、六条大路の南では、朱雀大路に面して鴻臚館が知られている。また中世以降は朱雀大路より西側はさびれて行くといわれているが、これまでの発掘調査により中世の遺構が現在の五条通を中心に数多く発見されている。発掘調査は、南の旧青果集荷場の調査区を1区、五条通に面した旧駐車場の調査区を2区として、1区から順次調査を行った。

遺構 調査区の基本層序は、コンクリート床を含め現代の盛土が約0.8m、その下に近世の耕土が約0.1mの厚さで堆積しており、これらをすべて除去した時点で基盤層である黄褐色泥砂あるいは赤褐色砂礫となり、この面で遺構を検出した。赤褐色砂礫は、この付近一帯に認められる層で厚く広範囲に分布しており、大きな流れ内の堆積と考えられる。黄褐色泥砂は、赤褐色砂礫の形成した谷状の部分に自然堆積したものと考えられる。

まず、1区で検出した溝、井戸、柱穴について概説する。溝SD1とSD2は、調査区東端で検出した南北溝である。重複して流れており、SD1が新しい。SD1は東肩が調査地外になるため全幅は不明であるが、幅1.2m以上、長さ23m以上、深さ0.3mである。堆積土はほぼ2層に分けられ、上層は暗茶灰色泥砂で土器、瓦などが多く出土した。下層は淡灰色粘土～灰色泥土で遺物の量は少ない。室町時代の中頃と推定

している。SD2は幅1.5～1.8m、長さ26m以上、深さ0.7mのほぼU字形の溝である。堆積土は大きく3層に分けられ、上層は茶灰色泥砂で小礫を混入する。瓦が多量に出土した層である。中層は暗灰色泥土で、大量の土師器皿と瓦器、輸入陶磁器が出土した。下層は褐灰色泥土で遺物

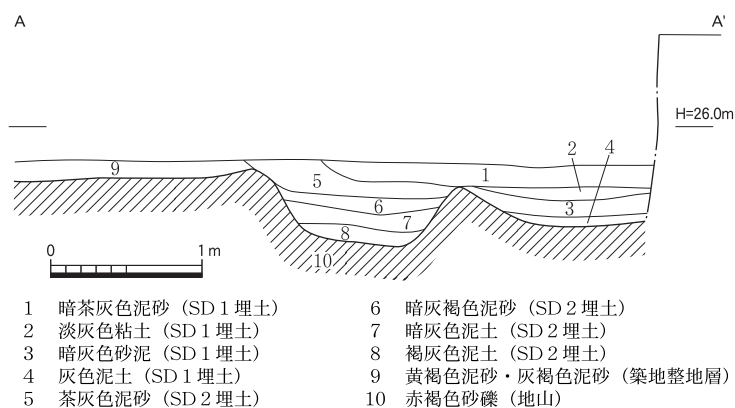


図144 1区SD1・2断面図（1：50）

の出土量は少ない。各層より出土した遺物に型式差はほとんど認められない。平安時代後期の溝と考えられる。

なお、SD 2 に平行して西側に4.1～4.3m幅で、長さ10mにわたり、厚さ10cm程の黄褐色泥砂と灰褐色泥砂の混在した層がみられ、層中より溝と同様の平安時代後期の土師器片、瓦などが少量出土している。溝と関連する築地整地層と思われる。

井戸SE 2 は調査区中央で検出した井戸で、方形の木枠を持ち、下部に2段に構成された曲物を据えている。掘形は径1.8mの円形、木枠は0.9×0.75mの方形、高さ0.9mが残る。上段の曲物が径0.45mの円形で高さ0.35m、下段の曲物が径0.35mの円形で高さ0.25m、下段の曲物の底まで深さ1.4mである。井戸枠内や掘形内から出土した遺物は室町時代中頃のものであり、出土した遺物にあまり型式差が認められないことから短期間で放棄されたものであろう。

調査区北端部では、隅丸方形の掘形で、礎板を持つ柱穴を2基検出した。東西の柱間は4.7mで、柱穴Aは0.9m×0.85m、深さ0.4m、柱穴Bは0.9m×0.1m、深さ0.6mである。柱穴Aでは50cm×22cm、厚さ8cmの長方形の板材

を十字形に2枚組み合せて礎板としており、柱穴Bでは基底部に柱穴Aと同様の板材を据え、その上に厚さ2～3cmの板を4枚積み重ねている。掘形内の遺物は極めて少なく時期を決め難いが、出土した土器片からは平安時代中期と推定される。検出できた柱穴は2基のみで、付近ではまったく検出できなかった。また、この地点には楊梅小路南築地が想定できることから、門に類する遺構とも考えられる。

次に2区では、中世の井戸と土壌を検出した他は、近世の土取穴が認められたのみであった。調査区南半には室町時代の整地層が残るが、それ以前の遺構や遺物は全くみられなかった。調査区全体が中世段階で大きく削平を受けているものと思われる。

井戸SE 3 は、調査区中央西寄りで検出した方形縦板組みの井戸である。2.6m×2.7mの方形の掘形内に約1.05m四方、深さ1.5mのほぼ正方形の木枠を持っており、木枠は長さ1.2m以上、幅0.3～

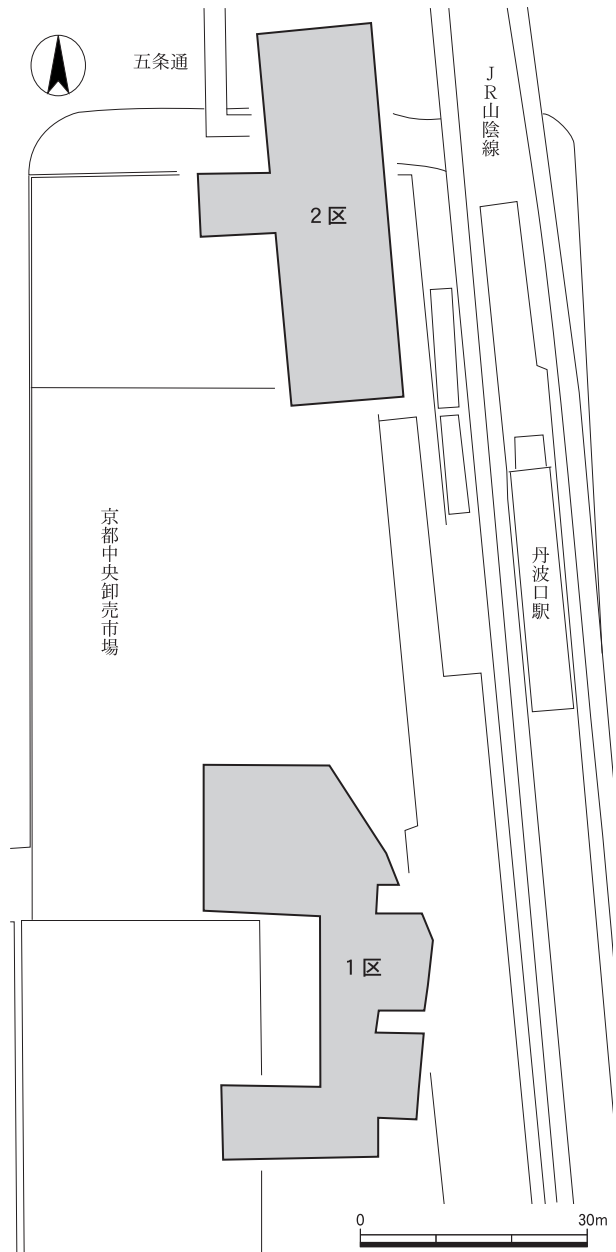


図145 調査区配置図 (1 : 1,000)

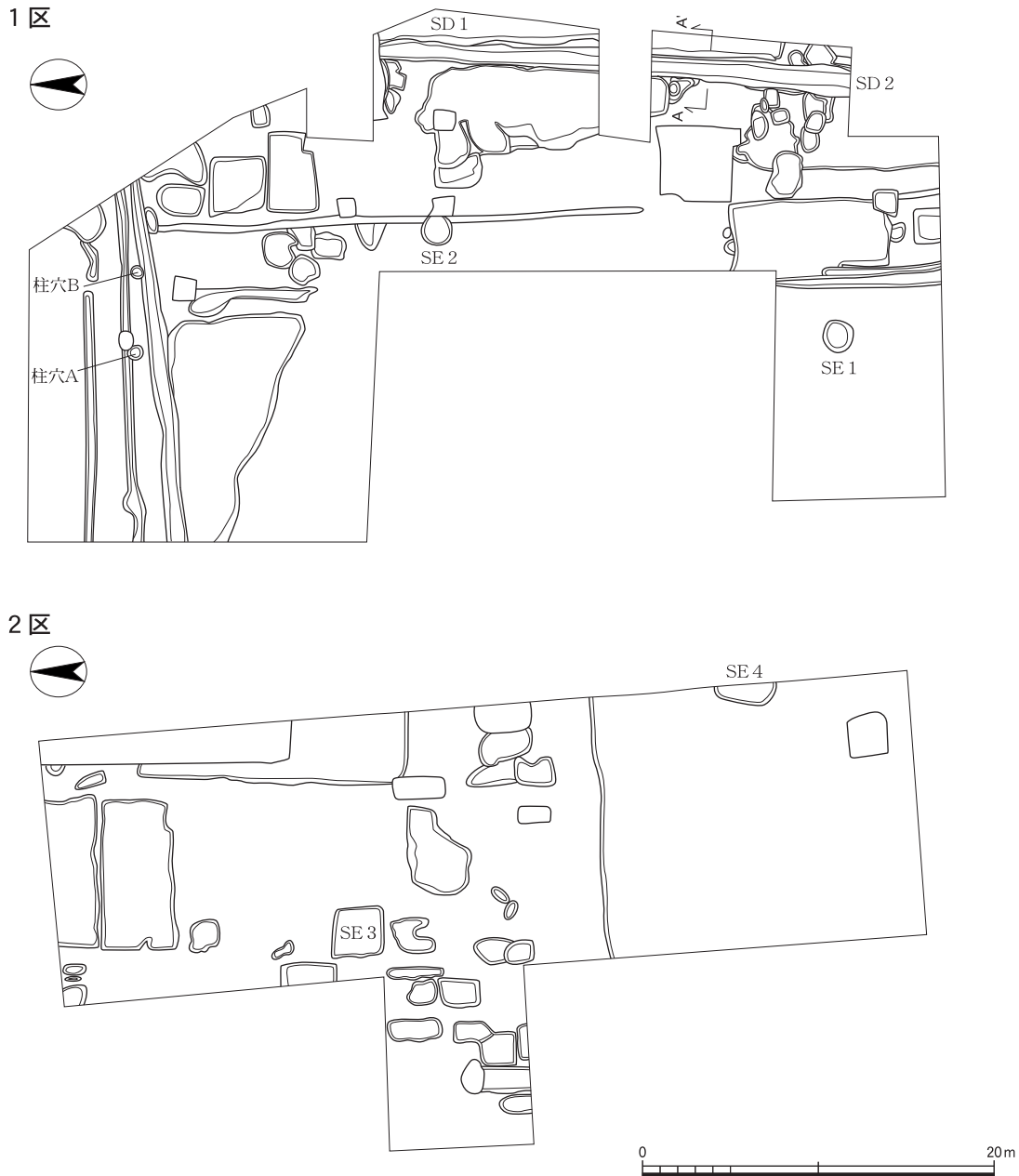


図146 遺構平面図（1：400）

0.4mの板材を縦に、一面につき3枚重ねて構成していた。木枠内側には側板を支える横棧が現状で3段組まれており、横棧の上下の間を井戸の各隅ごとに長さ0.3mの角材で支えるものである。また底部は赤褐色砂礫層を平らにならすだけで、曲物などの施設を持たない。井戸内の堆積土および掘形内からは室町時代と考えられる遺物が出土した。SE 4は調査区南東で検出した方形縦板組み井戸である。東半分が調査区外のため全体の規模は不明だが、SE 3と類似した構造をもつ。西側の一辺は幅1m、深さ1.2mであった。枠内より出土した遺物は室町時代のものである。

その他に、土壌や浅い落込み状の遺構がいくつかみられる。出土遺物から室町時代のものと江戸時代のものに大別できるが、何らかの施設として明確にできるものはなかった。

遺物 出土した遺物は瓦や土器類などで、整理箱にして84箱である。土器類には少量の弥生土

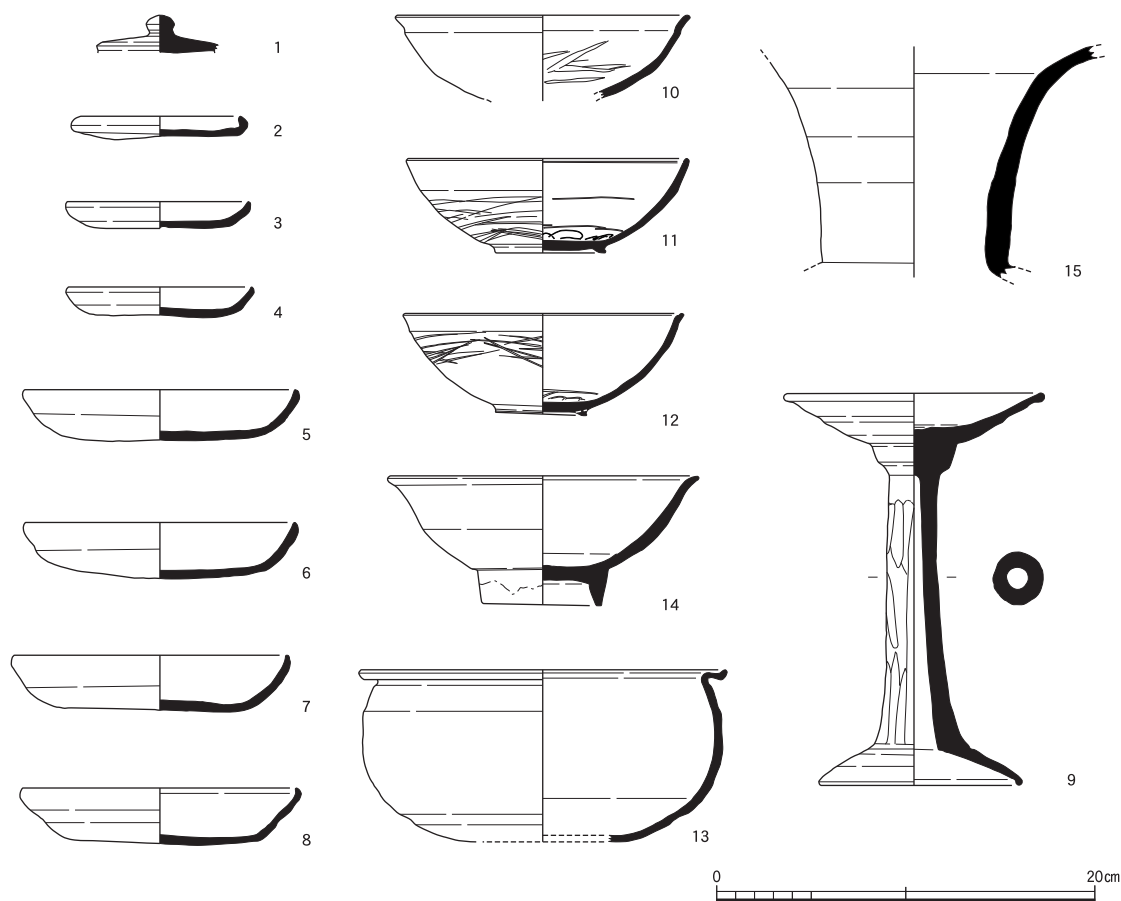


図147 SD2出土遺物実測図（1：4）

器片が含まれるが、大きく平安時代、室町時代、江戸時代の遺物に分けられる。これらの遺物のうち、朱雀大路に関連する溝と考えられるSD2から出土した遺物について図示している。(1)が灰釉陶器の蓋、(2～8)が土師器皿、(9)は白色土器高杯、(10～12)が瓦器碗、(13)は瓦器鍋、(14)が白磁碗、(15)は須恵器壺の頸部である。これらの土器群は平安時代後期のもので、溝の時期を示唆している。このほか、井戸群や包含層から室町時代の土師器や瓦器、陶器が出土しており、中世における生活痕跡を窺うことができる。

小結 今回の調査では、楊梅小路に関連する遺構は認められなかったが、朱雀大路の西側溝と考えられる溝を検出した。また他にも、平安時代の柱穴2基、室町時代の井戸と溝を検出している。これらについて若干の考察を加えてみたい。

1区で検出したSD2は、これまでの調査成果をもとにして作製した平安京条坊復元図によれば、朱雀大路西側溝の推定位置が今回検出の溝と一致している。また、SD2西側の帯状整地は築地の犬行と関連すると推定でき、この帯状部および溝の規模が『延喜式』に記される、溝広5尺と犬行幅1丈5尺にかなり近い値が得られることから、SD2を朱雀大路の西側溝と推定した。

しかし、朱雀大路西側溝と想定するのに否定的事実も存在する。つまり、平安京造営時の京の造営中心線がほぼ真北を有するという説をとればSD2の中心線は真北より東へ約2分ほどずれること、犬行と考えられる部分を良しとしても築地の痕跡がまったくみられなかったこと、平安京

造営時の溝である根拠が薄いという点である。

SD2から出土した遺物のうち、瓦は平安時代前期から後期のものがあるが、土器とくに土師器皿に関してはすべて平安時代後期に限られると言ってもよい。ただ、平安時代前期および中期のものも少量みられることから、平安時代後期までに溝の清掃あるいは掘りなおしが行われたことも充分考えられる。以上のように、SD2は朱雀大路の西側溝とは断言しがたいが、可能性のひとつとしておきたい。

また、1・2区で検出した室町時代の3基の井戸は、他に関連する遺構を検出することはできなかったが、出土土器群とともに確実に生活痕跡を示すものである。これまでの付近の調査で見つかっている室町時代の各種の遺構を考えると、この地域は広く生活の場として栄えていたことがわかる。しかし、近世の遺構・遺物は少なく、次第に村落から田畑に変わっていったことが想定できる。

37 平安京右京六条二坊七町 (図版18)

経過 京都市立病院の敷地北側、看護婦短期大学の東側において、診断棟が新たに建設されることになった。当敷地内では、過去の調査で平安時代の遺構が良好に遺存していることが判明しており、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。調査地は平安京右京六条二坊七町の北東隅部に相当し、西鞆負小路と樋口小路の交差点の検出が期待できた。そのため、条坊遺構の検出を主な目的として調査を行った。

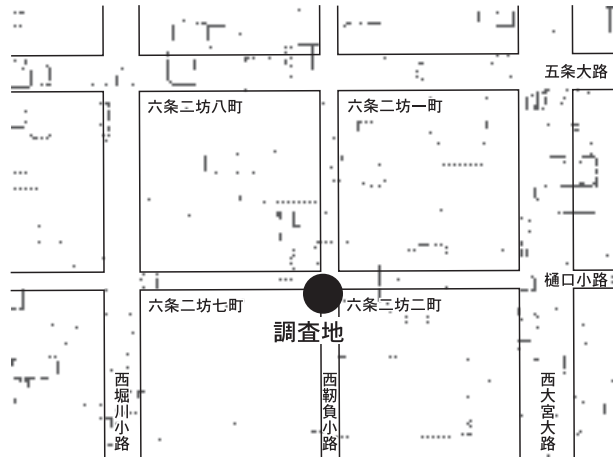


図148 調査位置図 (1:5,000)

遺構 発掘調査は東西に3箇所の調査区を設定し、東から1区・2区・3区として順次調査を進めた。調査区の基本層序は、現代の盛土や炭殻などが0.7~1 m、その下に近代の耕土が約0.2m

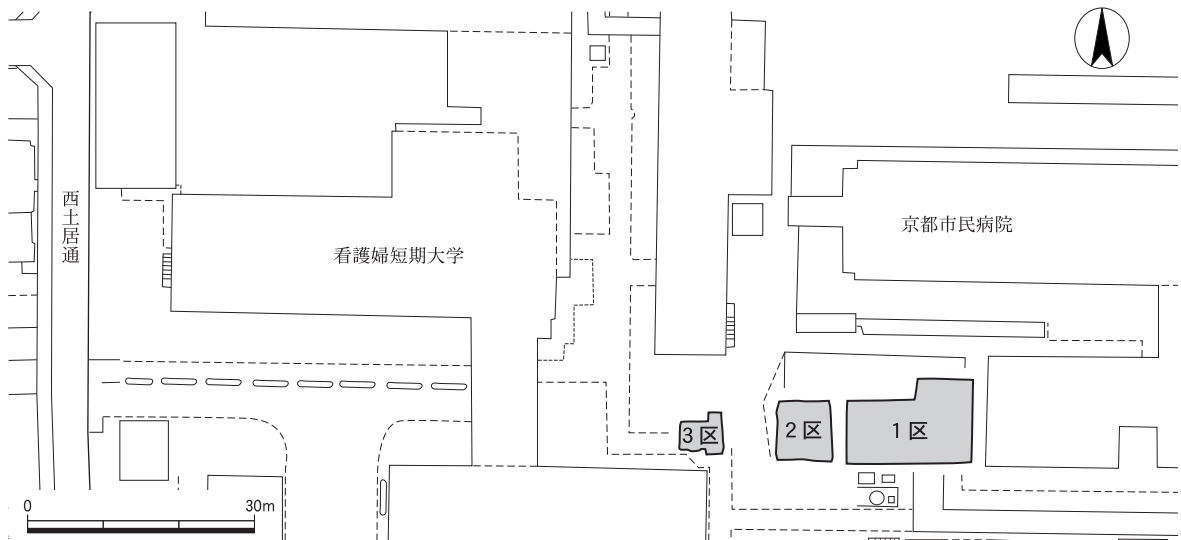


図149 調査区配置図 (1:1,000)

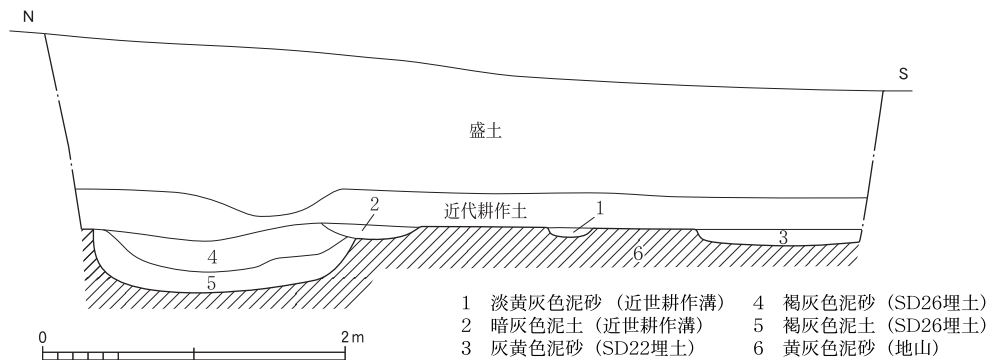


図150 3区東壁断面図 (1:50)

の厚さで堆積しており、これらをすべて除去した時点で基盤層である黄灰色泥砂となる。平安時代の遺構は、この基盤層上で検出した。

検出した遺構は、1区で西靱負小路の西側溝 (SD28) および東側溝 (SD30・31) を検出し、1区西端部から3区にかけて樋口小路南側溝 (SD26) を確認した。また、2区から3区にかけて樋口小路南築地の内溝と考えられる東西溝 (SD22) を検出している。これらの条坊関連遺構について順次概要を報告する。

まず、西靱負小路西側溝であるSD28は、幅約1.2mで北端は幅約1.5mと広くなり、調査区中央で途切れる。検出した長さは5.3m以上で、南は調査区外に展開する。深さは0.1~0.15mと浅く、北から南へ緩やかに傾斜している。西靱負小路東側溝は、該当する場所で南北溝SD30とSD31を検出した。ともに南は調査区外に展開する。SD30は幅約1.5mの西側の溝で、SD28とほぼ同じ東西ラインで北端が途切れる。深さ0.15~0.3mであるが、SD28とは逆に南から北に向かって傾斜する。SD31はSD30の東に隣接する南北溝で、幅1~1.2m、深さ0.25~0.3m、現状では溝の中央部が浅くなっている。

これらSD28とSD30・31との間が西靱負小路の路面となるが、近世以降の耕作溝や井戸などを検出するのみで、路面上の敷設についての資料は得られなかった。

また、SD28とSD30が途切れる位置から北側が樋口小路との交差点と考えられる。攪乱のために明確ではないが、SD31の北側に延長した位置でSD32を確認している。この溝がSD31に接続するならば、西靱負小路東側溝は樋口小路路面を南北に縦断していた時期があったことになる。ただ、SD32の底部高はSD31の底部高よりも低く、流水の方向に問題が残っている。

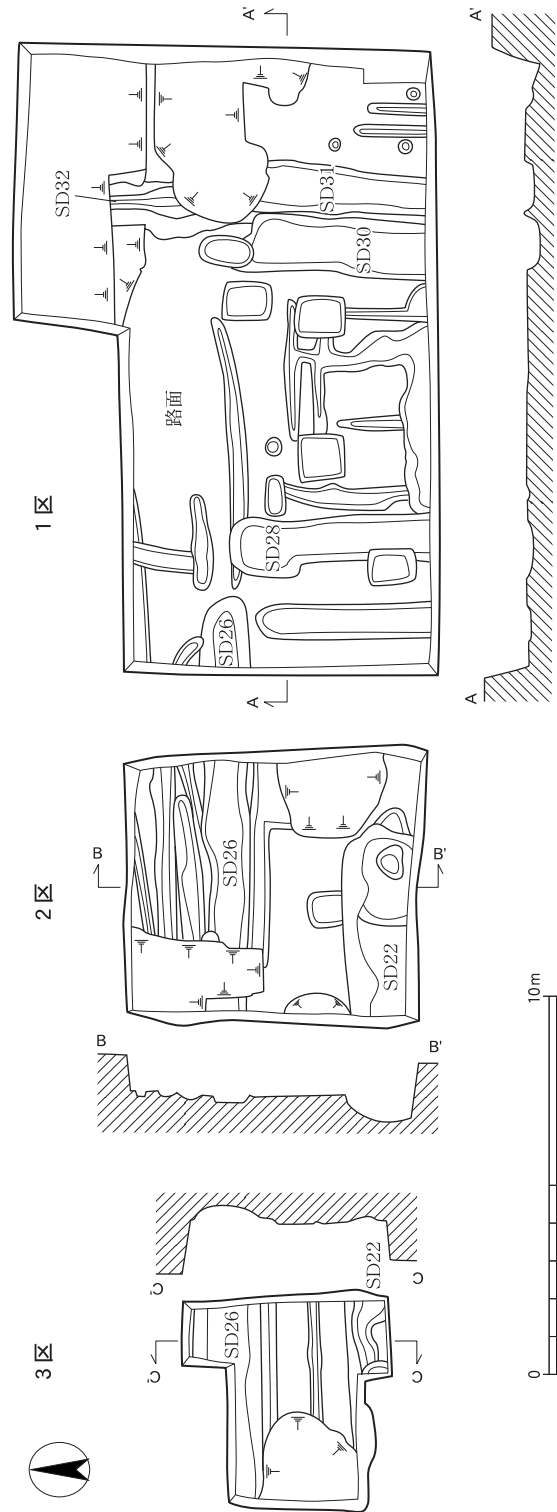


図151 遺構実測図 (1:200)

次に、樋口小路南側溝として東西溝SD26を長さ24m弱にわたって検出した。東端は1区SD28の北端部に接するように途切れており、西端は3区の調査区外に展開する。幅1.2～1.7mで、底部に凹凸がみられるが基本的には東から西へと傾斜し、3区では最大0.4mほどの深さをもっている。また、2・3区ではSD26の南にSD22を16m以上にわたって検出した。南肩は調査区外となるため規模は不明だが、2区では東端部で最大約0.7mと深くなっており、幅広い土壌状になると考えられる。なお、SD26の南肩とSD22の北肩は2.5m前後になっており、ここに樋口小路南築地が存在したと想定できる。

遺物 樋口小路南築地の内溝と考えられるSD22から、平安時代前期の土器群が多量に出土しており、良好な一括資料となっている（図152・153）。これらが出土した場所は、七町域の北東隅宅地内にあたっており、七町に所在した宅地から廃棄されたと考えられる。これらの土器群はSD22の堆積層でも下層から集中して出土した。器種は土師器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器、輸入陶磁器と多彩であり、七町の宅地の性格を示唆している。

土師器は供膳形態として皿（1・2・10～13）、杯A（3～9・14～29）、杯B（30～32）、高杯、煮沸形態として甕（33～36）が出土したが、杯Aの出土が非常に目立つ。杯皿類の外面調整はヘラケズリ調整のもの（10・11・14～21）とオサエ未調整のもの（12・13・22～29）がほぼ同じ比率で認められるが、層位的に最下層から出土した杯皿類（1～9）は、外面調整がほとんどヘラケズリであった。杯Bも外面調整はヘラケズリで、短くやや外側に踏ん張った高台を貼り付ける。これら供膳形態の器は口径の差から、それぞれ大小二つのグループに分けることが可能である。煮沸形態の甕も、口径約13cmの小型甕（33）から口径約25cmのもの（36）まで様々である。

黒色土器は、内面を黒色化した黒色土器A類がほとんどである。杯（37・38）、大型椀（39・40）、甕（41・42）が出土しているが、内外面を黒色化した小型壺（43）が1点出土している。

緑釉陶器の出土も目立つ。皿（44～48）、小型椀（49）、椀（50～53）、大型椀（54～57）と多彩で、底部は小型椀を除き削り出し平高台となっており、平安京近郊産のものである。それに対し、灰釉陶器は非常に少なく、図示したものは段皿（58）と椀（59）である。ともに、高台は断面方形の短い貼り付け高台である。なお、輸入白磁椀（60）が1点出土しており注目できる。

須恵器は蓋（61～63）、杯A（65～67）、杯B（64）、鉢（68～70）、瓶子（71）、壺、甕（72・73）などが出土した。とくに、頸部が欠損した瓶子（71）は最下層から出土である。また、大型長胴甕（72）と大型甕（73）がほぼ完形で出土しており、これらの土器群の特殊性を示している。

小結 今回の調査で、西鞆負小路と樋口小路に関連する条坊側溝を良好な状態で検出できたことは大きな成果である。とくに、西鞆負小路東側溝は樋口小路路面を南北に縦断していた時期があり、排水システムにおける南北路の優位性を確認することができたのは大きな成果である。また、七町域では樋口小路南築地内溝から平安時代前期の土器が多量に出土し、今後の平安京土器編年に重要な資料を提示できたといえる。ただ、これらの土器群を廃棄した七町域の宅地の様相はまったく把握できておらず、今後の課題として残されたといえよう。調査地周辺は平安時代の遺構が非常に良好に遺存していることから、今後の調査の進展に期待したい。

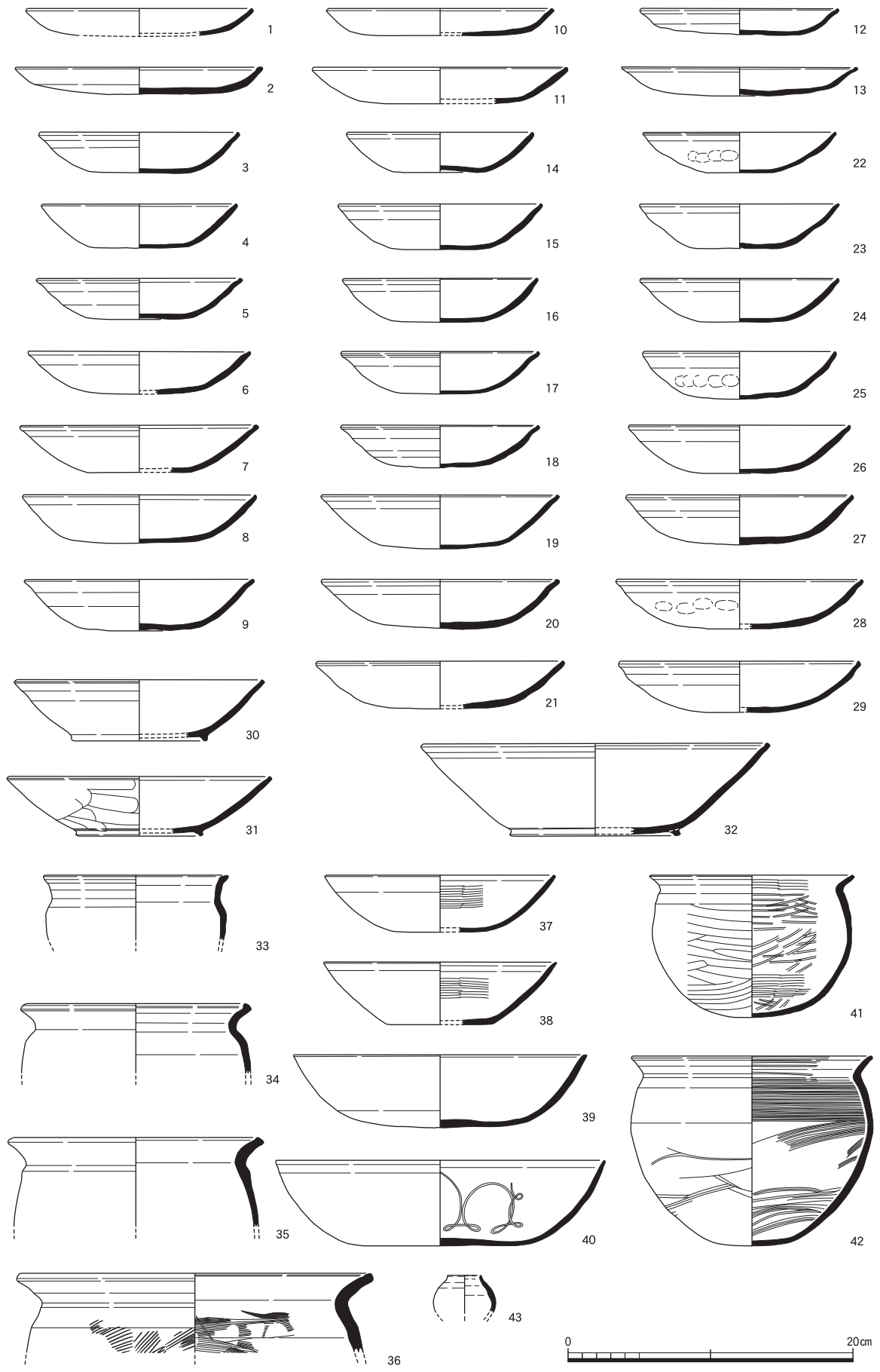


图152 SD22出土土器实测图1 (1 : 4)

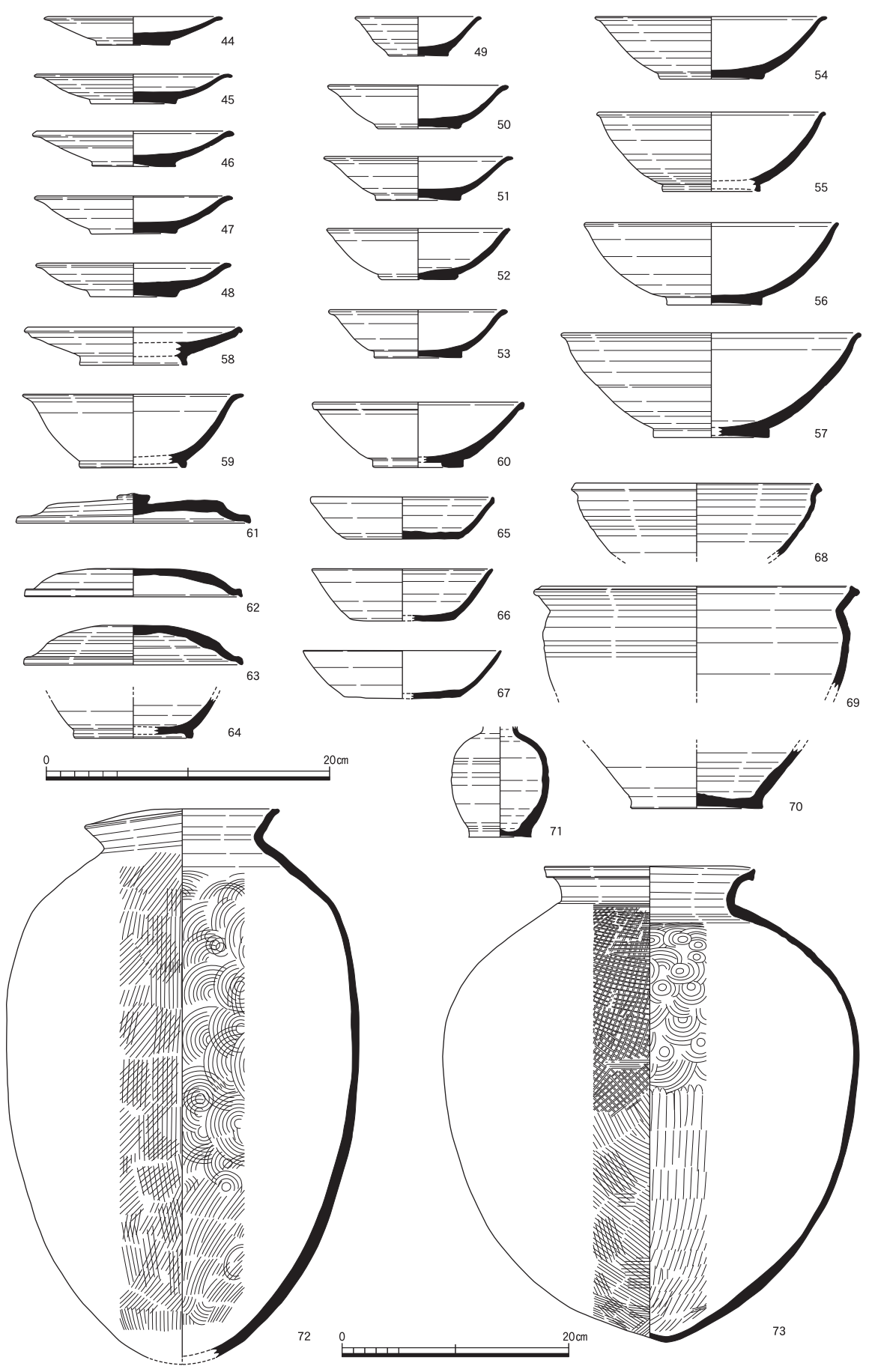


图153 SD22出土土器实测图2 (1:4、1:5)

38 平安京右京六条二坊八町

経過 京都市立病院の北側に隣接する朱雀第七保育所において、建物の増築が計画されたため、工事に先立って発掘調査を実施することになった。調査地は平安京右京六条二坊八町に相当し、南の七町域で平安時代の遺物が多く出土することから、当町においても平安時代の遺構の存在が推定できた。

遺構・遺物 調査区の基本層序は、現代の盛土と近世の耕作土層を除去すると、地表下約1.1mで基盤層である黄褐色粘土層となる。遺構はこの基盤層上で検出したが、遺構密度は非常に低く、中世以降の小溝や落込みなどを確認したのみで平安時代に遡る遺構は発見できなかった。出土遺物も非常に少なく、遺構検出中に土師器や陶器・磁器が少量出土したに過ぎない状況であった。

小結 今回の調査では、調査前の期待に反して平安時代の遺構はまったく検出できなかった。ただ、南の市立病院敷地内では平安時代前期に遡る遺構・遺物を多く検出しており、今後も引き続き周辺域での発掘調査を実施する必要がある。

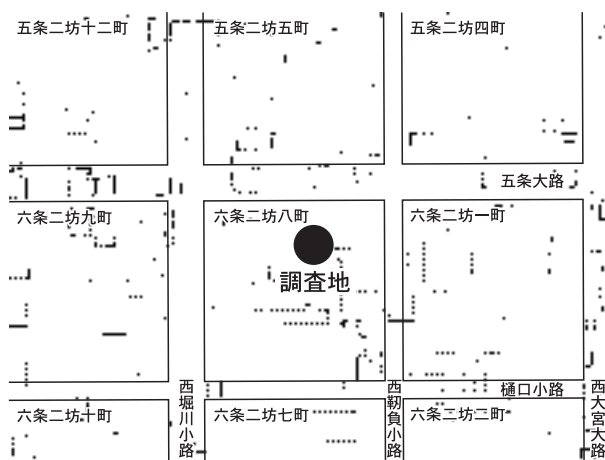


図154 調査位置図 (1 : 5,000)

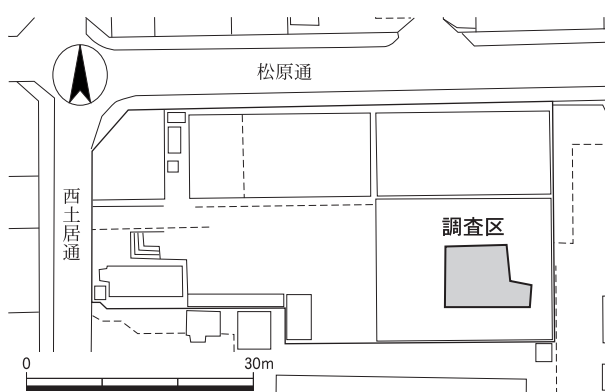


図155 調査区配置図 (1 : 1,000)



図156 調査区全景 (北から)

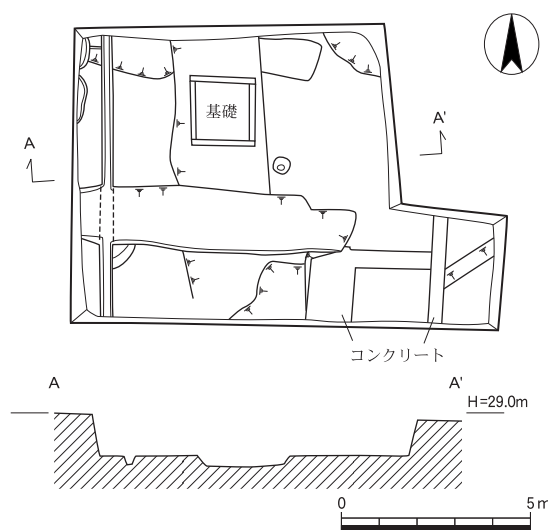


図157 遺構実測図 (1 : 200)

39 平安京右京八条二坊一町 (図版19)

経過 医療法人健康会は、京都市下京区西七条南中野町の敷地に南病院中棟を建設することになった。当地は平安京右京八条二坊一町にあたり、また平安京南西周辺に形成された市町の推定地であるため、京都市文化観光局文化財保護課は事前に試掘調査を行い遺構の遺存状態を調べることになった。調査の結果、柱穴などが多数検出され、京都市文化観光局文化財保護課の指導により、発掘調査を行うことになった。調査区は南北18m、東西6mに設定した。

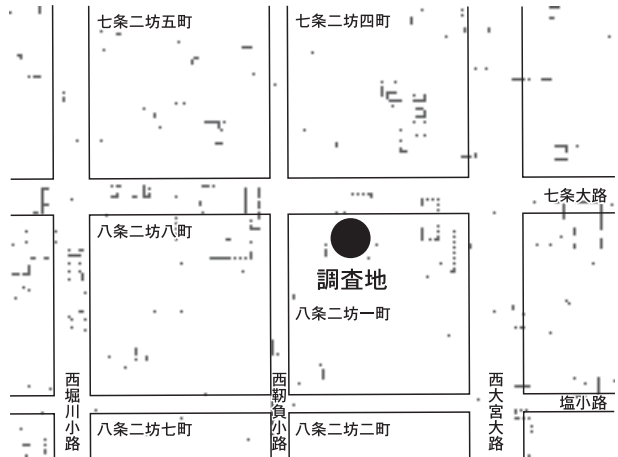


図158 調査位置図 (1 : 5,000)

遺構 調査区の基本層序は、上から現代層、暗褐色泥砂層、暗灰褐色泥砂層、黄褐色粘土層の順に堆積している。黄褐色粘土層以下は無遺物層であったため地山と思われる。暗褐色泥砂層は近世、暗灰褐色泥砂層は中世の遺物を包含していた。平安時代の包含層としては明確な土層は認められなかったが、部分的に黄褐色粘土層上面の凹みに砂っぽい茶灰色泥砂層が薄く堆積し、平安時代の遺物が混入していた。

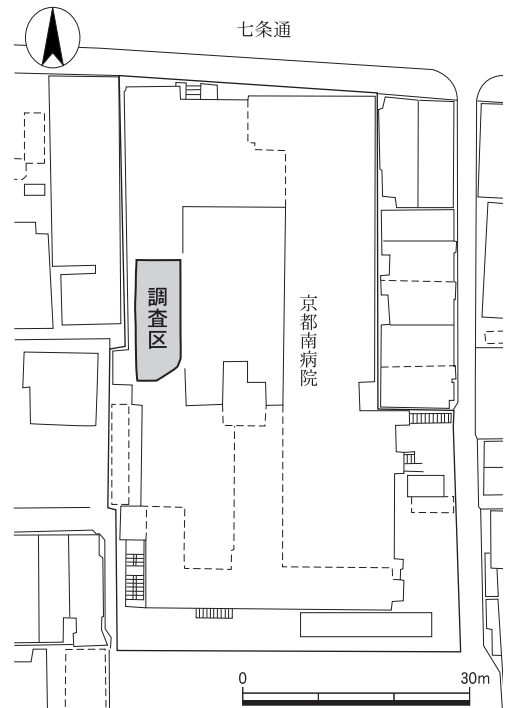


図159 調査区配置図 (1 : 1,000)

検出した遺構は井戸、溝、土壇、柱穴群などで、平安時代から江戸時代の遺構を確認した。平安時代の遺構としては井戸 (SE3) と柱穴などを検出した。SE3は、前期に属し、柱穴などは中期以降のものである。この井戸と同一時期の遺構は他には検出できなかった。中世の遺構は柱穴と土壇を検出した。これら中世以前の遺構について概観する。

SE3は一辺約1.1mの方形縦板組みの井戸である。掘形は南北約2.1mで、東西は西側が調査区外となるが2mほどであろう。四隅に角柱を立てて横棧を組み、0.15~0.2mの縦板を一辺に6枚並べていた。横棧は現状で2段残存しており、深さは約1.6mであった。検出状態では南側の側板が北へ倒れこんでおり、その上に土器などが破棄された状態をかたまって出土した。最下層では曲物4個、須恵器が口を上にした状態で検出された。また、倒れた側板を境に遺物を上層と下層に分けたが、時期的な差は認められなかった。土器類の他に、木製品、金属製品、種子などが出土した。

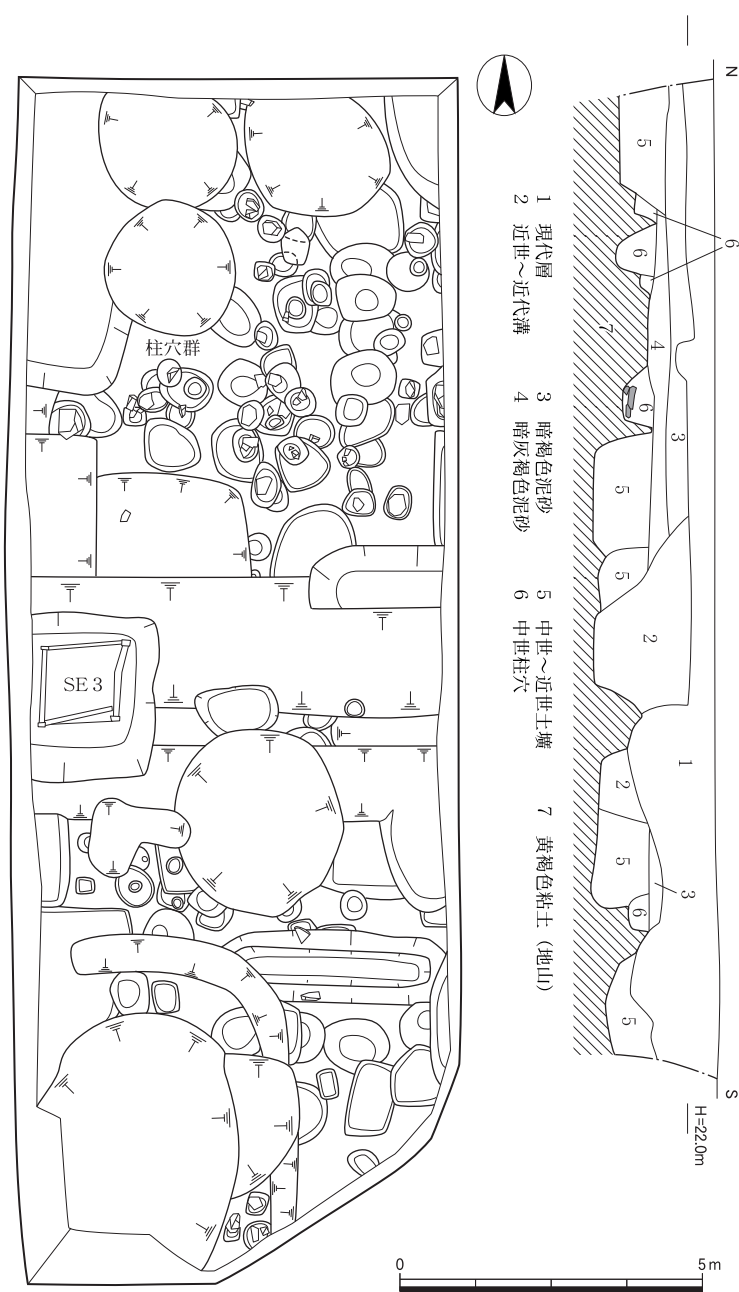


図160 遺構実測図 (1:100)

鎌倉時代から室町時代の遺構は、柱穴群と土壇である。柱穴群は、調査区の北半で集中して検出した。径約40~50cmのもので根石を据えたものとなないものがある。どのような建物になるのかについては不明である。土壇は平面形が長方形や楕円形などがあり、その性格については不明である。室町時代の遺構は量的には少ない。

遺物 遺物は整理箱にして62箱出土した。土師器、瓦類、陶磁器、木製品、金属製品などで、大半は中世から近世である。また、平安時代の良好な一括資料としてSE3の出土遺物がある。これらを図示し概説する。

土師器は杯が主体で、外面調整にヘラケズリを行うもの(1・2)とオサエ未調整のもの(3~6)が混在する。黒色土器はA類の椀(7)が出土している。外面はヘラケズリ後に粗いヘラミガキを施し、内面は非常に丁寧なヘラミガキで暗文が

底部と側面に4箇所認められる。須恵器は蓋(8)、杯B(9・10)、広口壺(11)、短頸壺蓋(12)、瓶子(13)などで、杯B(10)底部外面には墨書が施される。緑釉陶器は軟陶系の耳皿(14)と椀(15)がみられる。ともに、平安京北郊産と考えられる。このほか、曲物(16・17)、丸軀裏金具(18)、刀子(19)、銅銭(降平永寶・富寿神寶)、鉄製鋤の刃先、斎串、櫛、布切れ片、種子などが出土した。平安時代前期の多彩な遺物群といえる。

小結 平安京西市は七条坊門小路南、七条大路北、西堀川小路東、西大宮大路西にあった。今回の調査地は七条通をはさんでその南に位置するが、南西周辺に形成された市町の一角に当調査地があたり、調査によって西市が機能していた時期の井戸を検出した。井戸は近世溝によって上部を削平されていたが、土器類、木製品、金属製品、種子などが多く出土し、当時の日常生活を

知る良好な資料を得た。また、中世の柱穴を多数検出したことから、西市の衰退後しばらくして居住地として利用されていたことが明らかになった。

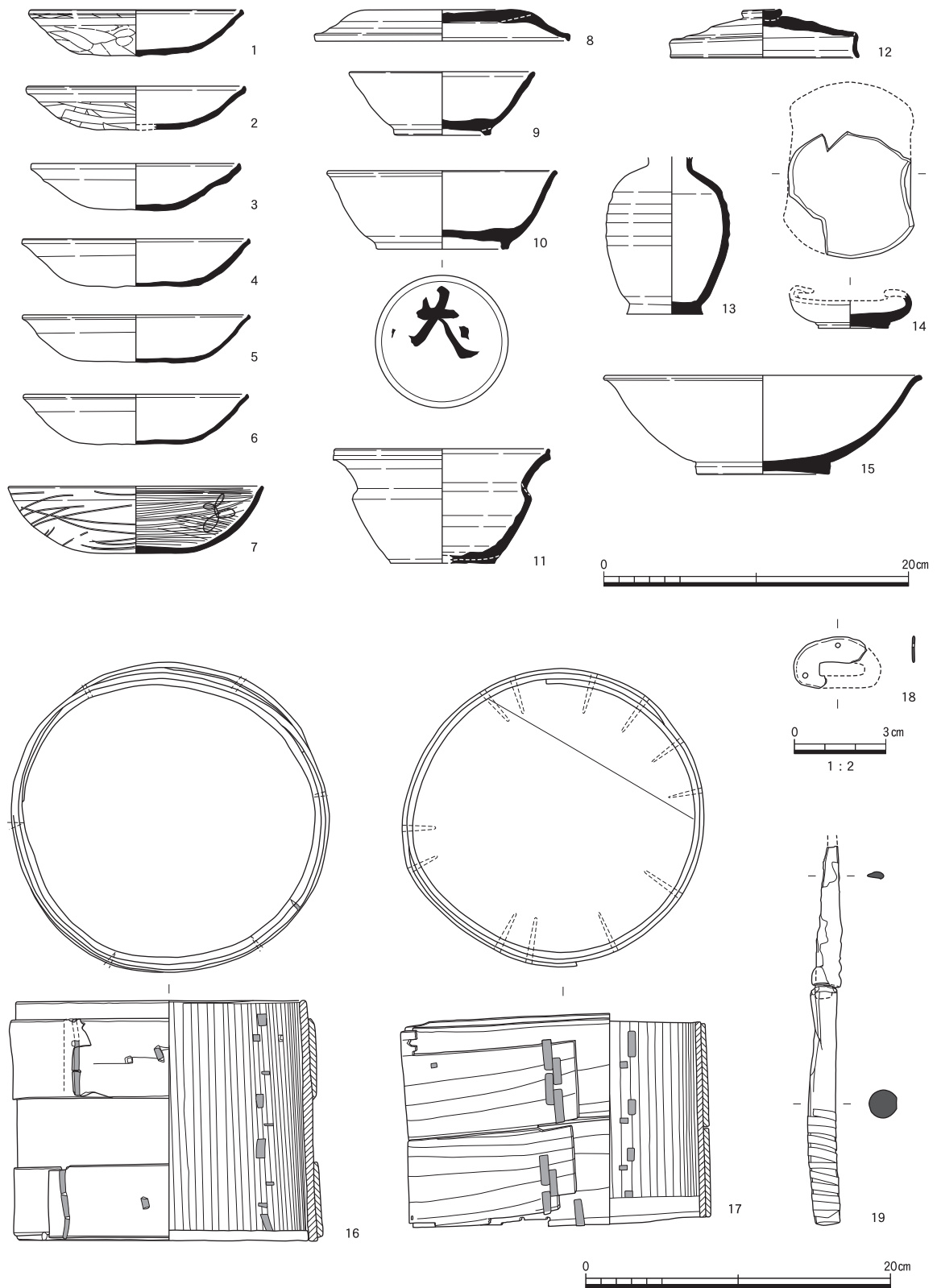


図161 SE 3 出土遺物実測図 (1 : 2、1 : 4)

40 平安京右京九条一坊十町（図版20）

経過 京都市立八条中学校において、校舎の改築工事が計画されたため、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。当地は平安京右京九条一坊十町にあたり、西寺の主要伽藍の北東にあたる。この地は西寺に関連する諸施設が存在したと考えられるが、これまで発掘調査が実施されたことがなく、東寺諸院の復元を参考に推定するにすぎなかった。今回の発掘調査では、これら西寺諸院の様相を明らかにすることを目的として調査を行った。

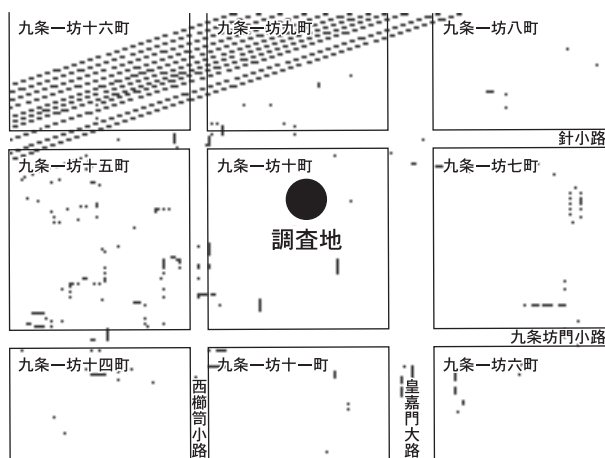


図162 調査位置図（1：5,000）

遺構 調査区の基本層序は、地表下0.3~0.4mまでが盛土および耕作土、その下層が中世包含層の茶褐色砂泥層で、それらを除去すると地表下0.5~0.6mで平安時代の遺構面となる。また、平安時代の遺構は基本的には基盤層の暗茶褐色泥砂上で検出したが、下層には弥生時代中期の大溝や土壟などがあるため、下層遺構の窪みを暗茶褐色炭混砂泥で整地して遺構面を形成している。弥生時代の大溝底部は地表下から約1.5mの深さをもっている。

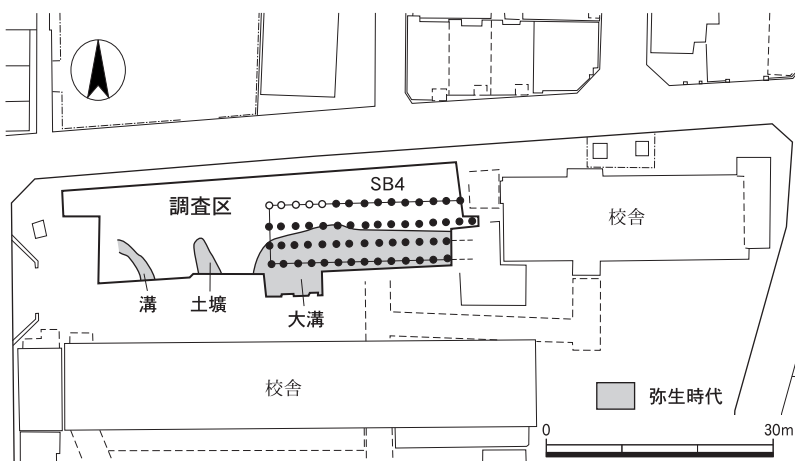


図163 調査区および遺構配置図（1：1,000）

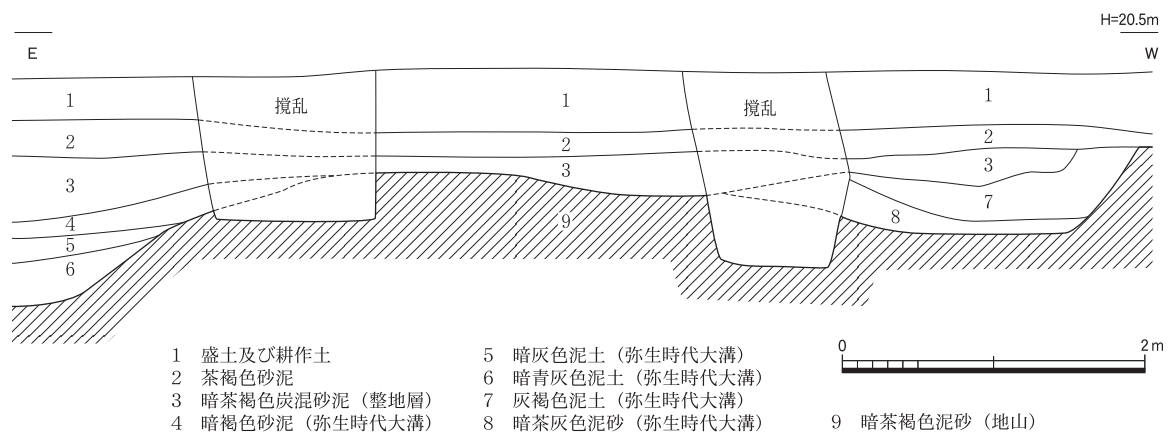


図164 南壁西半部断面図（1：50）

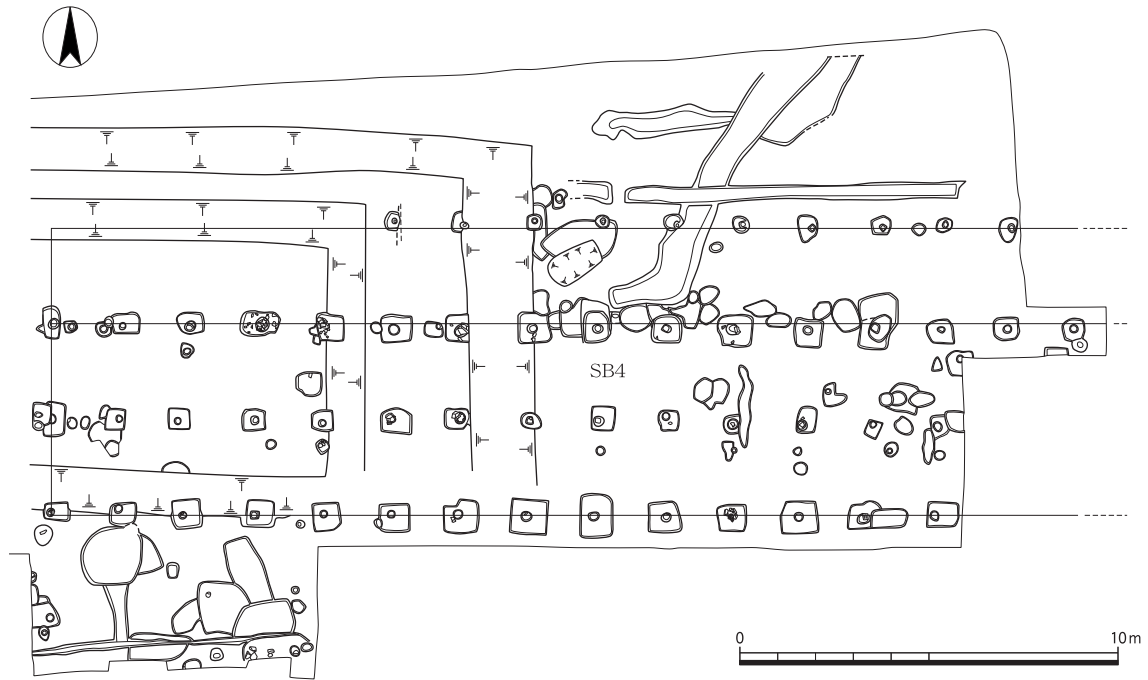


図165 調査区東半部遺構平面図 (1:200)

遺構は弥生時代遺構面、平安時代遺構面、室町時代遺構面の3面を確認した。弥生時代の遺構は、東西方向の大溝、土壇、溝などで、弥生時代中期の遺物を包含している。このうち大溝は調査区南東で検出した東西方向に長い落込みで、東と南肩は調査区外となる。南北幅は9m以上、西側は調査区中央付近で途切れる。深さは検出面から0.9~1mである。

平安時代の遺構としては、梁間3間×桁行15間以上となる細長い東西方向の掘立柱建物SB4を検出している。総柱構造であるが、北側柱列の柱穴は他の柱穴よりも一回り小さく、北側1間が庇になると考えられる。柱間隔は身舎梁間が2.4~2.5m、桁行が約1.8mで、北庇の出が約2.7mである。柱穴は身舎部分で一辺1m前後の方形を呈し、直径0.2m程度の柱痕を残すものもあった。庇柱穴は長径0.4~0.5mほどの円形に近い隅丸方形で、やや小さい。身舎内の柱穴は東柱と考えられることから、床貼り構造であったと推定できる。また、北側柱の北約0.8mの位置で、幅約0.4mほどの東西溝を検出しており、建物に関連する可能性がある。

このほか、中世遺構面で3棟分の建物柱穴および井戸2基を検出しており、室町時代には居住域として利用されていたことが判明した。

遺物 遺物の出土量は非常に多く、整理箱にして180箱出土している。内容は弥生土器と古式土師器、平安時代の土器類・瓦類・鞆羽口、室町時代の土器類などである。とくに



図166 瓦屋銘軒平瓦

平安時代の瓦類は西寺所用瓦と同じであり、軒平瓦には下外区珠文間に「土」「□松瓦屋」と読める銘文を陽出したものが出土している。平安時代の造瓦体制を考えるうえで重要な資料である。土器類は土師器・須恵器の他に緑釉陶器が目立って出土しており、緑釉獣脚や円面硯・風字硯も認められる。

小結 今回の調査で、西寺諸院に関わる建物遺構を初めて検出できたのは大きな成果といえる。東寺の北側には倉垣院や太衆院などが存在したことが推定されており、八条中学校敷地内で発見した長大な建物も、同様な施設に付属する建物であることは明らかである。また、鞆羽口が出土することから、寺院付属工房が周辺に所在した可能性もある。西寺諸院の発掘調査は始まったばかりであり、今後調査を継続して行うことによって、その実態を明らかにしていく必要がある。

41 平安京右京九条一坊・西寺跡 1

経過 本調査は、唐橋小学校校舎改築工事に伴うもので、当地は推定平安京西寺東回廊・東僧房にあたるため、調査を実施した。西寺境内調査14次調査である。

調査区は4箇所あり、東僧房跡にA区（南北6.5m、東西5.5m）、軒廊部にB区（一辺5m）、C区（南北5m、東西7.5m）、東回廊にD区（東西2.5m、幅約1m2本）の調査区を設定した。手掘りで近現代層を掘削し、その後遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。部分的に断割りを行い、土層を確認した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層（0.3m）、第2層黒色土層（耕土：0.05m）、第3層淡黄褐色粘質土層（約0.1m）、第4層灰褐色砂質土層（地山）である。第4層上面で遺構を検出した。検出した遺構は、瓦溜、礎石据付け穴、溝、石列、礎石などがある。

A区南部から西側にかけて、瓦溜SK1を検出した。不定形で、深さは0.05～0.1mで瓦と焼土が堆積する。SK1を取り除いて、中央で礎石据付け穴2基、その西側約2mで南北溝SD2を検出した。礎石据付け穴は南北に並び間隔は3.5mである。掘形は径1.2m、深約0.1mで、根石を据える。SD2は断面U字型で、幅1.8m、深0.3m、埋土は上層暗灰色泥土、下層茶褐色泥土で瓦を多く含む。

C区西端で、石列を検出した。掘形は幅1.4m、深0.2mで、凝灰岩（幅0.35m、厚さ0.1m）2個東西に並べる。石列の北側では第4層上面で淡黄褐色粘質土が残存し、基壇土と推定できる。ま

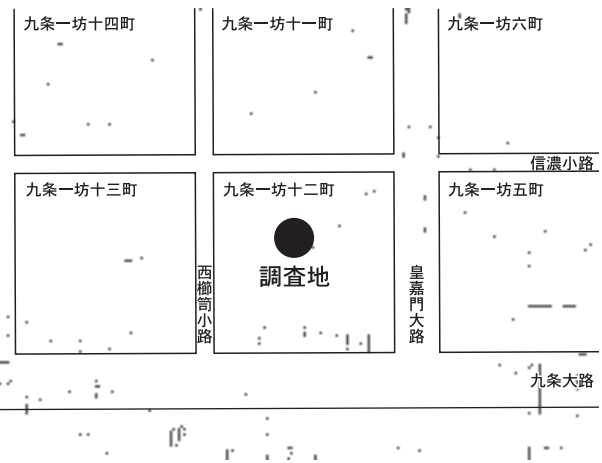


図167 調査位置図（1：5,000）

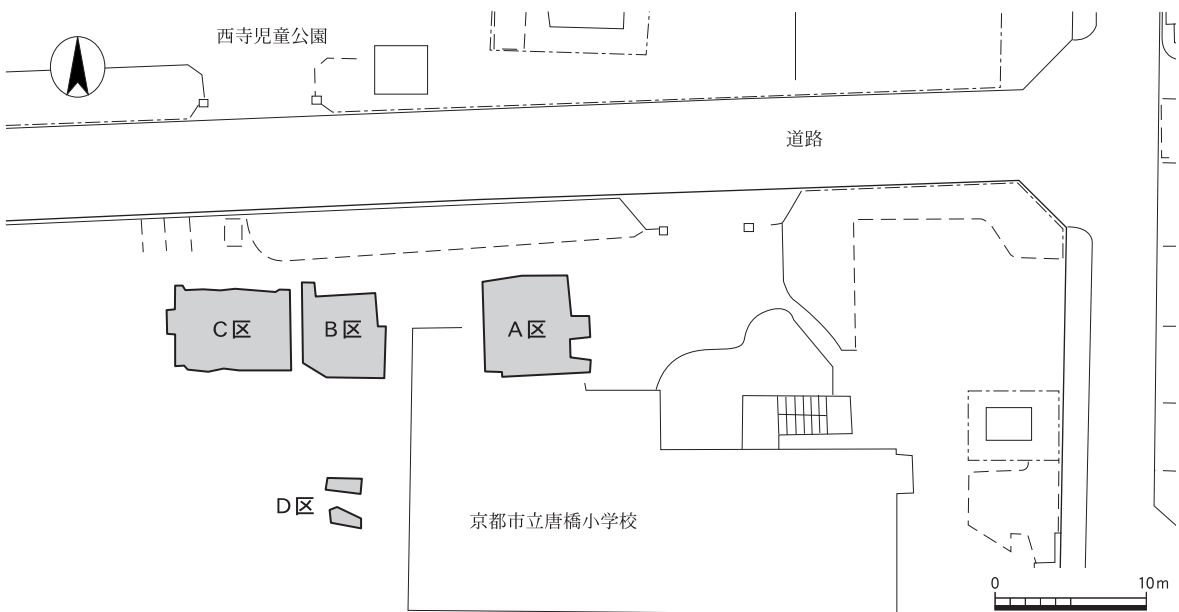


図168 調査区配置図（1：500）

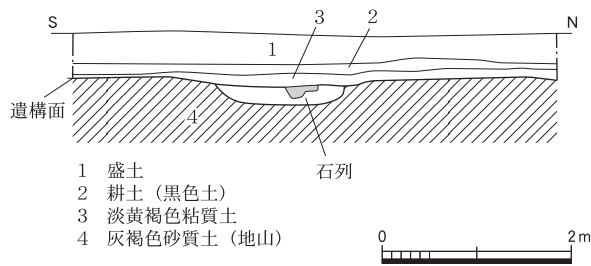


図169 C区西端断面図 (1:80)

時代前期である。

小結 今回の調査では、A区で礎石据付け穴を検出し、これに対応する東側掘形の検出のため拡張したが確認できなかった。復元では僧房桁行3.72mとし、これと合致する。南北溝SD2は僧房西雨落溝と推定できる。C区石列は金堂東軒廊南延石列と推定できるが、東回廊とのコーナーは検出できなかった。D区石列は東回廊東側延石列と推定できる。さらに、C区で礎石1個を検出し、東回廊の柱位置を推定できる資料を得ることができたことは大きな成果であった。

『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』 1979年報告

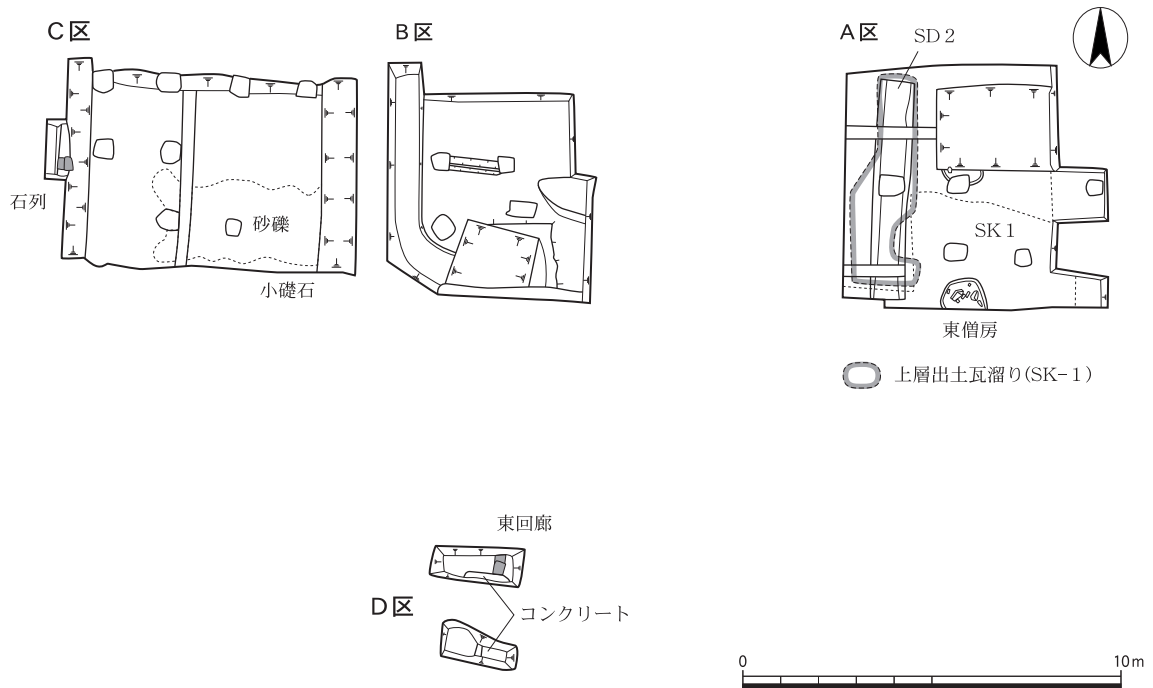


図170 遺構平面図 (1:200)

た、東南部で花崗岩小礎石を検出した。

D区では北側トレンチで凝灰岩石列を検出した。2個を南北に並べる。

遺物 遺物には、土師器、須恵器、瓦類などがある。瓦類が大半を占め土器類は少ない。瓦は瓦溜SK1および耕土から出土し、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦があり、時期は平安

42 平安京右京九条一坊・西寺跡 2 (図版21・22)

経過 発掘調査は、京都市立唐橋小学校校舎改築による現状変更に先立って、京都市からの委託により行ったものである。調査区は唐橋小学校敷地内の東側にあたり、西寺跡の東回廊部分に位置する。西寺境内調査15次調査である。今回の調査の目的は、東回廊の実態を明らかにするとともに、昭和45年度に平安博物館がプール建設の際に確認した東西方向の築地の延長と性格を明らかにすることであった。

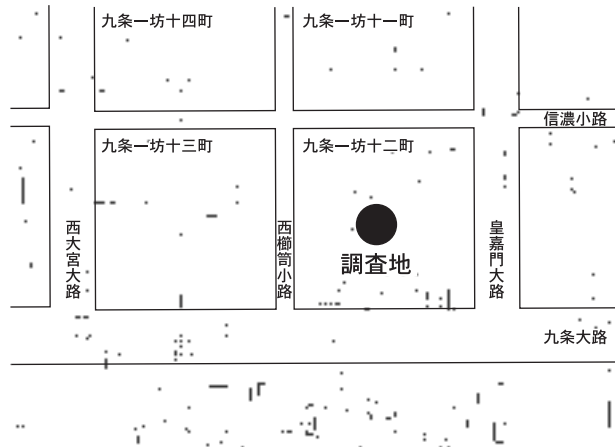


図171 調査位置図 (1 : 5,000)

遺構 現在この付近の地形はほぼ平坦であるが、地層の断面観察により判断すると、砂礫層と砂泥層が交互に堆積し、遺構面は北西から南東へ徐々に下っている。旧校舎の整地面から西寺造営面までの層には、旧耕作土や床土、中世整地層である灰褐色砂泥層が認められ、地表下0.4m前後で西寺の遺構面となる。また、西寺造営面の下層には古墳時代の遺物を包含する砂礫層が北東から南西に流路状に堆積しており、西寺の遺構は古墳時代遺構面の窪みを整地して形成されていることが判明した。以下に西寺関係の遺構について概説する。

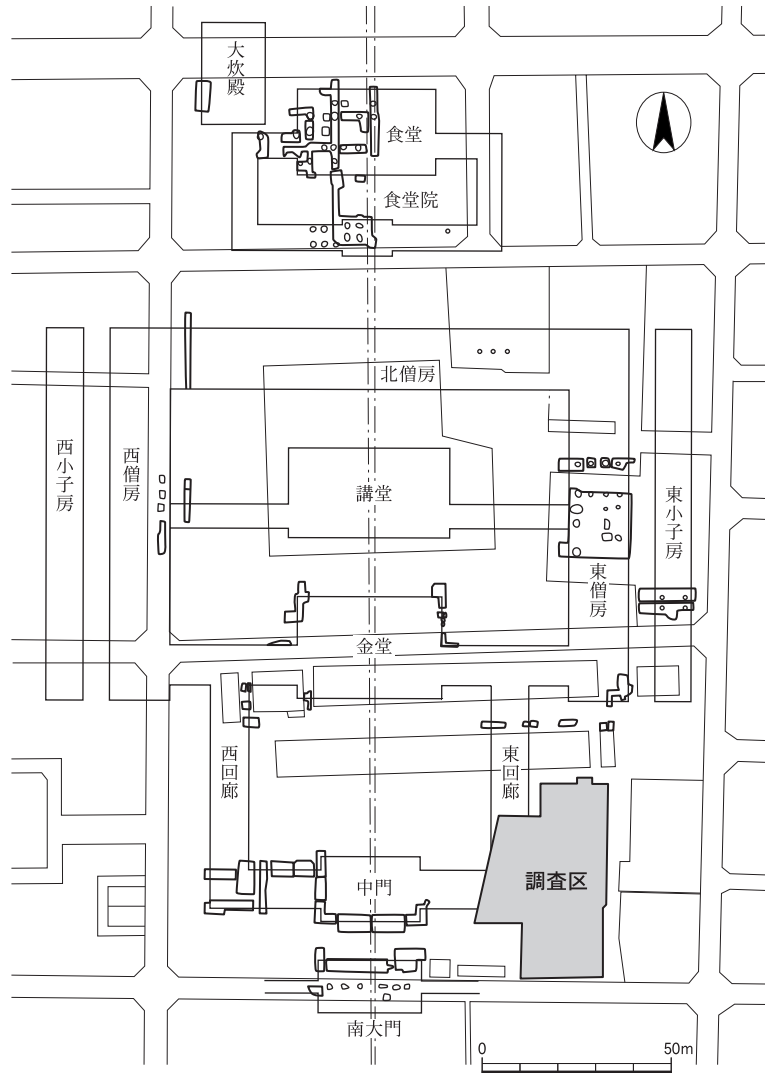


図172 調査区配置図および西寺復元図 (1 : 2,000)

東回廊 (SB1) 調査区西部で回廊跡を検出した。基壇そのものは後世に削平され残存状態は悪いが、東回廊の位置および規模が判明した。回廊に伴う遺

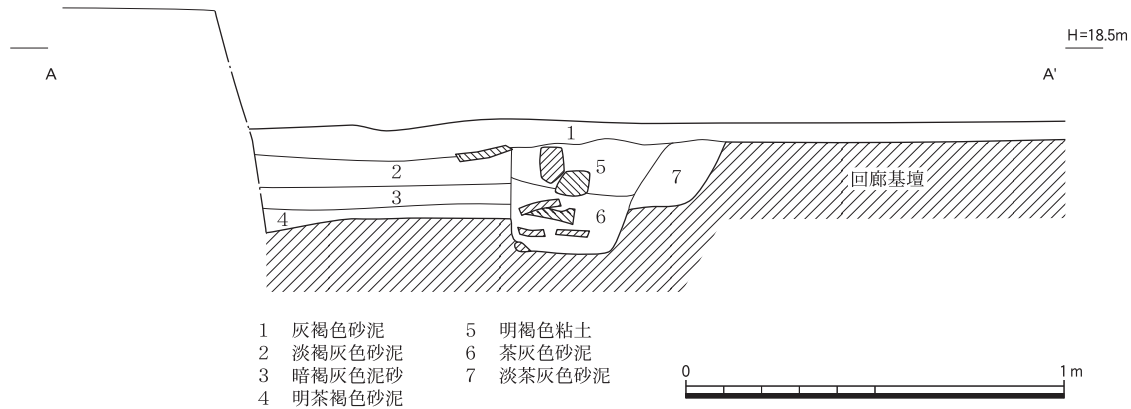


図173 回廊基壇断面図（1：20）

構は、複廊の礎石据え付け穴と基壇外装施設の切石列で、内外の延石間は10.44mである。礎石据え付け穴は、一辺約1mの隅丸方形を呈し、深さは約0.3mで、内には砂礫が認められた。柱間間隔は桁行13尺、梁間10.5尺に復元できる。基壇外装施設は延石となる凝灰岩の切石列で、残存状態が良好な東南隅では地覆石とともに羽目石の痕跡も認められた。延石はいずれも断面が一辺0.3mの方形を呈し、長さは0.5～1m前後である。地覆石は、幅0.3m、厚さ0.16～0.2mの断面長方形で、長さは0.6～1m前後である。両者ともに断面の寸法は統一されているが、長さは不統一で隅寄りに長いものが集中する傾向にある。基壇は掘込み地業は認められず、整地層を削り出した上に粘質土を盛土して形成し、基壇外装も一部整地層を掘込んで石材を据付けている。

築地（SA2） 調査区東部にて南北方向に築地の痕跡を検出した。上部はすでに削平されており、調査区北端部でわずかに基底部の高まりが残る。

門跡（SB3） 調査区東端中央やや南寄りで見出した門跡と考えられる遺構である。一辺0.6m弱、厚さ0.2mの扁平な凝灰岩方形礎石が据わっており、その西側に心々距離で約1.8mの位置でも小礎石が据えられた柱穴を検出している。また、これらの礎石の北側約4.5mでは対応して礎石を据え付けた痕跡を確認している。おそらく、検出した方形礎石が南支柱の礎石で、西側の小礎石が脚柱の礎石となるのであろう。東側は攪乱あるいは調査区外となるため確認できないが、構造的に四脚門になると想定している。なお、門基壇の地業は施されておらず、基壇外装の痕跡も認められない。

築地西側溝（SD4） 築地の西側で南北方向に見出した溝である。幅2m前後、深さ約0.7mである。溝の底部には礫の混じる土が堆積し、水が流れていたことが窺える。また、上層では多量の瓦と石が出土し、溝を埋める際に投棄したものと考えられる。後述する東西溝（SD5）と合流すると考えられるが、南側では幅が広がってSX6との切りあい関係が不明瞭になる。

東西溝（SD5） 落込み遺構（SX6） 調査区南端で東西方向に見出した東西溝で、南肩は直線的に見出してきた。既存校舎の基礎のため北肩が壊されていると仮定すれば、復元幅は約2mほどで、深さは約0.3mである。ただ、建物基礎より北側の落込みSX6と底部高がほぼ同じであり、SX6はSD4との合流部で排水が氾濫した痕跡の可能性が高い。SX6は底部の凹凸が激しい落込

み状の遺構である。北肩ラインが北東から南西に斜めになっており、北側ではSD4に切られているが南側では同時併存していた可能性もある。溝排水の氾濫によって形成されたと考えられ、中央部から土馬が出土している。なお、東南部では底部が下がって深さ0.7mほどであった。

その他、下層の遺構として調査区東半部で古墳時代中期の落ち込み状遺構を検出している。東は調査区外に展開しており、現状では南北約20mの半円形を呈して、西端から南西に向かって溝状遺構が取り付く。

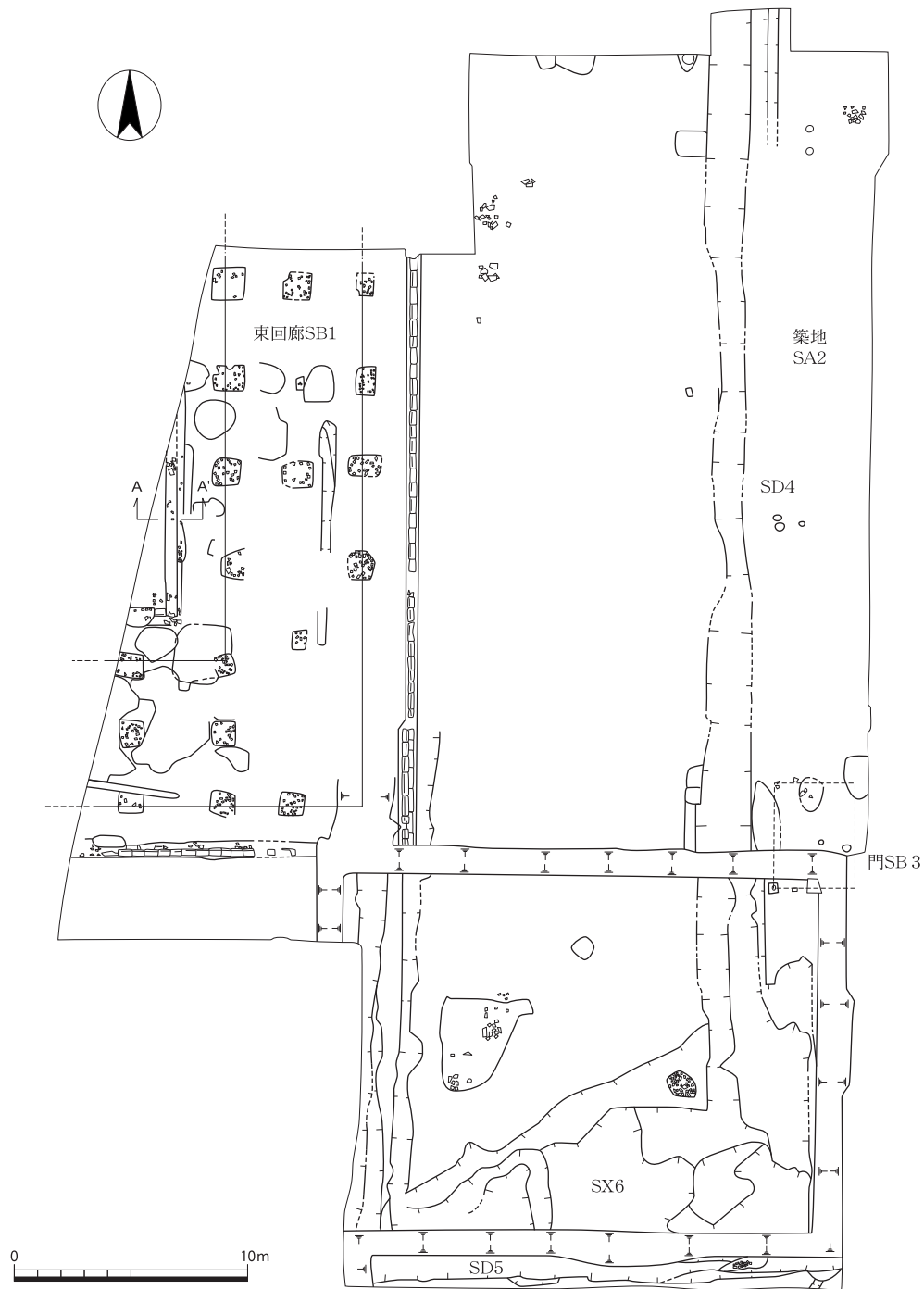


図174 遺構平面図（1：300）

遺物 築地西側溝SD4から多量の瓦類が出土した。軒瓦はほとんどが平安時代前期の瓦であり、鬼瓦も2点出土している。土器類は土師器の皿・杯・高杯・甕、須恵器の杯・蓋・壺などが出土している。とくに、SX6北肩部から多量の土器群とともに白磁椀（1）と三彩陶器皿（2）が出土しており、平安時代前期の良好な資料である。また、SD4からは東海産と考えられる緑釉陶器の香炉蓋（3）が出土した。古墳時代の遺物は、下層の落込み状遺構から土師器や須恵器が出土している。

小結 今回の調査で、西寺中心伽藍の東回廊基壇および礎石据付け穴を検出し、回廊の構造・規模がほぼ確定した。また、東回廊の東で南北方向の築地痕跡を確認したことで、伽藍地の南東隅に築地で囲まれた院が形成されていたことが明らかとなった。この施設は、東寺伽藍の灌頂院と対称の位置にあり、10世紀になって醍醐天皇の御忌が行われた國忌堂、後の御霊堂に推定できる。西寺は平安京内の官寺として機能した重要な寺院であるが、創建段階も含めて幾度かの伽藍の変遷が想定できる。今後は西寺の造営過程や伽藍の変遷を考古学的に明らかにしていく必要がある。



図175 SX6・SD4出土土器

43 平安京右京九条二坊四町 (図版23)

経過 京都市立洛陽工業高校の図書館新築工事に先立って、事前の発掘調査を行った。調査地は平安京右京九条二坊四町にあたり、平安時代の西大宮大路に接し、東方は西寺の寺域に相当する。しかし、付近一帯における過去の調査例は少なく、必ずしも層位の状態、遺構の有無は明確ではなかった。このことから当初は、幅5mで南北22m、東西20mのL字形の調査区を設定し、遺構の存在が明らかになれば西方に拡張を行う予定で調査を開始

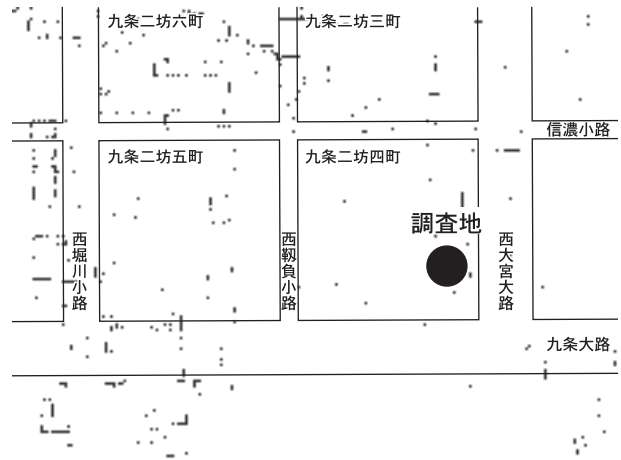


図176 調査位置図 (1 : 5,000)

した。調査が進むにつれ、平安時代中期に属する柱穴群と、平安時代の堆積層中に大量の古墳時代の遺物を検出するに至った。このため柱穴群の全容を明らかにし、さらに下層遺構の有無を明確にしていく必要性が生じ、西方へ東西8m、南北16mに渡って調査範囲を拡大した。この結果、平安時代中期に属する建物4棟、柱穴列、溝1条、土壇3基を検出し、さらに下層から古墳時代の竪穴住居2棟、溝1条を確認した。

遺構 調査区の基本層序は比較的単純な堆積状況を示す。現代層が0.3~0.4m、その下層には黄土(灰色砂泥)と床土があり、さらにその下層には淡黄灰色砂泥が0.3~0.4mの堆積を示す。平安時代中期の遺構は次の淡茶灰色砂泥層上に成立している。この層は古墳時代の遺物を多く含み、厚さは0.1~0.2mを測る。この淡茶灰色砂泥層を排除した時点で古墳時代の各遺構を検出した。古墳時代の遺構は、さらにその下層の淡黄灰色細砂および泥砂層をベースに成立している。この層は砂と礫の互層堆積で、1m以上にわたって続いており、少量ではあるが磨滅した土器片を含んでいた。以下で古墳時代の遺構と平安時代の遺構に分けて概説する。

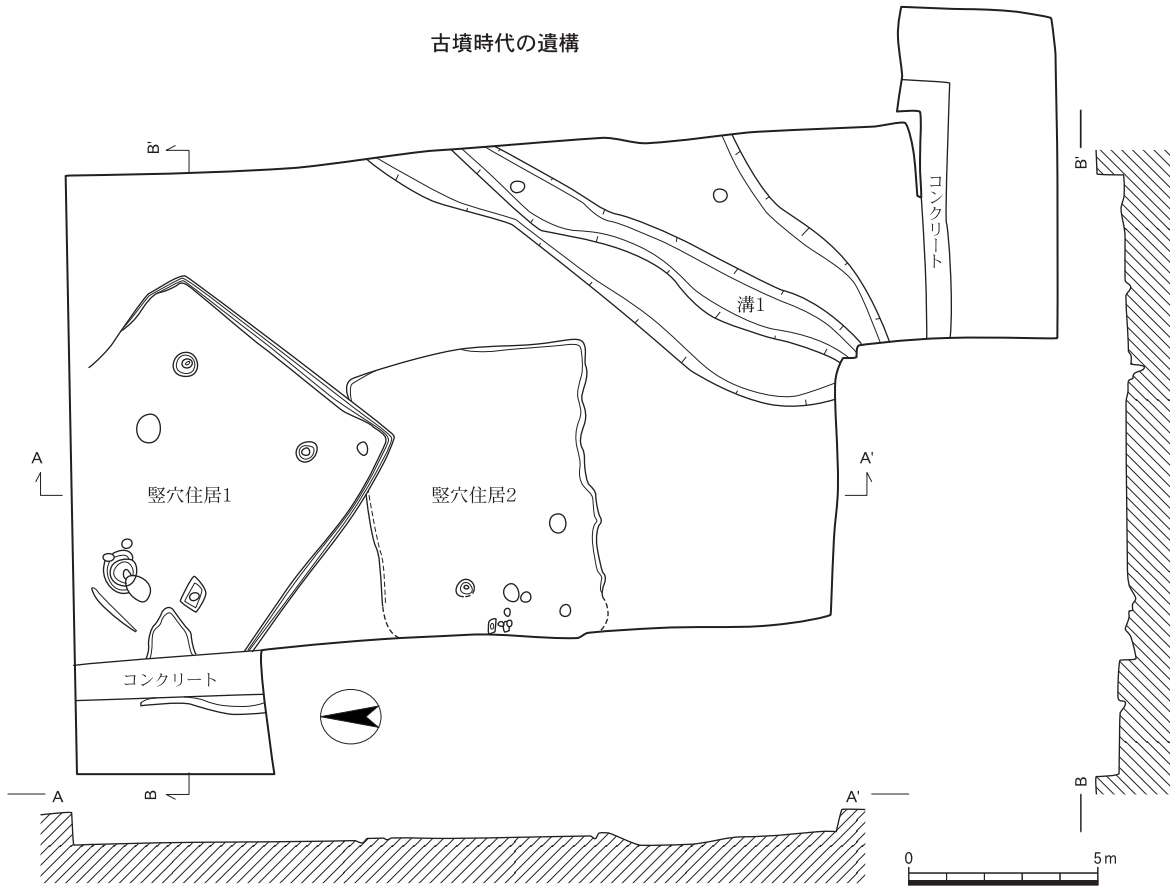


図177 調査区配置図 (1 : 1,000)

古墳時代の遺構は、竪穴住居を2棟、他に北東から南西に向かう溝跡を1条検出した。

竪穴住居1は、竈の設置された辺を北西に向けた傾きを持つ。規模は深さ約0.2m。各辺それぞれ7.5~8.0mの隅丸方形で、幅0.15~0.2mの壁溝をめぐる。主柱穴は北端が調査区外のため、3箇所しか検出できな

古墳時代の遺構



平安時代の遺構

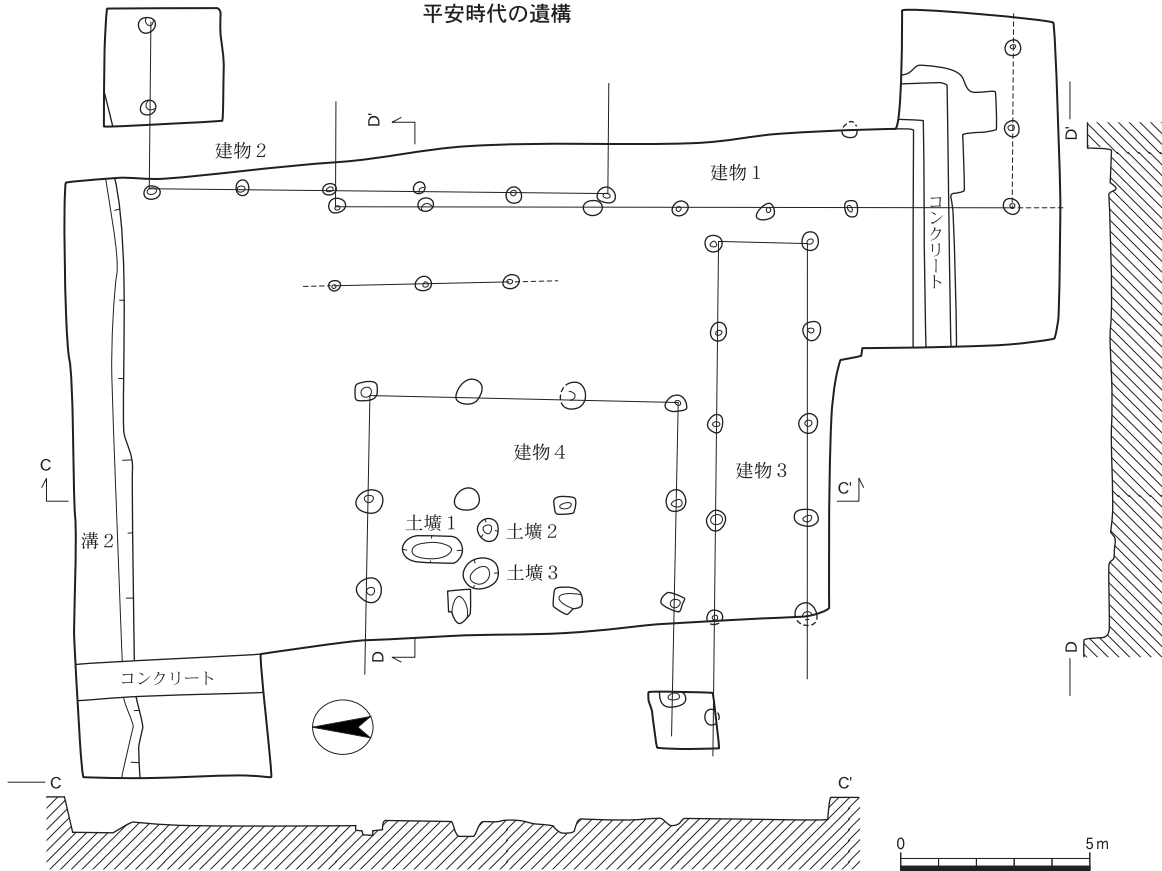


図178 遺構実測図 (1 : 200)

かった。柱跡規模は深さ0.5～0.7m、径0.5～0.6mである。住居跡内の施設として、北西辺の中央部に竈の痕跡を検出している。径は0.6～0.8mの灰の入る落込みで、底面は焼けて堅く締まる。上面が削平を受け、底面しか残存していないものと考えられる。竈周辺から数多くの遺物が出土した。

竪穴住居2は、竪穴住居1の南に接して検出した。削平が激しいため全体形状を把握しにくい。南北約6m、東西8mほどの長方形を呈している。深さは2～3cmと極めて浅く、壁溝は検出できなかった。柱跡は東側で2箇所検出し、調査区西端で竈に伴うと考えられる支柱石を確認した。

溝1は、調査区の東南辺を北東から南西にかけて延長する小河川の跡である。横断面は2段になり、中央に幅1.5m、深さ0.5～0.6mの部分が存在する。西側にゆるやかな立ち上りをみせる部分があり、全体として幅5～6mとなる。この溝1より出土した遺物は、竪穴住居から出土した遺物と極めて近接した時代のものであり、この小河川が竪穴住居と併存した可能性が強い。

次に平安時代に属する遺構としては、建物を4棟分、柱穴列、溝1条、土壇3基を検出した。

建物1は調査区の東端で検出した、南北8間以上×東西2間以上の掘立柱建物である。柱間は南北約2.2～2.3m、東西2.0～2.1mを測る。柱穴の形状はほぼ円形で、直径は約0.4m前後、柱穴の深さは検出面より0.4m前後である。柱間から推定すれば南北に長い建物と考えられるが、東側部分の柱穴列が不明のため、建物の全体的な規模、性格の復元は困難である。

建物2は同じく調査区の東端で検出し、建物1とほとんど重複するが、柱跡の重複関係はない。南北5間×東西2間分を確認しており、さらに東方に延びる可能性がある。南北の柱間距離は2.3～2.4m、東西は約2.3m。柱穴の形状は円形を呈し、直径は0.3～0.4m前後、深さは検出面より0.3～0.4m前後である。

建物3は調査区の南端で検出した、東西5間以上×南北1間の東西棟の掘立柱建物である。建物1と近接しすぎており、時期差があるものと考えられる。柱間は東西が2.3～2.4m、南北が約2.5m前後で、柱跡の深さは検出面より0.4m前後、直径0.35～0.4mである。

建物4は調査区の中央やや西寄りに検出した総柱の掘立柱建物である。南北3間×東西3間分を検出しており、倉庫と推定できる。南北の柱間は2.7～2.9m、東西2.6～2.8mである。柱穴の形状は円形に近い隅丸方形を呈する。深さは検出面より0.4～0.5mに及ぶ。拡張部分で東西3間に延びることを確認したが、さらに西に広がる可能性もある。

溝2は調査区北端で検出した東西に延びる溝で、北肩部は調査区外のため南半部のみを調査した。幅は一部拡張して確認したところ、約2.5mであった。この溝は土層の堆積が西から東へ傾斜しながら堆積しており、流路方向は西から東と推定できる。深さは最深部で検出面より0.4m程度で、堆積する土層は上層が褐灰色泥土、下層はやや灰色味を増した褐灰色細砂である。遺物は上層から多く出土した。

土壇1は調査区西寄り中央部で検出した。建物4と重複しているが、柱穴とは切り合わない。形状は南北1.5m、東西0.7mの隅丸長方形を呈する。深さは約0.3mで炭・焼土・土器の破片を大量



図179 土壙1出土黒色土器風字硯

に含む。出土した土器は、他の時代の遺物をほとんど混入しない平安時代中期の良好な一括遺物である。土壙の性格としては、遺物の出土状態から土器投棄穴と考えられる。近接して、他に2基の同様な土壙（土壙2・3）も存在する。いずれも形状は円形であるが、遺物は少量出土したにとどまった。

その他の遺構として、調査区中央部で南北に並ぶ柱穴列を検出している。柵の可能性のある柱穴は計3箇所、2間分である。柱間は2.2～2.4mである。

遺物 古墳時代の遺物は、竪穴住居1から6世紀中頃と考えられる須恵器の杯・杯蓋・甕、土師器の甕・壺・甑が出土した。また、竪穴住居2からは須恵器の甗・杯・杯蓋・甕、土師器の甕を検出した。さらに、溝1からは上層で須恵器の杯・杯蓋、土師器の甕が、最底部の砂礫に接して出土している。

平安時代の遺物は、土壙1から平安時代中期の良好な一括遺物が出土した。その内容は土師器杯・皿、須恵器杯・皿、黒色土器椀・硯・小壺・甕、灰釉陶器皿、緑釉陶器の小破片などである。とくに、黒色土器風字硯は内外面ともに丁寧なヘラミガキを施しており、炭素も全面に吸着して黒光りしている。

その他に平安時代中期の柱穴群、溝1、淡黄灰色砂泥層及び淡茶灰色砂泥層から土器片が多く出土してはいるが、まとまった良好な遺物ではない。遺物全体の量としては、遺物整理箱にして40箱が出土している。

小結 京都市立洛陽工業高校周辺では、西寺下層遺跡などから古墳時代以前の大規模な遺跡の存在が想定できた。最近では西寺の約200m北方の八条中学の敷地内で弥生時代中期の遺構、西寺下層遺跡では古墳時代前期の遺構が検出されている。今回の調査で古墳時代後期の竪穴住居を検出したことにより、下層遺跡は弥生時代から古墳時代にまたがる集落である可能性が高くなった。また、平安時代中期の建物群を検出したことにより、九条大路に面した四町での宅地利用の一端が明らかとなったといえる。しかし、遺跡の全容はなお明確ではなく、今後は遺跡の範囲確認が重要な課題であり、周辺地域の継続的な調査が期待される場所である。

Ⅲ 白河街区跡

44 尊勝寺跡 1

経過 本調査は、象彦倉庫建設工事に伴うもので、当地は尊勝寺又は得長寿院に推定されるため、調査を実施した。本調査は尊勝寺推定地における2次調査である。

調査区は1次調査区の北側を一部重複して、南北18m、東西18mの方形の調査区を設定し、随時拡張した。重機で現代・盛土層を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層黒灰色土層（現代盛土層：0.5m）、第2層茶灰色土層（近世包含層：約0.2m）、第3層黒色土と黄色砂の互層（版築層：0.3m）、第4層茶褐色砂土層（掘込地業層：0.2～0.4m）、第5層灰色粘土層（掘込地業層：0.2～0.5m）、第6層灰白色砂層（地山）である。第3層上面で礎石据付跡、土壇、井戸などを検出した。

調査区全面で22箇所の礎石据付跡を検出した。礎石据付跡は掘形が円形で底部平坦、規模は径約2m、深さ0.8mである。根固石は径0.3～0.4mの大きな石を底部から円形状に組み、間に径0.05～0.1mのぐり石を入れる。残存状況の良いものには中央を凹ませ、礎石を据易くしているものもある。最東側の礎石据付跡の一部には掘形が円形で、規模は径1.5m、深さ0.5mのものがある。据付跡埋土は灰褐色土で土器・瓦を含む。礎石はすべて抜き取られ残存していないが、据付跡の配置から南北棟建物で、中央部の2列が身舎、その東側と西側が庇、さらに東側が孫庇と推定できる。柱間寸法は礎石が残存していないので正確ではないが、身舎梁間は9.28m（30尺）、桁行は3.73m（12尺）・3.38m（11尺）で庇の出が4.35m（14尺）、孫庇の出が3.73m（12尺）と推定できる。

建物は、版築層・掘込地業層中から出土した土器から、12世紀初頭から中頃に属すると考えられる。

遺物 遺物は、約130箱出土した。種類は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、黒色土器、陶器、

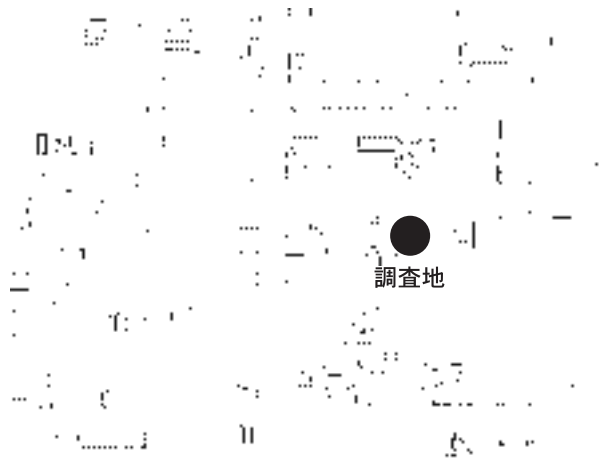


図180 調査位置図（1：5,000）

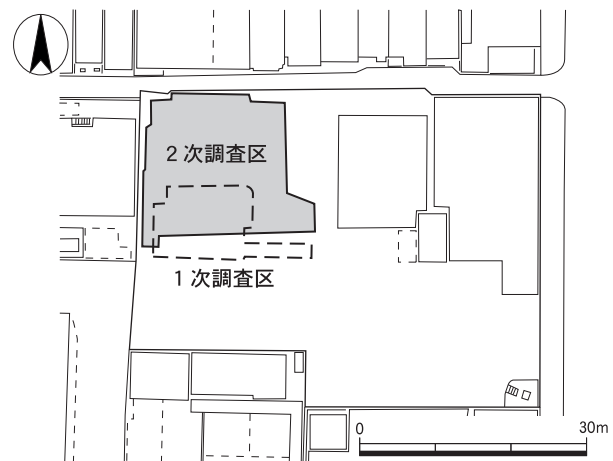


図181 調査区配置図（1：1,000）

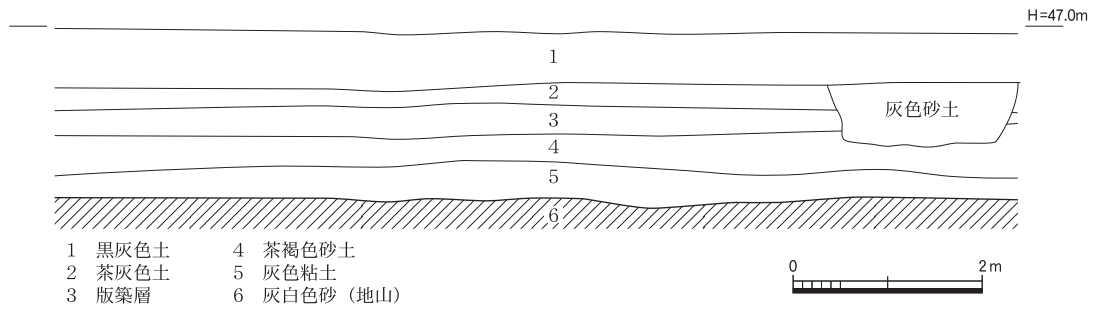


図182 東西セクション北壁断面図 (1 : 80)

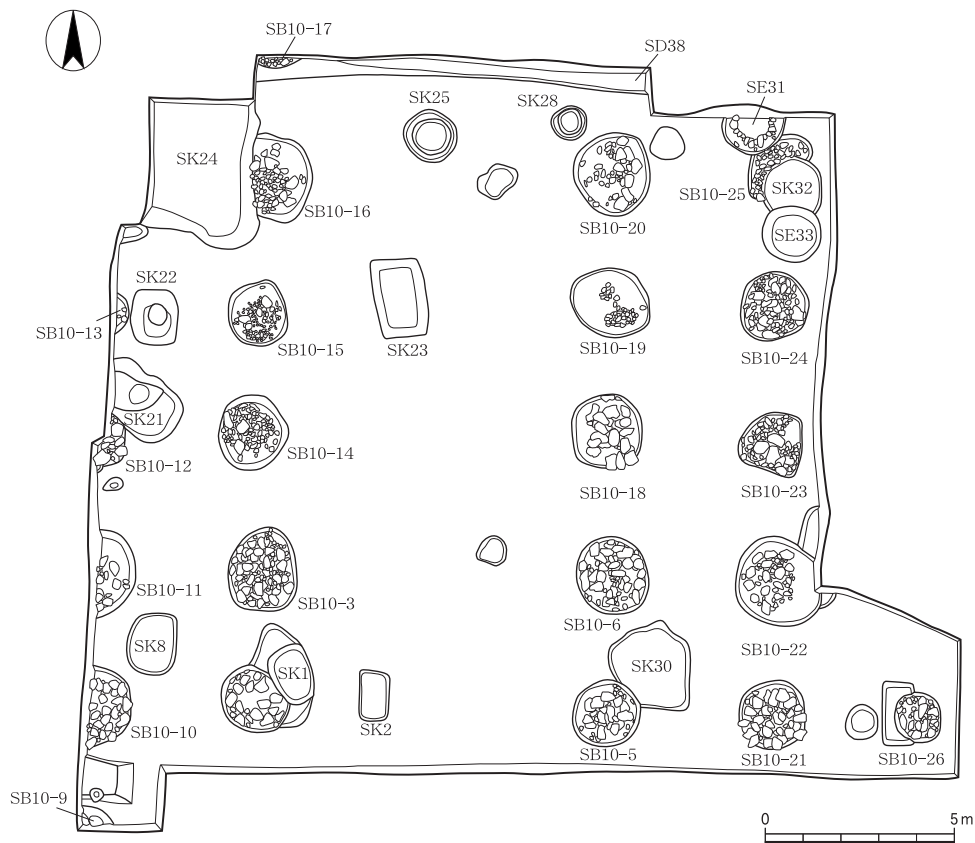


図183 遺構平面図 (1 : 200)

磁器、瓦、土製品、石製品、銭貨などである。遺物の大半は瓦類で、第2層・土壙から出土した。軒瓦は88点出土し、平安時代後期から鎌倉時代である。土器は第2層・掘込地業層・土壙などから出土した。

小結 今回の調査では、調査区全域が建物の範囲に含まれ、前回の調査と合わせて建物の規模と地業の築造方法を明らかにできた。建物は、周辺の推定復元から尊勝寺阿弥陀堂と推定できる。

『六勝寺跡発掘調査概要1978』 1979年報告



図184 調査区全景（南東から）

45 尊勝寺跡 2

経過 本調査は宅地建設工事に伴うもので、当地は尊勝寺または得長寿院推定地にあたるため、調査を実施した。

調査区は南北3m、東西22.5mの方形に設定し、随時拡張した。重機で現代・盛土層を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層黒灰色土層（現代・盛土層：0.5m）、第2層茶灰色土層（近世包含層：約0.2m）、第3層黒色土と黄色砂の互層（版築層：0.3m）、第4層茶褐色砂土層（掘込地業層：0.3～0.6m）、第5層灰白色砂層（地山）である。第3層上面で礎石据付跡、溝、土壇、柱穴などを検出した。

調査区東端部で礎石据付跡を2箇所（SB10・27・28）検出した。礎石据付跡は掘形が円形で、規模は径1.5m、深さ0.5mである。根固石は径0.05～0.1mのぐり石を入れる。埋土は灰褐色土で土器・瓦を含む。礎石据付跡の西側4.15mに、南北溝（SD81・80）が位置する。断面U字形で幅・深さともに0.4mで、心々距離は2.39mである。礎石は全て抜き取られ残存していないが、今回検出した据付跡は周辺の調査から南北棟建物西孫庇と推定できる。柱間寸法は礎石が残存していないので正確ではないが、桁行は3.73m（12尺）である。建物は、版築層・掘込地業層中から出土した土器から、12世紀初頭から中頃に属する。

調査区西部で南北溝（SD60・67）を検出した。溝SD60は断面U字形で幅1.1m、深さ0.3mである。溝SD67は断面U字形で幅1.5m、深さ0.2mで、溝心々距離は5.1mである。埋土は暗灰褐色土・黄褐色砂土で土器・瓦を多く含む。SD60は1976年の岡崎幼稚園内の調査で検出した南北溝の北延長上にあたる。SD60とD67の間には幅2.5mにわたり黄色砂が堆積している。これらのことから、上面が削平されたため本体は残存していないが、両溝は南北築地両雨落溝と推定できる。

遺物 遺物には、土師器、須恵器、瓦器、黒色土器、陶器、磁器、瓦などがある。遺物の大半は瓦類で、SD60・67、土壇（SK70）などから出土した。土器は第2層・掘込地業層・土壇などから出土した。

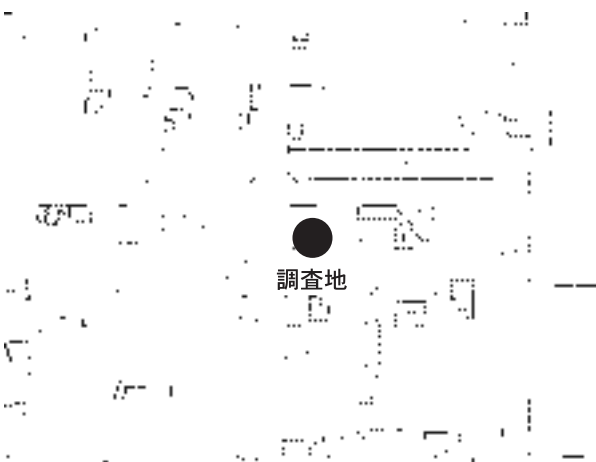


図185 調査位置図（1：5,000）

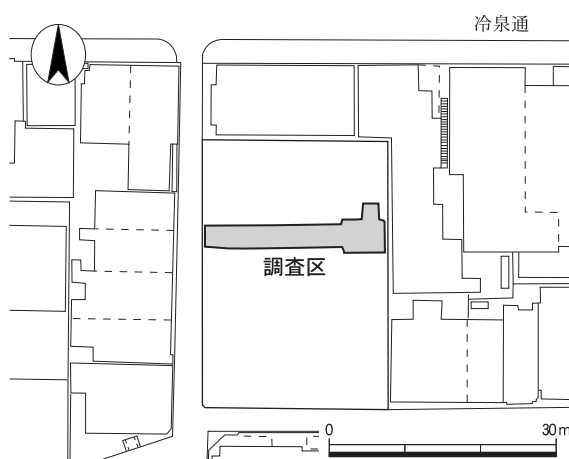


図186 調査区配置図（1：1,000）

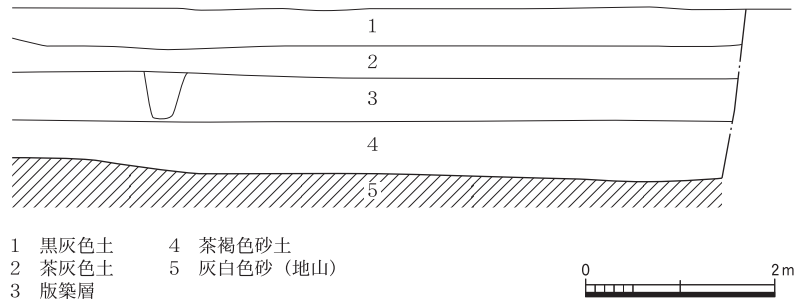


図187 北壁断面図（1：80）

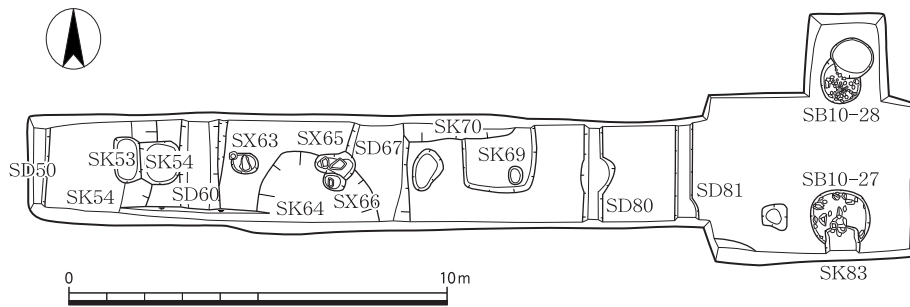


図188 遺構平面図（1：200）

小結 今回の調査で検出した建物は尊勝寺1で報告した建物と一連のものと考えられ、建物の西部の状況が明らかとなった。また、西部では築地痕跡を検出し、白河殿の地割を復元する上で重要な発見となった。

『六勝寺跡発掘調査概要1978』 1979年報告

IV 鳥羽離宮跡

46 鳥羽離宮跡37次調査

経過 本調査は城南宮御輿庫新築工事に伴うもので、当地は鳥羽離宮馬場殿にあたるため、調査を実施した。

今回の調査は、工事に伴い立会調査を実施したところ、平安時代の遺物包含層・遺構を検出したため発掘調査となった。調査区は、南北14m、東西12mの長方形の調査区を設定し、随時拡張した。重機で現代・盛土層を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層(0.8m)、第2層黄灰色粘質土層(約0.5m)、第3層灰褐色砂泥層(約0.1m)、第4層茶褐色泥砂・淡茶褐色泥砂小礫混層(0.1m)、第5層黄褐色泥砂層(0.03m)、第6層黄褐色粘質土層(0.1~0.15m)、第7層茶褐色砂礫層(地山)である。第2層上面(Ⅰ期)と第4層上面(Ⅱ期)で遺構を検出した。

第4層上面では、調査区南部・北西部で庭園景石と鳥羽離宮以前の包含層を検出した。SX1は第7層上面に黄褐色粘質土を盛り土

し、SX2は第4層上面に自然石を据える。いずれも景石は一辺0.3~0.5mのチャートで、掘形を掘り据える。盛土内からは、古墳時代・平安時代の遺物が出土した。

第2層上面では調査区中央で斜方向の溝を検出した。幅0.8m、深さ0.5mで両岸に杭が一定間隔に打たれ竹矢来で護岸する。遺構は、溝埋土中の遺物から近世に属する。

遺物 遺物には、土師器、須恵器、緑釉陶器、軒瓦・丸瓦・平瓦などがある。遺物の大半はSX1盛土から出土した。土師器はほとんどが平安時代中頃から後期である。須恵器は古墳時代と平安時代のものがある。瓦類では、奈良時代・平安時代・鎌倉時代のものがあり、藤原宮式軒瓦が含まれる。

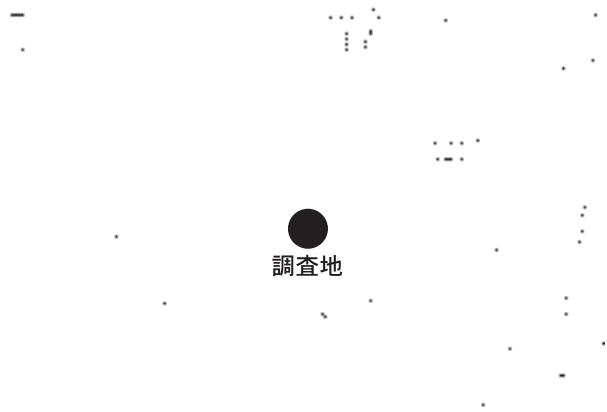


図189 調査位置図(1:5,000)

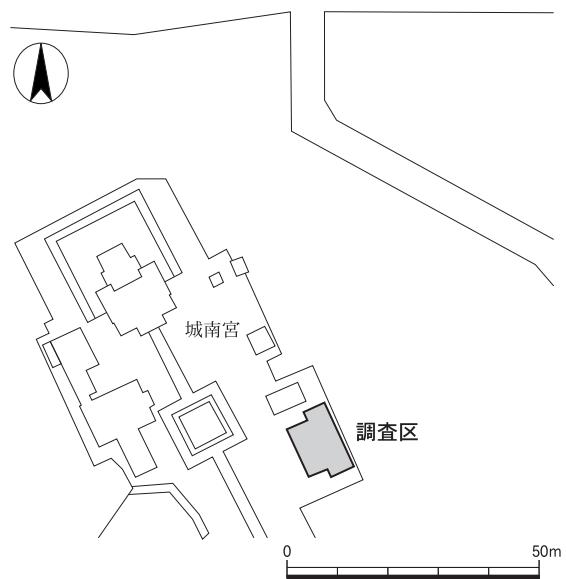
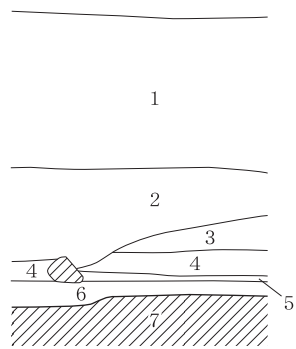


図190 調査区配置図(1:1,500)



- 1 現代盛土
- 2 黄灰色粘質土
- 3 灰褐色砂泥
- 4 茶褐色泥砂・淡茶褐色泥砂小礫混
- 5 黄褐色泥砂
- 6 黄褐色粘質土
- 7 茶褐色砂礫（地山）



図191 南壁断面図（1：40）

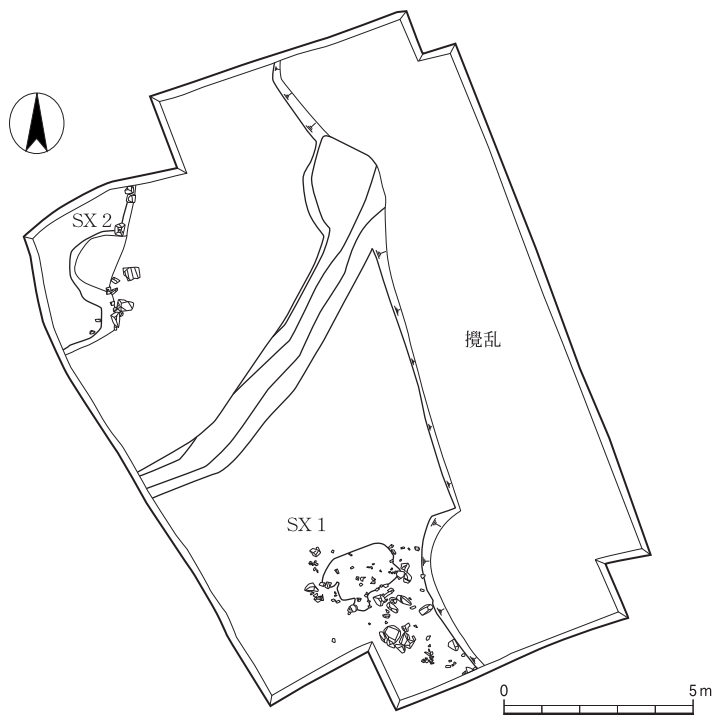


図192 遺構平面図（1：200）

小結 今回の調査では、調査区北部・南部で景石を検出し、調査区全域が庭園の一部と推定できる。

『鳥羽離宮跡 国庫補助による発掘調査概要 昭和53年度』 1979年報告

47 鳥羽離宮跡38次調査

経過 本調査は城南宮防火貯水槽新設に伴うもので、当地は鳥羽離宮馬場殿にあたるため、調査を実施した。

調査区は、南北10m、東西2.5mの長方形の調査区を設定した。重機で現代・盛土層を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層、第2層黄灰色粘質土層、第3層青灰色粘土層（0.1m）、第4層茶褐色腐植土層（0.3～0.5m）、第5層茶褐色砂礫層（地山）である。第5層上面で遺構を検出した。

第5層上面は、南から北に向かって緩やかに傾斜する。傾斜面には拳大の礫や瓦がほぼ同一の高さに散在し、園池の汀線と推定できる。

遺物 遺物には、土師器、瓦器、木製品、金属製品、瓦などがある。遺物の大半は第4層から出土し、木製柿経・五輪塔婆・木札・漆器、金属製懸仏・鉄鎌などが注目される。遺物は平安時代後期に属する。

小結 今回の調査は、調査区が狭く、遺構の性格は十分把握できなかったが、園池の北岸と推定できる。また、出土遺物が豊富で付近に鳥羽離宮に関する主要遺構が存在することが明らかとなった。

『鳥羽離宮跡 国庫補助による発掘調査概要 昭和53年度』 1979年報告

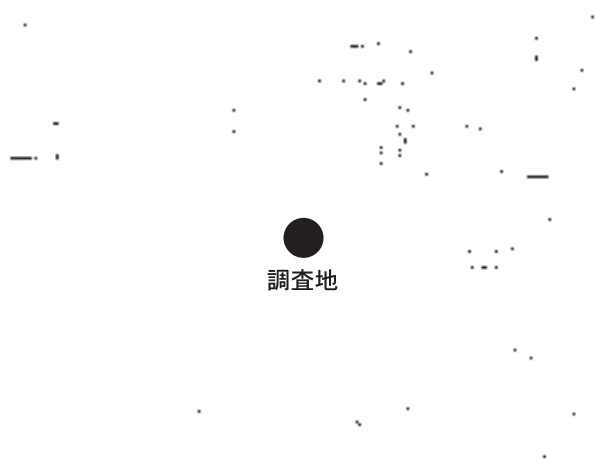


図193 調査位置図（1：5,000）

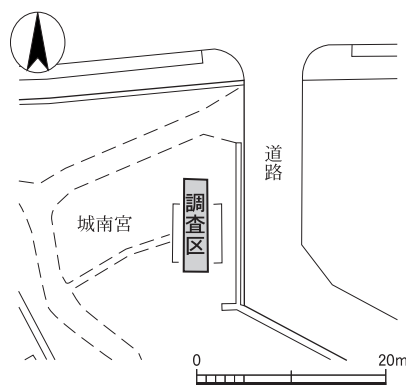


図194 調査区配置図（1：800）



図195 遺構平面図（1：100）

48 鳥羽離宮跡39次調査

経過 本調査は、住宅新設工事に伴うもので、当地は鳥羽離宮田中殿にあたるため、調査を実施した。

調査区は、東西7m幅で、北より南北4m、南北10m、南北20mの3箇所調査区を設定し、必要に応じて随時拡張を行った。重機で現代・盛土層を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代耕土(0.2m)、第2層床土(0.15m)、第3層茶褐色砂泥・淡茶灰色砂泥の互層(0.7m)、第4層青灰色粘土層(0.2m)、第5層黄褐色粘質土(約0.15m)、第6層暗褐色粘質土層(0.4m)、第7層暗褐色泥砂層(0.5m)、第8層暗褐色粘質土層(地山)である。第5層上面で「期」、第8層上面で「期」の遺構を検出した。

「期」の遺構は、平安時代前期と古墳時代に分けられる。平安時代前期の遺構は、南調査区全域で南北と東西の溝を検出した。溝は幅0.3m、深さ0.2mで、南北溝の間隔は1.5m前

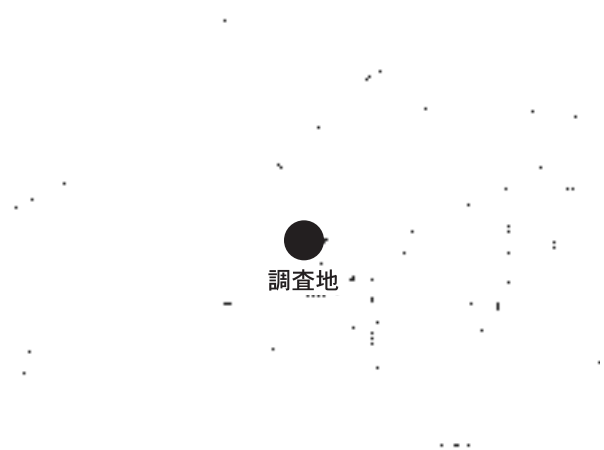


図196 調査位置図 (1 : 5,000)

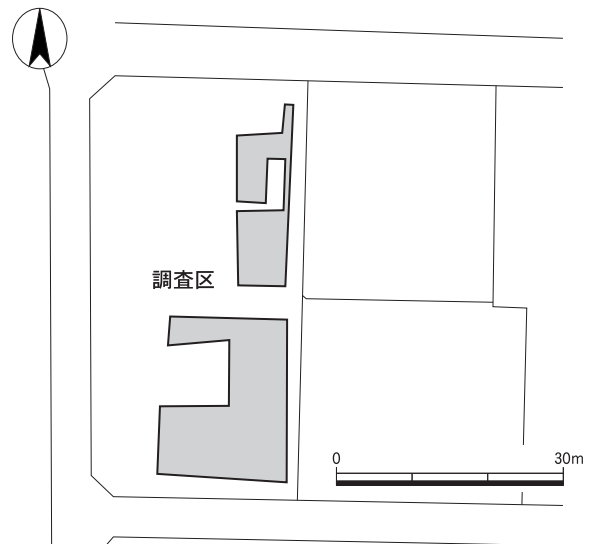


図197 調査区配置図 1 : 1,000

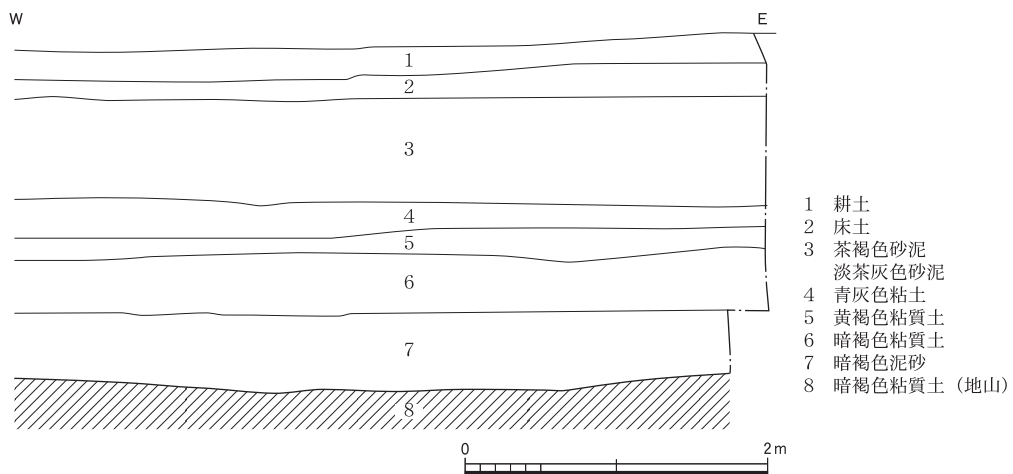


図198 北壁断面図 (1 : 50)

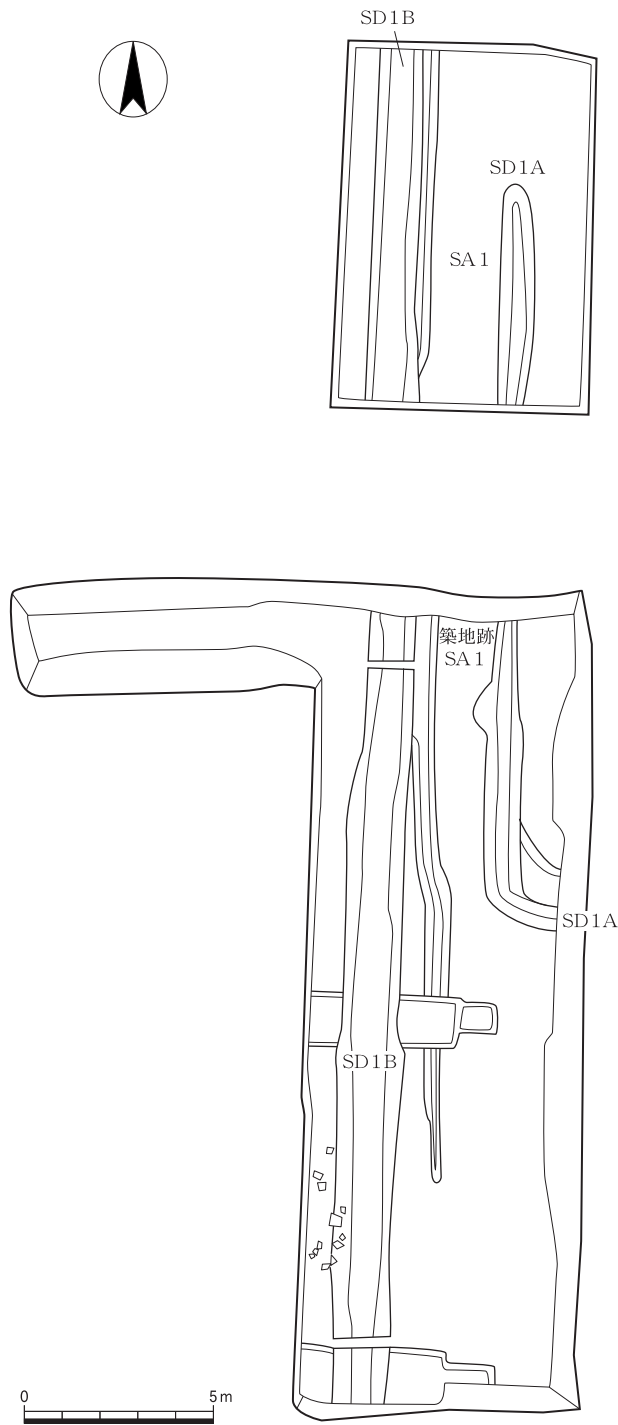


図199 平安時代遺構平面図（1：200）

軒瓦・丸瓦・平瓦が出土した。

小結 今回の調査では、南北築地・両側溝を検出し、この付近に鳥羽離宮の重要遺構が存在していることが明らかとなった。また、築地は地割を考える上で重要な定点となる。

さらに、当地域で竪穴住居を検出したのは初めてで、古代の地形復元を考える上で重要な例となった。

『鳥羽離宮跡 国庫補助による発掘調査概要 昭和53年度』 1979年報告

後である。東西溝の間隔は不規則である。溝内からは土師器・須恵器・黒色土器などが出土した。時期は9世紀代に属する。

古墳時代の遺構は、南調査区南部で竪穴住居3棟、ピット、落込みを検出した。南東隅の住居SB1は一辺約6mの隅丸方形で、北側に竈が位置し、壁溝が巡る。床は貼床を施しかなり硬い。支柱穴間の距離は南北2.1m、東西3mである。時期は6世紀中頃から後半に属する。

「期」の遺構は、調査区全域で南北溝2条を検出した。西側溝SD1Bは素掘りで幅1.2～1.4m、深さ0.3mである。東側溝SD1Aは南区で東へ曲がる。素掘りで幅0.5～1.1m、深さ約0.2mである。

両溝間は溝心々間で3.2m、整地層を盛り上げ、この盛り上げた部分は築地(SA1)と推定できる。溝からは土器類、瓦類が出土した。時期は平安時代後期に属する。

遺物 遺物には、土師器、須恵器、金属製品、土製品、瓦などがある。竪穴住居床面から土師器、須恵器、鉄器が出土した。平安時代の溝からは、土師器、須恵器、緑釉陶器、土錘が出土した。築地両側溝からは土師器、瓦器、

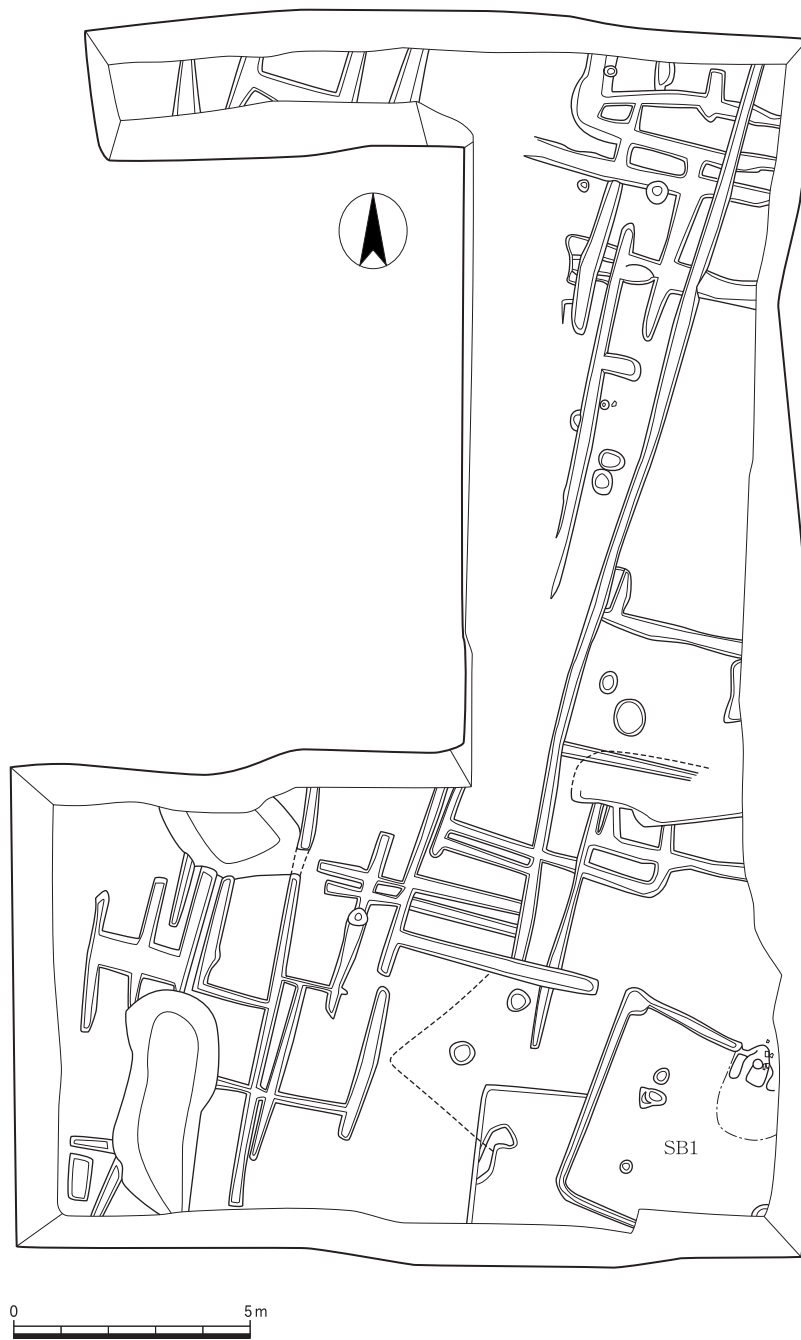


图200 古墳時代遺構平面図（1：160）

49 鳥羽離宮跡40次調査

経過 本調査は、住宅新設工事に伴うもので、当地は鳥羽離宮東殿にあたるため、調査を実施した。

調査はまず試掘調査を行い、焼灰と土師器包含層を確認したため発掘調査となった。調査区は、南北約20.5m、東西8mの長方形で、重機で現代・盛土層を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層(0.9m)、第2層耕土層(0.1m)、第3層床土層(0.15m)、第4層茶褐色粘質土層(約0.3m)、第5層黄灰色砂礫層(約0.1~0.2m)、第6層灰色砂礫層(地山)である。第6層上面で遺構を検出し、新(「期)・旧(。期)2時期に分かれる。

「期の遺構には、溝、建物などがある。調査区中央で検出した焼灰・土師器包含層は東へ延び、この層を切り込んで溝SD1、建物SB1が検出された。SD1は蛇行する溝で、幅0.3m、深さ0.15mである。建物は桁行3

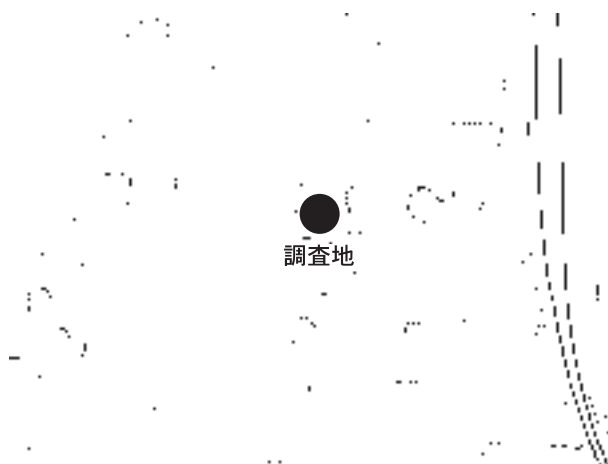


図201 調査位置図(1:5,000)

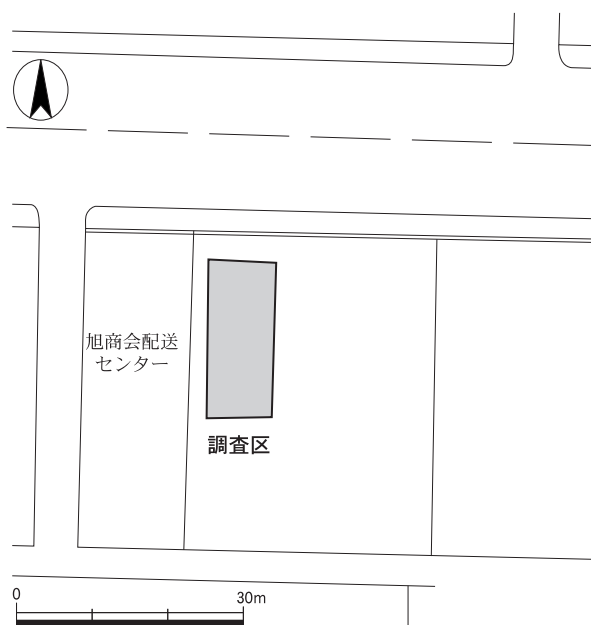


図202 調査区配置図(1:1,000)

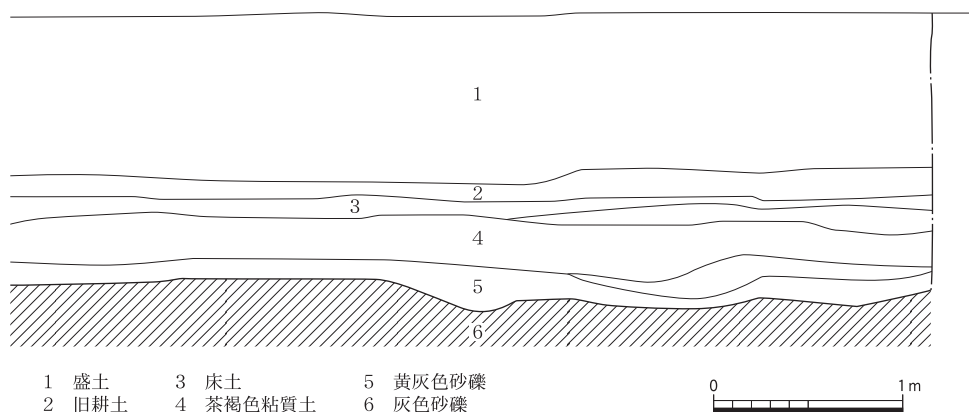


図203 東壁断面図(1:40)

間×梁間1間以上である。柱間は桁行・梁間ともに1.8mである。焼灰・土師器包含層内の土師器は鎌倉時代前半であり、「期」の遺構はそれ以降の中世から近世に属する。

。期の遺構には、土壙5基、井戸1基、溝3条などがある。土壙は調査区全域で検出し、南部に位置するSK3は幅1.2m、長さ1.7m、深さ0.2mで底部に板を平行に並べ、土壙墓と推定した。SK4も同様のものと推定した。北部では井戸SE1を検出した。掘形径1.5mの円形で、深さ0.5m、底部に曲物を据える。期は鎌倉時代前半頃に属する。

遺物 出土遺物は、整理箱で12箱出土し、土師器、瓦器、瓦などがある。SK4からは、良好な土師器が一括して出土した。

小結 今回の調査で、当調査地周辺では鳥羽離宮期には何の施設もなく、その後中世に墓域となり、さらにそれが埋没した後に耕作地となり、小規模建物が造られたことがわかった。調査地北側の10次調査でも墓が検出されており、当地の土壙墓もこの範囲に含まれていたと推定できる。

本調査では、付近の中世の変遷を知る資料がはじめて得られた。

『鳥羽離宮跡 国庫補助による発掘調査概要 昭和53年度』 1979年報告

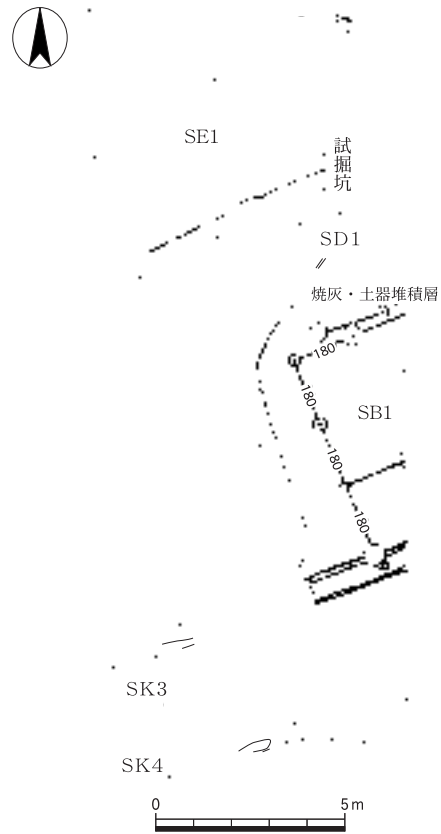


図204 遺構平面図 (1:200)

、調査地北側の10次調査でも墓が検出されており、当地の土壙墓もこの範囲に含まれていたと推定できる。

50 鳥羽離宮跡41次調査

経過 本調査は、住宅新設工事に伴うもので、当地は鳥羽離宮東殿にあたるため、調査を実施した。

調査区は、南北6m、東西3mの長方形で、重機で盛土・耕土・床土を掘削し、その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層(0.6m)、第2層暗青灰色粘土層(耕土:0.15m)、第3層暗灰色粘土層(床土:0.2m)、第4層灰褐色粘土層(0.15m)、第5層灰色粘土層(0.15m)、第6層暗茶灰色粘土層(約0.35m)、第7層腐植土層(0.05~0.25m)、第8層灰白色砂層(地山)である。第6・7層は南側に比べ北側が厚くなる。第8層上面で遺構を検出した。

遺構は園池の南側汀線部にあたり、南西部から北側に緩やかに傾斜する。調査区中央部には径0.05~0.2mの礫を東西方向に置き、洲浜と推定できる。時期は平安時代後期に属する。

遺物 出土遺物は、整理箱で1箱出土し、

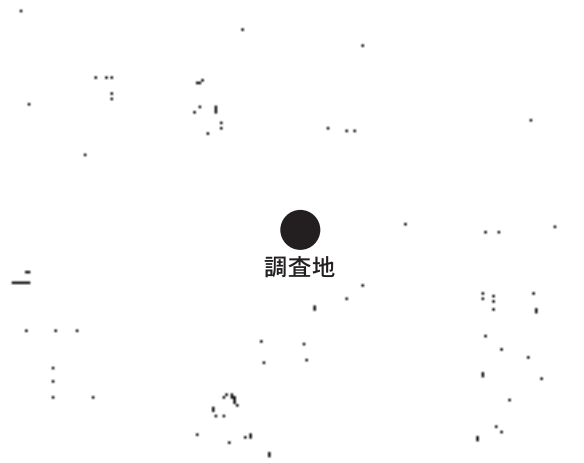


図205 調査位置図 (1:5,000)

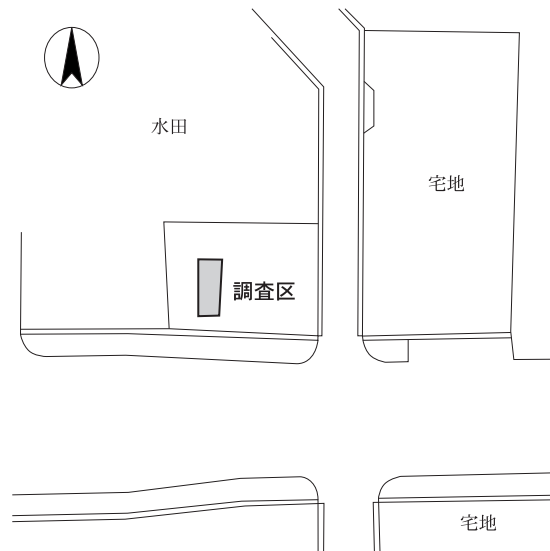


図206 調査区配置図 (1:1,000)

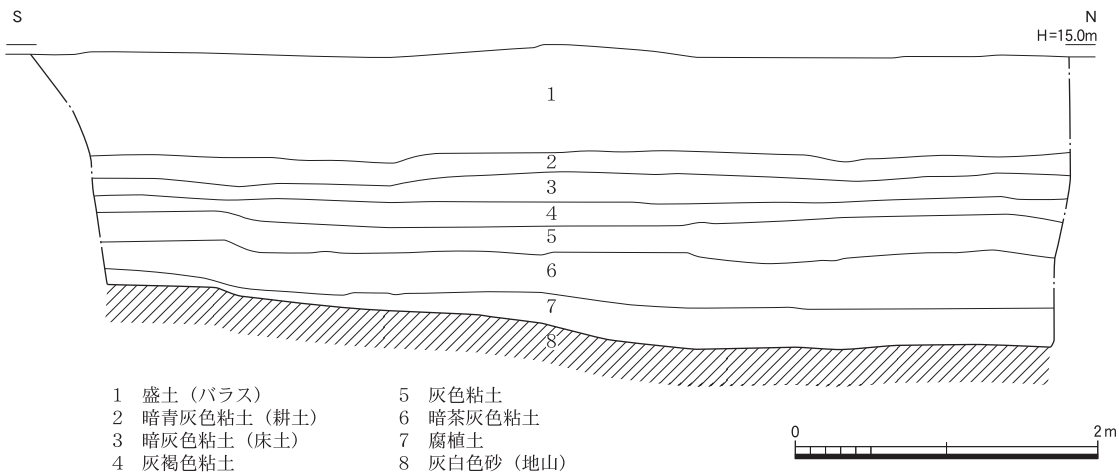


図207 西壁断面図 (1:50)

土器片、瓦片が少量出土した。

小結 今回の調査で、園池南岸を検出した。洲浜標高は13.1mで、11・44次調査から考え、東殿南方の園池の汀線は標高13.1～13.5mの間にあることがわかった。

『鳥羽離宮跡 国庫補助による発掘調査概要 昭和53年度』 1979年報告

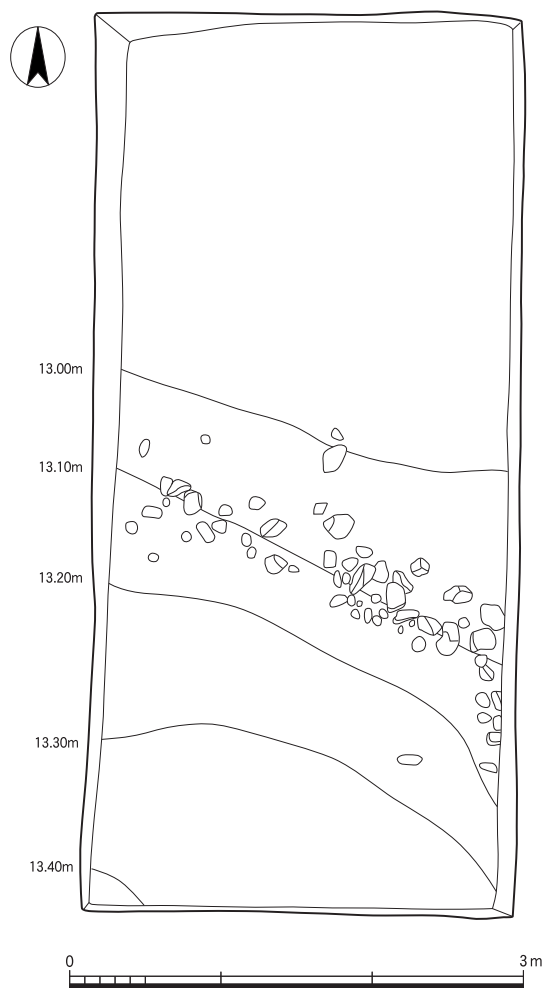


図208 遺構平面図（1：50）

51 鳥羽離宮跡42次調査

経過 本調査は、住宅新設工事に伴うもので、当地は鳥羽離宮東殿にあたるため、調査を実施した。

調査区は、南北11m、東西26mの長方形を設定した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層（0.65～3.5m）、第2層耕土層（0.15m）、第3層黄褐色砂泥層（床土：0.1m）、第4層黄褐色泥土層（0.35m）、第5層黒灰色腐植土層（0.15m）、第6層茶褐色砂礫層（地山）である。第6層上面で遺構を検出した。

遺構は調査区北東部で拳大の礫を敷いた園池の汀線を検出した。他の部分は現代攪乱がひどく、遺構・遺物は検出できなかった。遺構は平安時代後期に属する。

遺物 出土遺物は土師器・瓦器を少量出土した。

小結 今回の調査で、園池洲浜を検出した。洲浜は11次調査から考え、東殿南方の園池の汀線の南岸と推定できる。

『鳥羽離宮跡 国庫補助による発掘調査概要 昭和53年度』 1979年報告

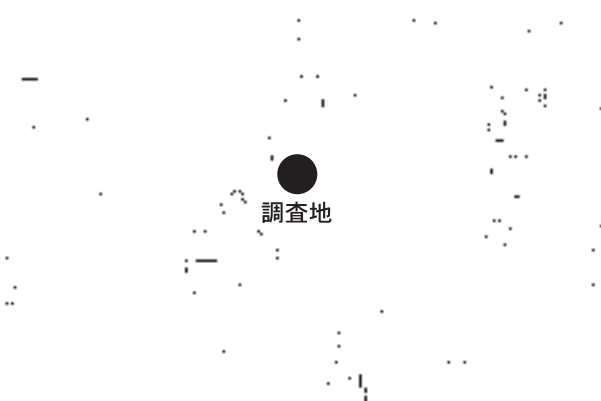


図209 調査位置図（1：5,000）

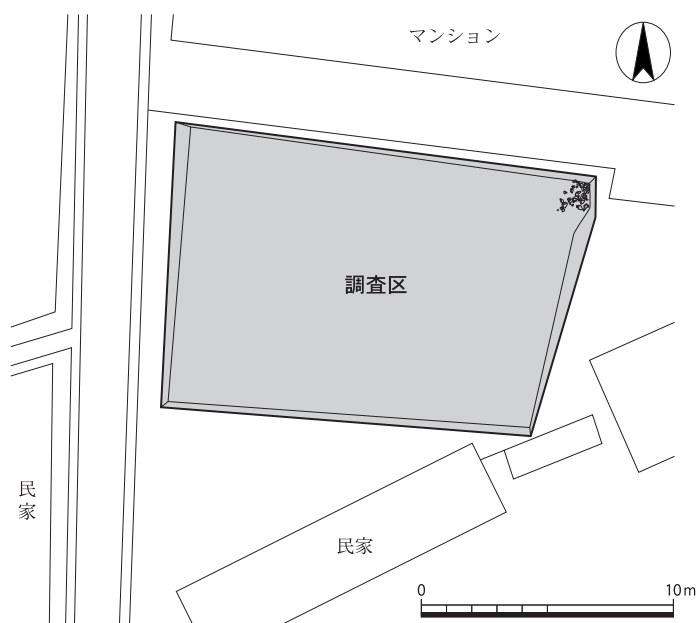


図210 調査区および遺構配置図（1：300）

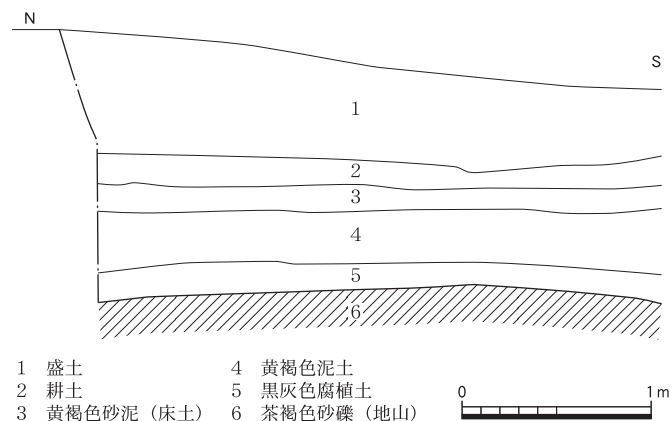


図211 東壁断面図（1：40）

52 鳥羽離宮跡43次調査

経過 本調査は、ホテル新設工事に伴うもので、当地は鳥羽離宮田中殿にあたるため、調査を実施した。

調査に先立ち試掘調査を行ったところ、調査地の南側で平安時代後期の遺構が残存していたため発掘調査を実施した。調査区は、南北9m、東西48mの長方形で、随時拡張した。

遺構 調査区の基本層序は、東側と西側で異なる。西部では、第1層現代盛土層（0.55m）、第2層耕土層（0.2m）、第3層茶黄褐色砂泥層（床土：0.1m）、第4層茶褐色泥砂層（0.35m）、第5層暗茶褐色泥土・黄灰色粘質土層（地業層：0.4m）、第6層砂礫層（地業層：0.15m）、第7層青灰色砂礫層（地山）である。東部では、床土までは同じであるが、第4層はなく灰褐色微砂層・茶褐色砂泥層・青灰色粘質土層が自然堆積し、青灰色砂礫層（地山）となる。西側では第5層上面で遺構を検出し、新（「期）・旧（。期）2時期に分かれる。東側は地山面で遺構を検出した。

。期の遺構は、西側第5・6層地業層の下部で古墳時代・平安時代前期の包含層を確認し、地業層中には古墳時代・平安時代前期の遺物が包含した。このことから、当該期の遺構の存在が推定できたが、確認することはできなかった。

「期の遺構は、西側南西部で南北約10.5m、高さ0.4mの土壇（SB1）を検出した。上面には礎石・根固め石は残存していない。土壇は掘込地業で造成され、砂質土の上に拳大の礫や瓦を敷き、固くつきかためて、これを2～3層行う。同様な地業は、2・4・18・30次で確認されている。土壇の周囲は高さ約0.4mで南北方向の壇となっている。ここに石抜き穴が検出された。石材の痕跡から花崗岩によって化粧されたと推定できる。壇の西側約3.6mの位置で、逆L字形の雨落溝（SD1）を検出した。溝は南北8.5m、東西8.7m確認し、調査区外に継続する。溝は幅0.4m、深さ

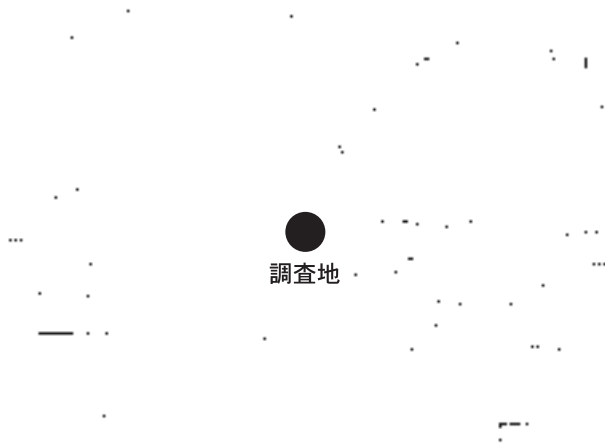


図212 調査位置図（1：5,000）

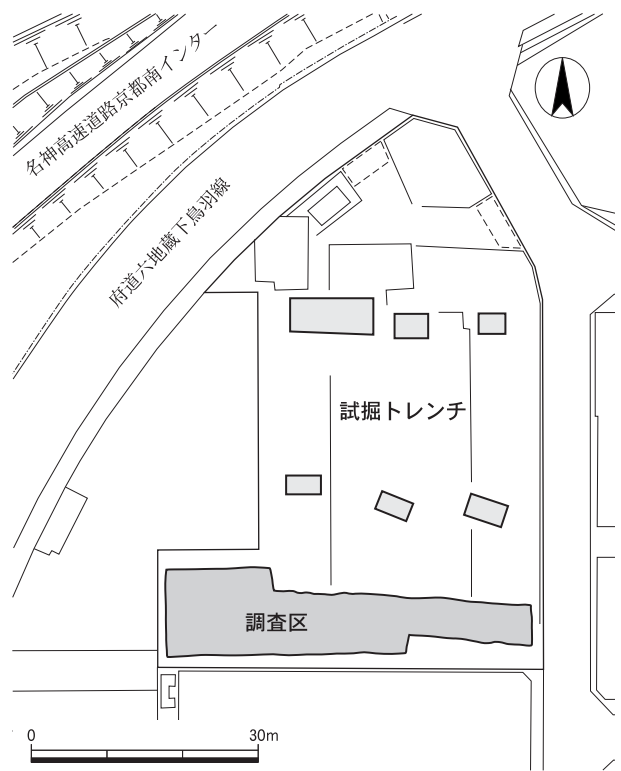


図213 調査区配置図（1：1,000）

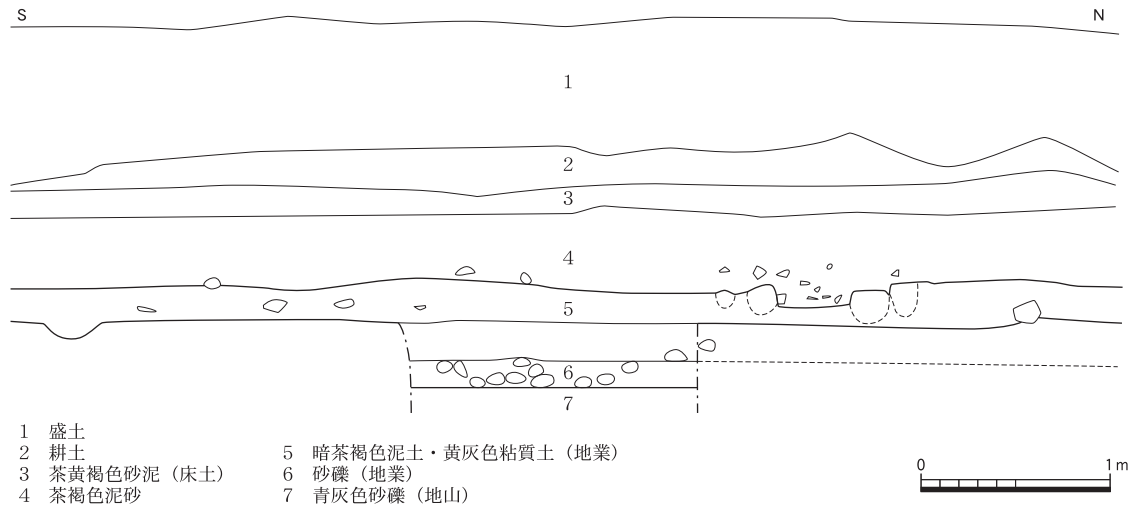


図214 西壁断面図 (1 : 40)

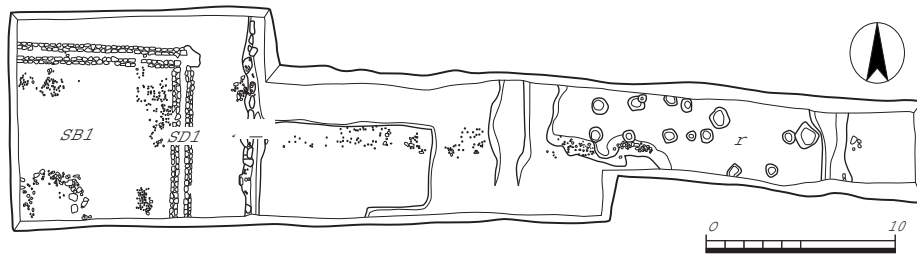


図215 南トレンチ遺構平面図 (1 : 400)

0.1mで、両側に河原石や花崗岩の切石を平坦面を上にして2列並べる。溝内外で瓦を多量に出土した。壇の約16m東側では池を検出した。肩口には軒瓦・丸瓦片が一括して認められた。また、池底で柱穴を東西4間×南北1間分検出し、橋と推定できる。遺構は平安時代後期に属する。

遺物 出土遺物には、土師器、須恵器、緑釉陶器、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦、金属釘などがある。瓦が大半で、他の遺物は少量である。時期は、古墳時代、平安時代前期、平安時代後期に分けられる。

小結 雨落溝を備えた建物は、今回の調査で初めて検出したが、建物規模などは明らかにできなかった。しかし、従来確認していた石敷遺構が建物の地業であることが証明できた。この建物は位置関係から、金剛心院に関係するものと推定できるが、どの建物に比定できるかは不明である。

『鳥羽離宮跡 国庫補助による発掘調査概要 昭和53年度』 1979年報告

53 鳥羽離宮跡44次調査

経過 本調査は、事務所建設工事に伴うもので、当地は鳥羽離宮東殿にあたるため、調査を実施した。

調査区は、南北10m、東西20mの長方形で、後に東に幅5m、長さ23m拡張した。重機で盛土・耕土・床土を掘削した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層耕土層(0.15m)、第2層床土層(0.1m)、第3層淡黄灰色粘質土層(0.1m)、第4層灰褐色粘質土層(0.2m)、第5層黄灰色砂層・暗灰色粘質土層の互層(0.2m)、第6層茶褐色砂礫層(地山)である。第4層上面で第1面の遺構を検出し、新(Ⅰ期)・旧(Ⅱ期)に分かれる。第6層上面で第2面の遺構(Ⅲ期)を検出した。

Ⅲ期の遺構は、調査区北西部で石組み(SX1・2)、中央から東側で石列(SX3)、南西部で石敷(SX4)を検出した。SX1は1m前後の石を千鳥状に配置し、周囲に粘土を置き、拳大の石を貼り付ける。SX2は同様の遺構で石がやや小さい。SX3は一辺0.8m前後の石を直線に約24m分並べたもので、南側は高く残る。SX4は南から北側に向かう斜面に0.05m大の小礫を敷き詰めたもので、西調査区外へ伸びる。遺構は平安時代後期に属する。

Ⅱ期の遺構は、全域で検出し、東西方向の素掘り溝である。溝北岸の一部に板と杭を組み合わせた護岸施設が認められた。室町時代から桃山時代に属する。

Ⅰ期の遺構には、調査区北側で検出した東西方向の溝がある。溝は近衛天皇陵の南辺に沿っており、南肩を検出し、幅0.25mで調査区外に続く。深さは0.5m以上である。陵の周囲を巡る壕と推定できる。護岸施設は認められない。溝埋土は木葉・小枝・種子などを含む有機物層が厚く堆積する。調査区南部で検出した溝は幅0.3m、深さ0.2mで埋土中に土師器・漆器が多数出土した。江戸時代に属する。

遺物 出土遺物には、土師器、瓦器、陶器、瓦、木製品などがある。木製品が大半を占め、他の遺物は少量である。木製品には、人形・下駄・箸・柿経・五輪塔婆などがある。時期は、室町時代である。瓦には、東海産の灰釉軒丸瓦・軒平瓦が見られる。

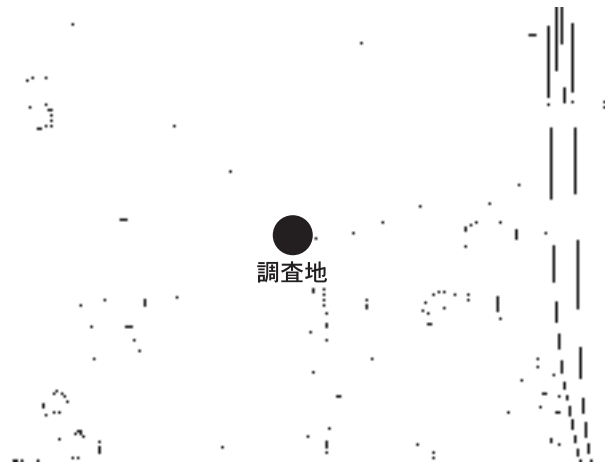


図216 調査位置図(1:5,000)

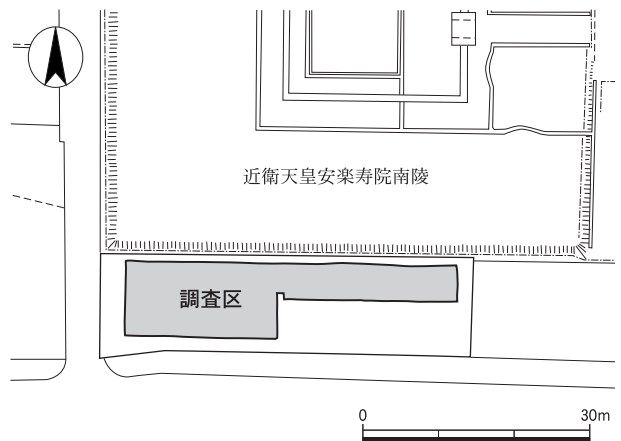


図217 調査区配置図(1:1,000)

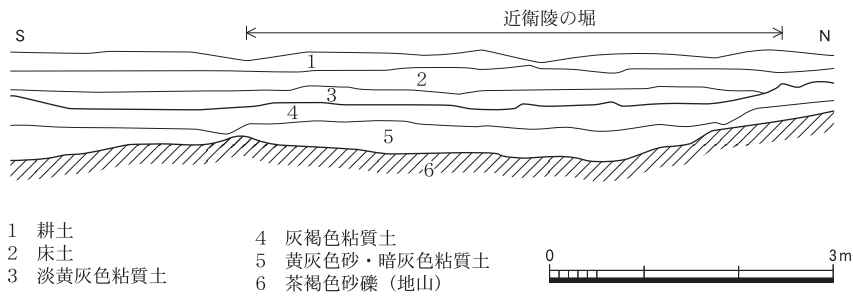


図218 西壁断面図（1：80）

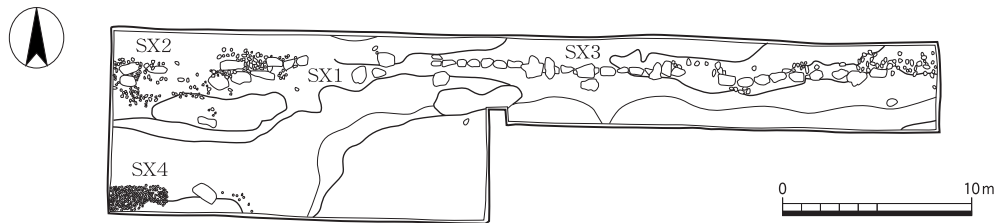


図219 遺構平面図（1：400）

小結 本調査で検出したSX1・2は、10・11次調査で検出した園池に関連したものと考えられる。東部検出石列SX3は、東殿庭園を構成する遺構と考えられるが、性格は不明である。

『鳥羽離宮跡 国庫補助による発掘調査概要 昭和53年度』 1979年報告

54 鳥羽離宮跡45次調査

経過 本調査は、ホテル新設工事に伴うもので、当地は鳥羽離宮田中殿にあたるため、調査を実施した。

西区の調査区は、南北46m、東西24mの長方形で、東区は幅3mの調査区を北側・南側は南北方向に、中央は東西方向に設定した。

遺構 西区の基本層序は、東側と西側で異なる。西部では、第1層耕土層(0.3m)、第2層灰色粘質土層(0.3m)、第3層茶褐色粘土層(地業層:0.1m)、第4層茶灰色粘土層(地業層:0.15m)、第5層礫層(地業層:0.6m)、第6層青灰色砂礫層(地山)である。東部では、第2層が石垣を境に厚く堆積し、その下に茶褐色泥砂層が堆積する。南側では石垣を境に青灰色粘質土層が堆積する。検出した遺構には、古墳時代後期のものと、平安時代後期のものとがある。また、遺構は伴わないが、平安時代前期の包含層を確認した。

古墳時代後期の遺構は、調査区北東部で竪穴住居2棟と弧状溝を検出した。範囲が狭いため住居は方形であるが規模は不明である。深さは0.1m残り、貼床はなく支柱穴が1箇所残る。古墳時代後期に属する。

平安時代後期の遺構は、北西部で南北約16m、東西11m、高さ0.3mの土壇(SB1)を検出した。上面では厚さ0.15mの茶褐色粘土層を盛り土する。西辺北部で0.6mの石を検出したが、礎石かど

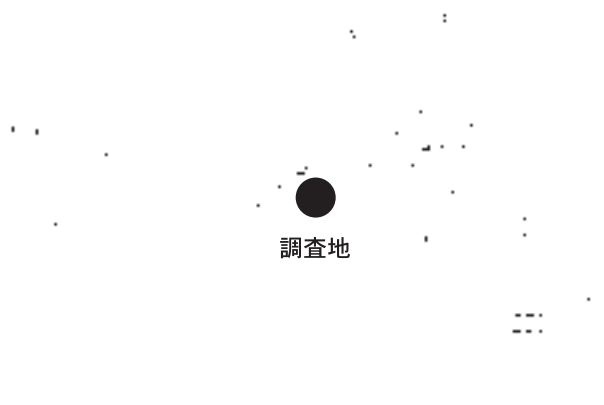


図220 調査位置図(1:5,000)

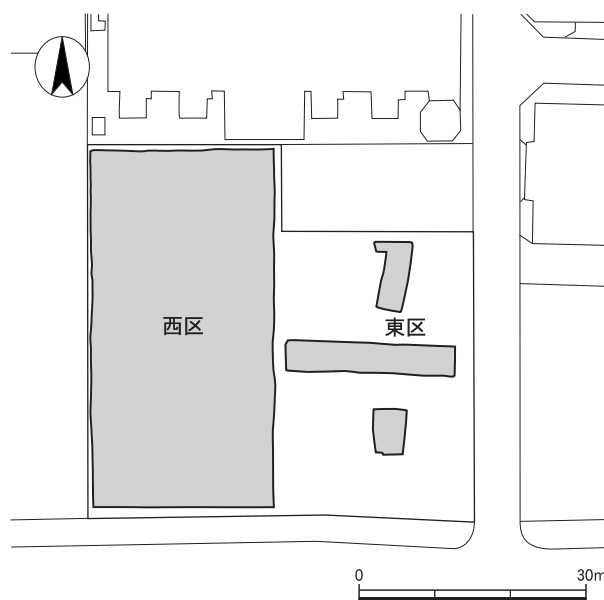


図221 調査区配置図(1:1,000)

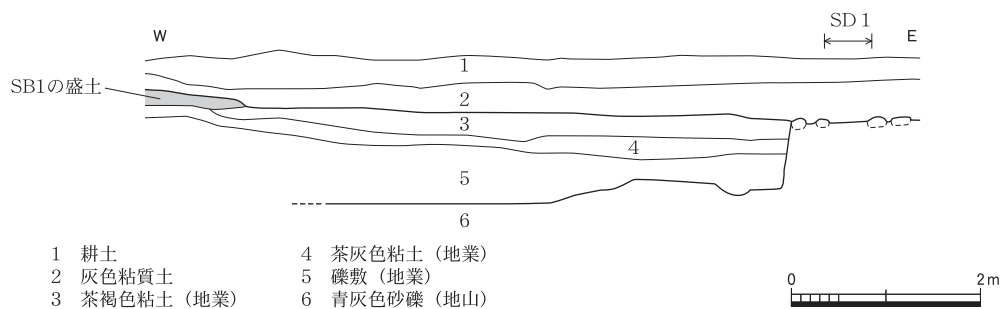


図222 西区北壁断面図(1:80)

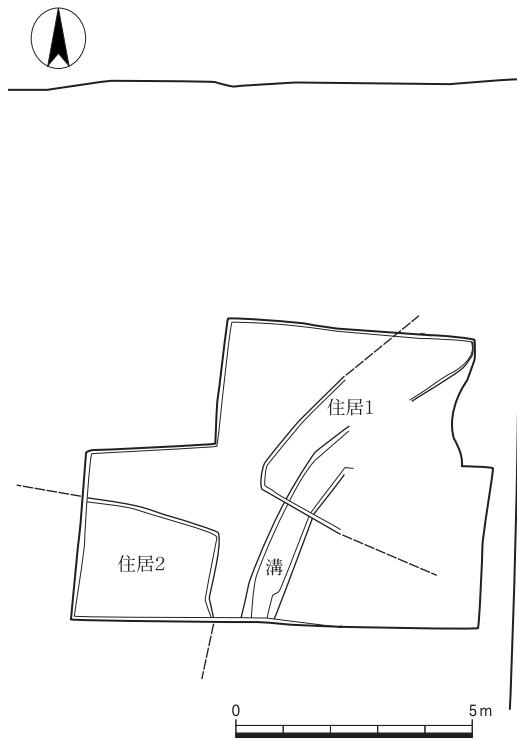


図223 西区下層遺構平面図 (1:160)

うか判断できない。また、北部で瓦溜 (SK1) を検出し、多量の瓦が出土した。土壇は掘込地業で造成され、範囲は石垣より内側である。掘込の底に、拳大の礫を2~3層固くつきかため、その上に第2・3層を積む。壇の内側約3.4mの

位置で、逆L字形の雨落溝 (SD1) を検出した。南北12m、東西8mを確認し、調査区外に続く。溝は幅0.34m、深さ0.2mで、両側に河原石や花崗岩の切石を平坦面を上にして2列並べる。溝内外で瓦が多量に出土した。壇の10m東側で逆L字形の溝 (SD2) を検出した。溝は断面コ字形で幅1.6m、深さ1.2mで、底部は北から南に傾斜する。埋土は暗青灰色粘質土である。

東区の基本層序は、第1層盛土層 (0.1m)、第2層淡茶褐色泥砂層 (0.2m)、第3層淡青灰色粘

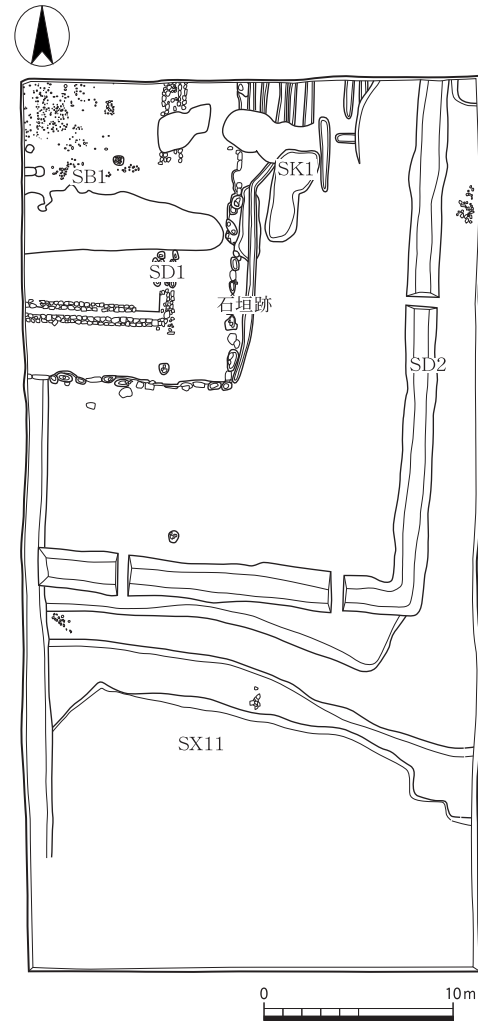


図224 西区上層遺構平面図 (1:400)

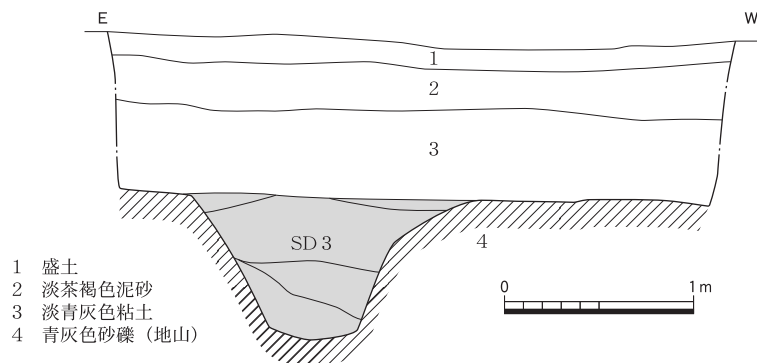


図225 東区南壁断面図 (1:40)

土層（0.5m）、第4層青灰色砂礫層（地山）である。第4層上面で遺構を検出した。

検出遺構は南北溝SD3で、幅1.8m、深さ1mである。南側は両側に開き、南端はSX11となり、南に向かって徐々に下がる。

遺物 出土遺物には、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦などがある。瓦が大半で、他の遺物は少量である。古墳時代の遺物は竪穴住居床面や整地層から土師器甕、須恵器甕・甗、平安時代前期の包含層からは土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器が出土した。平安時代後期の軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦がある。

小結 今回の調査では、43次調査で検出した建物の続きを確認した。しかし、基壇上面の削平が激しく、建物規模を知る手がかりは得られなかった。また、雨落溝の南北規模が43mであることが明らかになった。

『鳥羽離宮跡 国庫補助による発掘調査概要 昭和53年度』 1979年報告

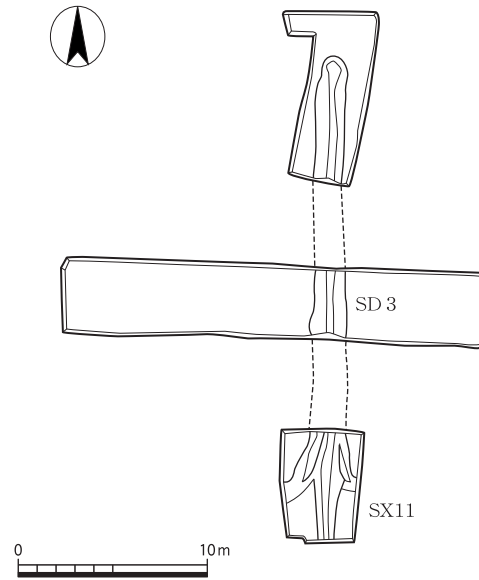


図226 東区遺構平面図（1：400）

55 鳥羽離宮跡46次調査

経過 本調査は、区画整理道路建設工事に伴うもので、当地は鳥羽離宮東殿にあたるため、調査を実施した。

調査区は、南北48m、東西12mの長方形である。重機で盛土・耕土・床土を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を実施した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層盛土層(0.8m)、第2層茶褐色泥土層(0.6m)、第3層赤褐色砂質土・茶褐色泥土の互層(第Ⅰ整地層：0.15m)、第4層灰褐色粘質土層(整地層：0.05m)、第5層茶灰色粘質土層(第Ⅱ整地層：0.15m)、第6層茶褐色粘質土(地山)である。第Ⅰ整地層は南側で厚く、北側に薄くなる。第6層上面でⅡ期の遺構を、第5層上面でⅠ期の遺構を検出した。

Ⅱ期の遺構には、井戸、建物、土壇などがある。南部で検出した井戸SE4601は、掘形方形で一辺約2.7m、深さ2.9m、底部に曲物を2段据える。井戸枠は一辺0.75mの木枠が認められた。埋土は2層に分かれ、上層は第Ⅱ整地層と同質で、下層は暗青灰色粘質土である。中央部では不整形の土壇SK4601を検出した。北部隅で礎石を検出し、21次調査で検出した建物SB2104に続く。時期は平安時代後期に属する。

Ⅰ期の遺構には、建物、溝、石列などがある。北部で検出した建物SB2103は、東西1間×南北2間確認し、東・南に延長する可能性がある。花崗岩の礎石が残り、南北間は3.6m・2.7m、東西間は3mである。中央部では溝SD4601を検出した。規模は、幅0.3m、深さ0.2mである。全域で土壇を検出した。南東隅では不整形で浅い土壇SK4603を検出し、土壇内からは完形の土師器が重なりあって出土した。また東西・南北の石列を検出した。時期は中世に属する

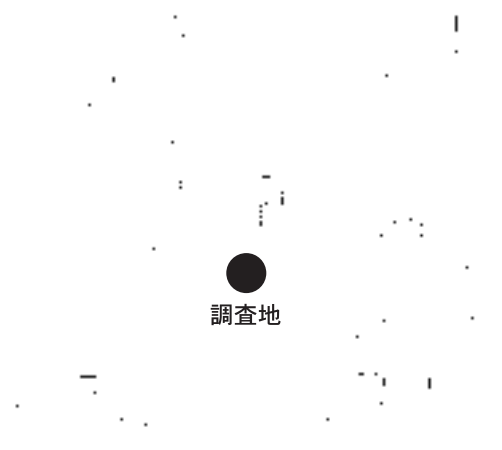


図227 調査位置図(1:5,000)

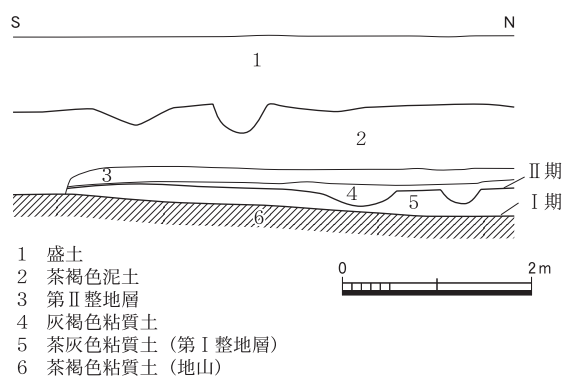


図228 西壁断面図(1:80)



図229 井戸SE4601断割り(北から)

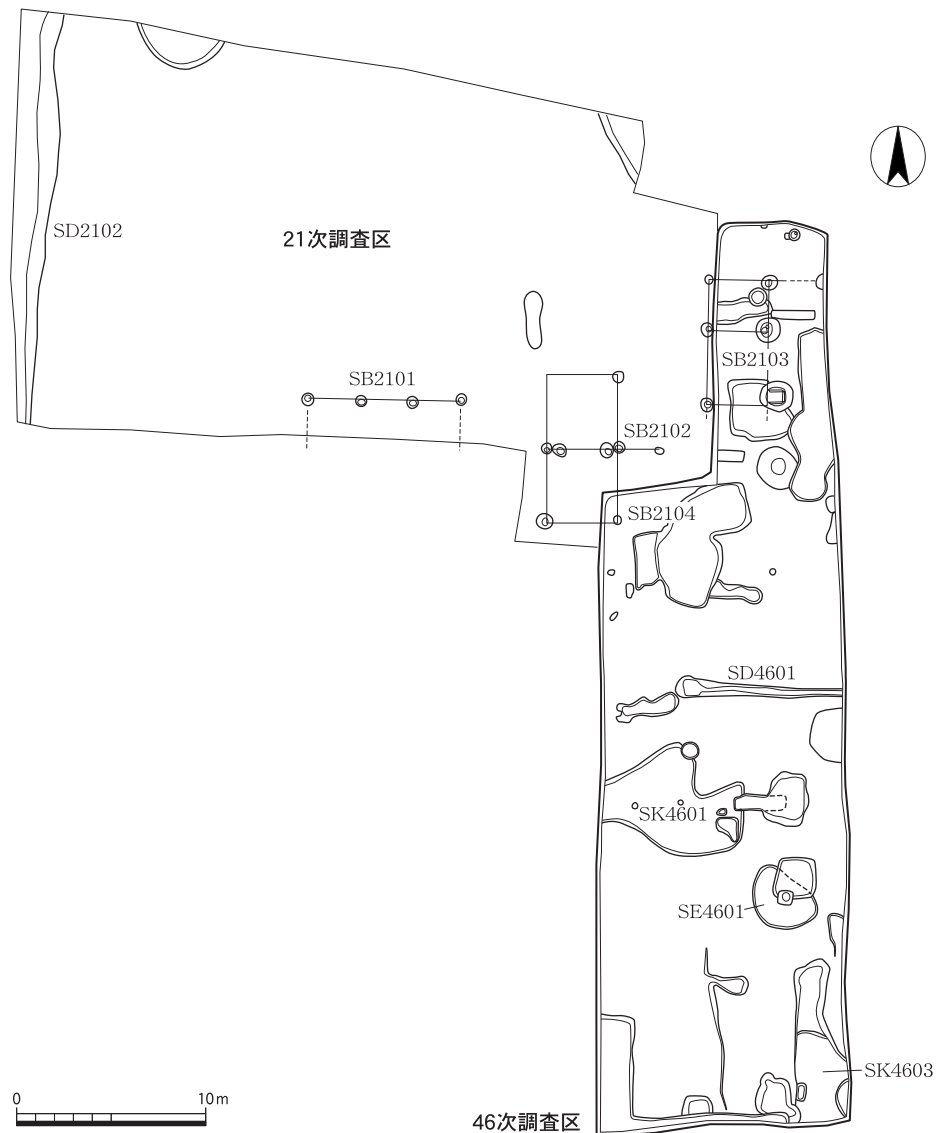


図230 遺構平面図（1：400）

遺物 出土遺物には、土師器、瓦器、黒色土器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦、木製品などがある。土器類は井戸・土壇から出土し、中でも土師器皿類が最も多く、次いで瓦器椀である。また、SK4601・SE4601では瓦器と黒色土器が伴出し、注目される。木製品はSE4601から箸・曲物・木の削り屑などがあり、特に箸の完形品が多数出土した。

小結 今回の調査では、21次調査で検出した建物の続きを確認したが、調査区が狭く、全体規模などは不明である。

また、検出した井戸・土壇などから出土した遺物の前後関係から、この付近が東殿内でも早くから造営されたと推定できる。

『鳥羽離宮跡 区画整理道路予定地内発掘調査概要 昭和53年度』 1979年報告

56 鳥羽離宮跡47次調査

経過 本調査は、内畑児童公園敷地拡張工事に伴うもので、当地は鳥羽離宮東殿にあたるため、調査を実施した。

調査区は、西区・東区2箇所あり、西区は南北12m、東西4.5m、東区は南北10.5m、東西4mである。

遺構 調査区の基本層序は、第1層盛土層(0.25m)、第2層耕土層(0.25m)、第3層淡茶褐色砂泥層(0.27m)、第4層茶褐色砂泥層(0.25m)、第5層黄灰色砂泥層(0.17m)、第6層黄灰色泥砂層(0.1m)、第7層茶褐色砂礫層(地山)である。第3層上面で第1面(・期)、第4層上面で第2面(、期)、第5層上面で第3面(」期)、第6層上面で第4面(「期)、第7層上面で第5面(。期)を検出した。

。期の遺構には、東西溝がある。溝埋土は青灰色粘質土で土師器皿が出土した。時期は平安時代後期から鎌倉時代に属する。

「期の遺構には、井戸、柱穴などがある。井戸は径約0.55m、深さ0.6mである。井戸枠は上部桶、下部曲物である。埋土から土師器、木製品が出土した。井戸の北側に素掘り東西溝が検出された。時期は、鎌倉時代から室町時代に属する。

」期の遺構には、建物、溝などがある。建物は梁間2間×桁行4間の東西棟で、梁間1間1.2m、桁行1間1.15mである。井戸は径約0.55m、深さ0.6mである。井戸枠は上部桶、下部曲物である。埋土から土師器、木製品が出土した。井戸の北側に素掘り東西溝が検出された。時期は、室町時代から桃山時代に属する。

、期の遺構には、建物などがある。建物の規模は遺存状態が悪いため明らかにできなかった。建物下の整地層(第4層)は慶長年間に豊臣家によってなされたものである。時期は、江戸時代に属する。

・期の遺構は、現代攪乱によってほとんど残っておらず所々に礎石が認められるだけである。時期は、江戸時代に属する。

遺物 出土遺物には、土師器、木製品などがある。土師器は、。期の溝から完形の皿が出土した。他には「期の井戸内埋土からも出土した。木製品は「期の井戸内埋土から出土した。井戸の構造物として上部で桶、下部で曲物を検出した。

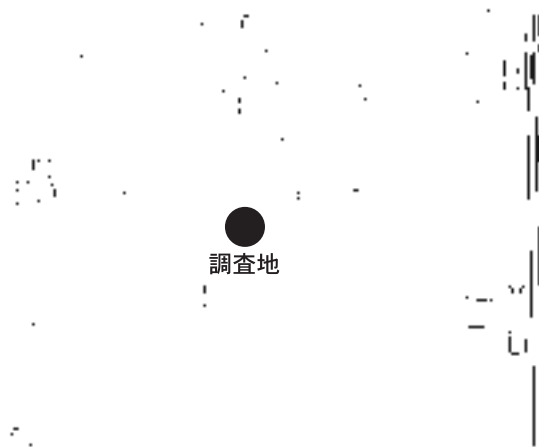


図231 調査位置図(1:5,000)

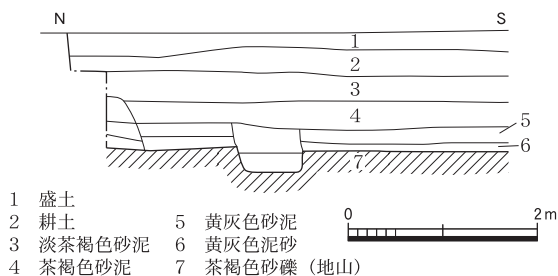


図232 西区東壁断面図(1:80)

小結 今回の調査では、平安時代後期から江戸時代までの各時期の遺構が検出され、当地域の変遷が明らかとなった。また、江戸時代の建物は安楽寿院十二ヶ院の妙音院と推定される場所にあたり、それに関連する建物と考えられる。

『鳥羽離宮跡 区画整理道路予定地内発掘調査概要 昭和53年度』 1979年報告



図233 Ⅱ期遺構平面図（1：150）

57 鳥羽離宮跡48次調査

経過 発掘調査は、給油所建設に先立って行ったものである。当地は鳥羽離宮東殿・泉殿の南方に位置し、園池に関わる遺構の存在が推定できた。

遺構・遺物 重機による現代盛土の掘削を行ったところ、地表下約2mで水成堆積の砂層を確認した。この砂層は調査地全面に広がっており、他の遺構はまったく確認できなかった。遺物は平安時代後期の土師器と瓦器片が少量出土したにすぎない。

小結 今回の調査所見から、当地は鳥羽離宮の園池の中であることが想定できた。鳥羽離宮園池の規模や旧鴨川との関係は重要な問題であり、池堆積を示す地点の広がりの確認はこれらの問題を解決していくためのデータとなろう。

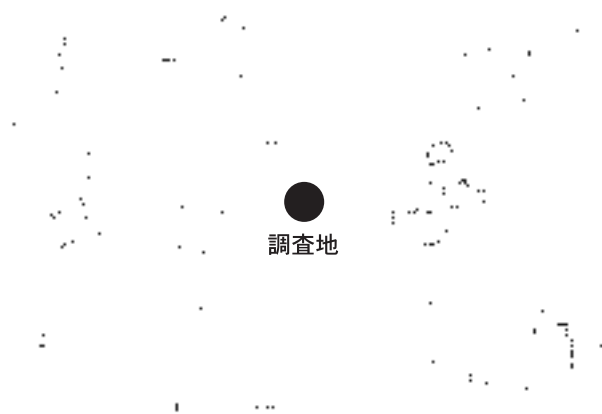


図234 調査位置図（1：5,000）



図235 調査付近航空写真（南から）

V 中臣遺跡

58 中臣遺跡12次調査

経過 今回の発掘調査は、宅地建設工事に伴うものである。当地域は、中臣遺跡の南西部にあたるため発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵上南西斜面に位置し、北東から南西に緩やかに傾斜する。中臣遺跡12次調査である。

調査は、調査地内に4箇所の調査区を設定した。手掘りで耕土・床土などを掘削し、その後遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査地の基本層序は、第1層耕土層(0.2m)、第2層灰褐色砂泥層(0.1m)、第3層暗褐色泥砂層(中世包含層:0.15m)、第4層茶褐色砂泥層(弥生時代から平安時代包含層:0.15m)、第5層黄褐色粘土層(地山)である。

第5層上面で遺構検出を試みたが、遺構は全く検出できなかった。

遺物 遺物には、弥生土器から中世の土器などがある。包含層などから出土したが、少量小片である。

小結 今回の調査では、遺構は検出できなかった。調査区の地山面は標高26m前後で、他地区の遺構面より約1m低くなっている。このため、遺物も少なく、遺構も検出できなかったと考えられ、この周辺は遺跡の中でもかなり低地に位置し、元々遺構は存在しなかったと考えられる。

『中臣遺跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1978年度』 1979年報告

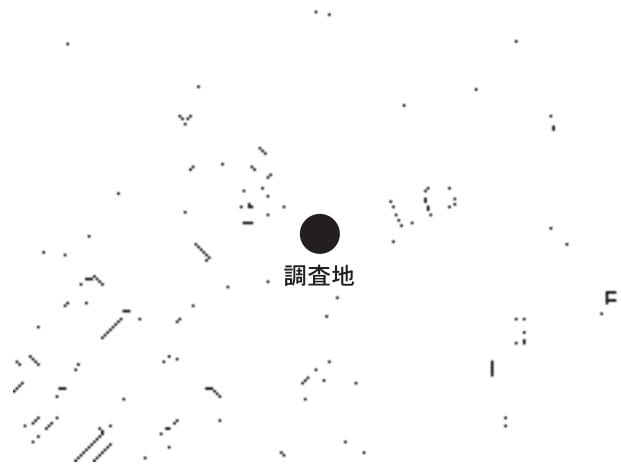


図236 調査位置図 (1:5,000)

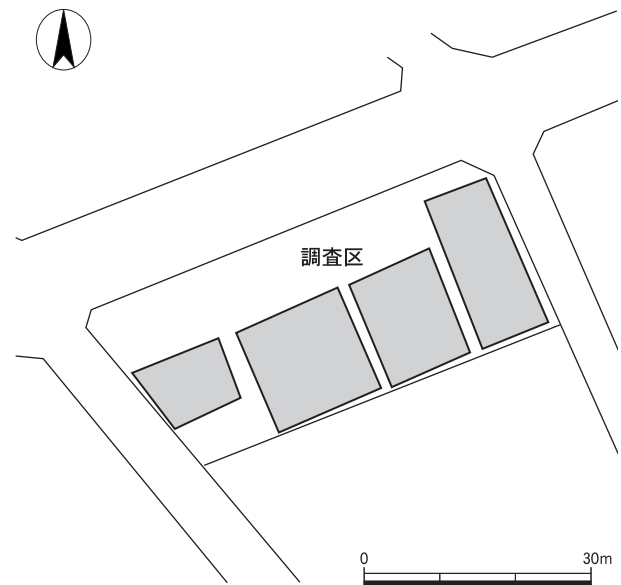


図237 調査区配置図 (1:1,000)

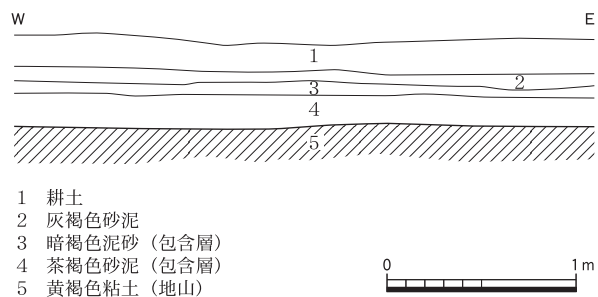


図238 北壁断面図 (1:40)

59 中臣遺跡13次調査

経過 今回の発掘調査は、運動公園予定地建設工事に伴うものである。当地域は、中臣遺跡の南部にあたるため発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵上南斜面の低位段丘及び氾濫原に位置する。中臣遺跡13次調査である。

調査は、調査地内に幅4m、南北71mの調査区を設定し、後に北側を拡張した。手掘りで耕土・床土などを掘削し、その後遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査地の基本層序は、第1層耕土層(0.28m)、第2層灰褐色砂泥層(弥生時代から古墳時代包含層:0.1m)、第3層黄褐色粘土層(地山)である。遺構は第3層上面で検出した。地山面は南(旧安祥寺川)に向かって下降し、耕土下-1.5mある。またトレンチ南端は山科川・旧安祥寺川の氾濫を示している。

調査区北部で南北溝、土壌などを検出した。溝は不定形で、幅0.5~0.6m、深さ0.03~0.05mである。

遺物 遺物には、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、ガラス玉などがある。ガラス玉は溝の上面で発見した。他の遺物は溝・包含層から出土した。

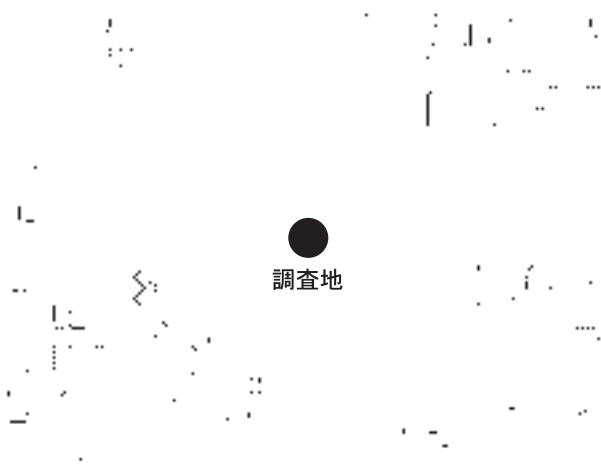


図239 調査位置図 (1:5,000)

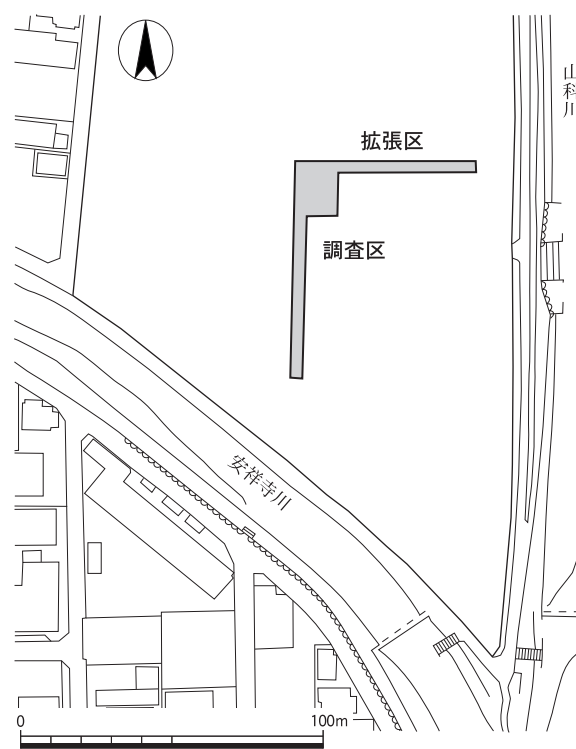


図240 調査区配置図 (1:2,500)

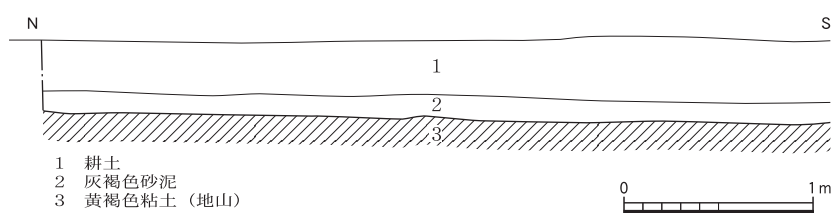


図241 東壁断面図 (1:40)

小結 今回の調査では、遺構はほとんど残存していなかったが、周辺の調査状況から考え、山科川・旧安祥寺川に挟まれた当地域付近は比較的氾濫などによる影響が少ないことが判明した。また、弥生時代末から古墳時代初期にかけての集落がこの地域にも広がっている可能性が高い。

『中臣遺跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1978年度』 1979年報告

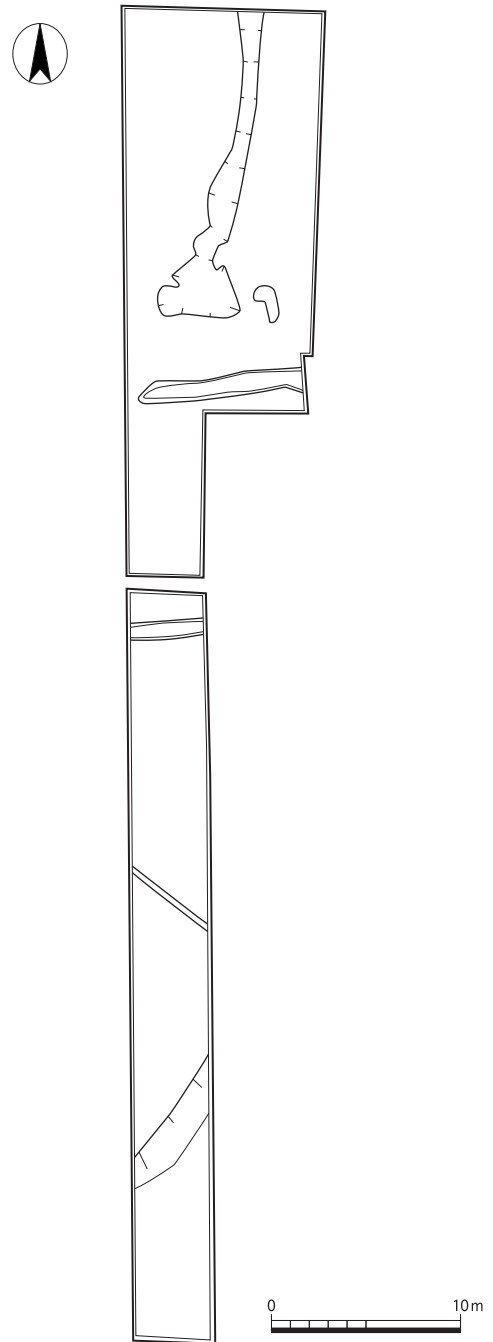


図242 遺構平面図 (1 : 400)

60 中臣遺跡14次調査

経過 今回の発掘調査は、個人住宅建設工事に伴うものである。当地域は、中臣遺跡の中央部にあたるため発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵南端中央部に位置する。中臣遺跡14次調査である。

調査は、幅3m・東西14m、幅3m・南北5.4mの調査区を設定し、随時拡張した。

遺構 調査地の基本層序は、第1層盛土層(0.5m)、第2層旧耕土層(0.25m)、第3層黄色粘質土層(地山)である。第3層上面で遺構を検出した。遺構は、竪穴住居、溝、柱穴などを検出した。

調査区中央で1号竪穴住居を検出した。隅丸方形で、東西5.2m、南北5.5m、深さ0.25mである。方向は北で真北から30°東へ振れる。床面は貼床を施す。主柱穴は4本で、掘形の形状は円形で径0.3~0.5m、深さ約0.3mである。西壁中央に、馬蹄形の竈が造りつけられ、袖は黄色粘質土で固め内部は良く焼ける。東壁沿いに不定形の土壇が2箇所あり、貯蔵穴と推定できる。北穴から土師器甕と須恵器杯の完形品が出土した。東柱間で砥石が出土した。壁溝は断面U字形で幅0.2m、深さ0.05m、

全周せず西壁・北壁・南壁で検出した。埋土は4層に分かれ、一時期に埋まったと考えられる。時期は6~7世紀である。

調査区東部で南北溝(SD2)を検出した。不定形で浅い。

遺物 遺物は、整理箱で3箱出土した。遺物には、土師器、須恵器、ミニチュア壺、砂岩製砥石などがある。竪穴住居および溝などから出土した。

小結 今回の調査では、竪穴住居を1棟しか検出できなかったが、他に竪穴住居が存在する可能性がある。これまで発見例は丘陵の下の平坦地が大部分で、丘陵上では3例目である。しかし、現在宮道烈子墓とされているものは古墳である可能性もあるので、同時期だとすると竪穴住居と古墳が近接し問題点が残る。

『中臣遺跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1978年度』 1979年報告

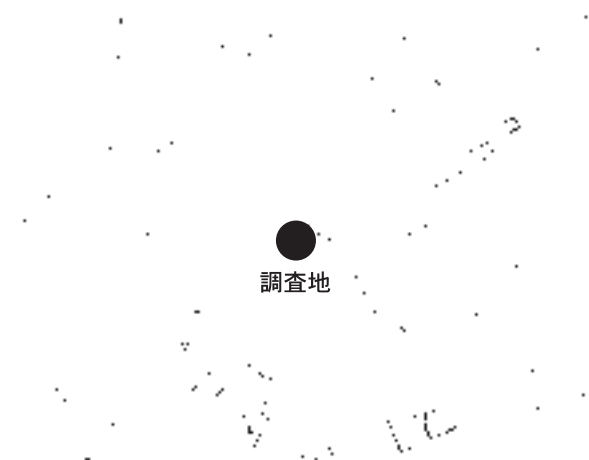


図243 調査位置図(1:5,000)

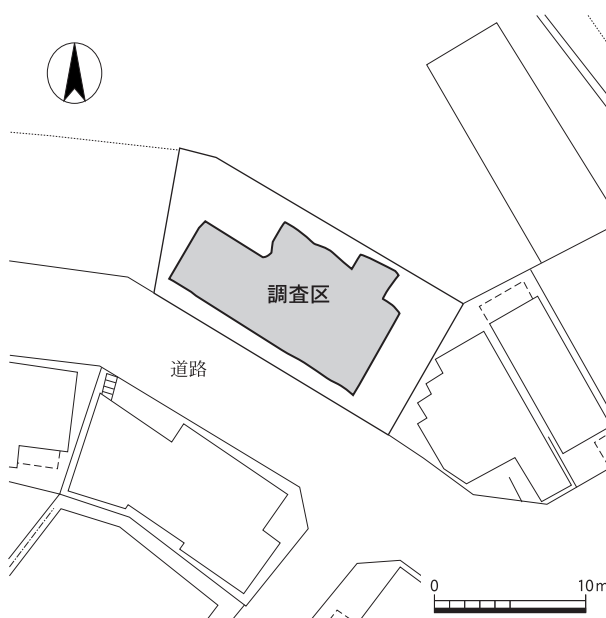


図244 調査区配置図(1:500)

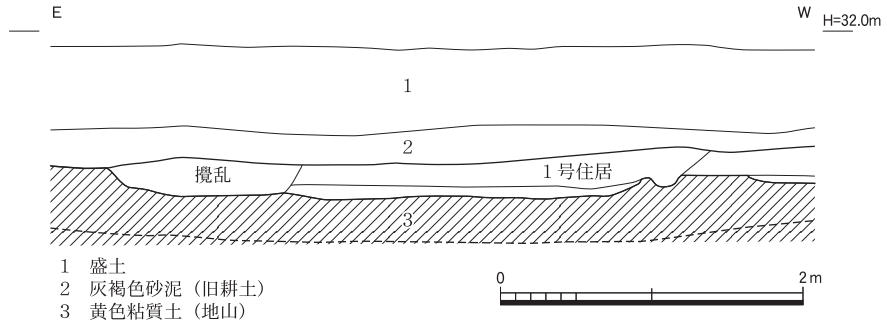


图245 南壁断面图 (1 : 50)

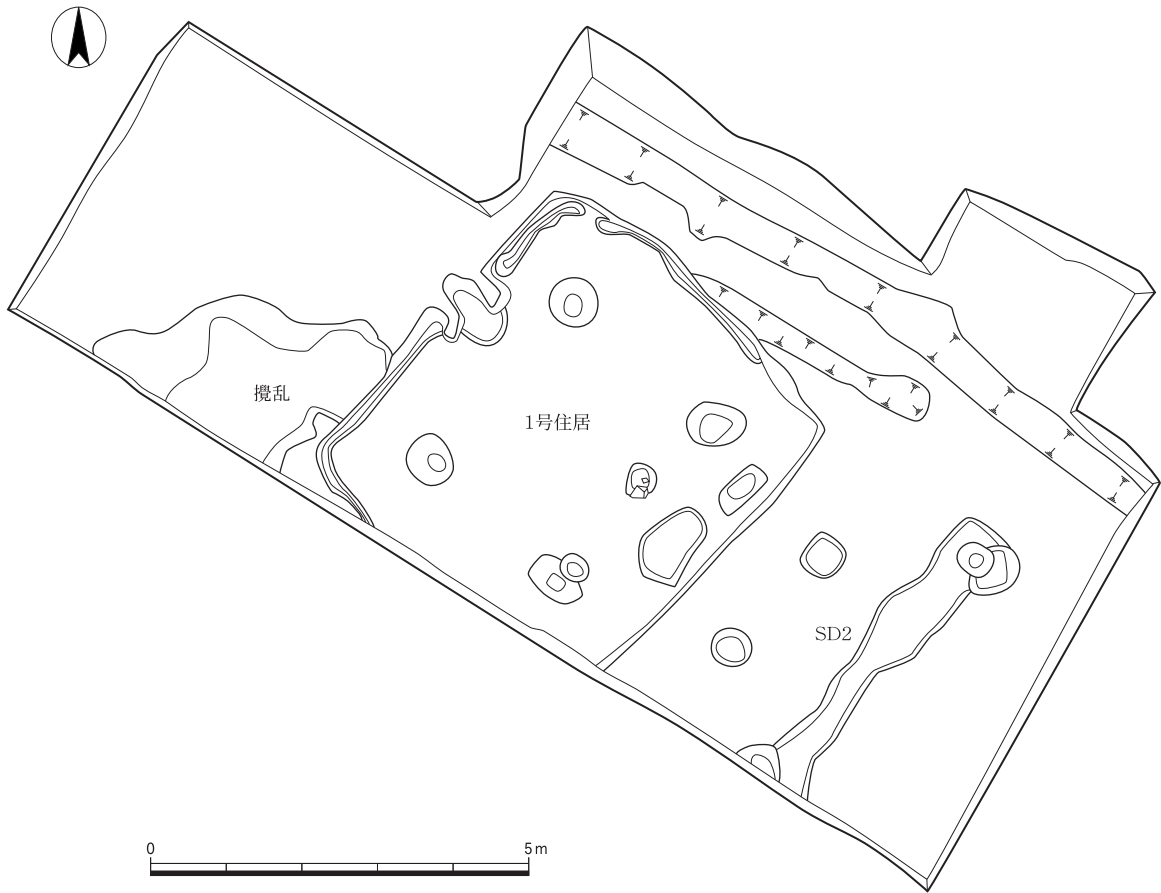


图246 遺構平面図 (1 : 100)

61 中臣遺跡15次調査

経過 今回の発掘調査は、住宅建設工事に伴うものである。当地域は、中臣遺跡の南西部にあたるため発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵西側の氾濫原、旧安祥寺川左岸に位置する。中臣遺跡15次調査である。

調査は、調査地内に東西4m、南北16mの調査区を設定し、随時拡張した。手掘りで耕土・床土などを掘削し、その後遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査地の基本層序は、第1層耕土層(0.1m)、第2層灰褐色砂泥層(耕土2:0.2m)、第3層緑灰色砂層(0.15m)、第4層灰褐色

砂泥層(旧耕土3:0.2m)、第5層暗褐色混礫泥砂層(0.15m)、第6層黄褐色粘土層(地山)である。第6層は調査区南側で急に低くなり、付近の調査区と同様である。遺構は第6層上面で検出した。

調査区北部で方形周溝墓を検出した。方位は北で西に振れる。南北7m、東西6.8mで、溝は断面U字形で幅約0.75m、深さ約0.3mで、上面は削平され主体部は検出できなかった。溝埋土は黒褐色混礫粘土・暗黄灰色粘土である。出土遺物は、南溝と東溝に集中し、すべて溝底より約0.05m程上層に散乱した状態である。遺物は小破片ばかりである。時期は弥生時代第Ⅰ様式末である。

遺物 遺物には、弥生土器、土師器などがある。遺物は、方形周溝墓からまとまって出土し、他の遺構からは少ない。器種には、壺・甕・手焙型土器・鉢などがある。

小結 調査では、方形周溝墓1基を検出した。これまでの調査では、丘陵上の1次調査で方形周溝墓を1基(第Ⅰ様式)検出しているものの、時期が異なり、一群のものとは考えられない。また、既往の調査では同時期の集落が栗栖野丘陵を取り巻くように位置しているが、今回の調査で確認した方形周溝墓はさらに低地に立地している点で注目できる。1976年の調査で確認した溝と合わせて当地域に墓域が設定できるならば、弥生時代から古墳時代の集落変遷を考察する上で重要資料となろう。

『中臣遺跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1978年度』 1979年報告

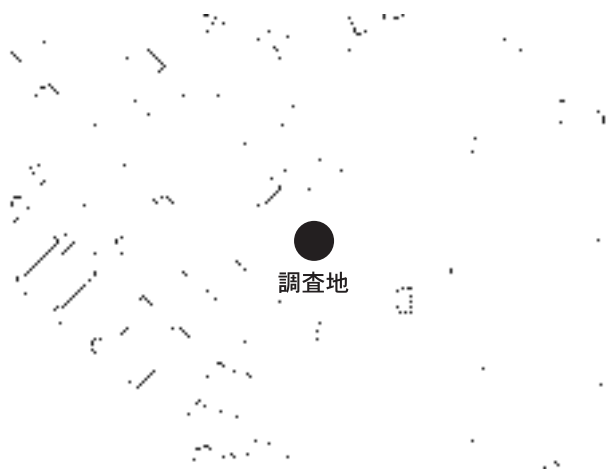


図247 調査位置図(1:5,000)

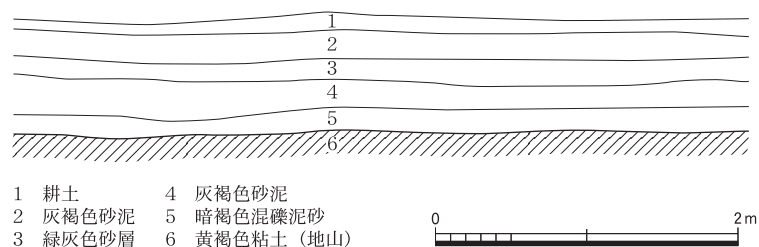


図248 北壁断面図(1:50)

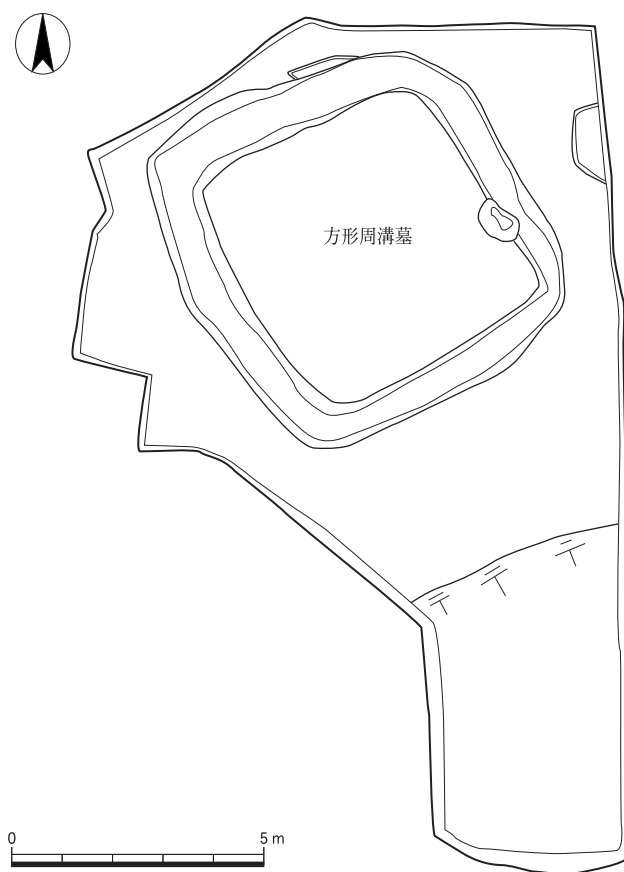


图249 遺構平面図 (1 : 150)

62 中臣遺跡16次調査

経過 今回の発掘調査は、土地区画整理道路23・24・25号線建設工事に伴うものである。当地域は、中臣遺跡の南東部にあたるため発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵東裾部から平坦地に位置し、山科川の西側にあたる。中臣遺跡16次調査である。

調査は、予定地内の各道路に沿って幅約6mの調査区を設定し、随時拡張した。手掘りで耕土・床土などを掘削し、その後遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査地の基本層序は、23・24号道路交差点北側では、第1層耕土層（0.15m）、第2層床土層（0.05m）、第3層黄褐色砂礫層（地山）である。

23号南側および24・25号道路では、第1層耕土層（0.15m）、第2層床土層（0.05m）、第3層旧耕土層（0.1m）、第4層旧床土層（0.15m）、第5層暗茶褐色砂泥層（0.25m）、第6層黒褐色砂泥層（0.25m）、第7層黒色砂泥層（地山）である。

遺構は、23・24号道路交差点北側では第3層で検出した。25号道路では、第6層上面で第1面の遺構、第7層上面で第2面の遺構を検出した。

23号道路では、25号道路交差点南側で7号竪穴住居、掘立柱建物SB3を検出した。7号竪穴住居は長方形で5.1m×4mである。

支柱穴は4本である。西壁中央に竈の痕跡が残り、炭と焼土が散在する。竈の北側に貯蔵穴があり、埋土中から須恵器杯身、土師器甕が出土した。壁溝は断面U字形で幅0.2～0.3m、深さ0.1mで、土師器が出土した。SB3は柱穴を南北4間検出したが、東側が7号竪穴住居に削平され、規模は不明である。

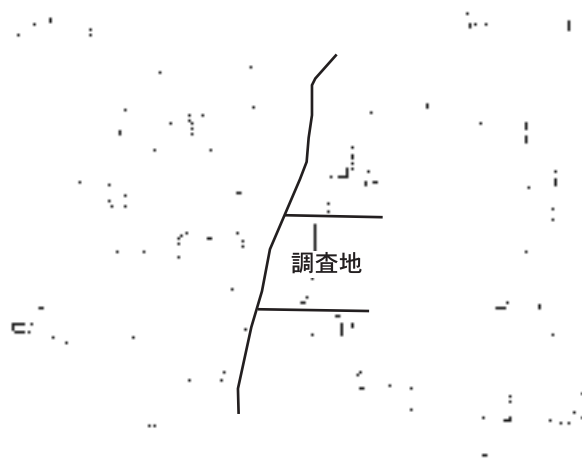


図250 調査位置図（1：5,000）

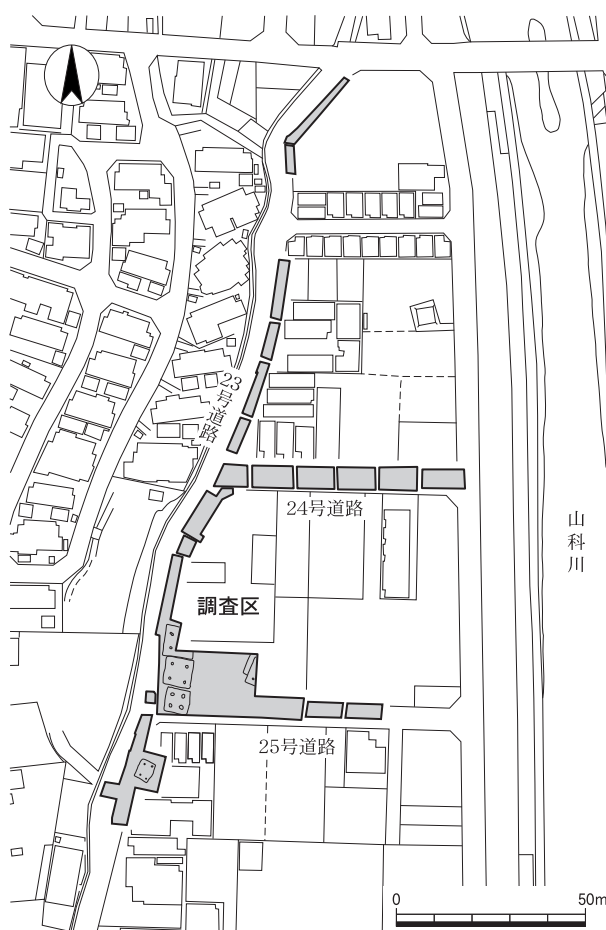


図251 調査区配置図（1：2,000）

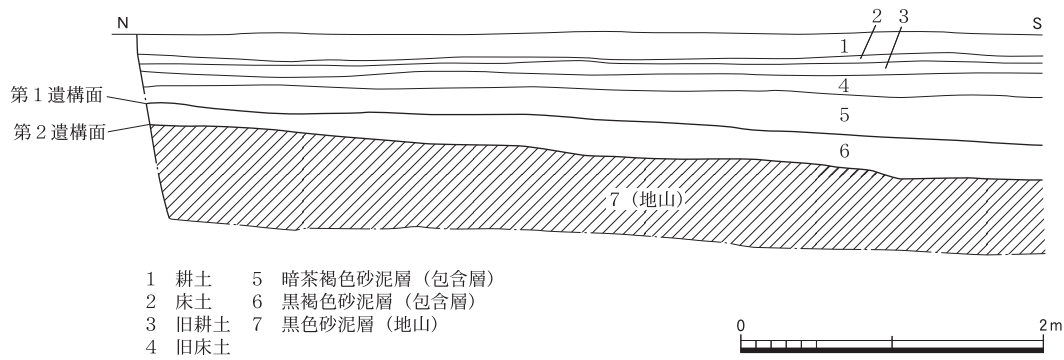


図252 25号道路4区拡張区東壁断面図 (1 : 50)

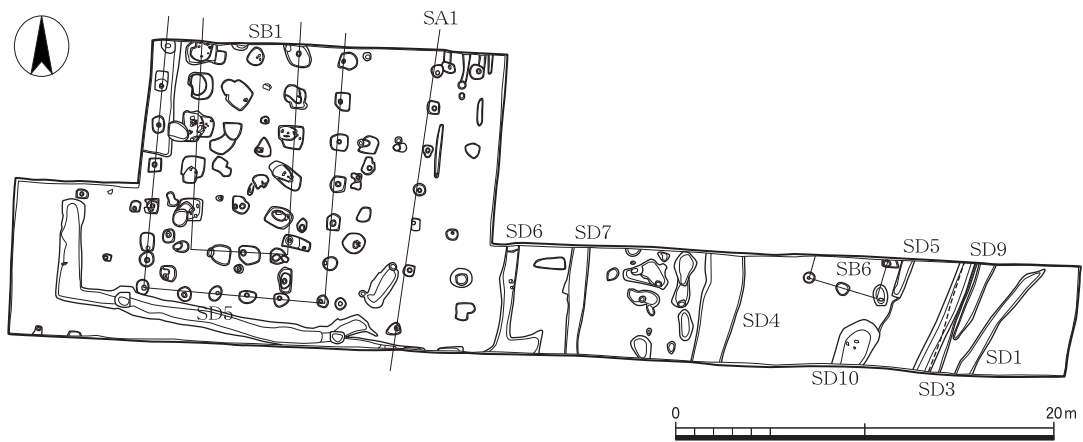


図253 25号道路第1面遺構平面図 (1 : 400)



図254 25号道路第2-1面遺構平面図 (1 : 400)

24号道路では、東側20mは川の氾濫が見られるが、西側では9号竪穴住居を検出した。9号竪穴住居は方形で東西4.5m×南北4.7m、上面が削平を受ける。支柱穴は4本で、掘形は円形で径0.3m、深さ0.3mである。西壁中央に馬蹄形の竈が造りつけられる。壁溝は断面U字形で幅約0.2m、

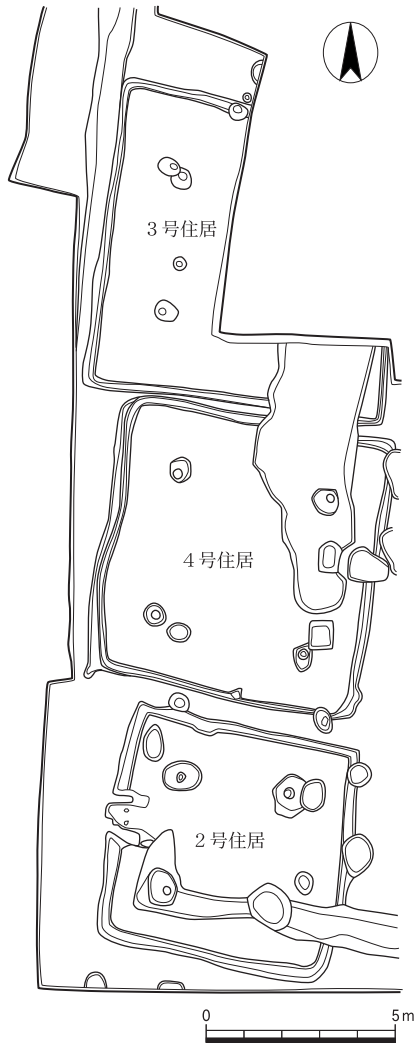
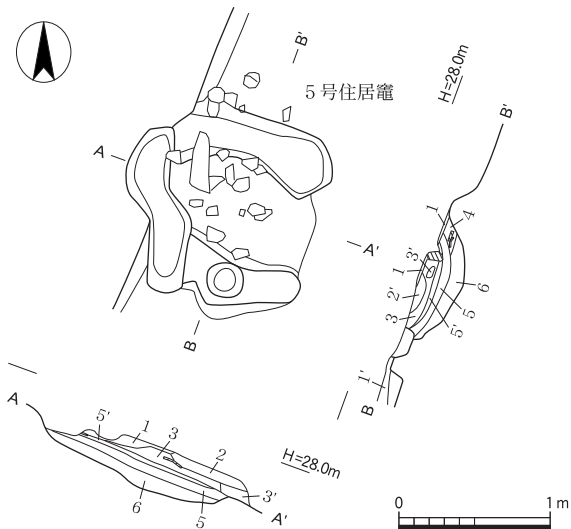


図255 2～4号住居平面図（1：200）

深さ0.05mである。北壁に接し土壌があり、埋土中から磨製石斧、須恵器小片が出土した。

25号道路第1面では、西側で掘立柱建物（SB1）を検出した。東西3間×南北5間以上の南北棟で3面に庇が付き、北に続く。梁間1.7m、桁行2.1m、東庇出2.4m、南西庇出2.1mである。母屋柱穴掘形は正方形で一辺1.2m、庇柱穴掘形は正方形で一辺0.6mである。建物の東側5mに南北柵SA1、南・西側に溝SD5（幅約1m、深約0.5m）があり、建物に付属すると考えられる。東側で建物SB6を検出した。東西2間×南北1間以上で北に続く。梁間・桁行1.8mである。東側では、南北溝を数条（SD1～9）検出した。いずれも北西から南西方向を向き、規模は一定していない。中央部やその東側で土壌を多数検出した。いずれも不定形で、規模は様々である。時期は奈良時代に属する。

第2面では、掘立柱建物群（2-1面）と竪穴住居群（2-2面）を重複して検出した。掘立柱建物は西側に集中し、方向はいずれも北で東に振れる。SB2は南北3間×東西3間以上の東西棟で、東に続く。梁間1.5m、桁行1.7mである。SB4はSB2に切られ、南北3間以上×東西2間の南北棟で、南に続く。梁間・桁行共に



- | | |
|-----------------|----------------------|
| 1 暗褐色砂泥（炭・焼土含む） | 3' 赤褐色砂泥（焼土・炭を多量に含む） |
| 1' 1層+地山粘土ブロック | 4 焼土（硬い） |
| 2 灰褐色泥砂（炭・焼土含む） | 5 炭・焼土層 |
| 2' 2層+地山粘土ブロック | 5' 炭化物層 |
| 3 焼土 | 6 褐色泥砂（焼土・炭を含み焼けている） |

図256 5・6号住居実測図（1：200、1：50）

不揃いである。SB5は南北2間以上×東西3間の南北棟で、南に続く。梁間・桁行共に1.5mである。SB7は3号・4号竪穴住居を切り込んだもので、南北5間×東西2間以上の東西棟で、梁間1.9m、桁行1.7mである。SB8は4号竪穴住居の下から検出したもので、南北3間×東西5間の東西棟で、梁間・桁行共に不揃いである。

竪穴住居は西端と中央に分かれ、西端では南北に3号・4号・2号住居と並ぶ。方向はいずれも北で東へ振れる。3号住居は正方形で、一辺8.1m、深さ0.2mである。支柱穴は2本確認し、掘形は円形で径0.5m、深さ0.4mである。竈は確認できなかった。壁溝は断面U字形で幅0.2m、深さ0.1mで、土器小片と「正」と刻まれた石製品が出土した。4号住居は正方形で、一辺7.3m、深さ0.1mである。支柱穴は4本で、掘形は円形で径0.6m、深さ0.5mである。竈は確認できなかった。壁溝は断面U字形で幅0.2～0.3m、深さ0.1mで、完形の須恵器高杯や土器小片が出土した。2号住居は正方形で、一辺6.2m、深さ0.5mである。支柱穴は4本で、掘形は円形で径0.8m、深さ0.5mである。西壁中央に馬蹄形の竈が造りつけられ、袖は黄褐色粘土で固め先端に石を立てる。内部に炭と焼土が堆積する。竈の北側に貯蔵穴があり、埋土中から須恵器杯、土師器甕が出土した。壁溝は断面U字形で幅0.25m、深さ0.1mで、須恵器、土師器が出土した。

2号住居下層から8号住居を検出した。南側は未調査であるが、方形で東西6.7mである。支柱穴は4本で、掘形は円形で径0.4～0.6m、深さ0.3mである。

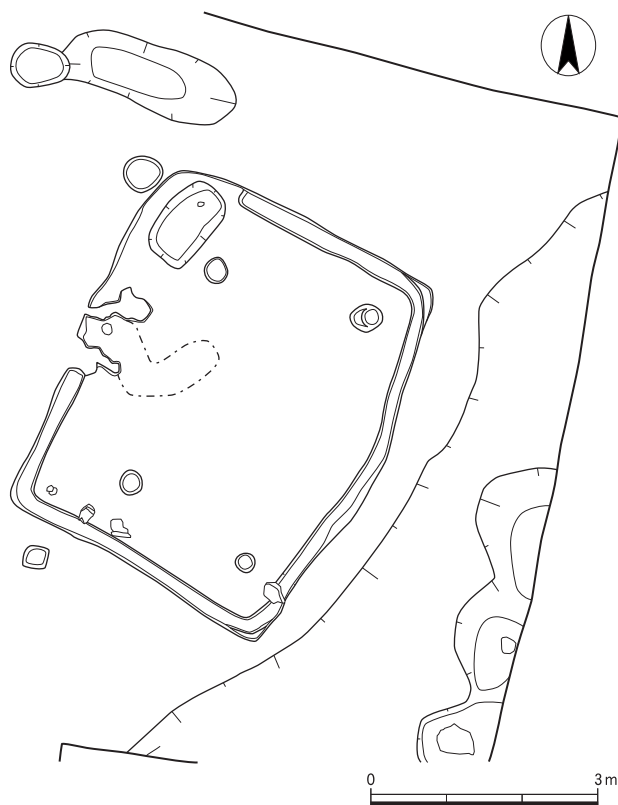


図257 7号住居平面図(1:100)

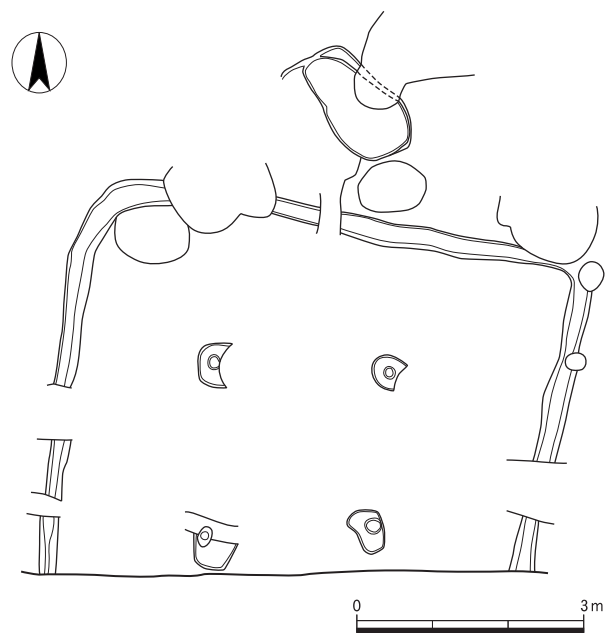


図258 8号住居平面図(1:100)

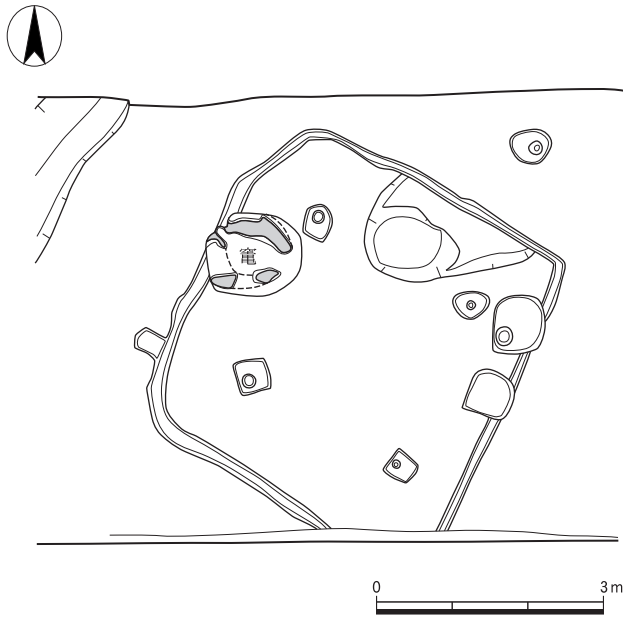


図259 9号住居平面図（1：100）

中央では5号・6号住居を重複して検出した。5号住居は方形で、一辺7.1mで残りは悪い。主柱穴は1本確認し、掘形は円形で径0.4m、深さ0.5mである。竈が西壁中央やや北側に造りつけられ、袖は黄褐色粘土で固め先端に石を立てる。内部に焼土が堆積する。竈北側に須恵器杯身が完形で出土した。壁溝は断面U字形で幅0.2～0.25m、深さ0.06mである。6号住居は方形で、上面は削平を受け残りは悪い。壁溝は断面U字形で幅0.2m、深さ0.05mである。

遺物 遺物には、弥生土器、土師器、

須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、石製品などがある。遺物の主体は、飛鳥時代から奈良時代の土器類で、他の時期のものは少ない。第6層からは飛鳥時代から奈良時代初期のものが多数出土した。

小結 今回の調査では、飛鳥時代から奈良時代の掘立柱建物・竪穴住居などの遺構を多数検出した。ただ、竪穴住居と掘立柱建物の時期差や変遷過程については不明な点が多い。また、これまで今調査区の周辺で検出していた縄文時代の遺構・遺物は全く検出できなかった。さらに旧石器時代の有舌尖頭器や古墳時代の遺物が出土し、当地域の遺跡の変遷を考える上で貴重な資料となった。

『中臣遺跡 建設省国庫補助事業による発掘調査の概要 1978年度』 1979年報告

63 中臣遺跡17次調査

経過 今回の発掘調査は、宅地建設工事に伴うものである。当地域は、中臣遺跡の南東部にあたるため発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵南端部に位置し、北から南へ、東から西に大きく傾斜し、段がある。中臣遺跡17次調査である。

調査は、調査地内に幅4m、長さ10～12mの調査区を2箇所設定した。手掘りで耕土・床土などを掘削し、その後遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査地の基本層序は、第1層耕土層(0.15m)、第2層褐色砂泥層(0.12m)、第3層黄褐色粘土層(地山)である。

第3層上面で遺構検出を試みたが、遺構は全く検出できなかった。

遺物 遺物は、包含層から須恵器、土師器などの小片が出土した。時期は6世紀末である。

小結 今回の調査では、遺構は検出できなかった。しかし、1977年度に調査を行った調査区西側の丘陵より一段下がった水田では、平安時代の掘立柱建物・井戸・溝などが検出されており、本調査地はかなり削平を受けていたと考えられる。

『中臣遺跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1978年度』 1979年報告

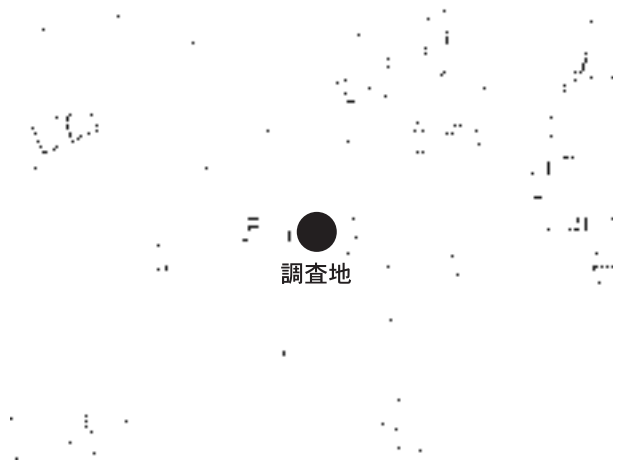


図260 調査位置図 (1 : 5,000)

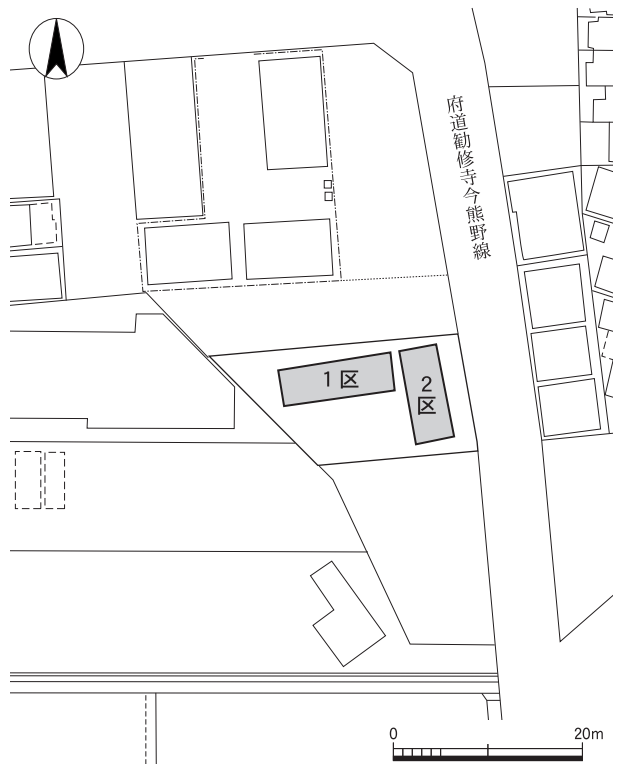


図261 調査区配置図 (1 : 800)

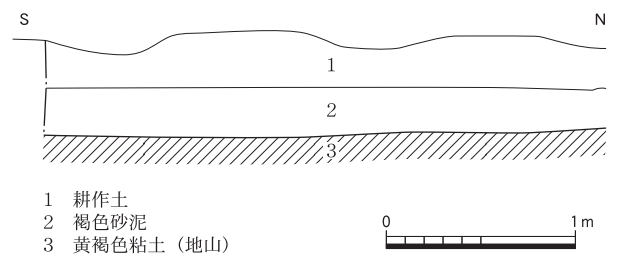


図262 2区西壁断面図 (1 : 40)

64 中臣遺跡18次調査

経過 今回の発掘調査は、宅地建設工事に伴うものである。当地域は、中臣遺跡の南西部にあたるため発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵上南西斜面に位置し、北東から南西に緩やかに傾斜する。中臣遺跡18次調査である。

調査は、調査地内に東西5m・南北7m、東西5m・幅2mの2箇所の調査区を設定した。手掘りで耕土・床土などを掘削し、その後遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査地の基本層序は、第1層耕土層1(0.25m)、第2層耕土層2(0.15m)、第3層砂礫層(床土:0.05m)、第4層耕土層3(0.15m)、第5層黒色砂泥層(包含層:0.2m)、第6層黄灰褐色砂泥層(地山)である。

第6層上面で遺構検出を試みたが、遺構は全く検出できなかった。

遺物 遺物は、第5層から6世紀の須恵器片、縄文時代後期の土器片が、各1点出土した。

小結 今回の調査では、遺構は検出できなかった。調査区の北側の12次調査や、東側の7次調査でも遺構が確認されていないので、この周辺は遺跡の中でもかなり低地に位置し、元々遺構は存在しなかったと考えられる。

『中臣遺跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1978年度』 1979年報告

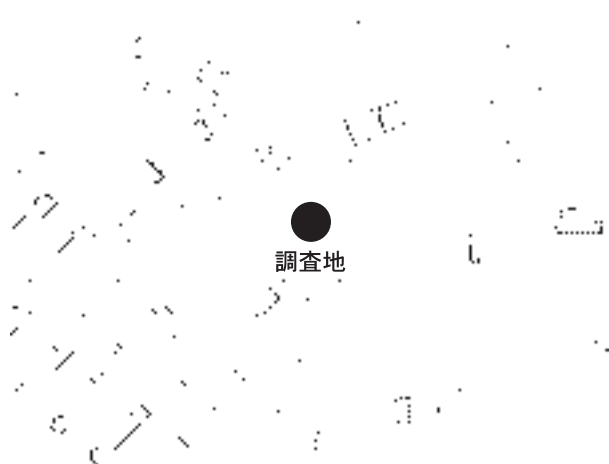


図263 調査位置図 (1:5,000)

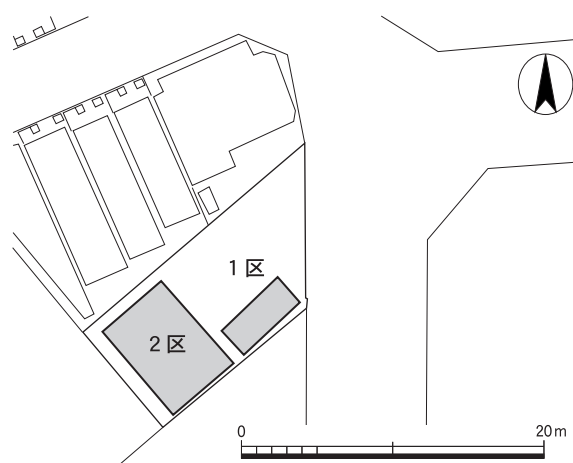


図264 調査区配置図 (1:500)

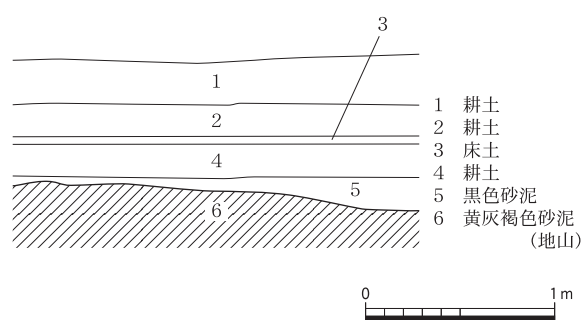


図265 2区南壁断面図 (1:40)

VI 長岡京跡

65 長岡京左京四條四坊

経過 発掘調査は、久我変電所新設工事に先立って行ったものである。当研究所による長岡京左京域の2次調査にあたり、長岡京期の遺構の有無を明らかにするために調査を行った。

遺構・遺物 調査地の基本層序は、盛土が1.3~1.5mあり、その下層に旧水田耕作土の灰褐色粘土が1m前後堆積する。さらに、近世の水田層（淡茶灰色粘土・淡黄灰色粘土・青灰色粘土）が基盤層を掘り込んで0.4~0.6m堆積しており、遺構面はほとんど削平を受けた状態であった。また、調査地西半部では現代まで繋がる川の痕跡を検出したため、長岡京期の遺構はまったく確認できなかった。

小結 今回の調査では、近世以降の削平によって、長岡京期の遺構は遺物も含めて検出できなかった。

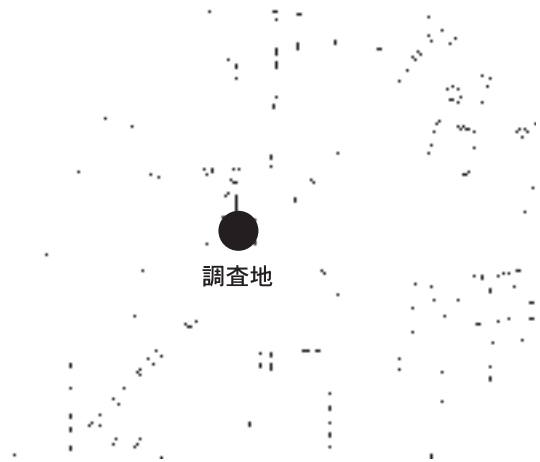


図266 調査位置図 (1 : 5,000)

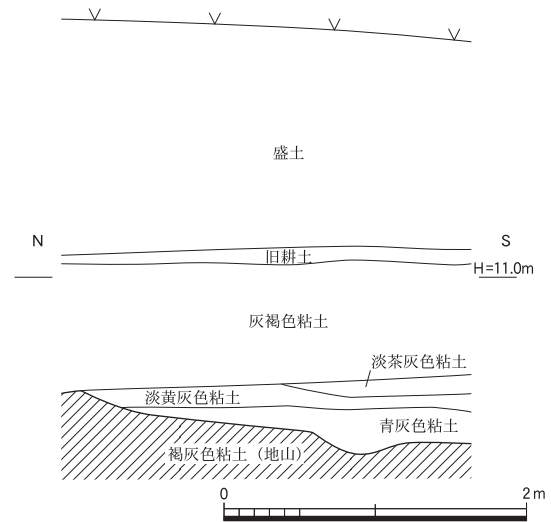


図267 東壁断面図 (1 : 50)

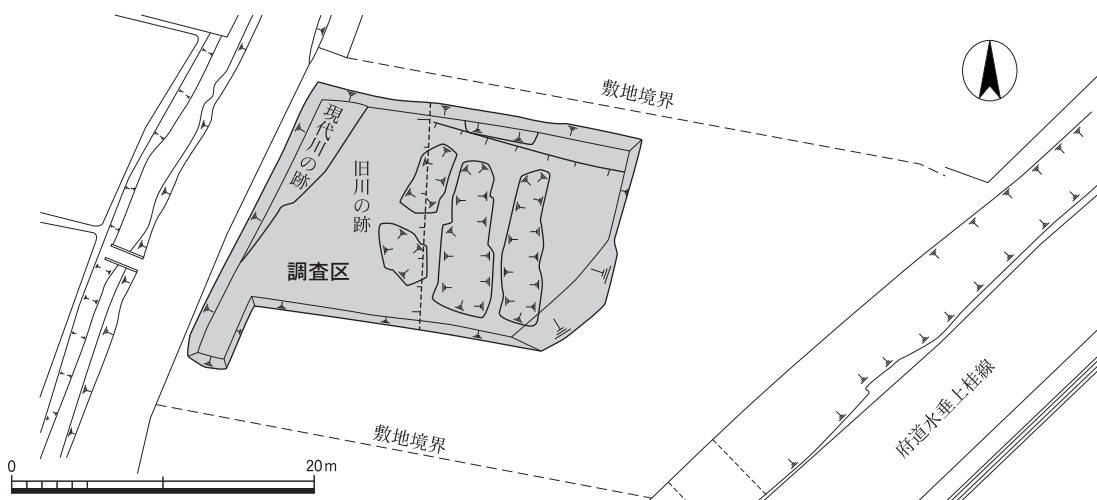


図268 調査区および遺構配置図 (1 : 500)

Ⅶ その他の遺跡

66 松ヶ崎廃寺

経過 本調査は、松ヶ崎小学校校舎建て替え工事に伴うもので、当地は松ヶ崎廃寺推定地にあたるため、発掘調査を実施した。

当初試掘調査を数箇所行い、遺構を検出したため発掘調査に移行した。調査区は東西15m、南北14mの変則的な十字形に設定した。重機で現代・盛土層を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層黄灰色土層（グラウンド整地層：0.15m）、第2層褐色土層（盛土層：0.55m）、第3層灰褐色土層（約0.3m）、第4層暗灰褐色土層（0.15m）、第5層黒褐色土層（約0.1m）、第6層茶灰色土・灰色砂礫層（地山）である。第4層上面で第1面、第5層上面で第2面、第6層上面で第3面の遺構を検出した。検出した遺構は、溝、井戸、土壇、柱穴、埋甕などである。

第1面では、調査区全域で土壇などを検出した。土壇は不整形のものが多く、規模も様々である。土壇の中には大型のものもあり、土師器を多数出土した。時期は、江戸時代前半に属する。

第2面では、調査区西側に土壇、柱穴が集中した。東側で斜方向の溝、南端で東西方向の溝を検出した。土壇は第1面と同様に不整形のものが多く、規模も様々である。柱穴は円形で、径約0.3m、深さ約0.3m程度である。建物としてはまとまらなかった。東側の斜方向溝は幅0.3～1m、深さ約0.3mで、南端の東西方向溝は幅約0.6m、深さ約0.2mである。時期は、桃山時代から江戸時代前半に属する。

第3面では、調査区全域に遺構が見られるが、特に東側に土壇、柱穴が集中した。土壇は楕円形・円形のものが多く、一辺0.5～1m程度である。柱穴は円形で、径約0.3m、深さ約0.2mである。

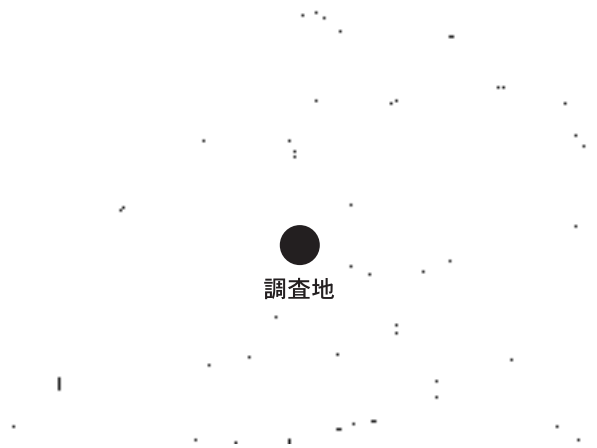


図269 調査位置図（1：5,000）

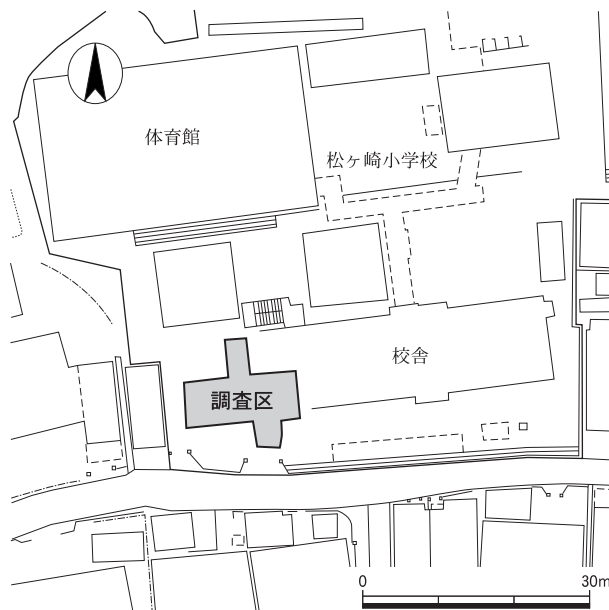
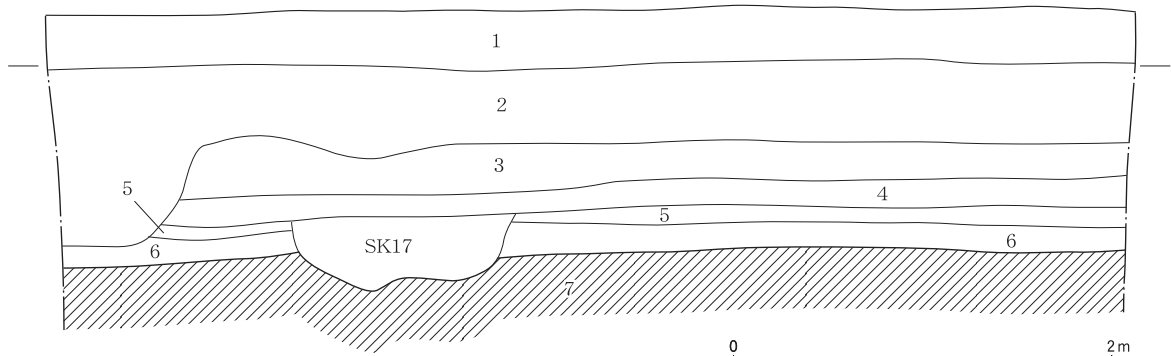


図270 調査区配置図（1：1,000）



- | | |
|-------------------|-------------|
| 1 黄灰色土 (グラウンド整地層) | 5 灰色砂土 |
| 2 褐色土 (盛土) | 6 黒褐色土 |
| 3 灰褐色土 | 7 茶灰色土 (地山) |
| 4 暗灰褐色土 | |

図271 西壁断面図 (1 : 40)

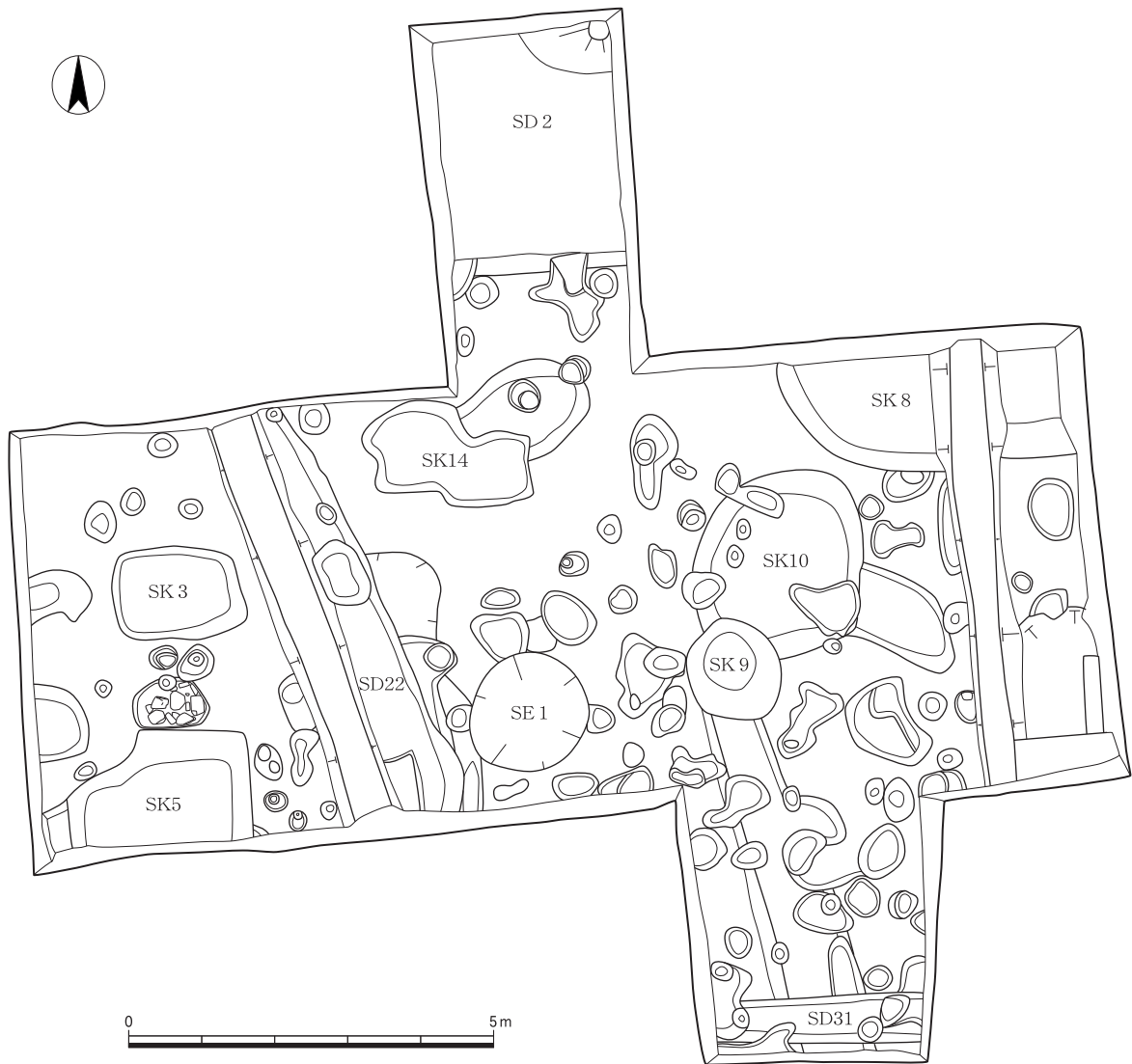


図272 遺構平面図 (1 : 100)

建物としてはまとまらなかった。時期は、室町時代後半から桃山時代に属する。

遺物 遺物には、土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦などが出土した。時期は、室町時代から江戸時代で、江戸時代のもものが中心で、他の時期のものは多くない。特に第1面で検出した各土壌からは土師器が多数出土した。

小結 今回の調査では、室町時代から江戸時代の遺構・遺物を多数検出したものの、それ以前の松ヶ崎廃寺に関係した遺構・遺物は検出できなかった。今回発見した遺構・遺物は、松ヶ崎廃寺の後身にあたる妙泉寺、あるいはその境内周辺に関係する遺構と推定できる。



図273 第3面全景（東から）

67 室町殿跡（図版24）

経過 上京区役所において別館の増築が計画されたため、工事に先立って発掘調査を実施した。当地は室町殿の推定地にあたり、花の御所関係の遺構の検出が期待された。

遺構・遺物 調査地の基本層序は、盛土が約0.6m、近代の整地層である茶褐色泥砂層が約0.4mあり、その下層に近世整地層と考えられる暗褐色泥砂層が厚さ約0.6mで認められ、基盤層の褐色砂礫層となる。検出した主要な遺構は、江戸時代の井戸と石室、土壇などであった。

井戸はすべて直径約1mの円形石組み井戸で、調査区北東隅でSE3を、南西隅でSE5を検出している。SE5の底部は検出面から約2.6mの深さで、SE3は危険を伴うと判断したため底部まで掘り下げていない。石室は調査区南東隅でSK1、北西隅でSK13を確認した。SK13は南半が壊され

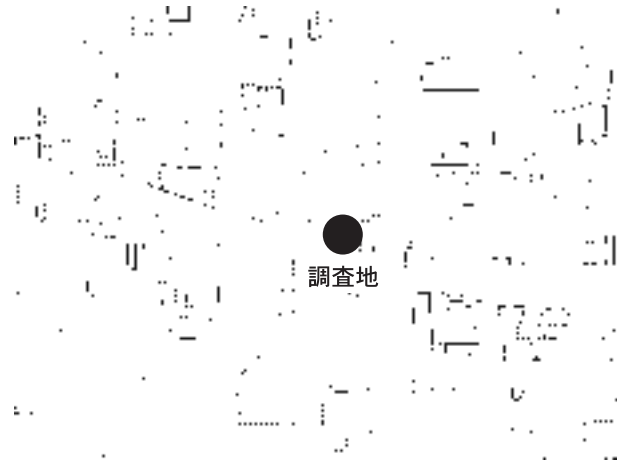
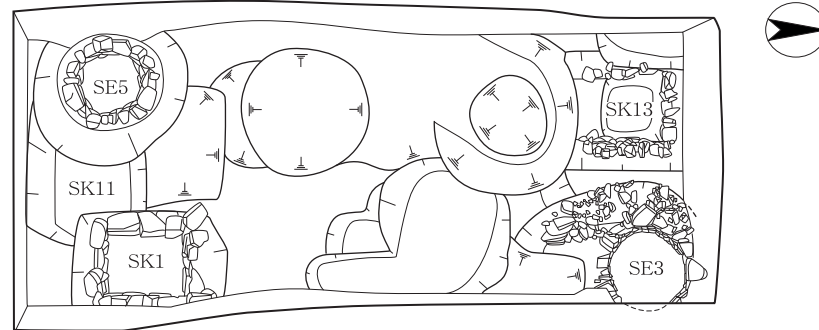


図274 調査位置図（1：5,000）



西壁断面図

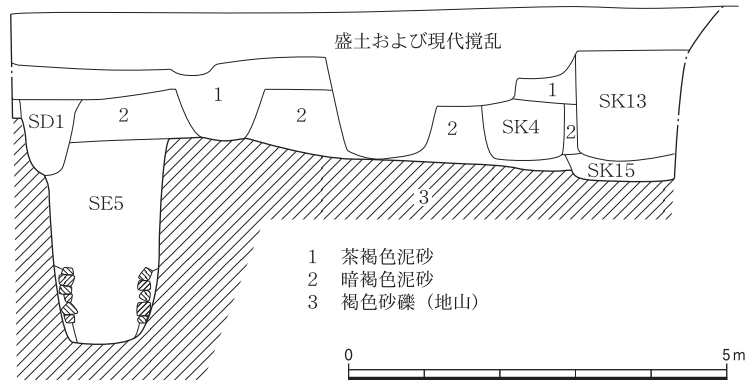


図275 遺構実測図（1：100）

ており規模が不明だが、SK1は東西約0.8m、南北約1mの長方形を呈する。深さは検出面から約1mであった。これらの遺構からは土師器とともに染付や近世陶器などが出土しており、大半が江戸時代の遺構と考えられるが、SE5からは染付が出土せず棧瓦以前の瓦類が多量に出土することから、中世末まで遡る可能性がある。なお、SE5の東に穿たれた土壙SK11からは建仁寺銘の瓦が出土したが、他の遺物は少なかった。

小結 今回の調査では、近世以降の井戸や石室などの遺構を検出したが、室町殿に関わる遺構は検出できなかった。ただ、土壙SK11から出土した建仁寺銘瓦や、SE5から出土した中世に遡ると考えとられる瓦類は、室町殿周辺の整備に伴う遺物の可能性がある。

68 北野廃寺 1 (図版25・26)

経過 調査地は京福電鉄北野線春日踏切の南東に位置し、京都市北区下白梅町に所在する。当地は飛鳥時代に創建された北野廃寺の南西限近くと推定され、寺域西限発見が期待される所である。また、文献では『日本文徳天皇実録』天安2年(858)正月27日条に常住寺西南別院の火災記事が見えることから、今回の調査で西南別院の一部を確認することも期待できた。

遺構 敷地は今出川西行通に面する平坦地で、南隣する民家よりも1m近く高くなっている。これは敷地北縁に地面を揃えているため、本来は南への傾斜地であった。調査区の基本層序は、アスファルト舗装地業を除去した段階で中近世の耕作土層である茶褐色土となる。この耕作土層は北で厚さ0.3mほどと浅いが、南では約0.85mと厚く堆積しており、北野廃寺の遺構面は茶褐色土層の下層で確認した。検出した遺構は飛鳥時代の竪穴住居4棟、平安時代の掘立柱建物と柵、溝などである。ちなみに遺構面の深さは、調査区北端部で地表下約0.3m、南端部で約1.1mであった。

住居1は調査区北部で検出した方形の竪穴住居で、方位は大きく西に振れている。短辺7.3m、長辺8mで、矩形をなさずやや歪んでいる。残存状態は極めて悪く、床面も確認できなかった。主柱跡は北西の柱跡を除く3箇所を確認した。主柱跡は側壁から内へ1.4~1.8mにあり、側壁に平行して位置するためにこれも矩形をなさない。また、南西辺の壁外0.7mに斜めに穿たれた支柱跡があり、これは東西棟を支えたものと思われる。さらに、南東の側壁と柱筋の間に長径約1m、短径約0.5mの土壌がある。この土壌からは完形の壺1点が出土した。

住居2は住居1に切られる竪穴住居で、東壁を確認したのみで柱跡などは不明である。

住居3は住居1の西で検出した方形の竪穴住居で、これも方位は大きく西へ振れている。長辺

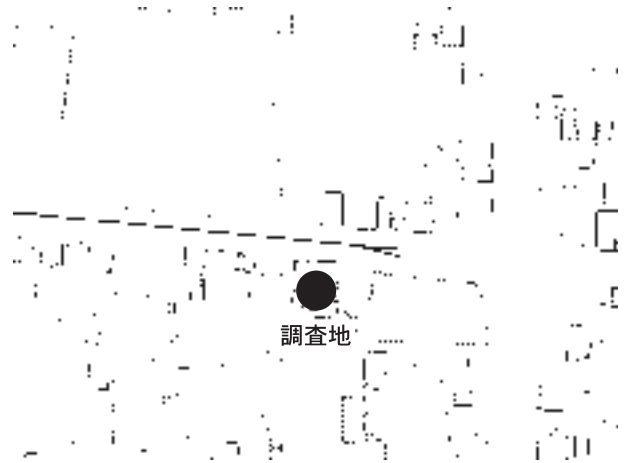


図276 調査位置図 (1:5,000)

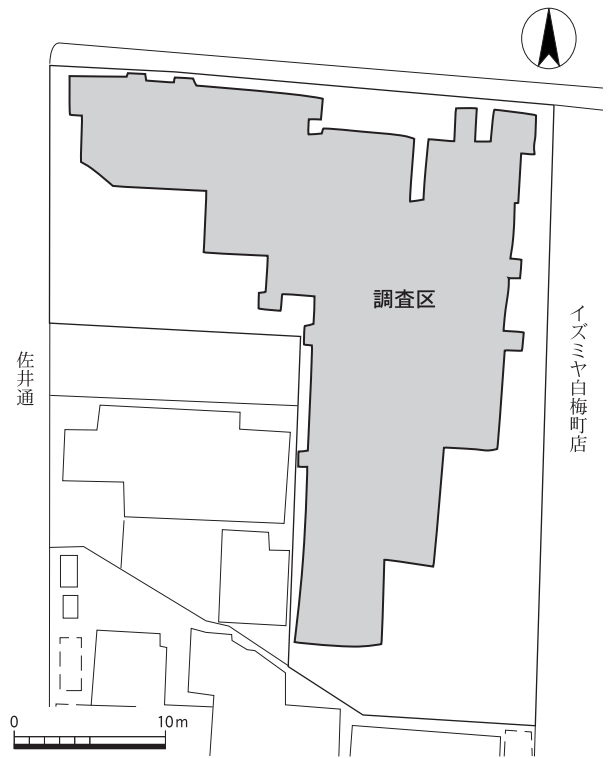


図277 調査区配置図 (1:500)

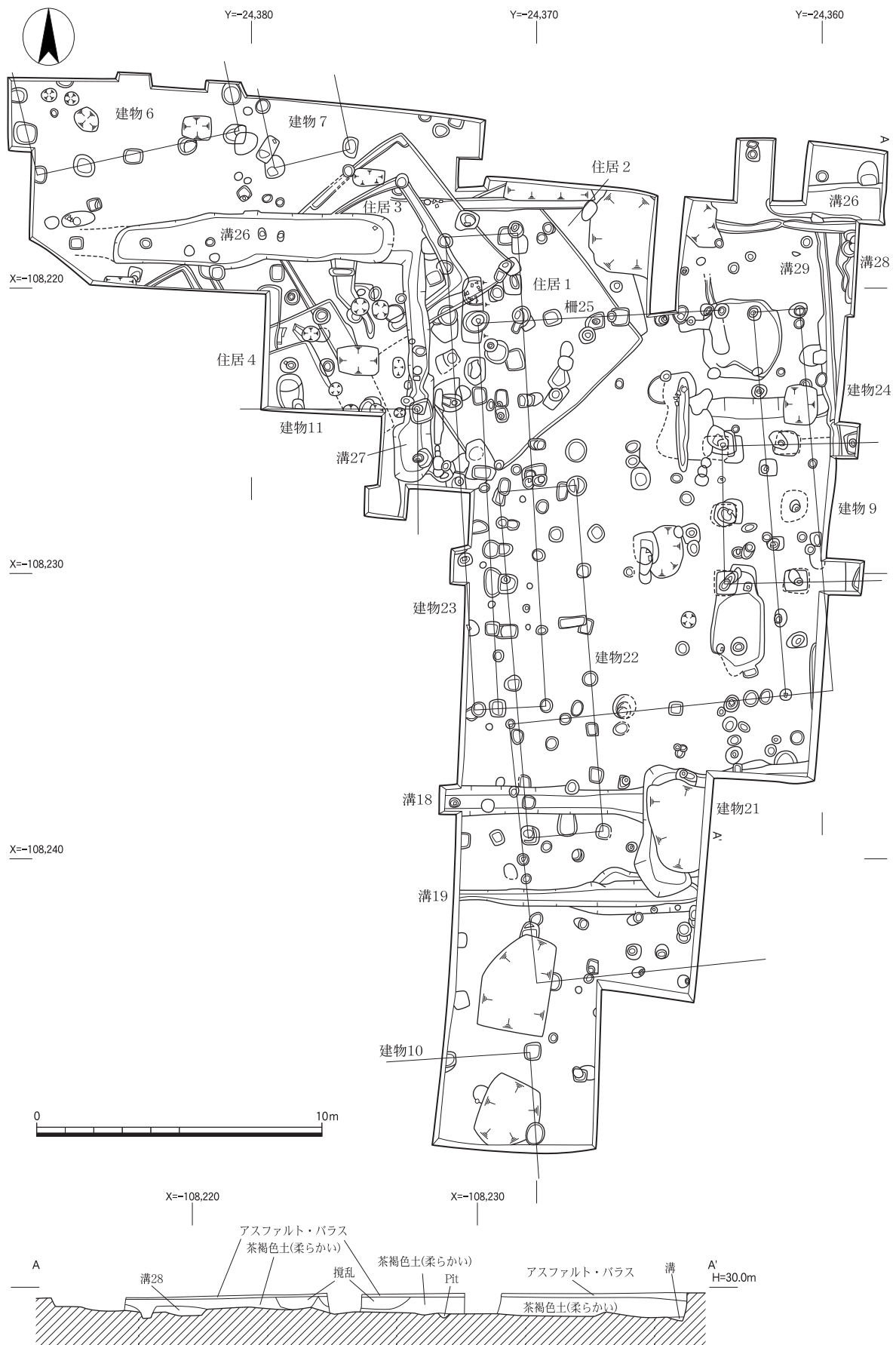


図278 遺構実測図 (1 : 200)

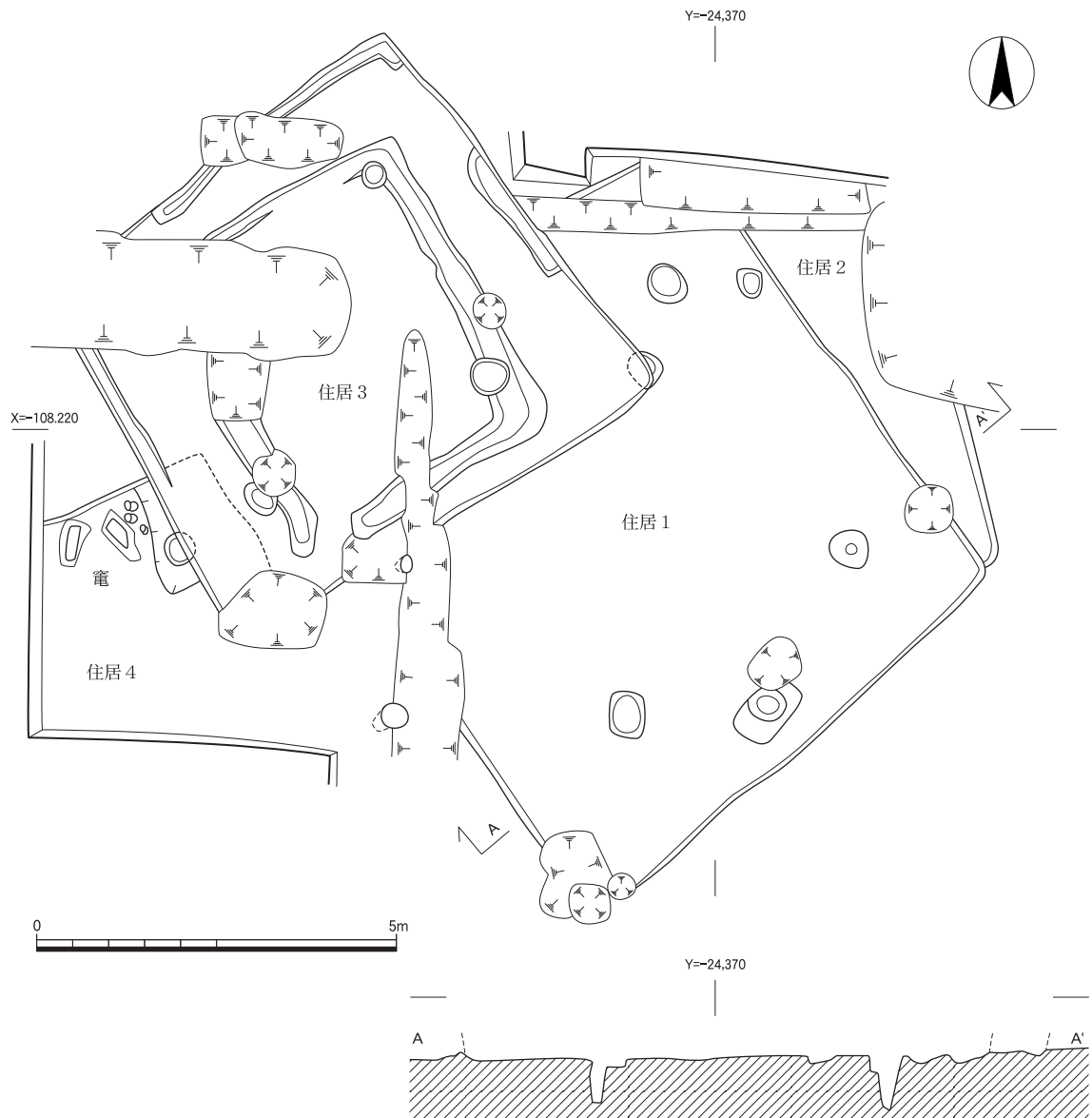


図279 竪穴住居実測図（1：100）

6.4m、短辺6mで、側壁から内へ1.5m前後に柱跡があり、ほぼ矩形に位置する。柱筋とほぼ重なる位置に浅い溝が方形にめぐるが、性格は不明である。

住居4は住居3の南に位置し、一部重複する。竪穴の一边は5m前後に復元でき、柱跡は側壁から内へ1mにある。北西壁に竈があり、八字形に構築している。竈の東袖部に接して、底を打ち欠いた土師器甕2個体と須恵器杯身が並んでいた。その東は浅い土壌になっていた。

建物6・7は調査区北西部で検出した掘立柱建物である。建物6は東西4間（約7.2m）、南北2間（3m）以上、その東で検出した建物7は東西1間（2.8m）、南北1間（2.5m）以上である。柱跡内には黒色土が入り、柱は抜き取られている。ともに西へ大きく振っており、竪穴住居群と併行する時期と思われる。

建物9は調査区の東端中央に位置する総柱の掘立柱建物である。柱跡掘形の一辺が0.8mほどの比較的しっかりした建物で、南北2間×東西2間分を確認しており、柱間は2.4mである。建物は

2回ないしは3回の建て替えがあり、最終時期にも柱の抜き取り痕跡が確認できる。

建物10は調査区南端部にあり、建物の北東隅1間分を検出したにすぎない。柱間は東西・南北ともに3mで、柱は抜き取られている。

建物11は竪穴住居群の南西に位置する掘立柱建物で、大半は調査区の西と南に展開する。北東隅付近の4柱穴のみの検出だが、建物9同様に柱跡掘形が比較的しっかりした建物である。東西2間(4.2m)以上×南北1間(1.8m)以上で、柱の抜き取りが認められる。

溝18・19は調査区南半部で検出した南北に並行する東西溝で、西から東に傾斜する。最大幅はともに約1.2mで、両溝の心々間は約3.6mである。建物10と建物9・11の間にあり、それらの敷地を限るとともに、両溝間は寺院地内の道路として使われたと見られる。

建物21は調査区南半で検出した掘立柱建物で、東は調査区外に展開する。溝18を切って建てられており、東西6間以上×南北4間の総柱建物に復元できる。柱間は東西が1.95m等間、南北は北側3間は2.4m等間、南1間のみが1.95mである。柱は抜き取られている。

建物22は調査区中央で検出した。南北6間×東西1間の南北に細長い掘立柱建物である。南北柱間のうち北1間のみが約3m、以外の南北柱間が約1.8mで総長約12.1m、東西柱間は約2.5mである。建物として西に展開する可能性もある。なお、溝18と重複することから、溝が埋め戻された後に建てられたと考えられる。

建物23は建物22と同様に南北6間×東西1間の細長い建物である。位置的にも建物22と重複することから、同じ性格の建物と想定できる。柱間は東西が約2.4mだが、南北は2.65～2.9mと建物22より広く、結果として南北総長が約16.5mと長くなっている。柱は建物の外側に倒すようにして抜き取られている。

建物24は建物21の北東に取り付くように検出した、南北5間×東西1間の細長い建物である。西側柱筋は建物21の柱筋と揃っている。柱間は南北が2.7m等間、東西が1.65mである。

柵25は建物21と建物24の北西空地を画する柵である。建物21西側柱列のやや西を基点として北へ柱穴が並び、約13.5mの地点で東へ折れて約8.5m延びる。この東西柱列は、建物24の北側柱と柱筋を揃えている。

溝26は調査区北端部を東西に穿たれた、最大幅約2mほどの溝である。部分的に深く掘り込んでいる所があり、土壙状になっている。浅くなって途切れている地点は、建物との関係から通路となっていたと推測できる。溝の北側には併存する建物は認められず、院地を区画する溝である可能性が高い。なお、遺物の出土量が多く、それとともに焼土・炭・焼けた河原石などが出土しており、火災後に埋められたとみられる。また、「鶺鴒室」の墨書土器が10点近く出土しており、当地の性格を考えるうえで示唆的である。

溝27は北は溝26に接続する南北溝である。南端付近で浅くなる。最大幅約1.3mで、焼土・炭・土器が多く出土した。溝26とともに院地を区画する溝であろう。

溝28・29は調査区東端で検出した南北溝群で、建物24の東側を画している。溝29では溝26と同様に焼土と炭が多く認められた。

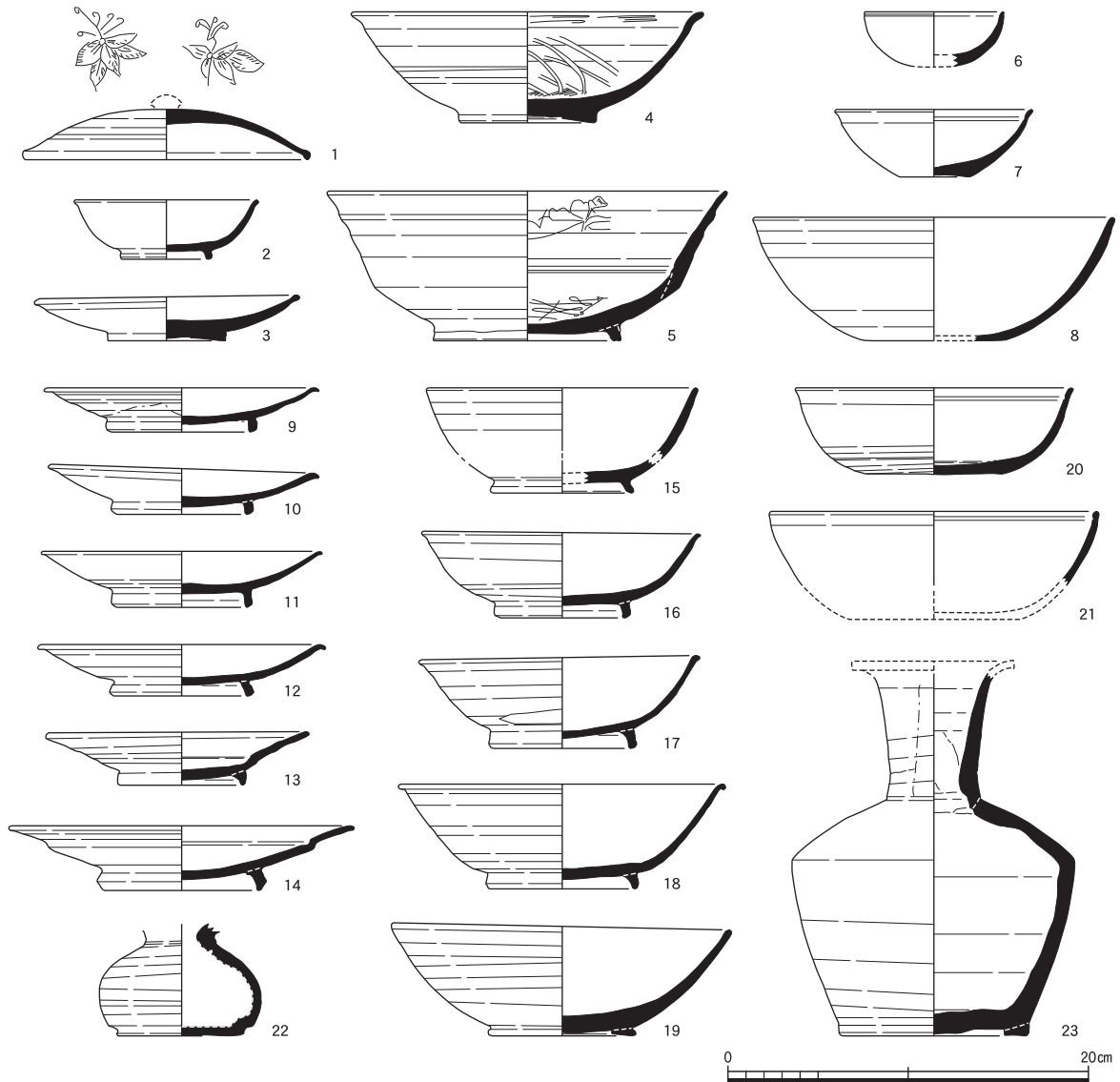


図280 溝26出土土器実測図（1：4）

遺物 溝を中心として平安時代中期の土器類が多く出土した。中でも溝26から出土した土器群は一括性が高く、平安時代の土器編年を構築する上での良好な資料となる。ここでは、溝26から出土した緑釉陶器（1～8）と灰釉陶器（9～22）、須恵器壺（23）を図化して提示しておく。緑釉陶器は陰刻花文を施した杯蓋（1）、小椀（2）、皿（3）、大椀（4・5）、無高台椀（6～8）がある。灰釉陶器は皿（9～12）、段皿（13・14）、椀（15～19）、無高台椀（20・21）、唾壺（22）がある。このうち、皿（9・12）の底部外面に「鶺鴒室」の墨書が施されていた。

小結 調査の目的としていた寺域西限の確認と寺内諸院家の把握のうち、前者についてはその徴証を見いだしえなかった。飛鳥時代には竪穴住居などの存在から寺域外の可能性もあるが、平安時代には寺院地の中だったことは明らかである。後者については平安時代前期と中期の状態を明らかにすることができた。平安時代前期には主要伽藍と方位を同じくする建物と溝があり、寺院地内の道路を挟んで計画的に掘立柱建物が並んでいる様子が窺える。ところが、平安時代中期

には前期の地割を踏襲せず、調査地北側に寺院地内道路が移動しており、南に掘立柱建物と柵・溝からなる一院家が成立する。この改変の契機として、天安2年（858）の西南別院の火災を想定している。また、これら中期の溝群は火災の処理物で埋め戻されていることから、『日本三代実録』に見える元慶8年（884）3月15日の常住寺主要伽藍の火災で廃絶したと考えられる。なお、中期の区画溝内からは「鶺鴒室」の墨書土器が多数出土しており、当地域に所在した寺院内の施設との関係を明らかにしていくことが今後の課題である。

69 北野廃寺 2 (図版27)

経過 当調査は、公共下水道工事に伴う発掘調査である。調査地は平安京北京極から北野廃寺に相当し、一条大路北方の施設あるいは寺院関係の遺構の検出が期待できた。

遺構・遺物 調査は西大路通の北野白梅町交差点の北側から、A～E区の5箇所のトレンチを設定し行った。基本層序は各トレンチとも道路面下に約0.4mの盛土があり、その下層に中近世耕作土層である黒褐色泥土が0.1～0.2m堆積していた。この耕作土層を除くと基盤層である茶褐色泥土となる。

検出した主な遺構は、D区で江戸時代の河川である溝2と室町時代の土壇3、E区で中世の溝4である。他のトレンチではC区で近世以降の土壇群を確認しただけで、A・B区では削平のため遺構は認められなかった。しかし、A～C区では北野廃寺に関わる多くの瓦類が出土しており、当地が寺院地内だったことを示している。また、D区の溝2からは、「旨」銘軒平瓦とともに尖頭器が2点出土している。

小結 今回の調査では、平安京北京極の構造を解明する遺構は検出できず、北野廃寺関係の遺構も発見できなかった。ただ、尖頭器の出土は、当地周辺における旧石器時代の遺跡の存在を示唆している。

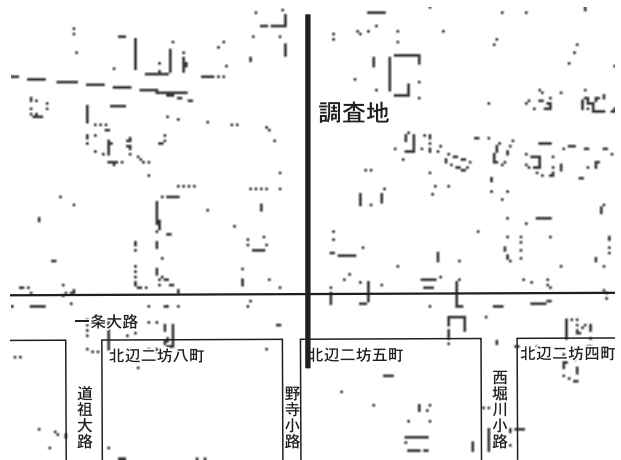


図281 調査位置図 (1 : 5,000)



図282 溝2出土尖頭器

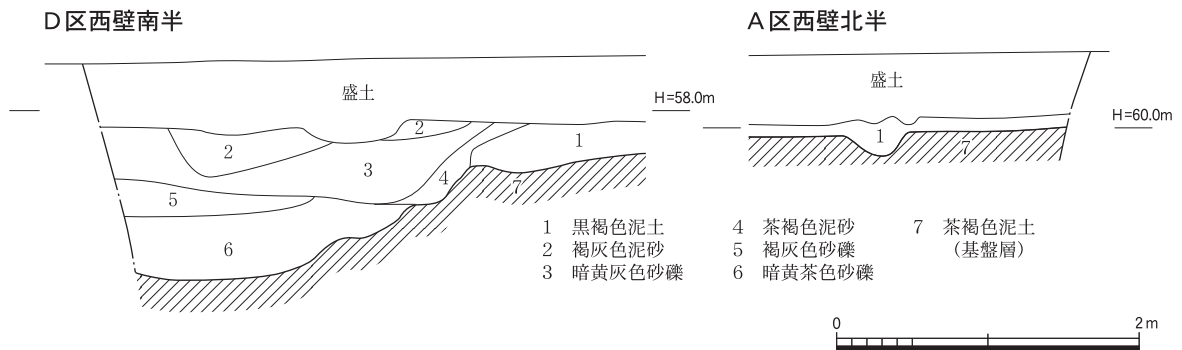


図283 A区・D区西壁断面図 (1 : 50)

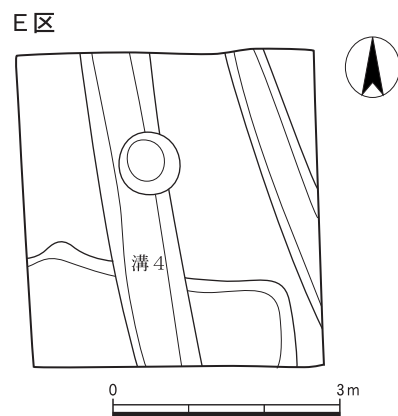
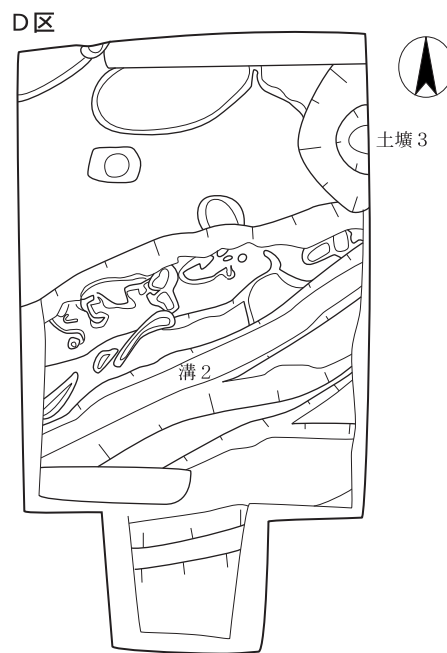
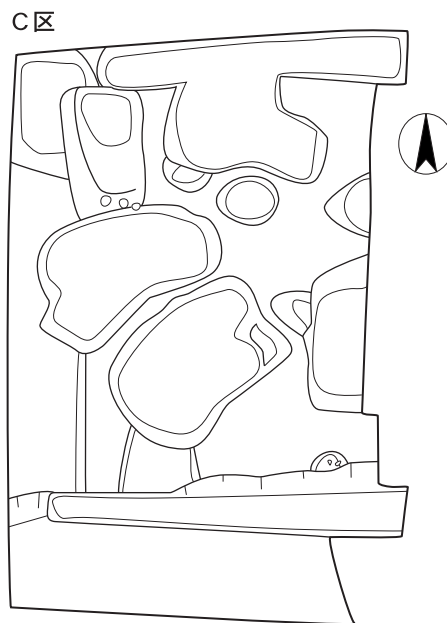
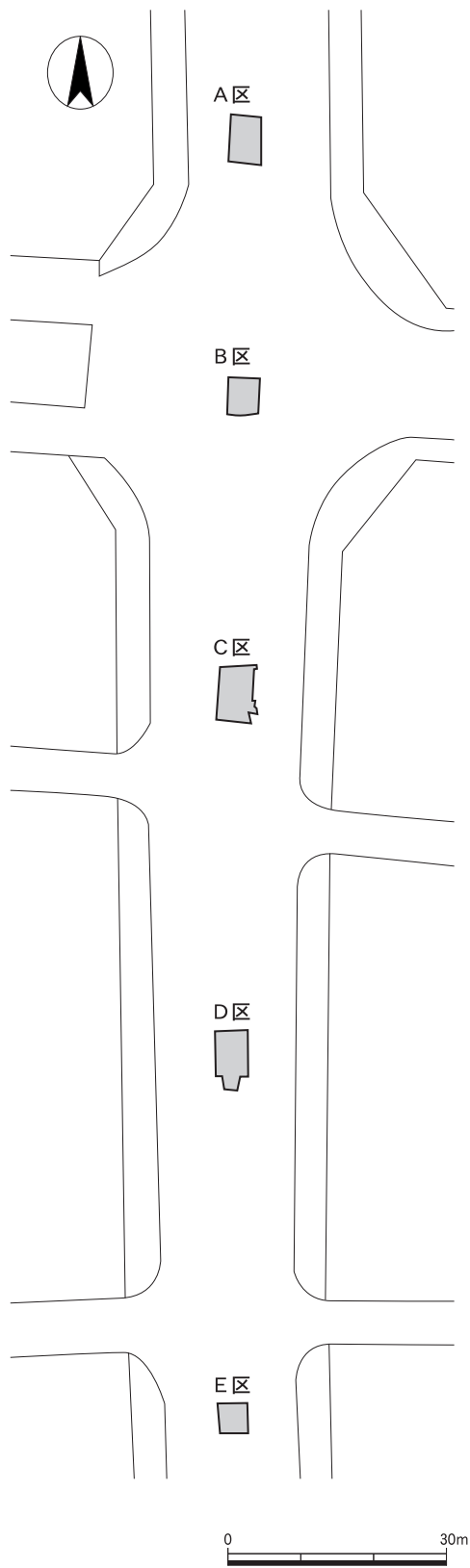


図284 調査区配置図 (1 : 1,000) および遺構平面図 (1 : 100)

70 法性寺跡（図版28）

経過 当調査は、大阪国税局深草寮の新築工事に伴う発掘調査である。調査地は稲荷山の北西麓、東福寺の南方に位置し、法性寺あるいは鎌倉時代に創建されたと伝えられる正覚庵に関する遺構の発見が期待できた。

遺構・遺物 現状は平坦地となっているが、調査区の北半と南半では1 m以上の段差がある。北半部は地表下0.2~0.4mが盛土で、その直下が基盤層となる。北半部では削平が激しく、遺構はまったく検出できなかった。南半部では盛土が1 m以上あり、下層は上から緑灰色泥砂、灰色砂泥、灰色泥土が約0.6 m堆積しており、地表下約1.8mで基盤層の黄褐色粘質砂泥となる。主な遺構はこの基盤層上で検出し、平安時代後期から鎌倉時代の遺構と江戸時代の遺構に分かれている。

平安時代後期から鎌倉時代の遺構は、礎石建物2棟と排水溝、柵などである。建物1は調査区南端部で検出した礎石建物で、北側柱に相当する礎石据え付け穴を東西に5箇所検出した（S1~5）。S1~4までの3間は約3.3m（11尺）等間に復元でき、西端のS4とS5の柱間だけが約3 m（10尺）となる。S1~3に対応して北側約1.8m（6尺）の場所に小礎石（S6~8）が据え付けられており、これらが石敷雨落溝3の南石敷に組み込まれていることから、小礎石は建物北縁のものと考えられる。また、北側柱ラインと北縁柱ラインの中間の位置で、長さ1 m前後の凝灰岩切石が東西方向に据え付けられた痕跡を2箇所を確認しており、建物本体の亀腹基壇の延石と考えられる。なお、建物本体は東西および南調査区外に展開するようである。

建物2は建物1の西端北側に取りつく礎石建物で、建物1のS4から北に8尺（約2.4m）等間で礎石S9および礎石抜き取り穴S10を検出した。礎石10の北では約1.5m（5尺）の位置で小礎石S11を確認しており、これが建物2の北縁になるのであろう。建物2の本体は西調査区外に展開しており、詳細な構造は明らかでない。また、建物2の東縁については、後世の南北溝で破壊されているため存否を確認できないが、これらが連結した建物であることから東縁の存在は充分想定できる。

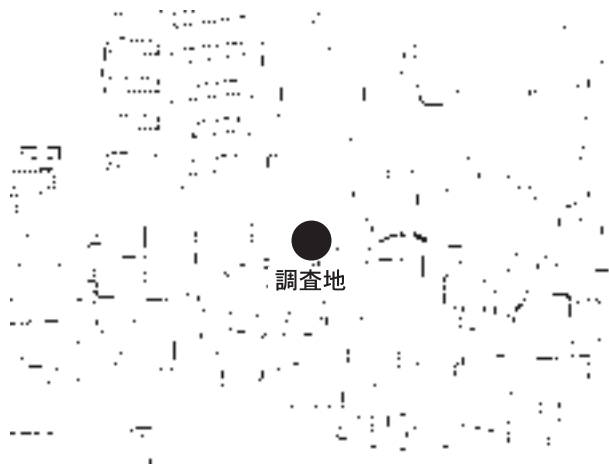


図285 調査位置図（1：5,000）



図286 調査区配置図（1：1,000）

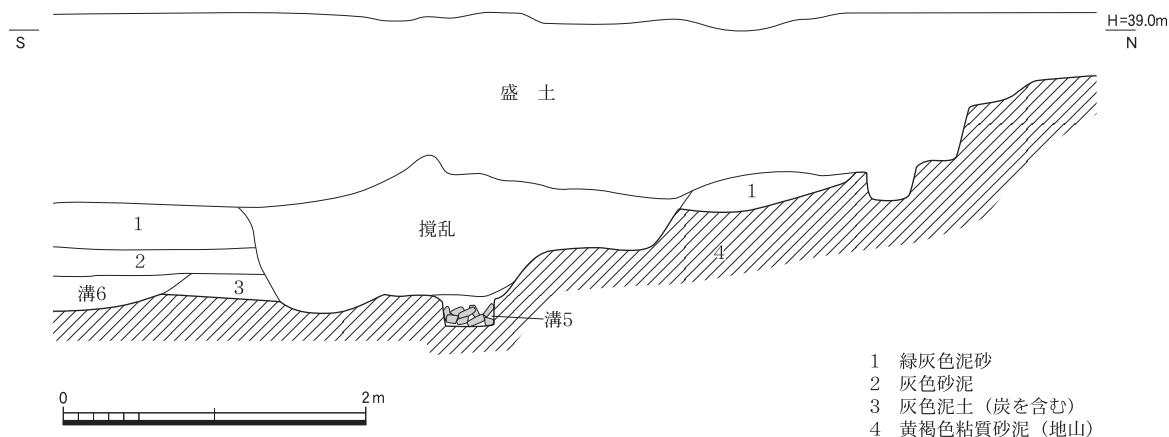


図287 西壁断面図（1：50）

石敷雨落溝3は、平坦な河原石を内外2列ずつ並べて溝肩の装飾にした溝で、中央の溝底部には石敷きはなく、土を固く叩き締めただけである。石敷き幅は約1.3mで、中央溝幅は約0.4mである。建物1の北側石敷き列が建物2の東で北に折れ曲がることから、建物1と建物2が一連の建物であることがわかる。建物2の北側雨落溝については、後代の東西溝5によって壊されており明らかでないが、溝5の北肩付近に石が多く点在しており、この位置に建物2の北側石敷雨落溝が存在したと考えられる。溝5の北側で検出した溝4は、北半部と南半部の段差裾部に設けられた溝で、北側からの雨水を処理するための施設と考えられる。北半部と建物群が建立された南半部とは、現状で約1.5mの段差があり、この溝に北側からの水を流すことで、建物内に雨水が流れ込まないようにしたのであろう。

これら南半部建物周辺では、平安時代後期から鎌倉時代前期の瓦類が多く出土しており、建物群の創建年代を考えるうえで重要な遺物となっている。また、溝5からは13世紀の土師器皿が出土した。

次に江戸時代の遺構は、墓壇群4基以上と溝、建物などを検出している。南半部で検出した墓壇8では集石内に骨片・炭とともに寛永通寶が6枚出土した。また、その北側にも骨片を含む浅い土壇状遺構や集石遺構を検出しており、南北に墓壇が並んでいたと考えられる。また、北半部から下る斜面にも新たに狭いテラスが造成され、東西に並んで墓壇9～11が設けられた。これらの周囲に穿たれた隅丸方形の土壇も墓壇である可能性が高い。なお、溝12は墓域の後方に流れ込む雨水を処理する溝で、西端で南へ屈曲させて雨水を落としている。そして、これらの墓壇に囲まれるように2間×2間の小規模な建物7が南半部中央に建てられている。また、同位置に性格不明の南北方向の柵6があり、これらの柱穴は雨落溝3の石敷きを壊している。

小結 当地域では以前から平安時代に遡る瓦が採集されており、寺院の存在が推定されていた。今回の調査で礎石建物を良好な状態で検出できたことは大きな成果である。当地には正応3年(1290)に東福寺第五世恵雲を開山とした正覚庵が建立されたとも伝えられており、法性寺との関係も含めて遺跡の性格の解明が今後の課題である。

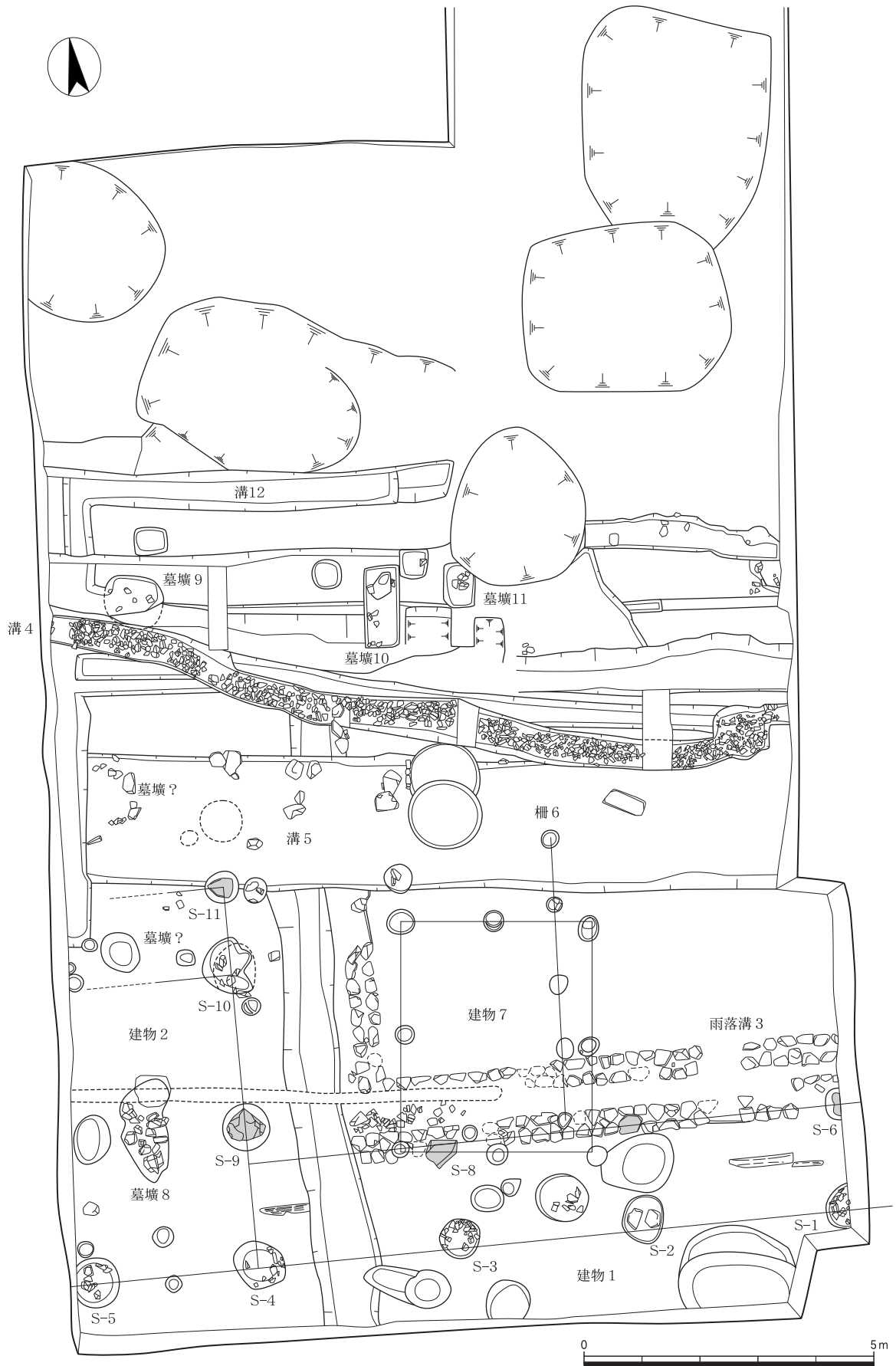


图288 遺構平面図 (1 : 100)

71 旭山古墳群

経過 今回の発掘調査は、花山火葬場拡張工事に伴う2次調査である。調査は、1次調査で調査したE支群3基から開始し、表土を除かないと検出できない古墳・遺構があることから、調査区全域を全掘した。なお、北西側では遺構が希薄であると判断し、トレンチ調査を行い、土層観察にとどめた。

調査では、古墳時代の古墳・小石室・土壙、平安時代以降の土壙群・石列・古墓を検出した。手掘りで各遺構の調査を行い、各古墳石室の実測・写真撮影を実施した。床面を断割り、および掘形検出を実施した。

遺構 調査地の基本層序は地表面から約0.2~0.5mまでが表土で、その下が褐色土の地山層となる。地山を掘削し周濠を造り、その土を盛り上げて墳丘を構築する。

古墳群は尾根の南斜面に限られ、調査地北部側のC支群、中央部のD支群、南端部のE支群の3支群に分かれる。支群はそれぞれ5~10基を単位として造営される。C支群は方墳5基で構成され、3基を調査した。いずれも規模は一辺6m前後、高さ1.3m前後で、無袖式石室を持つ。D支群は方墳3基と小石室1基で構成され、墳丘は一辺6m前後、高さ1.3m前後で、無袖式石室を持つ。小石室は長さ1.5m、幅0.55mである。E支群は方墳7基と小石室3基で構成され、墳丘の規模は

一辺6m前後、高さ1.5m前後で、無袖式石室を持つが、E-2号墳は最も大きく、両袖式石室である。小石室は長さ1.5m前後、幅0.5m前後で、床に礫や割石を敷くものもある。

平安時代以降の遺構には、調査地北部で墳墓を検出した。一辺2.9m、高さ0.4mで盛土下に一辺1.3mの土壙を検出し、四壁・底部が焼ける。他に調査区中央部で不定形の土壙が集中するが、性格は不明である。さらにその南側には長さ約36mにわたり東西石列を検出した。

遺物 遺物は、古墳に関係するものと、それ以外に分けられる。古墳の副葬品としては須恵器



図289 調査位置図 (1 : 5,000)

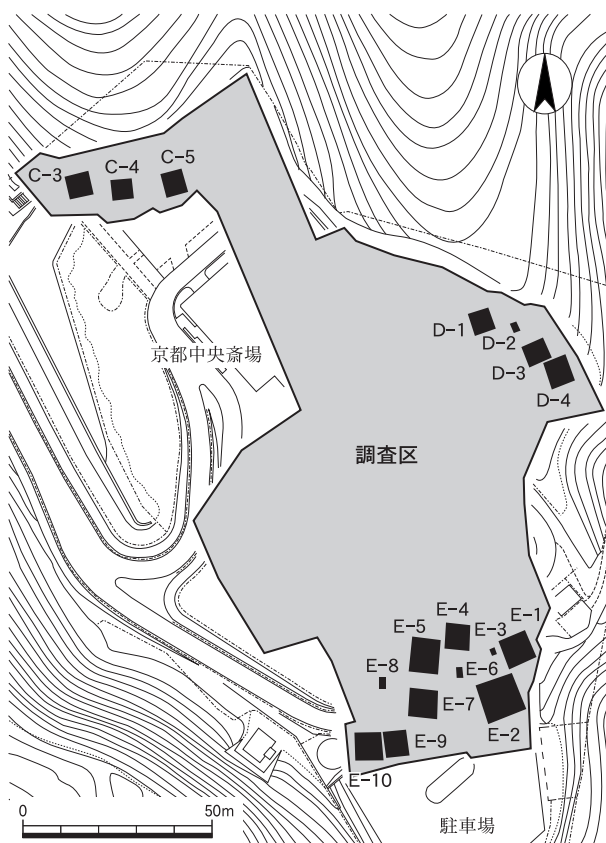


図290 調査区配置図 (1 : 2,000)

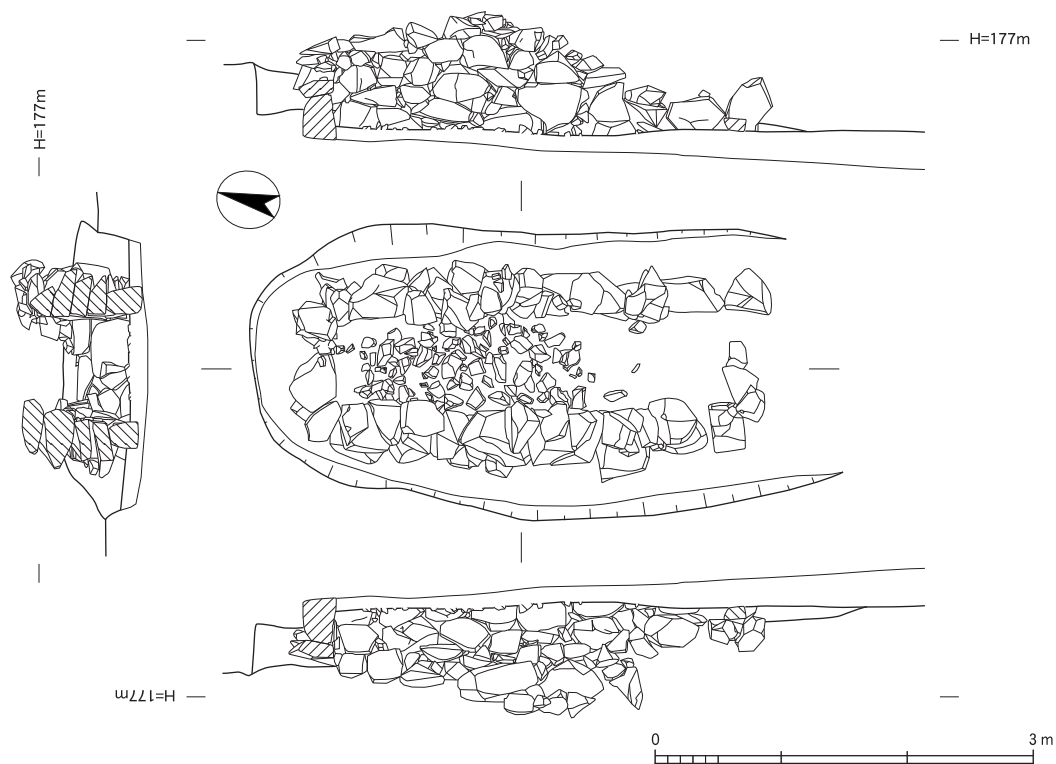


図291 D-4号墳石室実測図（1：60）

杯身HとG・蓋・長頸瓶・高杯・甕・横瓶・提瓶・平瓶・甗、土師器杯・甕、刀子・金環があり、木棺に使用した鉄釘・鏝がある。

古墳時代以外の遺物には、弥生土器、石器、奈良時代から鎌倉時代の土器類、銭貨がある。奈良時代の遺物は古墳を墓として再利用した際のものと考えられる。平安時代の遺物は、古墳時代の遺構を破壊した墳墓の副葬品として出土した。

小結 今回の調査では、古墳群の支群の分布状況、各支群間の規模の差などが明らかとなり、E支群が最も数が多く、中心となる大型墳が見られる。さらに古墳の周辺に小石室も位置する。各古墳・小石室は大型墳を除き墳丘や石室の規模・周溝のあり方が類似する。また、各支群毎に方向や配置に統一性が見られ、単位として捉えることができる。時期は、副葬品などから7世紀前半から中葉の短期間の造営と推定できる。以上のように、当該期の古墳群の構造を明らかにしたことは重要な成果である。

さらに、奈良時代以降当地域が墓地として利用された状況が明らかとなった。

『旭山古墳群発掘調査報告 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第5冊』 1981年報告

72 山科本願寺跡

経過 当調査は耐震性防火水槽の埋設工事に伴う発掘調査で、京都市山科区西野阿芸沢町に所在する山科中央公園内で実施した。調査地は山科盆地の中央付近に位置する山科本願寺跡にあたるところで、現在は山科団地および山科中央公園として利用されている。南に国道1号線と東海道新幹線が東西に走り、北東から南西へ向かって山科川が流れている。山科本願寺跡（寺内町遺跡）は山科区西野一帯に広がる中世末期の都市遺跡である。天文元年（1532）の焼亡によって全く消滅したが、「土居」と「環濠」の遺構が今も延長700mにわたって認められる。今回の調査地は山科中央公園の北西で、山科本願寺の環濠と推定されている空濠の西への延長線上、約20mのところに位置する。そのために環濠の続きが検出されると予想した。

遺構・遺物 直径7mの円形で深さ7mの貯水タンクが計画されたため、トレンチは東西8m、南北9mに設定した。まず全面を1.5mの深さで重機によって掘削したが、下層にもコンクリートなどが混入していることがわかり、トレンチの北西と南西隅を部分的に深掘りしてみることにした。機械の掘削限界である5.4mの深さまで掘り下げたが、相変らず現代攪乱層であったため当地は旧地形を保っていないと判断し、これ以上の掘削は中止することにした。遺構および遺物はまったく検出することができなかった。

小結 調査地一帯は、山科団地と中央公園が造成される以前に工場敷地となっていた場所であり、かなり深部まで攪乱されていることが判明した。そのため、遺構は破壊されたものと判断される。

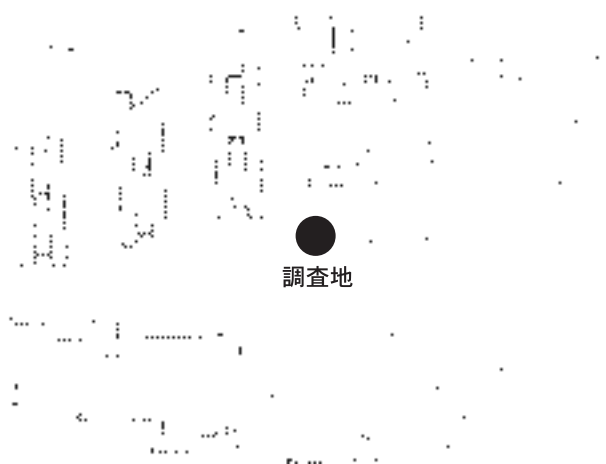


図292 調査位置図（1：5,000）

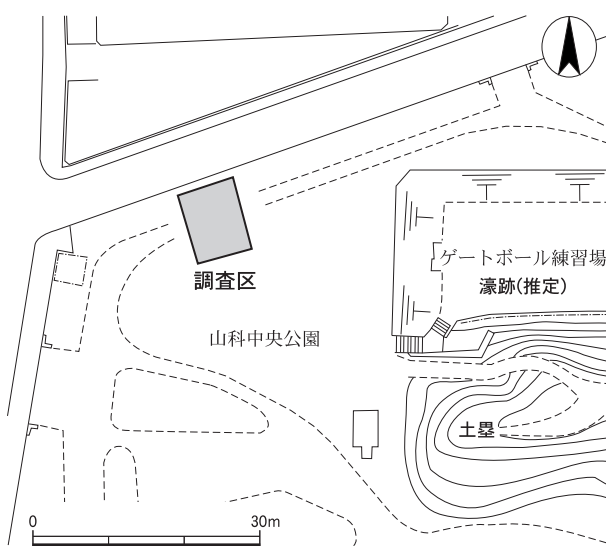


図293 調査区配置図（1：1,000）

73 醍醐古墳群 (図版29)

経過 当調査は、
山間埋立処分地建設に伴う進入路拡幅工事の事前調査である。調査地は山科区大向と伏見区醍醐を分ける丘陵上に位置する。調査に先立ち進入路の拡幅部分につ

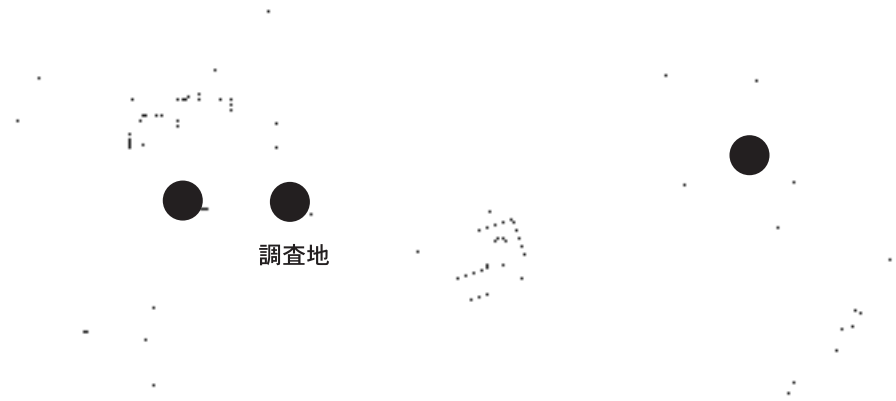


図294 調査位置図 (1 : 5,000)

いて分布調査を実施したところ、範囲内に4基の古墳推定箇所を検出した。調査ではこれらを西から1~4号地点と仮称したが、1号地点については改めて範囲外にあるとのことで、今回は発掘調査を実施しなかった。

遺構・遺物 2号地点では東西21m、南北14.5m、高さ1.5mの方墳状の高まりを確認した。調査はこの墳丘を断割るかたちで、幅2mのトレンチを設定し、順次この中を掘り下げていった。

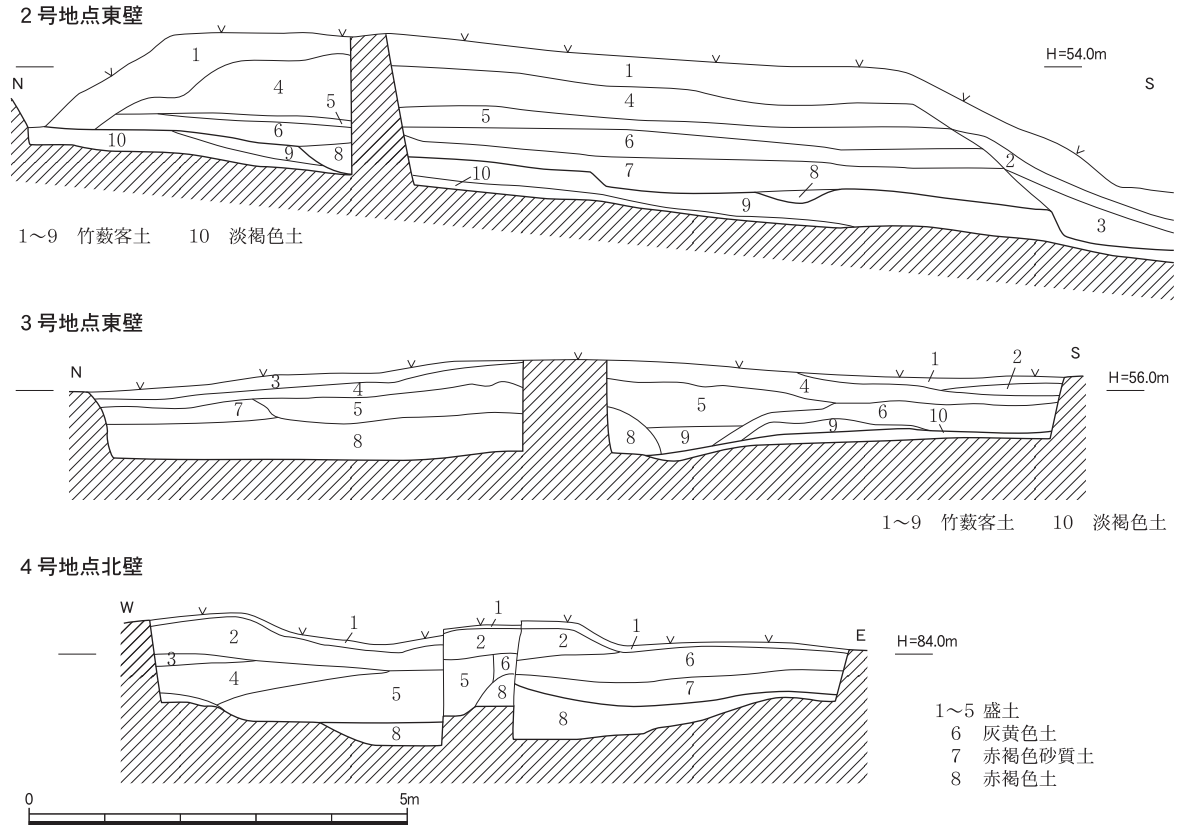
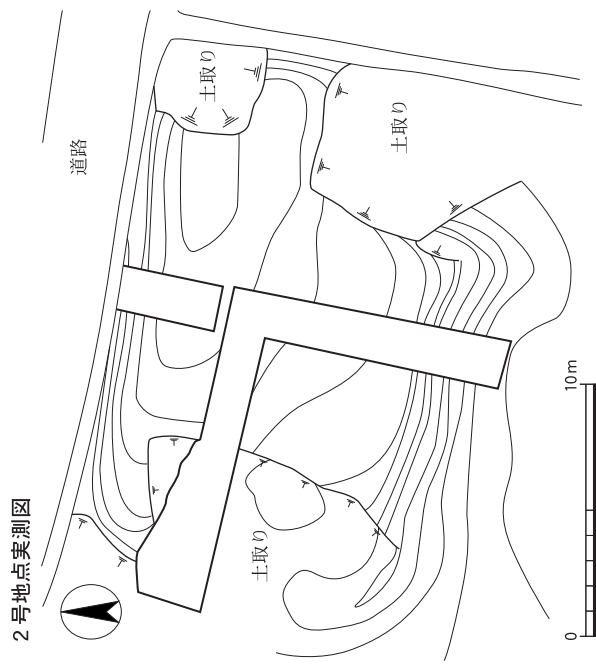
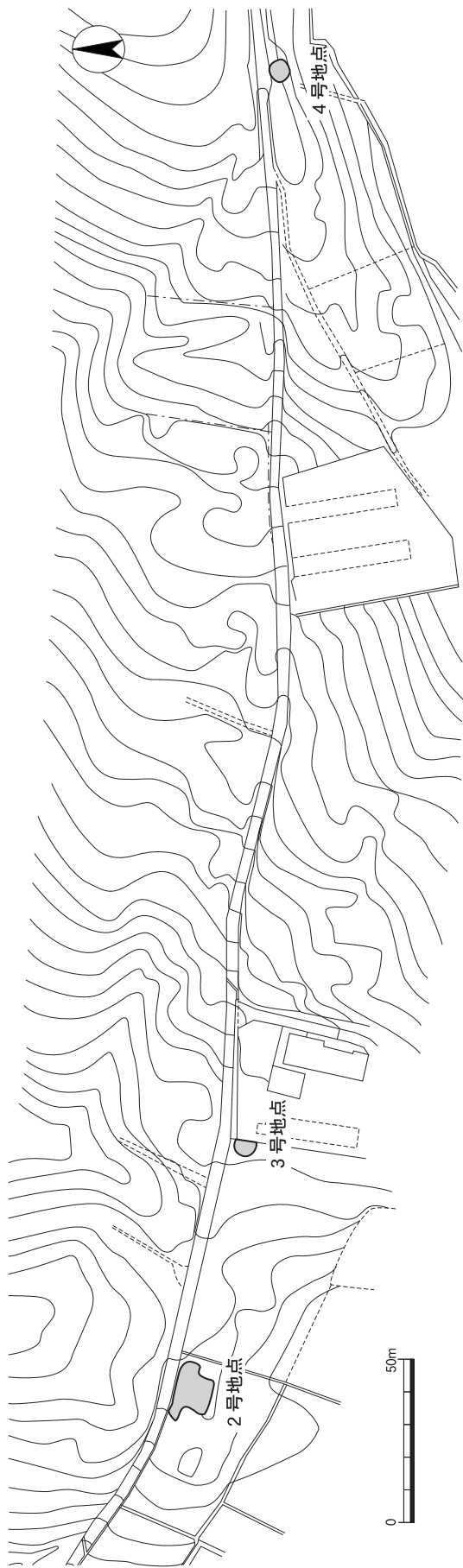
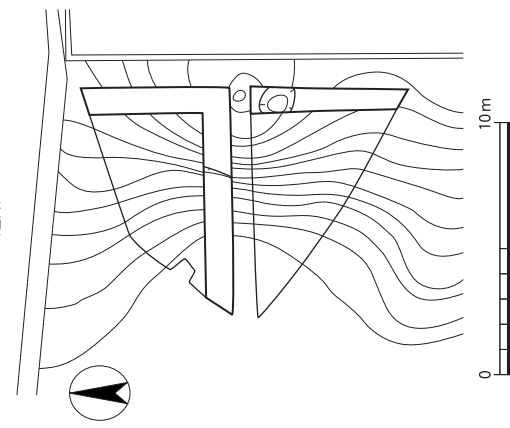


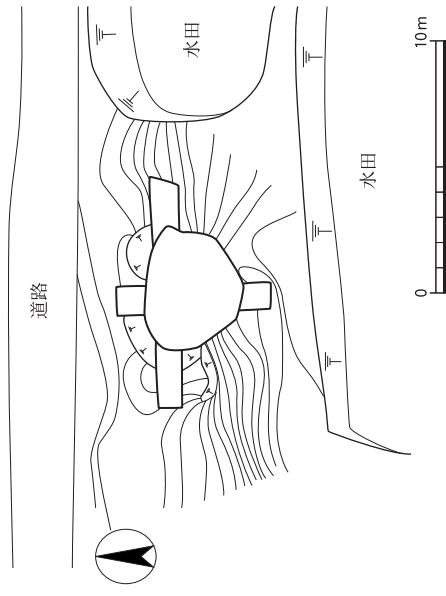
図295 2~4号地点断面図 (1 : 100)



2号地点実測図



3号地点実測図



4号地点実測図

図296 調査区配置図 (1 : 2,000) および墳丘測量実測図 (1 : 300)

そして墳丘を約1.5m下げたところで、地山らしき淡褐色土層に達した。この間の土層はすべて竹藪のための客土層であった。3号地点は中央以東が削平された径10m、高さ0.7m程の円墳状の高まりである。調査はT字状にトレンチを設定して掘り下げたが、下層まで竹藪客土が続いていた。そして、約1.2m掘り下げた所で、2号地点と同様の地山らしい淡褐色土を検出した。4号地点は径約9m、高さ1m程の円墳状の高まりで、中央部が近年の土取りで大きく破壊されていた。調査は東西9.1m、南北6.1mにわたる幅1mのトレンチを設定し、この部分についてのみ掘り下げた。掘削の結果、中央の攪乱は地山の赤褐色土にまで達しており、主体部を確認することはできなかった。また、墳丘部分の掘り下げにおいても、古墳を証明する墳丘盛土や周溝の形跡は認められなかった。出土遺物は3号地点の灰黄色土層中から須恵器の小片が1点出土しただけである。

小結 古墳と推定した高まりについて発掘調査を実施したが、いずれの地点も古墳と認定し得る直接の遺構や遺物を検出できなかった。

74 醍醐寺旧境内（図版30）

経過 当調査は、醍醐寺旧境内に所在する醍醐小学校の増築に伴う発掘調査である。調査地は醍醐寺主要伽藍の南西に位置し、旧奈良街道に面することから、醍醐寺子院に関連する遺構の検出が想定できた。

遺構・遺物 調査区の基本層序は、地表下約0.2mまでが運動場の整地土であり、その下層に暗茶褐色泥砂層が約0.15m堆積する。遺構はこの暗茶褐色泥砂層を除去した段階で検出しており、遺構面の基盤層は暗黄褐色泥

砂層であった。検出した遺構は、鎌倉時代の建物2棟と土壌群などである。建物1は、調査区北端で根石を伴う柱列を東西方向に検出した。また、調査区南端部で検出した建物2は、井戸状遺構SX1を囲むように柱穴を3箇所確認した。中世の土壌群は13基検出しており、多量の土器を包含するものや、蔵骨器と考えられる瓦器鍋を据えたものなどがある。遺物は、土師器、須恵器、陶器、瓦器、磁器、滑石製羽釜、鉄製品（釘・刀子）など、整理箱にして5箱出土した。

小結 今回の調査では、中世における醍醐寺子院に関連する建物遺構の一部を確認したが、調査面積が狭小なため構造や規模などを確認するには至っていない。ただ、中世の遺物が多く出土しており、周辺には子院関係の遺構が良好に遺存していると推測できた。

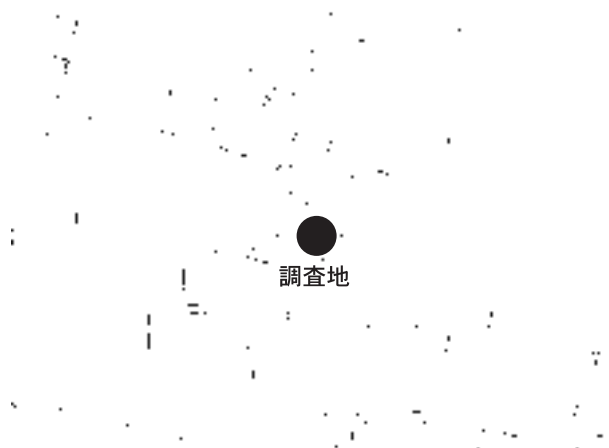


図297 調査位置図（1：5,000）

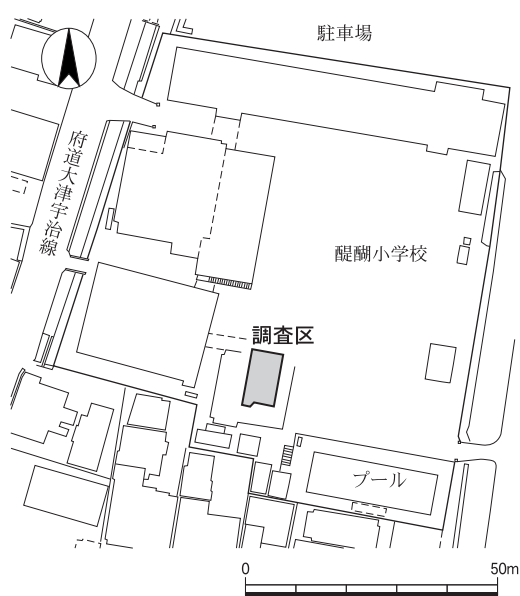


図298 調査区配置図（1：1,500）

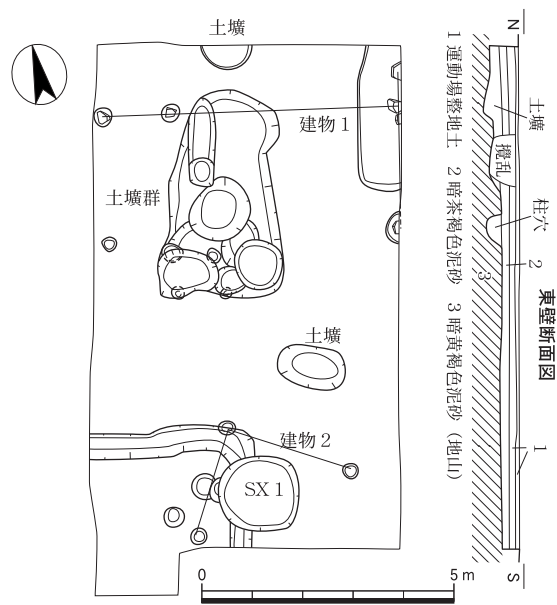


図299 遺構実測図（1：150）

75 板橋廃寺（図版31）

経過 京都市伏見区下板橋町に所在する京都市立板橋小学校において、校舎増築工事が行われることとなった。当該地周辺では奈良時代に遡る瓦などが採集されており、古代寺院跡の存在が推定されていた。また、近世以降では伏見城下の武家屋敷あるいは町屋などが営まれた地であり、各時代の遺構の発見が期待されることから、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。

遺構 調査区の基本層序は、運動場の整地土と小学校創設時の積土が厚さ約1.8mみられ、この積土層下は各時代に伴う整地層が全体で厚さ0.2～0.25m堆積しており、部分的に4～6層の薄い整地層がみられる。整地層は調査区全体を覆うものでなく、建物を構築する際に建物範囲を整地したものである。整地層下は積土層と思われる茶灰色系の砂礫層で、黄灰色粘土がブロック状に多量に入り込んでいた。この積土層は約0.5m堆積しており、その下層が基盤層である黄灰色粘土層である。検出した遺構は建物を主体として竈、集石群、土壇などで、各整地層ごとに時期差をもって検出した。ここではこれらの遺構を上層、下層、最下層として概説するが、上層、下層ともに近世の遺構であり、最下層の建物1棟だけが中世に遡る。

上層では建物1～3と集石群を検出した。

建物1は調査区西部に位置する礎石を使用した建物である。東西2間分（約4m）×南北5間（約10m）を検出した。わずかに掘り窪めた礎石据付穴に0.5～0.6mの礎石を据える。礎石は自然石を使用し、柱列方向に礎石の長軸を合わせる。建物西半は調査区外になると考えられる。なお、建物1の北側では東西方向に割り石を配した遺構を検出し、建物北東隅では割り石と自然石が集中して出土した。建物2は調査区南東部に位置する掘立柱建物である。東西2間（約2.25m）×南北4間（約5.7m）を検出した。建物3は建物1と柱穴が重複し、建物1の南東隅の礎石を除去した後に

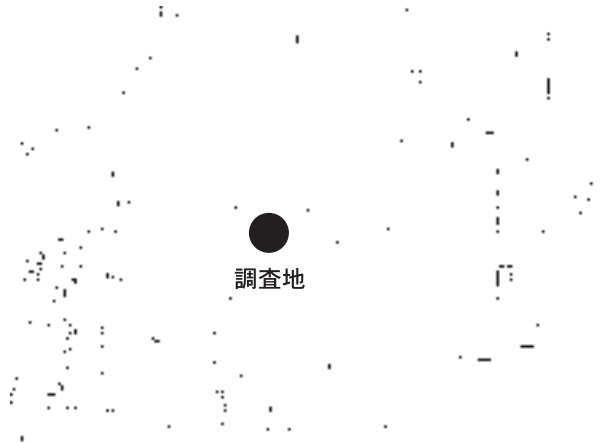


図300 調査位置図（1：5,000）

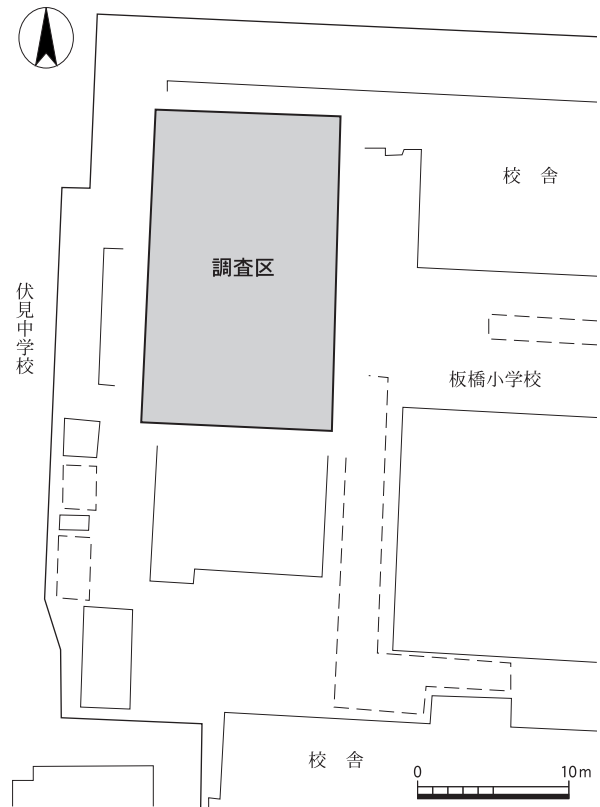


図301 調査区配置図（1：500）

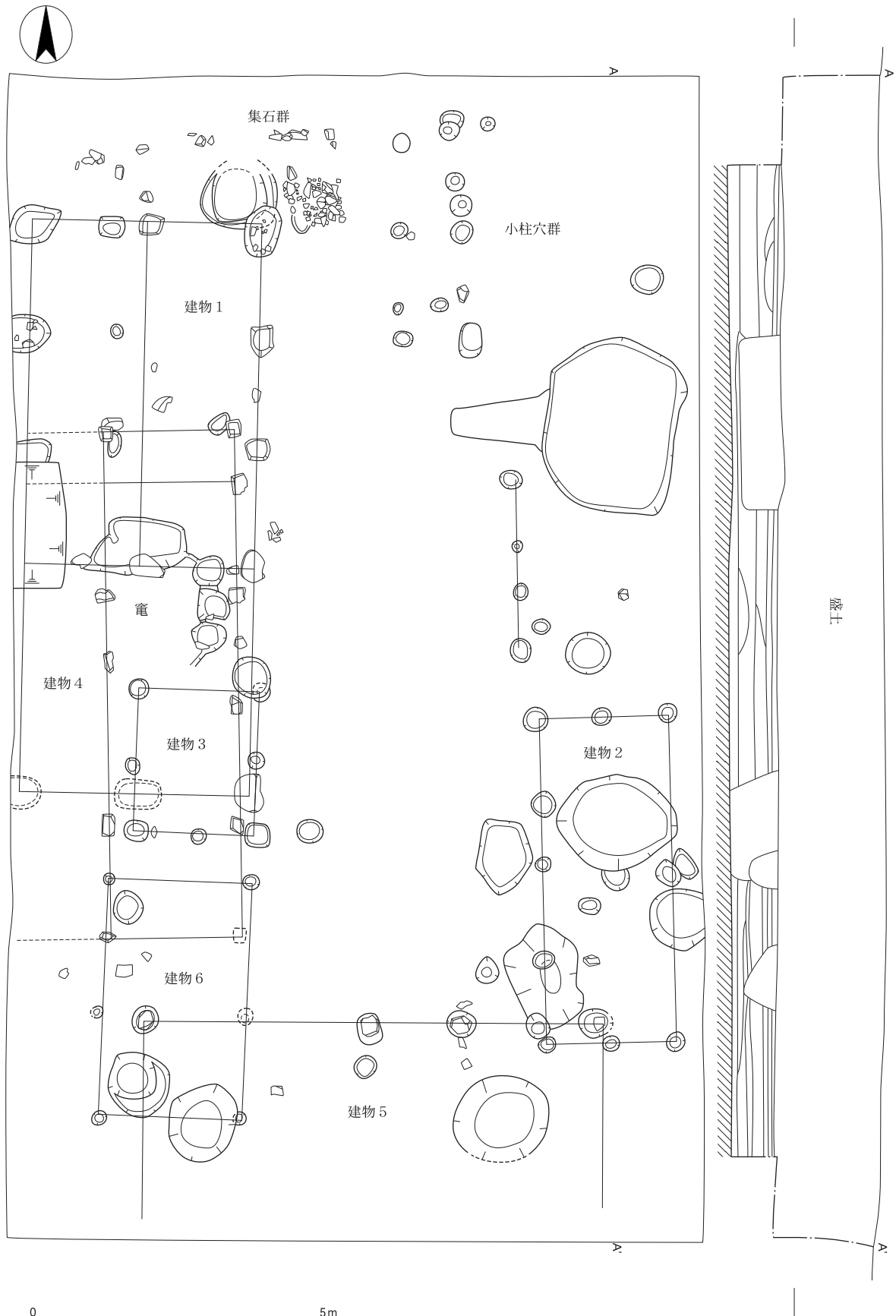


图302 遺構実測図 (1 : 100)

建物3の北東隅柱穴を検出した。東西2間(約2.25m)×南北2間(約2.5m)の小規模な建物である。このほか、調査区北部で小柱穴群を検出しており、小規模な建物が存在したと考えられる。

次に下層で検出した建物は、建物4・5の2棟である。建物4は調査区西部に位置する礎石を伴う建物である。東西1間分(約2.3m)×南北4間半(約9m)を検出しており、西は調査区外に広がると思われる。礎石に伴う掘形は検出できず、礎石を直接地面に据えたのであろう。礎石は0.3~0.4m大の割石を用いる。なお、建物内の北東部に竈が設置されていた。北に大型の竈を1基、東に小型の竈を3基南北に並べる。上部は削平されているが、基底部中央をやや掘り窪め、黄色粘土で竈本体を4基同時に構築したようである。竈内面は赤色に焼けており、焚口床面は竈から掻き出した灰や炭などが踏み固まり薄い層をなしていた。建物5は調査区南部に位置する掘立柱建物である。東西約8m分を検出し、南へはさらに広がる。柱穴は径約0.5~0.6mのほぼ円形で、底部に約0.3~0.35mの根石を置く。

最下層の遺構は建物6だけである。調査区南西部で検出した掘立柱建物で、東西1間(約2.5m)×南北2間(約4.1m)の小型建物である。

遺物 各整地層などから土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦器、染付などが多く出土した。多くは近世の遺物であるが、建物6の柱穴からは糸切底の土師器皿が出土している。また、積土と考えられる茶灰色系の砂礫層中から白鳳期の重弧文軒平瓦が2個体出土した。この積土層は調査区に近接する場所から運ばれたものと思われ、板橋廃寺に関連する遺物として重要である。

小結 今回の調査では、伏見城の築城に伴って整備された城下町の建物遺構を検出できた。とくに、建物4には竈遺構を伴っており、城下町の宅地内での生活の一端を窺うことができた。また、小規模ながら中世の建物を検出したことで、城下町形成以前の土地利用も想定できるようになった。板橋廃寺の実態についてはまったく不明であるが、発掘調査によって重弧文軒平瓦が出土したことで、調査地周辺に古代寺院に関連する遺跡が存在することはほぼ間違いないであろう。伏見城下町の復元とともに板橋廃寺の実態解明も今後の課題として残されたといえる。

76 伏見城跡 1

経過 当調査地は伏見城の西側に形成された城下町の一画で、鍋島屋敷に推定される場所である。当地においてマンション建設が計画されたため、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。

遺構・遺物 調査地の基本層序は、地表下0.3mまでが盛土で、その下層において伏見城期の整地層を確認した。整地層は黄褐色砂礫層で形成されていたが、遺構としては井戸を1基検出しただけであった。この整地層は伏見城築城時に約1.7m盛土しており、整地層を除去した地表下約2mの地点で褐色砂礫層を基盤層とする室町時代前期の遺構面を確認した。ここでは丸瓦を合わせて土管状に繋げた暗渠施設を検出しており、中世京都で多く見られる有孔方形埴も出土している。また、出土遺物には、土師器や瓦器・陶器などの中世土器や瓦類に混じって円筒埴輪片が出土している。

小結 当調査では伏見城期の遺構はほとんど検出できなかったが、築城時の厚い整地層を確認することができた。また、基盤層上で検出した排水管遺構や瓦類の出土から、室町時代前期の瓦葺き建物遺構の存在を想定できた。さらに、円筒埴輪の出土は、当地周辺に後期古墳の存在を想定させる重要な所見であった。

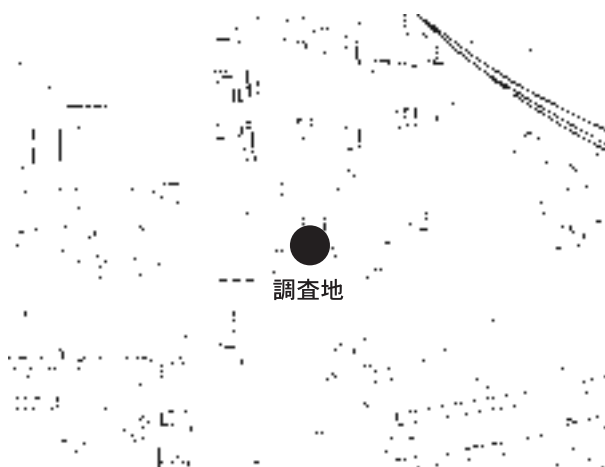


図303 調査位置図（1：5,000）



図304 調査区全景（北西から）



図305 暗渠施設検出状況（西から）

77 伏見城跡2

経過 今回の発掘調査は、伏見城跡松の丸と弾正丸の間に位置する空堀底部の、方形台状遺構の性格を知るために行われた。

方形台状遺構を中心として、幅5mのトレンチを東西方向に6本、裾部に1本、東側斜面に1本、計8本のトレンチを設定した。周辺を含めた全体の地形図を作成した後に、調査を実施した。断面実測・写真撮影を行い、最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査地の土層は、各地で異なっているが、おおむね基本層序は、第1層表土層(0.2~0.8m)、第2層灰白色砂と茶褐色砂質粘土の互層(盛土:0~5m)、第3層灰褐色粘土層(堀内埋土)である。第3層上面で遺構を検出した。

方形台状遺構は、基底部東西幅約23m、上部幅約13m、高さ約5mの盛り上がりで、上部の平坦面は南斜面上の

●
調査地

図306 調査位置図(1:5,000)

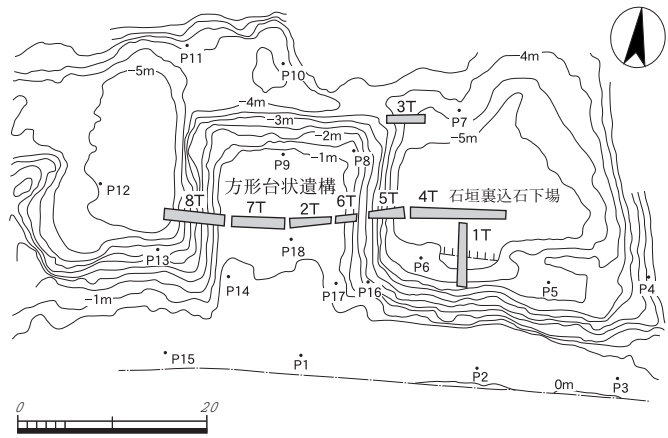


図307 調査区配置図(1:800)

- | | |
|-----------|------------|
| 1 表土 | 14 灰色砂 |
| 2 濁黄灰色砂 | 15 褐色砂質粘土 |
| 3 灰色粘土 | 16 茶灰色砂質粘土 |
| 4 淡黄色砂 | 17 白色砂 |
| 5 黄褐色砂質粘土 | 18 灰白色砂 |
| 6 灰色粘土 | 19 灰褐色砂 |
| 7 淡黄色細砂 | 20 黄灰色砂 |
| 8 黄褐色砂質粘土 | 21 茶灰色砂 |
| 9 灰色砂 | 22 茶色砂 |
| 10 濁黄灰色砂 | 23 青灰色砂 |
| 11 茶灰色砂 | 24 灰褐色砂 |
| 12 茶灰色粗砂 | 25 黄灰色砂礫 |
| 13 青灰色砂 | 26 灰褐色粘土 |

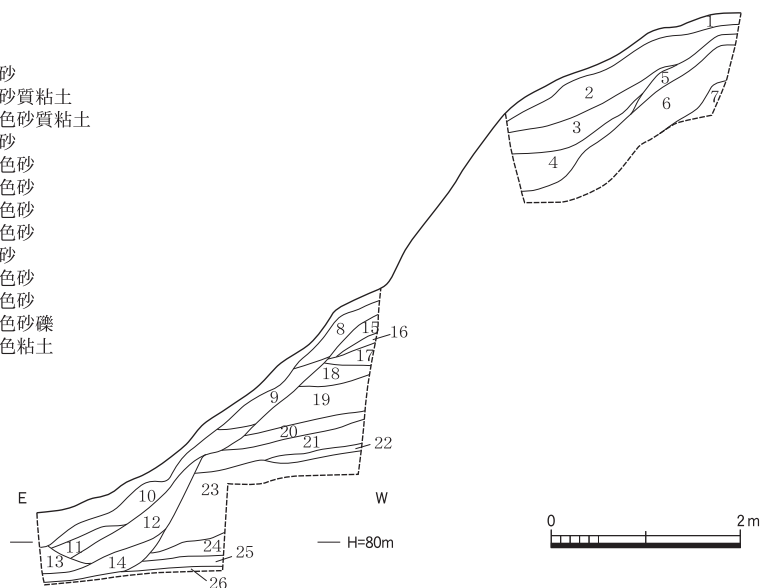


図308 南壁断面図(1:80)

幅8 mの平坦面に繋がる。遺構は、堀底部に地業を行わず、砂と粘土を互層に積み上げて形成する。壁面・上面には護岸の施設は設けていない。

遺物 出土遺物には、土師器、瓦類などがある。遺物の主体は瓦類で、土器類は少ない。瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・面戸瓦などがある。時期は、桃山時代である。

小結 今回の調査では、方形台状遺構は石垣などの施設がなく、盛土も城の石垣下の土とは異なり、堀とは全く関係無いと推定した。地元の人々の聞き取りから、明治時代の射撃台であろうと考えられる。

また、堀南側の石垣は抜き取られ、裏込め石が残存したのみで地業はなく、石垣の構築方法は不明である。

『伏見城跡－文化庁国庫補助による発掘調査報告－1978年度』 1979年報告

78 伏見城跡 3 (図版32)

経過 当調査は、公務員宿舎建設に伴う発掘調査である。調査地は伏見城二の丸の西北西に位置する伊達街道に西面した場所で、「永井久太郎」の地名が残る城下屋敷地に相当する。今回の調査でも屋敷地に関連する遺構の検出が想定できた。

遺構・遺物 調査区の基本層序は、地表下0.2~0.3mの盛り土を除去すると、安土桃山時代から江戸時代の遺構面となる。この遺構面は伏見城築造時に平坦面を形成したもので、自然地形は南東から北西へ緩やかに傾斜しており、調査区東端部では厚さ約1.2~1.4m、西端部では厚さ約1.5mの整地がなされていた。なお、調査区南東隅において、整地層の下層に埋没した古墳墳丘の北西部高まりを確認した。墳丘上や周辺から多くの土師器・須恵器とともに円筒埴輪片が出土している。

伏見城期の遺構は、井戸1基と瓦溜を検出したにすぎない。井戸4は検出面では東西約1.4m、南北約1.2mの方形を呈する井戸で、遺存していないが方形井戸枠があったと想定できる。また、深さ約1.5mから下は円形素掘り構造となるが、3mより下層は安全確保のため掘削できなかった。瓦溜5は、調査区東端部で検出した浅い不整形な窪みに多量の瓦が廃棄されたもので、金箔瓦も出土している。

江戸時代の遺構は、建物1と土器類を多量に包含した土壌2および墓壙群で形成された土壌3である。建物1は径約1mほどの浅い礎石抜き取り穴を検出しており、東西4間(約8m)×南北2間以上(約4m)で南は調査区外に展開する。遺構の切りあい関係を見ると、井戸4の埋没後に礎石が据えられていることがわかる。土壌2は調査区西北部で検出した東西約1.8m、南北約3m、深さ約0.8mの方形土壌で、底面と側面に炭層が堆積し、土師器灯明皿

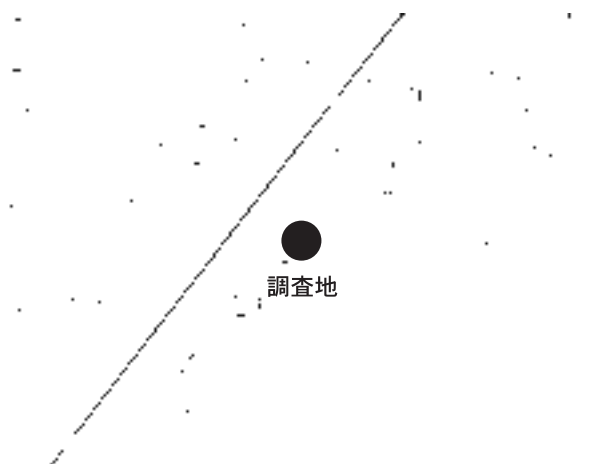


図309 調査位置図 (1 : 5,000)

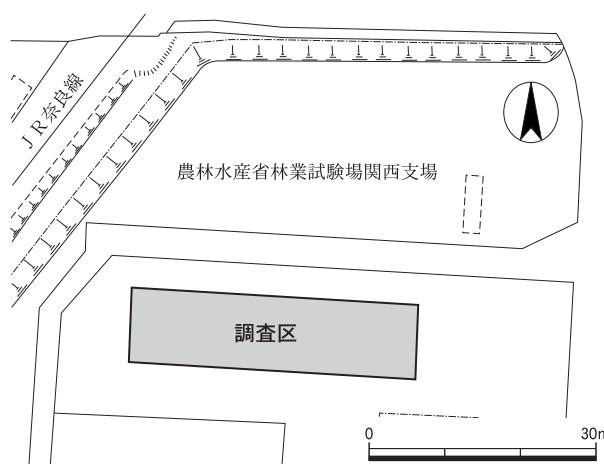


図310 調査区配置図 (1 : 1,000)

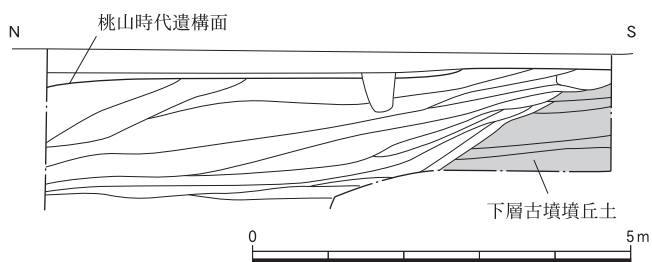


図311 東壁断面図 (1 : 100)

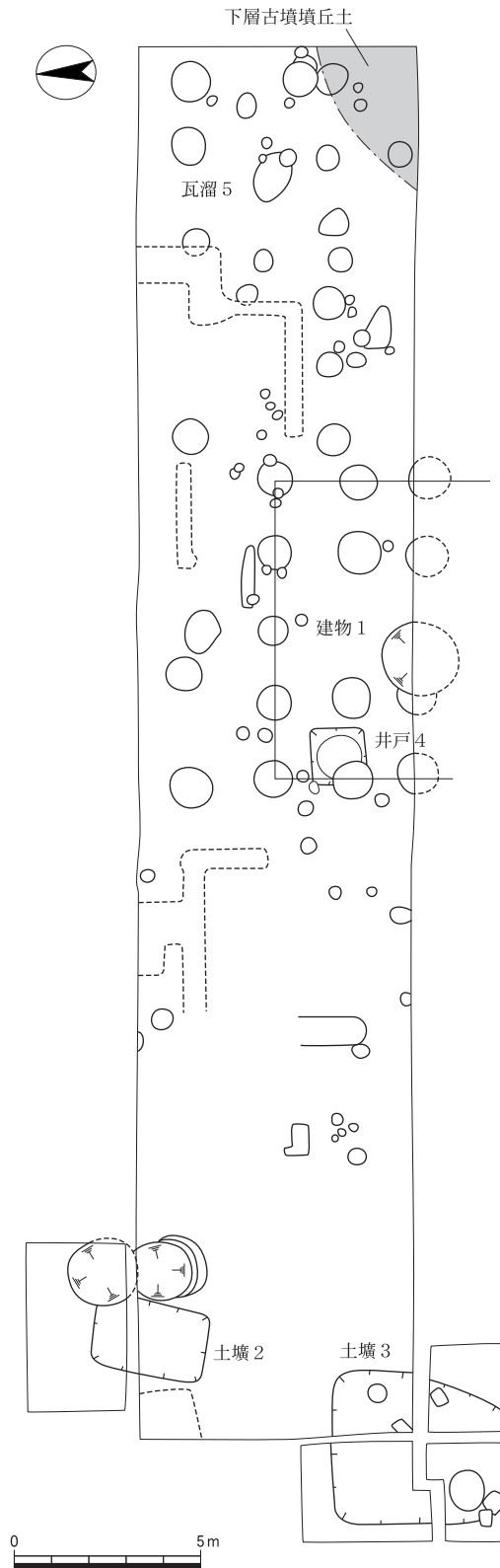


図312 遺構平面図（1：200）

が重なるように出土した。また、骨片も出土することから土壙3と同様に墓壙遺構と考えられる。土壙3は調査区南西で検出しており、検出面では東西約4m、南北4.5m以上の大型土壙として認識したが、掘り下げた段階で一辺0.4~0.6mの方形墓壙が数基確認できた。また、下層の炭層から古銭6枚が紐に通した状態で出土した。

小結 今回の調査では伏見城期の遺構はあまり検出できなかったが、築城に際して大規模な整地事業が行われたことを改めて確認することができた。また、江戸時代以降には、礎石建物と墓壙群を検出したことから寺院地として利用されていたと想定できる。さらに、厚い整地層の下層で古墳の墳丘を発見したことは大きな成果であり、今後は伏見城下に埋没する群集墳の存在も視野に入れて調査を行っていく必要がある。

第2章 試掘・立会調査

I 昭和53年度の試掘・立会調査概要

昭和53年度の原因者負担による試掘・立会調査の委託契約件数は、立会調査29件、試掘調査8件である（表2）。これらの調査のうち西部幹線公共下水道工事に伴う立会調査（17～19）については個別に報告する。その他の遺構・遺物が希薄なものについては一覧表の記載にとどめ、調査位置を図324に示した。

平安宮内の内裏跡・縫殿寮・南院跡（1）では、平安時代の遺構は確認できなかったが、出水通と土屋町通の交差点を西に入った地点では、地表下0.3～0.4mで平安時代の瓦を包含する堆積土層を0.2mの厚さで検出した。また、千本通と新出水通の交差点から東へ30mの地点まで、地表下0.1m前後の深さで地山（黄褐色砂泥層）を確認できた。地山未確認の地点については聚楽第に伴う堀跡である可能性が高いと考えられる。出土遺物は、平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・瓦器・瓦類や江戸時代の土器類などである。

御井跡（2）では、京都市立朱雀第六小学校の校舎建替に伴い試掘調査を実施した。地表下0.4mで地山（淡黄褐色砂礫層）を確認した。この上面では、北東から南西方向に流れる幅約6mの流路状遺構を検出した。調査区は湧水が激しく、御井が置かれた地区として妥当と考えられる。

平安京内では、左京二条二坊、史跡二条城（3）で平安時代後期の土器溜、平安時代末から鎌倉時代の埋甕土壙を検出した。また、近世初頭の石組暗渠も確認した。遺物は、瓦類、土師器、緑釉陶器片、常滑甕などが出土した。

左京八条四坊（4）では、鎌倉時代の井戸1基、室町時代の井戸を5基と溝1基を検出した。遺物は、平安時代から室町時代の土師器・陶磁器・瓦などが出土した。

左京九条二坊（7）では、平安時代末から鎌倉時代の溝状遺構を検出した。遺物は、平安時代末から鎌倉時代の土師器、中世から近世の陶磁器、古墳時代の土師器などが出土した。

右京二条・三条二坊（9）では、平安時代の溝、鎌倉時代の井戸1基・溝・土壙などを検出した。平安時代の溝からは銅銭が出土した。

右京二条～四条二坊（10）では、平安時代の池状遺構と溝8条を検出した。平安時代末の井戸1基、中世の井戸1基なども検出した。遺物は、木簡・卒塔婆・土師器・須恵器などが出土した。

右京二条三坊七町（11）では、平安時代の溝・土壙、弥生時代の溝を検出した。平安時代の溝は春日小路南側溝と推定できる。遺物は、土師器・緑釉陶器・須恵器・弥生土器などが出土した。

右京二条三坊七町（12）では、平安時代後期の井戸1基を検出した。遺物には、越州窯の合子・椀、土師器、須恵器、瓦などがある。

右京四条～九条二坊（14）では、平安時代の井戸1基と溝・土壙などを多数検出した。遺物は、黒色土器・瓦器・緑釉陶器・灰釉陶器・須恵器・銭貨などが出土した。銭貨は推定西市跡（七条

西大路交差点内)で検出した。土師器は、古墳時代のものや平安時代から中世にかけてのものが出土した。

右京七条～九条二坊(15)では、平安時代の路面・溝2条・井戸1基を検出した。路面は七条大路にあたり、その南北の側溝を確認できた。遺物は、古墳時代の土師器と平安時代の遺物が多数出土した。

その他の遺跡では、岩倉忠在地遺跡(25)で、弥生時代の落込み2基と遺物包含層を検出した。弥生時代後期の遺物が出土した。

植物園北遺跡(26・27)では、(26)で古墳時代の溝状遺構1基・住居跡3棟、平安時代の包含層と時期不明の池状遺構・河川跡、(27)で弥生時代の溝状遺構3箇所、平安時代の土壙1基、中世の土壙1基を検出した。遺物は、古式土師器がそれぞれの調査区から出土した。(27)からは鉄製品も出土した。

勧修寺境内(29)では、鎌倉時代の溝1条を検出した。土師器が出土した。

中久世遺跡(30)では、弥生時代の包含層を検出した。

深草遺跡(32)では、弥生時代・古墳時代の溝・ピット、平安時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代の土壙・包含層を検出した。出土遺物の時期は、弥生時代から江戸時代にわたる。

伏見城跡(37)では、安土桃山時代の石垣1箇所を確認した。軒丸瓦が1点出土した。

II 平安京跡

1 平安京右京広域・西京極遺跡（図版33～35）

経過 1978年度西部幹線公共下水道工事は、西京極（その1～7）、西院（その1～7）両地区と西部3号幹線で実施されることになった。該当地は右京区内にあって西は天神川から東は佐井西通、北は四条通付近から南は八条通近辺までが工事範囲となる。西京極遺跡と平安京右京五条から八条の三・四坊にあたり工事に伴い立会調査を実施した。調査の結果、弥生時代から中世、近世に至るまでの各時代の遺構・遺物を検出した。いずれも立会調査の制約上、少量の遺物検出にとどまったが、一部まとめて遺物が出土した地点があり、それを報告する。

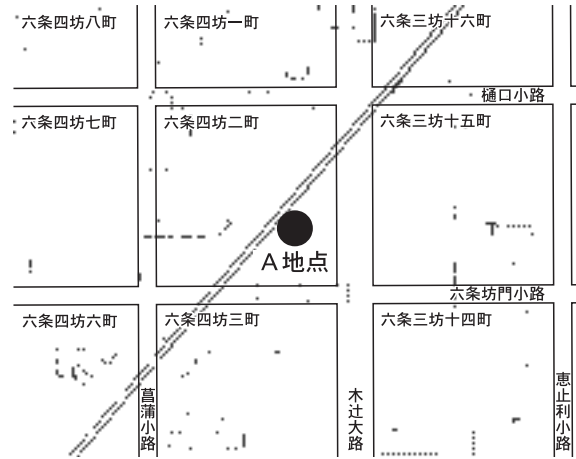


図313 A地点位置図（1：5,000）

A地点 西院（その2）地区の調査である。五条通と阪急電車京都線が交差する地点から阪急電車の南側の道路を北東へ約60mの地点である。

基本層序は地表下0.55mまでが現代盛土層、1.8mまでが茶褐色粘土層、以下が砂礫層となる。遺構は地表下0.55mで茶褐色粘土層上面で検出した溝状遺構である。幅約0.9m、深さ0.7mを測り、埋土は暗茶褐色粘土層である。この埋土から多量の弥生土器が出土したので報告する。なお約60m南西に位置する五条通と阪急電車京都線が交差する地点でも茶褐色粘土層上面で検出した落込みから弥生土器が出土している。

弥生土器（図314、図版33） 壺（1）、甕（2）は共に内外面同一原体のハケメを用いて調整を施す。弥生時代中期に属する。

壺（3～12）は弥生時代後期である。（3）は垂下口縁の広口壺で外端面に3条の凹線文を巡らせ円形浮文を貼り付けている。小片のため円形浮文の個数単位は不明である。（5）は口縁の1箇所をつまんで下に折り曲げ片口状にしている。（9）は長頸壺で体部外面は左上りのハケメを施し、底部付近は軽く指で押さえ明瞭な平底としている。体部内面の底部には反時計回りの「クモの巣状ハケメ」が施され、体部上半ではハケメがナデによって消されている。（11）の口縁部下端の列点文の原体は籬ではなくハケメ原体を用いている。（12）も体部内面の底部には反時計回りの「クモの巣状ハケメ」が施され、体部上半には左上りのナデ、口縁部はヨコ方向のハケメを施す。

甕（13～16）、鉢か甕の脚台（17）、高杯（18～21）、器台（22・23）も弥生時代後期である。高杯（18）は外面にはハケメを施した後、粗いヘラミガキを施す。（19～21）は屈曲部に円孔の透かしを3方に穿つ。器台（22）は筒部に沈線文を施す。（23）は筒部及び脚台部との屈曲部に2段の互い違いに配した円孔の透かしを4方に穿つ。



图314 A地点出土土器实测图 (1 : 4)

B地点 西部3号幹線の調査である。葛野大路通と高辻通の交差点から北へ約150mのデルタ自動車教習所前の地点である。

この工事では掘削深が2.8mあり、基本層序は現代盛土層、耕作土層、茶褐色粘土層、暗灰色泥土層、茶褐色砂質粘土層、緑灰色粘土層となる。茶褐色粘土層、暗灰色泥土層は土師器や須恵器の小片が出土する遺物包含層であり、茶褐色砂質粘土層、緑灰色粘土層が地山層と考えられる。検出した遺構は河川状遺構である。幅約

30m、深さ0.7mを測り、遺構断面の底部は中央が緩やかに窪み、この形状に沿って黒灰色粗砂層、黒褐色有機物包含層、茶灰色砂礫層の3層が薄く堆積している。古墳時代前期の土器は黒灰色粗砂層から多量に出土した。これらの土器を報告する。

古墳時代前期の土器（図316、図版34・35）出土土器には壺、甕、高杯、小型鉢、小型丸底土器、小型器台などがある。

(24～34)は壺である。(24)は内外面をヨコ方向に丁寧にヘラミガキを施す。細かく精良な胎土を用いる。(25)は外面に煤をとどめる。(26)は内外面をヨコナデする。(28)は内外面をヨコ方向にヘラミガキを施す。(29)は内面をヨコ方向にヘラケズリを行う。(30)は内外面をヨコナデで仕上げる。(30～34)はいずれも屈曲部上端に稜を形成している。

(35～49)は甕である。(35)は小型の甕である。体部内面は左上りにナデ上げており、外面には煤を残し、内面には煮沸時の残溶物をとどめている。(36)は体部上半に右上がりの粗いタタキを施した後、口縁部を継ぎ足す。口縁部内外面はヨコナデによって仕上げるが、内面には横方向のハケメが残っている。(37)は口縁部はヨコナデを施し、外面には粘土紐の接合痕跡が明瞭に残る。胎土に砂粒を多く含み、赤灰色を呈する。(38)は体部上半は右上がりの細筋のタタキを施し、内面はヘラケズリにより器壁を薄くする。胎土は雲母を多く含み、褐色を呈する。河内産の庄内式甕である。(39)は体部外面に粗い右上がりのタタキを施す。内面には左上りの凸線がみられるが、これはあて具にあった凹線の痕跡と考えられる。(40)は(39)を模した在地的な庄内式甕である。(41・42)は受口状口縁をもつ近江型甕である。(44～49)は布留式に属するもので、(47)が最も一般的な形態、(44・45)はその先行的形態、(48)は後出的な形態をもつ。

(50～60)は高杯である。(50)は口縁部外面には口縁からジグザグ状にヘラミガキ、列点文、タテ方向のヘラミガキを施している。(51)は(50)の脚部になると考えられるものである。屈曲部に円孔を4方に穿つ。(52)は内外面を丁寧にヘラミガキし、内面にはこの上から放射状暗文を加えている。他の高杯とは異なり微砂粒を含んだ精良な胎土で赤褐色を呈する。(53)は内外面共にタテ方向のヘラミガキを施す。裾部の内面のみヨコナデを施している。(54)は内外面に螺旋状のヘラミガキを施す。(55・56)は外面にはタテ方向、内面には左上りのハケメを施し、後に口縁

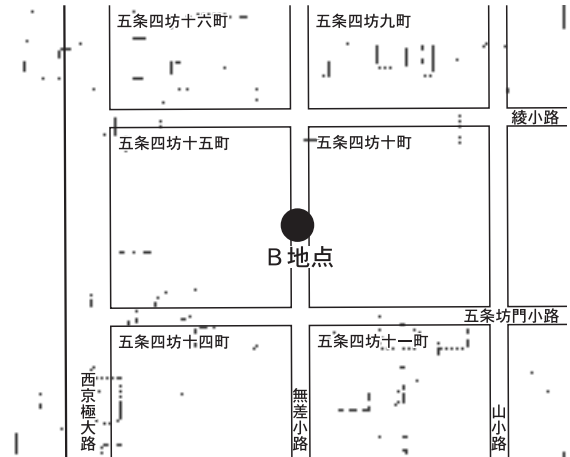


図315 B地点位置図 (1:5,000)

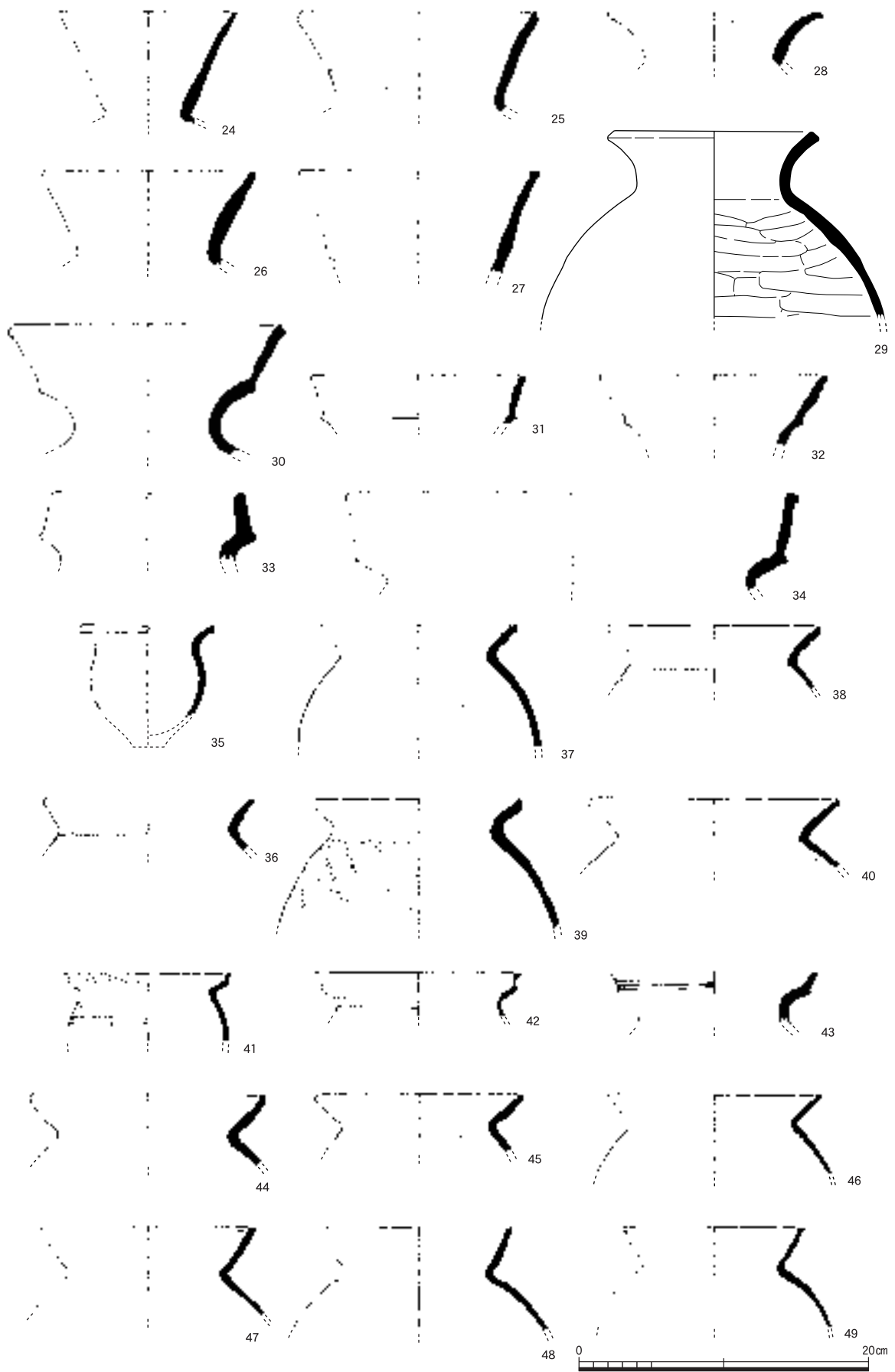


图316 B地点出土土器实测图1 (1:4)



図317 B地点出土土器実測図2 (1:4)

部をヨコナデする。(57)は屈曲部のやや上方に円孔を四方に穿つ。

(61~63)は小型鉢である。(63)は内面にのみ丁寧なヘラミガキをヨコ方向に施す。細かく良好な胎土を用いる。

(64・65)は小型丸底土器である。(64)は外面にタテ方向にハケメを施した後、口縁部と体部にヨコ方向の丁寧なヘラミガキを施す。口縁内面にも同様のヘラミガキを施す。体部内面には調整の際に生じた工具の痕跡をとどめる。この工具はハケメ状ないしヘラ状のものと思われ、体部内面に沿って時計回りに回る。胎土は細かく良好のものを用いる。(65)は外面にナデを施した後、底部付近に一方方向のハケメを施す。内面は左上りのハケメを施した後、反時計回りにヘラケズリを行う。

(66・67)は小型器台である。(67)は皿部は磨滅が著しい。脚部は外面にタテ方向のヘラミガキを施し、内面には時計回りにハケメを施す。

C地点 西院（その4）地区の調査である。葛野大路五条に所在する光華女子学園の北側の地点である。

基本層序は地表下0.8mまでが現代盛土層、0.94mまでが耕作土層、1.15mまでが暗褐色砂質土層、1.53mまでが褐色砂質土層、以下が灰色ないし褐色の砂層となる。地表下1.15mの褐色砂質土層から飛鳥・奈良時代の土師器・須恵器が出土している。

飛鳥時代の土器（図319） 土師器鉢（68）の口縁端部は内傾して中央に凹みをもち、外面は上半部をヨコ方向のナデ、下半部をオサエによって調整した後、ヨコ方向に粗いヘラミガキを施す。内面はヨコ方向のナデの後、底部より上方にかけて放射状暗文を施し、次いで上半部に右上がりの斜行暗文を施す。焼成は良好で、胎土は細かい砂粒を含み、色調は内外面とも赤褐色を呈す。

土師器甕（69）の口縁端部は内傾して中央に凹みをもち、口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内外面は左上りのハケメ、口縁部内面には反時計回りのヨコ方向のハケメを施す。焼成は良好で、胎土中は雲母・石英・長石を多く含み、色調は内外面とも橙灰色を呈す。

D地点 西院（その1）地区の調査である。五条通の2筋南の東西通（中堂寺南通）と西小路通の1筋東の南北通交差点北東側である。

基本層序は地表下0.6mまでが現代盛土層、1.2mまでが耕作土層、1.35mまでが暗灰色粘土層、1.55mまでが暗灰色砂層、以下が暗灰色泥土層となる。地表下1.2mの暗灰色粘土層からは平安時代の土師器・須恵器・瓦などが出土している。

平安時代の土器（図321） 土師器には皿（70～75）と杯（76）がある。

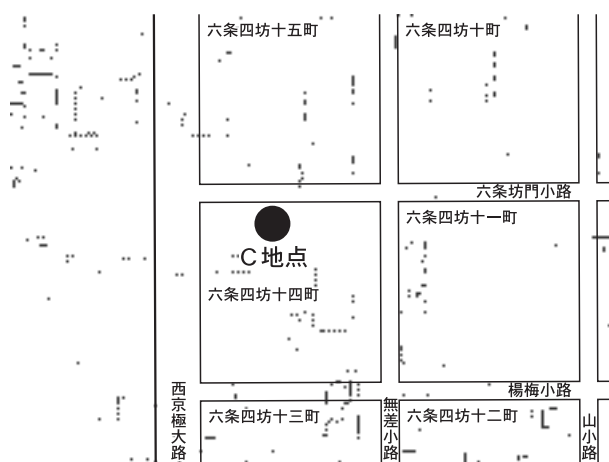


図318 C地点位置図（1：5,000）

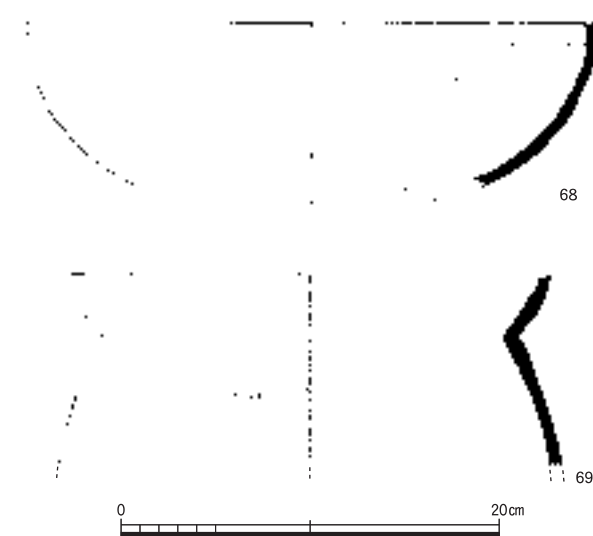


図319 C地点出土土器実測図（1：4）

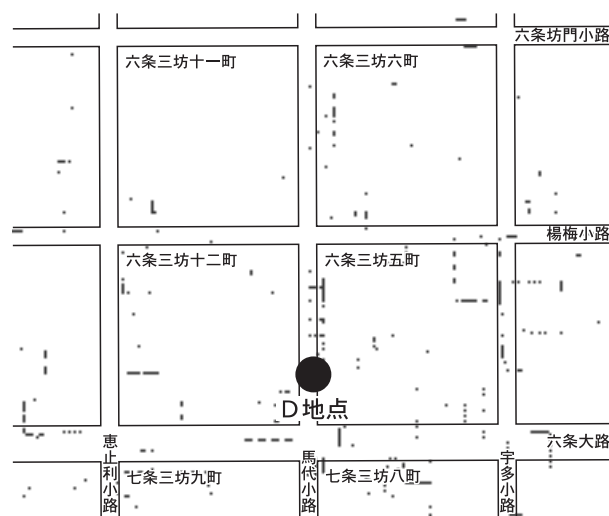


図320 D地点位置図（1：5,000）

皿（70～73）はいずれも口縁部をヨコナデし、底部外面を指オサエのままにとどめる。

杯（76）の内面はハケメを施した後、ヨコ方向のナデを行う。外面は指オサエの後に粗いヘラミガキを行う。

E地点 西院（その4）地区の調査である。葛野大路高辻の交差点のひとつ北側の交差点である。

基本層序は、地表下0.8mまでが現代盛土層、1.73mまでが茶褐色粘土層、1.73m以下が暗灰色泥土層となる。地表下1.73mの暗灰色泥土層から石製品の子持勾玉が出土した。しかし、この層からは子持勾玉以外の遺物は一切出土していない。

石製品（図323、図版33） 子持勾玉（77）は、全長9.7cm、幅6.4cm、厚さ3.6cmを測る。

全体に重厚で断面形は正円に近い。頭部の貫通孔は両面から穿ち、軽く縁を面取りする。この部分に紐擦れはみられない。子は腹部に1個、背部に4個、両側面に各3個を配する。子の多くは端部を欠損している。しかし、完存するものをみると、背部のものは中央が凹んで勾玉の名残をとどめるが、両側面のものはすべて平坦面となって単なる突起化している。表面には製作時の擦痕をとどめている。石材は暗緑灰色を呈する滑石を用いている。全体に重厚で均整な形態をとどめている点からみて勾玉としては古い形態のものと考えられる。

『西部幹線公共下水道工事に伴う遺跡調査概報』1978年度 1979年報告

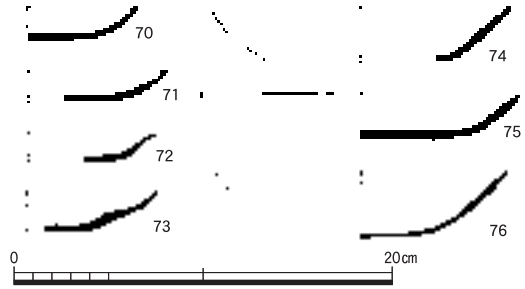


図321 D地点出土土器実測図（1：4）

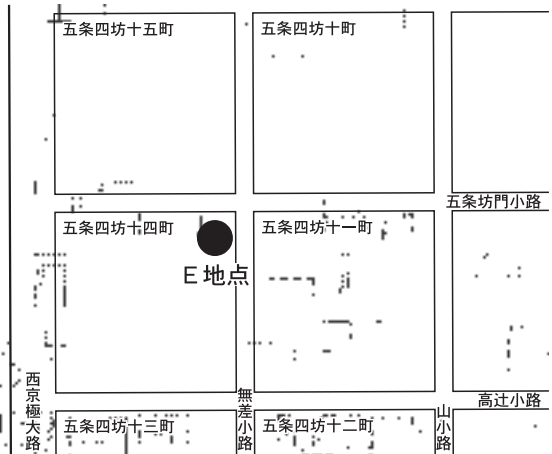


図322 E地点位置図（1：5,000）

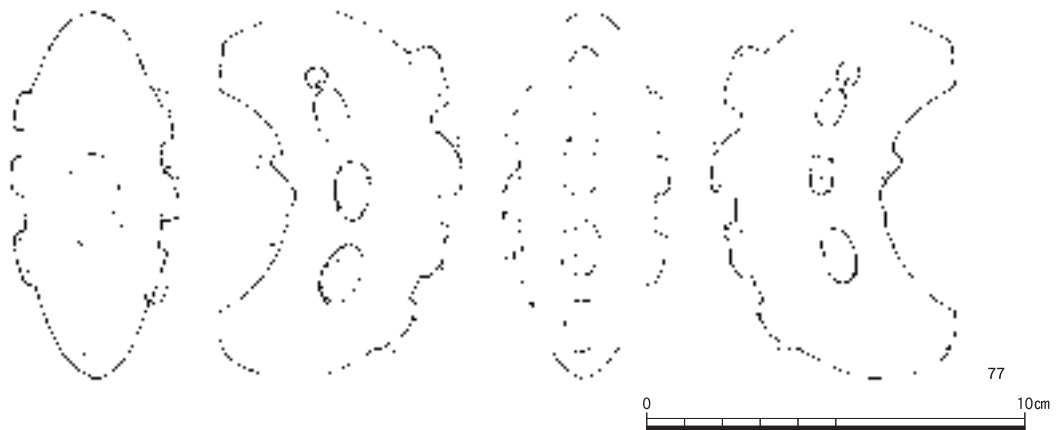


図323 E地点出土子持勾玉実測図（1：2）

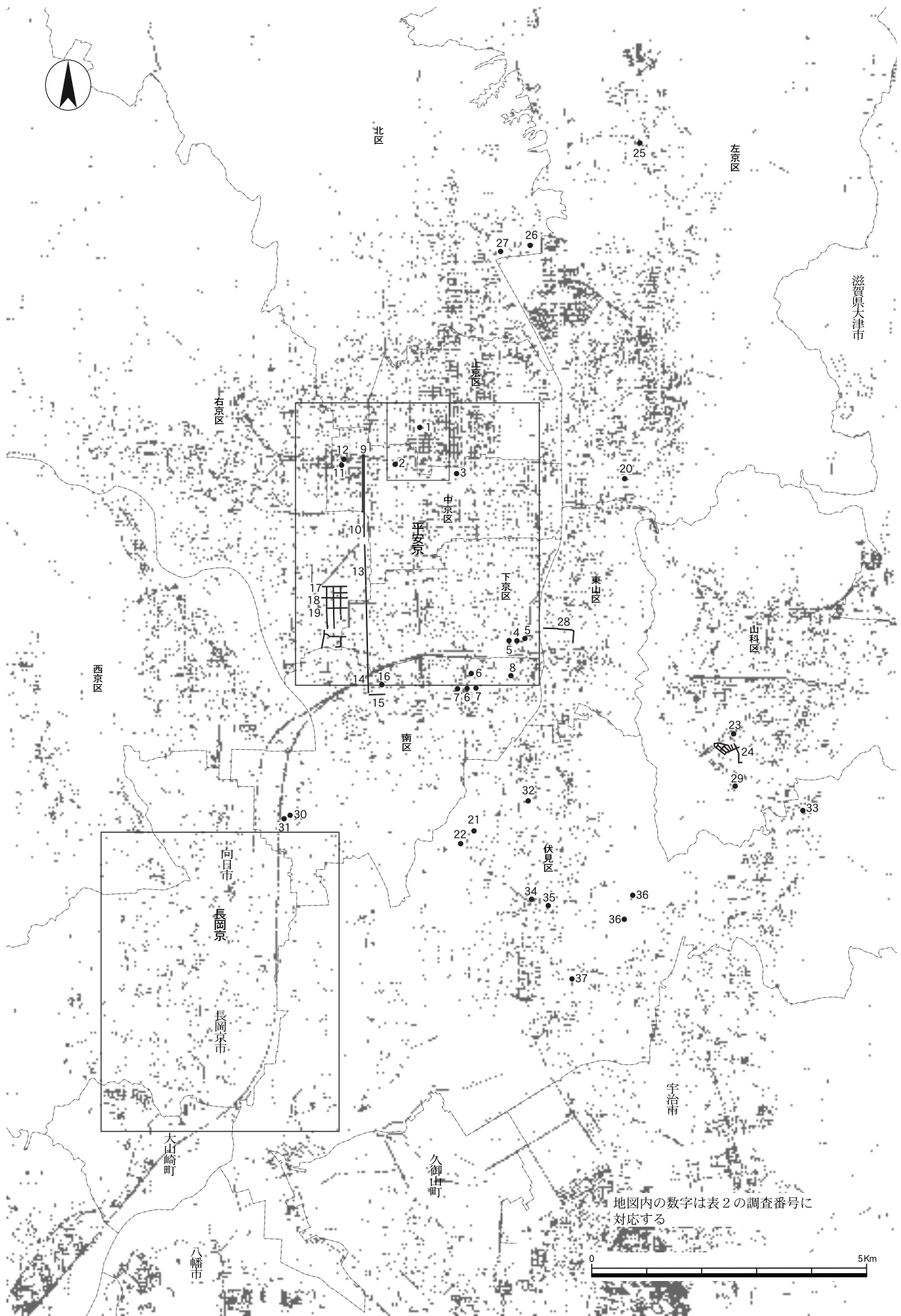


図324 昭和53年度試掘・立会調査位置図 (1 : 100,000)

表1 昭和53年度発掘調査一覧表

	契約番号・遺跡名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考
平安宮	1 53-014-03 平安宮朝堂院会昌門跡 78HK-NC	中京区聚楽廻東町24-6	1978/07/11 ～1978/07/20	30㎡	京都市/ 松本良子	本、和泉田	国庫補助
	2 53-014-06 平安宮朝堂院暉章堂跡 78HK-HS002	上京区竹屋町通千本東 入聚楽町863	1978/05/30 ～1978/06/07	35㎡	京都市/ 青山重昭	平尾	国庫補助
	3 53-014-09 平安宮朝堂院小安殿跡 78HK-CO	上京区千本通下立売下 る小山町877他	1978/08/24 ～1978/09/30	120㎡	京都市/ 吉川正晃	平尾	国庫補助
	4 53-014-05 平安宮豊楽院跡 78HK-BR001	中京区聚楽廻西町71-2	1978/07/06 ～1978/07/11	25㎡	京都市/ 齊藤吉三郎	平田	国庫補助
	5 53-026 平安宮正親司跡 78HK-UN	上京区仁和寺街道御前 東入鳳瑞町219	1978/08/20 ～1978/09/28	350㎡	本門仏立宗	平田	
	6 53-078 平安宮主殿寮跡 78HK-IN	上京区中立売通智恵光 院西入多門町445-12	1979/02/10 ～1979/03/10	100㎡	(株)長谷川	加納、鈴木広	
	7 53-046 平安宮造酒司跡 78HK-MK005	中京区聚楽廻松下町	1978/10/02 ～1978/11/25	1100㎡	京都市	本	
	8 53-014-01 平安宮中和院跡 78HK-CC001	上京区下立売通千本東 入田中町420	1978/04/17 ～1978/05/13	110㎡	京都市/ 久保田満夫	平田	国庫補助
	9 53-014-02 平安宮中務省跡 78HK-CM001	上京区丸太町通千本東 入中務町491-60	1978/04/24 ～1978/05/29	65㎡	京都市/ (株)中村織ネ ーム	平尾	国庫補助
	10 53-014-04 平安宮中務省跡 78HK-ON	上京区丸太町通千本東 入中務町491-3	1978/05/24 ～1978/06/19	100㎡	京都市/ 木村有志	本、和泉田	国庫補助
	11 53-014-07 平安宮太政官跡 78HK-DK002	上京区浄福寺通丸太町 下る東入主税町1050	1978/07/10 ～1978/07/15	80㎡	京都市/ ダイテツ建設	百瀬	国庫補助
	12 53-014-11 平安宮太政官跡 78HK-OG	上京区竹屋町通千本東 入主税町1092	1978/09/25 ～1978/11/04	142㎡	京都市/ (株)大原パラ ジウム化学	長宗	国庫補助
平安京	13 53-050 平安京左京北辺二坊六町 78HK-DE001	上京区油小路通中立売 下る甲斐守町97	1978/10/16 ～1978/12/29	300㎡	電々公社	磯部、中村	
	14 53-062 平安京左京一条四坊隣接地 78HK-AJ	上京区寺町通丸太町上 る京都御苑	1978/12/01 ～1978/12/25	47㎡	京都市	中村	
	15 53-087 平安京左京二条三坊十二町 78HK-EK	中京区烏丸通二条上る 蒔絵屋町260	1979/02/09 ～1979/03/01	180㎡	京都トラスト (株)	中村、吉川	
	16 53-065 平安京左京四条三坊十五町 78HK-RQ-A	中京区六角通烏丸東入 堂之前町231.232-1	1978/12/08 ～1979/01/17	50㎡	(株)イヌイ	家崎	
	17 53-052 平安京左京四条三坊十五町 78HK-RQ-B	中京区六角通東洞院西 入堂之前町236	1978/12/18 ～1979/01/31	75㎡	小倉屋旅館	石井	

	契約番号・遺跡名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考	
平安京	18	53-092 平安京左京四条四坊一町 78HK-NQ	中京区東洞院通三条下 る三文字町217	1979/03/16 ～1979/04/15	145㎡	(株) 中原	辻裕	
	19	53-038 平安京左京五条一坊十二町 78HK-MC	中京区壬生相合町1 (松原中学校)	1978/08/31 ～1978/10/04	450㎡	京都市	家崎、中村	
	20	53-064 平安京左京六条一坊二町 78HK-KT002	下京区中堂寺坊城町 26-1 (光徳小学校)	1978/11/15 ～1978/12/20	408㎡	京都市	加納	
	21	53-073 平安京左京六条一坊三町 78HK-GK001	下京区五条通 (西大路 ～堀川)	1978/12/22 ～1979/01/13	80㎡	京都市上下水道事業	梅川	
	22	53-058 平安京左京六条一坊三・六町 78HK-GK001	下京区中堂寺壬生川町 12 (国道9号線)	1978/12/04 ～1979/02/28	800㎡	近畿地方建設局	梅川、加納	
	23	53-004 平安京左京八条三坊二町 78HK-TD	下京区塩小路通新町西 入東塩小路町841-5	1978/05/08 ～1978/06/06	220㎡	武田病院	吉川	
	24	53-020 平安京左京八条三坊二町 78HK-ST	下京区塩小路通新町西 入東塩小路町608-5	1978/04/21 ～1978/06/09	400㎡	京都市	丸川	
	25	53-040 平安京左京八条三坊七町 78HK-NS	下京区塩小路通烏丸西 入東塩小路町579-10他	1978/09/20 ～1979/02/02	1000㎡	日本生命	鈴木広、吉川	
	26	53-027 平安京左京八条三坊十・ 十一・十四町 78HK-EC	下京区烏丸通塩小路下 る東塩小路町	1978/08/01 ～1979/08/17	1250㎡	(株) 京都ステーションセンター	辻純、吉川、磯部、平方	発掘立会
	27	53-014-08・53-031 平安京左京九条四坊三町 78HK-KF001	南区東九条南山王町5-5	1978/08/22 ～1978/09/23	200㎡	京都市	長宗、本	国庫補助
	28	52-052・53-008 平安京右京一条三坊四町 77HK-KD	中京区西ノ京南大炊御 門町1-2	1978/04/03 ～1978/06/10	1000㎡	関西電力	久世、平方	
	29	53-044 平安京右京二条三坊二町 78HK-SE002	中京区西ノ京中御門西 町25 (朱雀第八小学校)	1978/09/08 ～1978/09/22	330㎡	京都市	百瀬	
	30	53-011 平安京右京二条三坊七町 78HK-NR001	中京区西ノ京春日町 16-1他	1978/05/15 ～1978/06/17	680㎡	長谷工不動産	百瀬	
	31	53-014-12・53-082 平安京右京三条二坊十二町 78HK-CS	中京区西ノ京新建町 5-14～5-30	1978/11/10 ～1979/01/07	500㎡	京都市	平尾	国庫補助
32	53-089 平安京右京四条一坊九町 78HK-CZ	中京区壬生神明町1-7	1979/02/06 ～1979/03/10	200㎡	近畿電気通信局	平尾		
33	53-012 平安京右京四条一坊十二町 78HK-SR	中京区壬生森町26-8	1978/05/22 ～1978/06/30	300㎡	京都中央信用金庫	磯部		
34	53-090 平安京右京四条四坊六町 78HK-YA002	右京区山ノ内山ノ下町 22 (山ノ内小学校)	1979/03/07 ～1979/03/31	250㎡	京都市	辻裕		

	契約番号・遺跡名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考	
平安京	35	53-028 平安京右京五条二坊一町 78HK-SN001	中京区壬生東土居ノ内 町20 (朱雀第七小学校)	1978/07/17 ~1978/08/31	300㎡	京都市	磯部、辻裕	
	36	53-088 平安京右京六条一坊三・四町 78HK-SM001~3	下京区中堂寺南町	1979/03/10 ~1979/06/11	2000㎡	京都市	加納、鈴木広	
	37	53-080 平安京右京六条二坊七町 78HK-KC003	中京区壬生東高田町1-2 京都市立病院	1979/02/01 ~1979/03/15	200㎡	京都市	本	
	38	53-094 平安京右京六条二坊八町 78HK-AF	中京区壬生東高田町1-2 (朱七保育園)	1978/11/28 ~1978/12/02	80㎡	京都市	本、長宗	
	39	53-070 平安京右京八条二坊一町 78HK-PR	下京区西七条南中野町8	1979/01/16 ~1979/01/29	100㎡	笹井外喜雄	中村	
	40	53-063 平安京右京九条一坊十町 78HK-AE001	南区唐橋門脇町35 (八条中学校)	1978/11/21 ~1979/03/06	600㎡	京都市	平方	
	41	53-014-10 平安京右京九条一坊十二町、 西寺跡 78HK-SG005	南区唐橋西寺町65 (唐橋小学校)	1978/08/24 ~1978/08/31	100㎡	京都市	百瀬	国庫補助
	42	53-077 平安京右京九条一坊十二町、 西寺跡 78HK-SG006	南区唐橋西寺町65 (唐橋小学校)	1979/01/27 ~1979/03/31	1550㎡	京都市	堀内明、本	
43	53-086 平安京右京九条二坊四町 78HK-RK001	南区唐橋大宮尻町22 (洛陽工業高校)	1979/01/25 ~1979/03/10	360㎡	京都市	平田		
白河街区	44	53-017-01 尊勝寺跡 78KS-ZH002	左京区岡崎最勝寺町	1978/12/11 ~1979/01/31	358㎡	京都市/ (株)象彦	上村和	国庫補助
	45	53-017-02 尊勝寺跡 78KS-OE	左京区岡崎西天王町 84-2・3	1979/02/05 ~1979/03/05	83㎡	京都市/ (株)醍醐住建	上村和	国庫補助
鳥羽離宮	46	53-015-01 鳥羽離宮跡(馬場殿) 78TB-TB037	伏見区中島宮ノ後町 33-1(城南宮)	1978/02/15 ~1978/08/05	100㎡	京都市/ (宗)城南宮	鈴木久、長宗	国庫補助
	47	53-015-01 鳥羽離宮跡(馬場殿) 78TB-TB038	伏見区中島宮ノ後町 33-1(城南宮)	1978/02/15 ~1978/08/05	20㎡	京都市/ (宗)城南宮	鈴木久、長宗	国庫補助
	48	52-079・53-015-01 鳥羽離宮跡(田中殿) 78TB-TB039	伏見区竹田小屋ノ内町 57	1978/03/10 ~1978/04/10	300㎡	京都市/ 桐山増次	鈴木久	国庫補助
	49	53-015-01 鳥羽離宮跡(東殿) 78TB-TB040	伏見区竹田浄菩提院町 36	1978/02/15 ~1978/08/05	150㎡	京都市/ 中野静子	鈴木久、長宗	国庫補助
	50	53-015-01 鳥羽離宮跡(東殿) 78TB-TB041	伏見区竹田浄菩提院町 57	1978/02/15 ~1978/08/05	20㎡	京都市/ 松見良進	鈴木久、長宗	国庫補助
	51	53-015-01 鳥羽離宮跡(東殿) 78TB-TB042	伏見区竹田浄菩提院町 48-5	1978/02/15 ~1978/08/05	30㎡	京都市/ 大前久治	鈴木久	国庫補助

	契約番号・遺跡名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考	
鳥羽離宮	52	53-015-02・53-030 鳥羽離宮跡（田中殿） 78TB-TB043	伏見区竹田小屋ノ内町 90.91、中島宮ノ後町 9.10A.10B	1978/08/17 ～1978/10/12	450㎡	京都市／ （株）エース興 産	鈴木久	国庫補助
	53	53-015-03 鳥羽離宮跡（東殿） 78TB-TB044	伏見区竹田浄菩提院町 31	1978/11/06 ～1978/12/22	200㎡	京都市／ 福井秀雄	鈴木久	国庫補助
	54	53-015-04・53-051 鳥羽離宮跡（田中殿） 78TB-TB045	伏見区中島宮ノ後町	1978/11/30 ～1979/03/01	900㎡	京都市／ 鯛池	鈴木久、長宗	国庫補助
	55	53-067 鳥羽離宮跡（東殿） 78TB-TB046	伏見区竹田内畑町・浄 菩提院町	1979/02/06 ～1979/03/31	676㎡	区画整理	鈴木久、長宗	
	56	53-095 鳥羽離宮跡（東殿） 78TB-TB047	伏見区竹田内畑町119 （内畑児童公園）	1979/03/12 ～1979/04/15	96㎡	区画整理	鈴木久	
	57	53-061 鳥羽離宮跡 78TB-TB048	伏見区竹田踞川町7-2	1978/12/22	50㎡	（株）シェル石 油	鈴木久	
中臣遺跡	58	53-016-01 中臣遺跡 78RT-NK012	山科区勸修寺西金ヶ崎 77-2.78.79	1978/07/10 ～1978/08/08	730㎡	京都市／ 辻庄三	菅田	国庫補助
	59	53-016-02 中臣遺跡 78RT-NK013	山科区勸修寺東金ヶ崎 （勸修運動公園予定地）	1978/10/01 ～1978/10/31	600㎡	京都市	菅田	国庫補助
	60	53-016-03 中臣遺跡 78RT-NK014	山科区勸修寺西栗栖野 町40-22.44-A	1978/10/24 ～1978/12/04	100㎡	京都市／ 筒井 浩	菅田、前田	国庫補助
	61	53-060-01 中臣遺跡 78RT-NK015-1	山科区勸修寺西金ヶ崎 23-1.24-2	1978/11/03 ～1978/11/29	100㎡	京都市／ 京都開発工業	菅田、前田	国庫補助
	62	53-041 中臣遺跡 78RT-NK016	山科区柳辻番所ヶ口町	1978/09/25 ～1979/01/31	1800㎡	京都市／ 区画整理	菅田	国庫補助
	63	53-060-02 中臣遺跡 78RT-NK017	山科区勸修寺西栗栖野 町84-B他	1979/01/05 ～1979/01/17	92㎡	京都市／ 小原昭一	菅田、前田	国庫補助
	64	53-060-03 中臣遺跡 78RT-NK018	山科区勸修寺西金ヶ崎 84	1979/01/10 ～1979/01/26	50㎡	京都市／ 檀野慶三郎	菅田	国庫補助
長岡京	65	53-093 長岡京左京四条四坊 78NG-NG002	伏見区久我森の宮町 15-26	1979/04/09 ～1979/04/18	380㎡	関西電力	梅川	
その他の遺跡	66	53-048 松ヶ崎廃寺 78RH-MH001	左京区松ヶ崎堀町40 （松ヶ崎小学校）	1978/10/04 ～1978/11/12	120㎡	京都市	上村和	
	67	53-091 室町殿跡 78HK-EZ001	上京区今出川通新町東 入堀出シ町28	1979/03/07 ～1979/03/31	60㎡	京都市	吉川	
	68	53-036 北野廃寺 78RH-KG003	北区北野下白梅町1	1978/09/01 ～1978/10/28	500㎡	岡島建設	梅川	

	契約番号・遺跡名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考	
その他 の 遺 跡	69	53-056 北野遺跡 78RH-KG004	北区西大路通（円町～ 平野神社南詰）	1978/11/21 ～1978/12/09	33㎡	上下水道	家崎、堀内明	発掘立会
	70	53-081 法性寺跡 78RT-OK001	伏見区深草正覚町7	1979.02.10 ～1979.03.15	300㎡	大阪国税局	吉村	
	71	52-070・53-025 旭山古墳群 77RT-AY002	山科区上花山旭山町	1978/01/25 ～1978/08/31	16000㎡	京都市	木下	
	72	53-047 山科本願寺跡 78RT-JN	山科区西野阿芸沢町 （山科中央公園）	1978/10/16 ～1978/10/20	72㎡	京都市	前田	
	73	53-039 醍醐古墳群 78FD-ON	伏見区醍醐御所ノ内	1978/09/01 ～1978/10/18	135㎡	京都市	丸川、磯部、 辻純	
	74	53-068 醍醐小学校内遺跡 78FD-DG001	伏見区醍醐東大路町 31-1（醍醐小学校）	1978.11.28 ～1978.12.16	60㎡	京都市	辻裕	
	75	53-045 板橋廃寺 78FD-IB001	伏見区下板橋町610 （板橋小学校）	1978/09/14 ～1978/11/06	240㎡	京都市	辻裕	
	76	53-001 伏見城跡 78FD-FO	伏見区桃山町鍋島2-1他	1978/04/21 ～1978/06/05	500㎡	(株)トラス サービス	江谷	
	77	53-018 伏見城跡 78FD-OK	伏見区桃山町大蔵	1979/02/13 ～1979/03/02	20㎡	京都市/ (株)桃山城	梅川	国庫補助
78	53-049 伏見城跡 78FD-NG	伏見区桃山町永井久太 郎	1978/10/05 ～1978/12/05	300㎡	近畿農政局	江谷		

表2 昭和53年度試掘・立会調査一覧表

	契約番号・遺跡名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考
平安宮	1 53-013 平安宮内裏・縫殿寮・南院跡 78HK-QQ	上京区山王町～田中町	1978/06/07 ～1978/08/24	立会	上下水道	平田	
	2 53-007 平安宮御井跡 78HK-OI	中京区西ノ京車坂町15 (朱雀第六小学校)	1978/04/05 ～1978/04/10	試掘 25㎡	京都市	平田	
平安京	3 53-085 平安京左京二条二坊、 史跡二条城 78HK-JJ003	中京区二条通堀川西入 二条城町	1979/03/12 ～1979/04/07	立会	京都市	木下	
	4 53-054 平安京左京八条四坊 78HK-KS	下京区東塩小路町～材 木町	1978/10/01 ～1979/03/31	立会 250㎡	上下水道	辻純	
	5 53-072 平安京左京八条四坊 78HK-KS	下京区塩小路通河原町 ・東洞院交差点	1978/10/01 ～1979/02/28	立会 20㎡	大阪ガス	辻純	
	6 53-022 平安京左京九条二坊 78HK-NH	南区九条通(猪熊～油 小路)、油小路(九条～ 東寺道)	1978/06/25 ～1979/03/30	立会	上下水道	石井	
	7 53-055 平安京左京九条二坊 78HK-QJ	南区東九条下殿田町～ 西九条比求城町	1978/10/01 ～1979/12/12	立会	上下水道	石井	
	8 53-009 平安京左京九条四坊三町 78HK-KF-試	南区東九条南山王町	1978/05/17	試掘	京都市	長宗	
	9 53-053 平安京右京二条・三条二坊 78HK-AC	上京区・中京区西大路 通(三条～丸太町)	1978/10/06 ～1978/10/21	立会	上下水道	平方	
	10 53-002 平安京右京二～四条二坊 78HK-D-002	右京区西院東淳和院町 ～中京区西ノ京南円町 (西大路通)	1978/05/02 ～1978/09/13	立会 1800m	電々公社	久世	
	11 53-003 平安京右京二条三坊七町 78HK-NR-試	中京区西ノ京春日町 16-1他	1978/05/01 ～1978/05/08	試掘	(株)長谷工不 動産	百瀬	
	12 53-010 平安京右京二条三坊七町 78HK-NR	中京区西ノ京春日町 8.16-43	1978/05/14 ～1978/05/16	試掘 120㎡	洛陽女子学院	百瀬	
	13 53-019 平安京右京四条・五条二坊 78HK-AA	中京区西大路通(三条 ～五条)	1978/07/25 ～1978/10/04	立会	上下水道	前田	
	14 53-034 平安京右京四～九条二坊 78HK-AB	南区吉祥院九条町、 右京区西院高山寺町	1978/05/15	立会	電々公社	平方	
	15 53-024 平安京右京七～九条二坊 78HK-NN	下京区西大路通(七条 ～東海道線)	1978/07/12 ～1978/11/18	立会	関西電力	家崎	
	16 53-084 平安京右京九条二坊四町 78HK-RK-試	南区唐橋大宮尻町22 (洛陽工業高校)	1979/02/13 ～1979/02/27	試掘	京都市	平田	
	17 53-021 平安京右京八条三坊・四坊 78HK-KG	右京区西京極佃田町・ 中沢町・下沢町ほか	1978/06/01 ～1979/03/31	立会 2960m	上下水道	加納	西京極その1

	契約番号・遺跡名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考	
平安京	17	53-021 平安京右京七条三坊 78HK-KG	右京区西京極三反田町 ・中溝町・大門町	1978/06/01 ～1979/03/31	立会 2470m	上下水道	加納	西京極その2
		53-021 平安京右京六条・七条三坊 78HK-KG	右京区西京極北庄境町 ・南庄境町	1978/06/01 ～1979/03/31	立会 2490m	上下水道	加納	西京極その3
		53-021 平安京右京六条三坊・四坊 78HK-KG	右京区西院六反田町・ 西溝崎町	1978/06/01 ～1979/03/31	立会 1970m	上下水道	加納	西院その1
		53-021 平安京右京五条四坊 78HK-KG	右京区葛野大路（高辻 ～四条）	1978/06/01 ～1979/03/31	立会	上下水道	丸川	西部3号幹線
	18	53-042 平安京右京六条・七条四坊 78HK-KG	右京区西京極畔勝町・ 西池田町・東池田町ほか	1978/09/01 ～1979/03/31	立会 4110m	上下水道	丸川	西京極その6
		53-042 平安京右京六条・七条四坊 78HK-KG	右京区西京極野田町・ 西大丸町・堤町ほか	1978/09/01 ～1979/03/31	立会 2320m	上下水道	丸川	西京極その7
		53-042 平安京右京五条・六条三坊 78HK-KG	右京区西院太田町・追 分町・久保田町ほか	1978/09/01 ～1979/03/31	立会 2210m	上下水道	丸川	西院その2
		53-042 平安京右京五条三坊・四坊、 六条四坊 78HK-KG	右京区西院月双町・清 水町	1978/09/01 ～1979/03/31	立会 3430m	上下水道	丸川	西院その3
		53-042 平安京右京五条・六条四坊 78HK-KG	右京区西院東貝川町・ 西田町・西京極葛野町	1978/09/01 ～1979/03/31	立会 3610m	上下水道	丸川	西院その4
	19	53-075 平安京右京七条・八条四坊 79HK-KG	右京区西京極中町・東 町・前田町ほか	1979/01/16 ～1980/03/31	立会	上下水道	加納	西京極その4
		53-075 平安京右京七条・八条四坊 79HK-KG	右京区西京極堤外町・ 西川町・芝ノ下町ほか	1979/01/16 ～1980/03/31	立会	上下水道	加納	西京極その5
		53-075 平安京右京五条三坊 79HK-KG	右京区西院坤町・松井 町・北井御料町ほか	1979/01/16 ～1980/03/31	立会	上下水道	加納	西院その5
	53-075 平安京右京五条三坊・四坊 79HK-KG	右京区西院安塚町・日 照町	1979/01/16 ～1980/03/31	立会	上下水道	加納	西院その6	
	53-075 平安京右京五条四坊 79HK-KG	右京区西院東貝川町・ 安塚町・日照町	1979/01/16 ～1980/03/31	立会	上下水道	加納	西院その7	
白河街区	20	53-071 六勝寺跡 78KS-SW071	左京区岡崎最勝寺町 神宮道	1979/02/05 ～1979/02/06	立会	上下水道	久世	
鳥羽離宮	21	53-035 鳥羽離宮跡 78TB-UW035	伏見区竹田桶ノ井町	1978/08/18 ～1978/08/21	立会 120m ²	上下水道	鈴木久	
	22	53-067 鳥羽離宮跡（東殿・城南宮） 78TB-TB-立	伏見区竹田内畑町・桶ノ 井町・中島宮ノ後町		立会 1203m ²	区画整理	鈴木久、長宗	

	契約番号・遺跡名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考
中臣遺跡	23 53-066 中臣遺跡 78RT-NK019	山科区栗栖野打越町、 東野舞台町	1979/02/01 ~1979/02/28	試掘	京都市	菅田	
	24 53-006 中臣遺跡 78RT-UW006	山科区西野山中臣町他	1978/05/10 ~1978/08/08	立会 400㎡	上下水道	菅田	
その他の遺跡	25 53-057 岩倉忠在地遺跡 78RH-IT001	左京区岩倉忠在地町309 (洛北中学校)	1978/10/16 ~1978/10/22	試掘 30㎡	京都市	中村	
	26 53-074 植物園北遺跡 78RH-SN001	北区上賀茂岩ヶ垣内町 ・松本町・桜井町・高 縄手町	1979/01/10 ~1979/12/20	立会 3500m	上下水道	久世、家崎	
	27 53-079 植物園北遺跡 78RH-SN002	北区上賀茂今井河原町 ~松本町	1978/11/25 ~1979/02/21	立会 2009m	上下水道	久世	
	28 53-023 法住寺殿跡 78RT-HN001	東山区七条通(京阪電 車~東大路)、東大路通 (七条~東海道線)	1978/07/10 ~1978/08/26	立会 1000m	関西電力	堀内明	
	29 53-083 勸修寺境内 78RT-UW083	山科区勸修寺西北出町 ~泉玉町	1979/02/01 ~1979/03/31	立会	上下水道	菅田	
	30 53-005 中久世遺跡 78MK-NK-立	南区久世殿城町 (国道171号線)	1978/05/19 ~1978/05/26	立会 48㎡	大阪ガス	中村	
	31 53-033 上久世遺跡 長岡京跡 78MK-D-033	南区久世殿城町	1978/08/17 ~1978/08/23	立会	電々公社	鈴木広	
	32 53-076 深草遺跡 78TB-FK	伏見区深草西浦町他	1979/01/16 ~1979/07/30	立会	上下水道	吉村、大矢	
	33 53-037 小野廃寺 78FD-D-037	伏見区醍醐大高町	1978/09/18 ~1978/09/25	立会 487m	電々公社	丸川	
	34 53-029 伏見城跡 78FD-FJ	伏見区両替町11丁目・ 15丁目、桃山水野左近 西町3、筑前台町13	1978/08/10 ~1978/09/30	立会	上下水道	吉村	
	35 53-032 伏見城跡 78FD-AH	伏見区桃山水野左近東 町19(桃山中学校)	1978/07/28 ~1978/08/03	試掘 100㎡	京都市	江谷	
	36 53-043 伏見城跡 78FD-OG043	伏見区深草大亀谷古御 香町他	1978/11/01 ~1978/12/28	立会	大阪ガス	吉村	
	37 53-059 伏見城跡 78FD-FD059	伏見区桃山町本多上野	1978/09/02 ~1978/10/31	立会 400㎡	京都市	江谷	

図 版

昭和53年度

京都市埋蔵文化財調査概要

発行日 2011年12月15日

編 集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発 行

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 Tel 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 Tel 075-256-0961